

# 庭鳥塚古墳発掘調査報告書

(羽曳野市内の前期古墳の調査)

羽曳野市埋蔵文化財報告書66

2010

羽曳野市教育委員会

# 庭鳥塚古墳発掘調査報告書

(羽曳野市内の前期古墳の調査)

羽曳野市埋蔵文化財報告書66

2010

羽曳野市教育委員会



## 序

羽曳野市は、大阪府の東南部に位置し、金剛・葛城の山並みを仰ぎ、石川がゆるやかに流れる水と緑に恵まれた自然豊かなところです。このような自然環境は太古の昔から人々の暮らしや文化を育み、数多くの歴史的遺産として今日に受け継がれています。本市ではこれらの豊かな自然や歴史的遺産を活かし、「人・時をつなぐ安心・健康・躍動都市はびきの」を合言葉にまちづくりを進めています。

本冊は、平成17年度から平成20年度における庭鳥塚古墳の発掘調査の成果と平成18年度から平成21年度に実施した出土遺物整理の成果を報告します。

庭鳥塚古墳は、古墳時代前期に築造された前方後方墳です。副葬品に三角縁神獸鏡をはじめ筒形銅器や大量の武器・武具が納められ、被葬者像にはヤマト政権に係わりをもち、朝鮮半島から最新の情報を得ることができた武人のすがたが浮かびあがってきます。また、箆手（こて）やノコギリなど出土例が極めてすくない品々をもつ庭鳥塚古墳の特異性も指摘できます。そして、庭鳥塚古墳が築かれて間も無く古市古墳群の造営が開始されることから、両者の関係が注目されます。

最後になりましたが、調査の実施にあたり、土地所有者をはじめとする関係者の方々、関係機関のご協力を賜りましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも市がすすめる文化財行政に一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成22年3月

羽曳野市教育委員会  
教育長 藤田博誠

# 例 言

1. 本書は、羽曳野市教育委員会が庭鳥塚古墳の範囲確認を目的とし、平成17年度から平成20年度にわたって実施した発掘調査、並びに平成18年度般平成21年度にかけて行った遺物整理に関する事業報告書である。現地調査終了後、年度毎に報告書を作成してきたが、ここに現時点における報告をもって、過去の内容を訂正・修正する。

なお、平成17年度の墳丘断面については、『古市遺跡群X X VII』に報告済みであるので、ここでは取り上げていない。

2. 調査は、羽曳野市教育委員会が実施したが、担当課及び担当者は以下のとおりである。

【平成17年度】

歴史文化課 課長松村好司。主事 河内一浩が現場作業の担当と『古市遺跡群X X VII』の作成に当たった。

【平成18年度】

歴史文化課 課長東山。主査 河内一浩が現場作業の担当と『古市遺跡群X X VIII』の作成に当たった。

【平成19年度】

歴史文化課 課長柳橋信夫 参事上田昌良。主査 河内一浩が現場作業の担当と『古市遺跡群X X IX』の作成に当たった。

【平成20年度】

社会教育課 課長上田昌良。係長 河内一浩が現場担当と『古市遺跡群X X X』の作成に当たった。10月市民協働ふれあい課に上田並びに河内が移動後も河内は社会教課兼務で調査を続行する。

【平成21年度】

社会教育課世界遺産登録準備室 室長高野学。係長 河内一浩が本報告の作業に従事する。

3. 5年にわたる調査の実施及び本書の作成にあたっては次の方々に参加を得た。(敬称略)

(調査員) 河野詠子・中嶋宏美

(補助員) 寿村美紗・田中泰子・樽本絵理香

(作業員) 多田真弓・津村多美子・上田伸子・大屋英子・小林晴美

(事務員) 松田智恵子・井上美穂子

(調査指導・その他) 河上邦彦

橋本達也・甲斐康大・細川晋太郎・南部裕樹

4. 調査において協力を頂いたのは次の通り。記して感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)

土地所有者・東阪田自治会区長

文化庁・大阪府教育委員会・橿原考古学研究所・大阪府文化財センター・磐田市文化財センター

5. 土層・遺物の色調については、『新版標準土色帖』（1987年版 農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色調監修）を使用し、肉眼による観察である。
6. 方位は磁北を使用し、レベル高についてはT、P（東京湾標準潮位）値による。なお、一部にO、P（大阪湾標準潮位）値を示すものがあるが、その際には明記した。
7. 平成17年度の遺構及び出土遺物の撮影は、有限会社阿南写真工房の阿南辰秀・伊藤慎司氏に依頼しておこなった。
8. 出土遺物の保存処理作業を株式会社京都科学へ委託事業として実施した。
9. 本報告の狐塚古墳と御旅山古墳の出土埴輪は大阪府教育委員会が所蔵している。図については河内一浩、中嶋宏美が実測した。
10. 本書の執筆・編集は河内一浩がおこなった。

# 目 次

## I 部 庭鳥塚古墳調査報告

### I. 古墳の位置と調査経過

1. 調査以前の庭鳥塚古墳	1
2. 調査の契機	5
3. 調査の経過	6
4. 調査成果の活用	49

### II. 古墳をめぐる環境

1. 東阪田遺跡について	52
2. 地理的環境	54
3. 歴史的環境	56

### III. 古墳の調査

#### 1. 墳丘

(a) 墳丘測量	62
(b) 発掘調査	
【後方部墳頂調査区】	64
【第1トレンチ】	68
【第2トレンチ】	70
【第3トレンチ】	73
【第4トレンチ】	74
【第5トレンチ】	76
【第6トレンチ】	77
【第7トレンチ】	78
【第8トレンチ】	80
【第9トレンチ】	81
【第10トレンチ】	82
【第11トレンチ】	84
【第12トレンチ】	84
【第13トレンチ】	86
【第14トレンチ】	86
【第15トレンチ】	88
【第16トレンチ】	90
(c) 出土遺物	
【埴輪】	92
【土師器】	93

	【弥生土器】	96
	【中世・近世遺物】	96
2.	埋葬施設	
	(a) 墓 墳	98
	(b) 粘土槨	100
	(c) 棺	102
3.	副葬品の配列	
	(a) 棺内遺物	103
	(b) 棺外遺物	104
	【棺外遺物東側の配列】	
	【棺外遺物西側の配列】	107
	【棺外北小口】	108
4.	副葬品	
	(a) 棺外遺物	
	【鏡】	109
	【勾玉】	115
	【刀剣類】	115
	(b) 棺外遺物	
	【筒形銅器】	116
	【鉄鏃】	118
	①片鑄定角式	120
	②両鑄定角式	120
	③柳葉式	124
	④平根系大型定角式	128
	⑤小型三角式	130
	⑥腸扶柳葉式	133
	⑦振りを加えた鏃	134
	⑧無茎三角式	136
	その他の鉄鏃	139
	【銅鏃】	142
	【鉄鏃】	146
	【鉄鏃】	146
	【鉄斧】	147
	【鉄刀】	150
	【鉄劍】	150
	【鉄ヤリ】	152
	【電手】	154

#### IV. まとめ

古墳の立地	159
前期古墳の分布	159
墳形の復原	162
大阪府下の前方後方墳について	164
外部施設について	166
埋葬施設の検討	167
埋葬施設の構築	170
鏡の検討	174
副葬鉄について	176
筒形銅器について	178
埴輪	179
鉄ヤリ2の系譜	180
錦について	181
土器について	182
副葬品の組成と特徴	183
南河内地域の武器・武具組成	184
築造時期	185
被葬者像	185
参考文献	

#### II部 羽曳野市の前期古墳の調査

1 西山古墳	191
埋葬施設確認にいたる経過	
古墳の位置と環境	
調査の成果概要	
出土埴輪	
調査結果	
2 狐塚古墳	202
確認にいたる経過と過去の調査	
古墳の位置と環境	
出土埴輪の観察	
まとめにかえて	
3 壺井丸山古墳	210
古墳の位置と環境	
古墳概況	
観察成果	

まとめ

- 4 壺井御旅山古墳…………… 215  
調査にいたる経過  
出土埴輪の観察  
副葬品から見た埴輪の製作時期  
まとめにかえて
- 5 通法寺裏山古墳…………… 232  
古墳確認にいたる経過  
古墳の位置と環境  
調査成果の概要  
出土埴輪  
まとめにかえて
- 6 庭島塚古墳の景観…………… 236
- 7 庭島塚古墳のこれから…………… 237

## 插图目次

图1	古墳位置図	1
图2	昭和47年墳丘測量図	3
图3	昭和50年調査区断面図	4
图4	調査配置図	7
图5	6月8日調査略図	8
图6	6月9日調査略図	8
图7	7月5日調査略図	11
图8	7月6日調査略図	11
图9	7月7日調査略図	12
图10	7月20日調査略図	13
图11	7月21日調査略図	14
图12	7月22日調査略図	14
图13	7月23日調査略図	15
图14	7月25日調査略図	16
图15	7月27日調査略図	16
图16	8月10日調査略図	19
图17	8月11日調査略図	19
图18	10月7日調査略図	26
图19	10月19日調査略図	27
图20	10月23日調査略図	28
图21	10月24日調査略図(1)	28
图22	10月24日調査略図(2)	29
图23	東阪田遺跡範囲図	53
图24	地形分類凡例	54
图25	地形図	55
图26	遺跡分布図	58
图27	墳丘測量図	63
图28	後方部墳頂部施設	66
图29	第1トレンチ土層断面図・葦石実測図	68
图30	第2トレンチ土層断面図	71・72
图31	第4トレンチ土層断面図・葦石実測図	75
图32	第5トレンチ土層断面図・葦石実測図	76
图33	第6トレンチ土層断面図・葦石実測図	77
图34	第7トレンチ土層断面図	79
图35	第10トレンチ土層断面図	83
图36	第12トレンチ土層断面図・葦石実測図	85
图37	第14トレンチ土層断面図	87



図38	第15トレンチ墳丘測量図・土層断面図	89
図39	第16トレンチ墳丘測量図・土層断面図	91
図40	埴輪実測図	93
図41	土器実測図	95
図42	その他の遺物	97
図43	墓壇平面図・土層図	99
図44	粘土構平面図・断面土層図	101
図45	副葬品配置図	105
図46	鏡面図(処理前)	109
図47	鏡実測図	111
図48	鏡拓影・断面図	113
図49	勾玉実測図	114
図50	棺内刀剣類実測図	115
図51	筒形銅器実測図	116
図52	鉄鍬分類	119
図53	鉄鍬実測図(1)	121
図54	鉄鍬実測図(2)	122
図55	鉄鍬実測図(3)	123
図56	鉄鍬実測図(4)	124
図57	鉄鍬実測図(5)	125
図58	鉄鍬実測図(6)	126
図59	鉄鍬実測図(7)	129
図60	鉄鍬実測図(8)	131
図61	鉄鍬実測図(9)	132
図62	鉄鍬実測図(10)	135
図63	鉄鍬実測図(11)	137
図64	不明鉄鍬実測図	139
図65	銅鍬実測図(1)	143
図66	銅鍬実測図(2)	144
図67	鏃・鏃・鉄斧実測図	148
図68	鉄斧実測図	149
図69	鉄刀1・鉄刀2・鉄刀3・鉄剣2・鉄剣3実測図	151
図70	鉄やり1・鉄やり2・鉄やり3実測図	153
図71	箆手実測図	155
図72	石川流域前期古墳分布図	161
図73	墳丘復原図	163
図74	前方後方墳の変遷	165
図75	南河内の前期古墳埋葬施設	168
図76	埋葬施設築造過程模式図(1)	171
図77	埋葬施設築造過程模式図(2)	172

図78	南河内前期古墳鏡出土地点	175
図79	鉄ヤリ2類例資料実測図	180
図80	土器	182
図81	西山古墳墳丘測量図	192
図82	遺構平面図	195
図83	埋葬施設平面図	195
図84	埴輪棺実測図	196
図85	円筒系埴輪実測図	197
図86	盾形埴輪実測図	199
図87	西山古墳墳形復原図	201
図88	狐塚古墳地形測量図	204
図89	円筒埴輪列位置図	204
図90	狐塚古墳出土埴輪	209
図91	駒ヶ谷出土の銅鏡	210
図92	丸山古墳墳丘測量図	213
図93	丸山古墳出土遺物実測図	213
図94	御旅山古墳埴輪出土位置図	217~218
図95	後円部埴輪出土位置図	219
図96	御旅山古墳出土埴輪実測図 (1)	221
図97	御旅山古墳出土埴輪実測図 (2)	222
図98	御旅山古墳出土埴輪実測図 (3)	223
図99	御旅山古墳出土埴輪実測図 (4)	224
図100	御旅山古墳出土壺形埴輪実測図 (1)	226
図101	御旅山古墳出土壺形埴輪実測図 (2)	227
図102	御旅山古墳出土壺形埴輪実測図 (3)	228
図103	壺形埴輪口縁部形態分類図	229
図104	御旅山古墳出土線刻埴輪実測図	230
図105	通法寺裏山古墳出土埴輪実測図	235
図106	庭鳥塚古墳景観	236
図107	羽曳野市内前期古墳のアクセス	238

## 写真目次

写真1	発見直後の庭鳥塚古墳	5
写真2	黒褐色腐葉土除去後の墳頂部	65
写真3	積み石の状況	65
写真4	第1トレンチ葦石検出状況	69
写真5	第2トレンチ断面土層	70
写真6	第3トレンチ断面土層	73
写真7	第7トレンチ	78
写真8	第8トレンチ	80
写真9	第9トレンチ	81
写真10	第10トレンチ葦石検出状況（北から）	82
写真11	第4トレンチ土師器出土状況	94
写真12	粘土礫被覆粘土表面叩き痕跡	100
写真13	棺蓋の残骸	102
写真14	北小口の漆膜	108
写真15	三角縁神獸鏡細部写真	110
写真16	三角縁神獸鏡細部写真	110
写真17	鏡面残存布目	114
写真18	鉄鏃	118
写真19	無茎三角式鉄鏃の装着方法	138
写真20	鋸	146
写真21	鉄斧・鎌	147
写真22	ヤリ2の細部	152
写真23	埴輪棺検出状況	194

## 表 目 次

表1	遺跡地名表	59
表2	副葬品一覧表	103
表3	定角式計測値	120
表4	柳葉式計測値	127
表5	平根系大型定角式計測値	128
表6	小型三角式計測値	130
表7	腸扶柳葉式計測値	134
表8	無茎三角式計測値	136
表9	鉄鏃一覧表	140~142
表10	銅鏃一覧表	145
表11	石川流域前期古墳一覧表	160
表12	墳丘各部計測値一覧表	162
表13	前方後方墳一覧	164
表14	南河内前期古墳出土鏡一覧表	174
表15	出土鏃の構成	177
表16	埴輪から見た石川流域古墳編年	178
表17	古墳時代前期の鋸出土地名表	181

## 原色図版目次

(表紙) 庭島塚古墳の調査風景

- 図版1 鏡背(処理前)
- 図版2 鏡面(処理前)
- 図版3 鏡背斜め(処理前)
- 図版4 鏡背(処理後)
- 図版5 鏡面(処理後)
- 図版6 鏡背斜め(処理後)
- 図版7 粘土槨断面
- 図版8 後方部墳丘断面
- 図版9 粘土槨断面
- 図版10 墓壇断面
- 図版11 粘土槨断面
- 図版12 副葬品出土状況
- 図版13 副葬品出土状況
- 図版14 副葬品出土状況
- 図版15 副葬品出土状況
- 図版16 副葬品出土状況
- 図版17 副葬品出土状況
- 図版18 副葬品出土状況
- 図版19 副葬品出土状況
- 図版20 副葬品出土状況
- 図版21 副葬品出土状況
- 図版22 副葬品出土状況
- 図版23 副葬品出土状況
- 図版24 副葬品出土状況
- 図版25 副葬品出土状況
- 図版26 副葬品出土状況
- 図版27 副葬品出土状況
- 図版28 副葬品出土状況
- 図版29 副葬品出土状況
- 図版30 副葬品出土状況
- 図版31 副葬品出土状況
- 図版32 副葬品出土状況
- 図版33 副葬品出土状況
- 図版34 副葬品出土状況
- 図版35 副葬品出土状況
- 図版36 副葬品出土状況

- 図版37 副葬品出土状況  
図版38 ヤリ3有機質  
図版39 ヤリ3有機質

## 写真図版目次

- (表紙) 埋葬施設が明らかとなった庭鳥塚古墳
- 図版1 調査前墳丘(後方部)・墓壇検出状況  
図版2 埋葬施設断面・粘土礫検出状況  
図版3 葺石検出状況(平成17年度)  
図版4 葺石検出状況(平成18年度)  
図版5 葺石検出状況(平成17・19年度)  
図版6 葺石検出状況(平成20年度)  
図版7 出土土師器  
図版8 出土埴輪  
図版9 埋葬施設全景・遺物出土状況  
図版10 墓壇断割り状況  
図版11 鏡出土状況  
図版12 鏡(処理後)  
図版13 筒形銅器・鉄製工具  
図版14 鉄刀・鉄剣・鉄ヤリ  
図版15 鉄鏃・銅鏃  
図版16 通法寺裏山古墳・西山古墳  
図版17 西山古墳出土埴輪  
図版18 西山古墳出土埴輪  
図版19 西山古墳出土埴輪  
図版20 西山古墳出土埴輪  
図版21 西山古墳出土埴輪

## I 部 庭鳥塚古墳調査報告

# I. 古墳の位置と調査経過

## 1. 調査以前の庭鳥塚古墳

庭鳥塚古墳は、大阪府羽曳野市東阪田字庭鳥塚に所在する。

古墳は、近鉄南大阪線古市駅から府道枚方富田林泉佐野線を南2kmにある閑静な住宅地に隣接する竹藪と雑木林の中に保存されている。府道枚方富田林泉佐野線の広瀬交差点の南東が墳丘である。平成17年に調査をする前までは鬱蒼とした雑木林であり、周囲から墳丘を見ることができなかった。

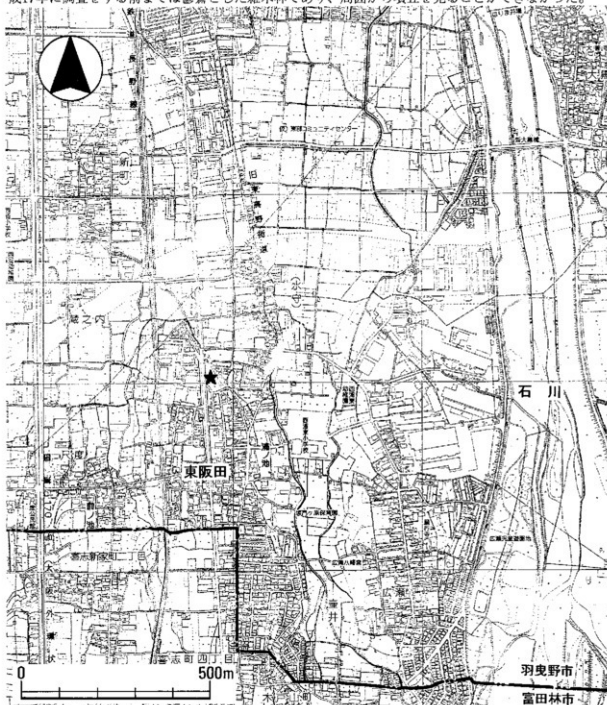


図1 古墳位置図



庭島塚古墳の存在については、一部の研究者には知られていたが「大阪府文化財地名表」や「羽曳野市埋蔵文化財包蔵地図」に記載されることはなかった。古墳の存在を示す文献資料は、知りえたところでは「節・香・仙」第17号が最初であろう（文献1）。

「節・香・仙」第17号によれば、「東阪田所在のニワトリ塚（方墳）の実測をして、従来の分布図の記載漏れを補充したものである。」とある。この調査は大阪府教育委員会が昭和47年2月から3月に羽曳野市と太子町で実施した遺跡分布調査で、調査期間中に庭島塚古墳を測量調査しているようだ。報告の記述によれば、測量を実施した時の墳形は方墳として認識されていたことが判る。なお、測量図は未発表であったが、原因が大阪府教育委員会文化財調査事務所に保管されていることが判り、今回報告書作成にあたり大阪府教育委員会から提供を受けた（註1）。

図2が昭和47年の測量図である。墳丘は報告にあるように方墳と意識しているため、前方後方墳の後方部を中心に図化がなされている。方形の墳丘の北側に点線で墳丘裾を強調しているが、わずかながら北に延びる前方部が測量されている。コンターは20cm間隔でとられているが、測量作業は昭和47年に実施されているための標高は大阪湾標準となっている。最高所がO.P.48.01mを測り、T.P.に換算すると46.7mとなる。

古墳の規模は、O.P.45mのコンターを墳丘裾とすると東西17m、南北22mの規模となる。墳丘の高さは南側の平坦部から3mとなり、目立った高まりであったことが窺える。平成17年に削り取られた時の高まりは東西16m、南北15mの規模となったので、昭和47年の測量図と比較して後方部墳丘が南側へ7m程度が消滅したことになる。平成17年に実施した埋葬施設の調査では、庭島塚古墳が未盗掘古墳と確認されただけに、工事によって副葬品の全重量が把握できなかったのは非常に残念だ。

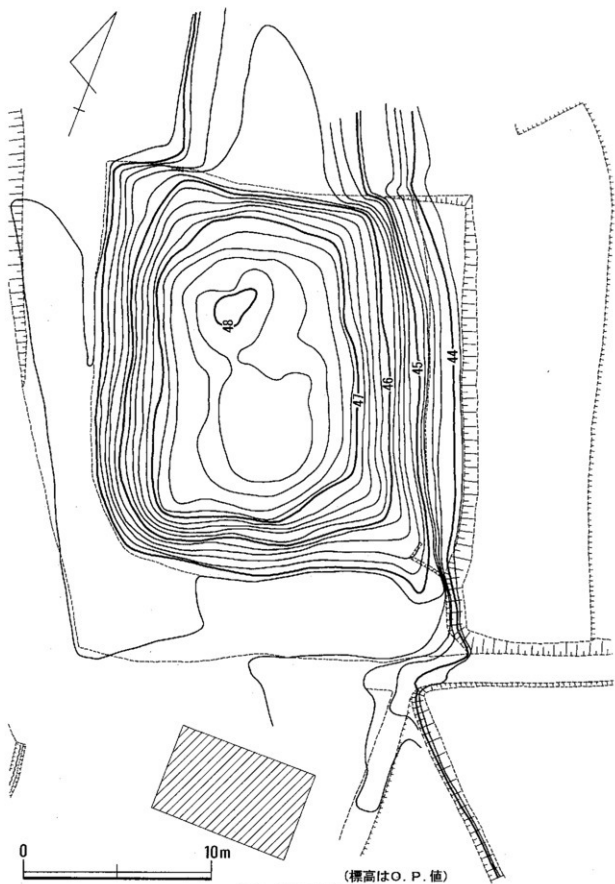
また、図2の測量図から駐車場の造成以前の地形を知ることができた。それによれば、墳丘東側はかつて大きな崖になって竹藪であった。駐車場の造成にあたり東側に張り出して盛土をしたことになる。したがって、平成17年の調査前に測量した図8の墳丘図は、後方部の形状が当初のものではないことが判明した。調査でも盛土であったことがわかり、前方後方墳と認識し辛い景観であったことが理解できる。

調査については、古墳と周知はされていないもの大阪府教育委員会の手で実施されていたことが関係者の話で知った。その時の調査成果の報告書は刊行されていないが、今回大阪府教育委員会のご配慮を得、調査概略を発表することができたのでここで少し紹介しておこう（註2）。

最初の調査は、昭和50年（1975）の4月10日に踏査がされている。以下、手記をそのまま箇条書きすると、

- ①径25m、高さ3mの円墳状の隆起である。
- ②西側をカットされている外は保存状況は良好。
- ③南側斜面の一部において盛土様の土層を観察できる。
- ④頂部は礫が著しく多いが葺石等ではなく、小さな砂利である。
- ⑤周辺は竹藪で、そのためのカットも可能性がないわけではない。
- ⑥頂部でサヌカイトフレーク一片を採集した外、遺物は無し。
- ⑦「鶏塚」なる名称の由来等については聞き取りができなかった。

以上の7項目の所見から調査担当者は、古墳の可能性が強く、少なくとも人為的な盛土であろう結論付けられている。



(標高はO. P. 値)

図2 昭和47年墳丘測量図

そして、昭和50年（1975）9月に府道枚方富田林泉佐野線の歩道設置に伴う拡幅工事に先立ち大阪府教育委員会が調査を実施している。調査地点は府道の東側、調査カードの略図から図3にトーンで示した庭鳥塚古墳の西側前方形付近を調査していることがわかる。

調査成果は、崖面の表土を除去したところ、一部に包含層が存在することが明らかとなった。包含層を人力で掘削した結果、サヌカイト片、土師器、須恵器、中世羽釜、中世土師皿などの遺物が出土した。調査担当者は、庭鳥塚古墳の周濠の一部にあたる可能性を指摘している。

略図から包含層の厚さは最大で1.1mを測る。埋土は暗茶黄色粘質泥土の単層で、調査した地点の北側で緩く立ち上がりを断面で確認している。調査地の南端は、府道枚方富田林泉佐野線から住宅へ行くための上り坂の角付近にあたる。そこから北へ8mに立ち上がりが確認されたことは、平成18年の調査成果から前方形の墳丘裾が検出された可能性が高い。さらに、平成17年度に調査を実施した第4トレンチと第5トレンチから出土した遺物の組成とも合致する。

したがって、昭和50年9月の調査で確認されたのは、庭鳥塚古墳の前方形西側に堆積した中世の遺物包含層になり、地山の立ち上がりは前方形墳丘の一部と考えられる。そして、包含層の下面が水平であることは前方形の墳丘裾西側に広がる第1テラス面となる。ただし、昭和50年の立会い調査では東西方向の土層状況を確認できず、西側において2段築成であったのか、あるいは段築が持たないのかは断定ができなかった。ここでは、4年間の調査成果から墳丘の段築は東側が2段、それに対して西側は1段としておく。

その後20年、奇跡的に開発が伸びることなく保存されたのは決して偶然ではない。古墳として認識され、今日まで大事に管理されていた地権者によるものである。あらためて敬意を払いたいと思う。

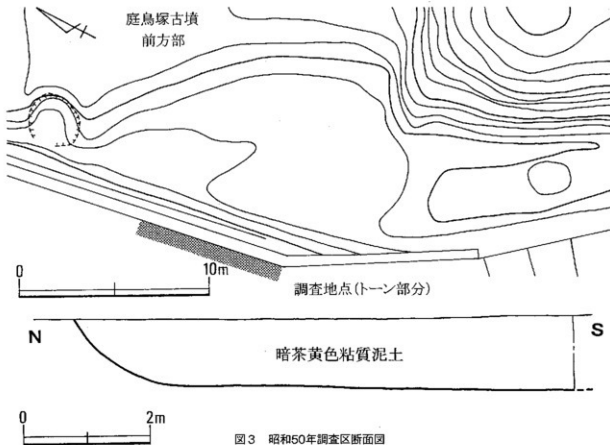


図3 昭和50年調査区断面図

## 2. 調査の契機

平成17年6月1日の午後、羽曳野市東阪田遺跡の一面で整地工事によって削られた墳丘の断面に粘土椽が露出している無残なすがたを確認した。墳丘は周辺の段丘から採掘した土砂で盛られているため、そのまま放置していくと墳丘や粘土椽が自然崩壊の恐れがあった。墳丘の断面をビニールシートで覆って盗掘と雨などによる流出を防止する応急の対策を行った(写真1)。

墳丘を削ってしまった工事は、駐車場拡張を目的とした整地であった。工事を施工するにあたり地権者から事前に文化財保護法に基づく埋蔵文化財調査届出が5月17日の火曜日に提出された。歴史文化課は同日これを受理した(羽教歴第1073号)。届出により申請地が東阪田遺跡に該当するため発掘調査の副申を付け発掘を実施することとなった。

調査担当者によると、5月19日の木曜日に樹木及び竹の伐採と抜根を開始し、翌日の金曜日に高まり(墳丘)を重機による調査が実施された。明瞭な遺構は確認できなかったという。週明けの23日(月曜日)から26日(木曜日)の間に担当者が3回現場に行ったが工事はされていなかったため調査は実施していないと聞いている。その後、業者から工事の連絡がなかったが、月の替わった6月1日の水曜日に現地が既に削平されたことが判ったため、別の職員が現況を確認しに行って埋葬施設を認知したという結果となった。

現況を大阪府教育委員会へ連絡するとともに土地所有者の協議に入った。6月5日に土地所有者から緊急調査の同意を得ることができた。

まず、墳丘の確認のため翌6日から竹藪の伐採に着手した。鬱蒼とした竹藪に手間取り、墳丘の測量は週明けの13日からとなった。測量期間中、墳丘断面を精査したところ、粘土椽の断面に鉄製品(副葬品)が認められた。



写真1 発見直後の庭島塚古墳

### 3. 調査の経過

庭島塚古墳の発掘作業は、平成17年6月20日から開始した。墳頂平坦面に十文字に土層観察アゼを残し人力による掘り下げたところ、6月29日に墓壙を検出し、7月7日は粘土槨を検出した。当初、墳頂平坦面の中央がやや窪んで、川原石が散乱したので盗掘を受けていると判断したが、粘土槨はまったく盗掘されていないことが判明した。しかし、検出した粘土槨の中央は大きく陥没し、断面に露出した副葬品である鉄製品は腐食がかなり進行していたので、その他の副葬品も劣化している可能性が高いものと危惧された。文化財保護法に基づく届け出（第99条）を6月30日付け（第1152号）で文化庁宛に提出した。

7月21日から粘土槨内の調査に入り、おびただしい遺物が出土し始めた。そして27日の昼前に棺内から三角縁神獸鏡が発見された。これらの調査成果は報道するとともに、9月3日に地元向け現地説明会並びに一般現地説明会を催したところ全国から1700名に及ぶ参加者を得た。説明会実施以降も見学者は後をたたなかつた。また、現地説明会を前に研究者対象の現地見学を実施し、悪天候にかかわらず150名の見学者があった。

現地説明会が終了後、土層観察のために残っていた露出した粘土槨部分の掘り下げを始めた。遺物を取り上げ後、粘土槨の小口部分の構造を把握するための調査に入った。墳丘の調査は7月13日から実施し、墳形・規模を確認する目的で6本のトレンチを設定した。また、露出した断面については土層の剥ぎ取りを実施した。

すべての調査を同年10月28日で終了した。翌日から調査区を真さ土で埋め戻して養生を実施した。露出した断面は土嚢で覆い、墳丘の断面裾は杭と横板で土嚢を補強した。

無名であった古墳の名称については、小字から「庭島塚古墳（にわとりづかこふん）」とした。大阪府教育委員会に対し、平成17年11月に埋蔵文化財包蔵地の取り扱い変更協議書を提出し、東阪田遺跡のなかに種類と時代を追加した（註3）。

墳丘については、平成18年度から3カ年計画で継続調査を実施することとなった。平成18年度の調査は、古墳の東側にある平坦面や西側の旧国道などの周辺地形を含む墳丘測量の実施と前方後方墳の墳丘裾を確認する目的からトレンチを前方部に3箇所、後方に2箇所を設定した。設定したトレンチの幅は1m内外とし、調査による損傷を最小に留めることとしたが、盛土観察のため墳丘を断り切った箇所もある。調査は9月1日から翌年の3月20日まで実施した。

平成19年度の調査は、前方後方墳のくびれ部に2箇所と前方部の北東コーナーに調査区を設けた。墳丘裾を確認する昨年度の目的と異なり、墳丘の外部施設の構造とその保存状況を把握することが目的である。調査は12月18日から3月20日まで実施した。

平成20年度の調査は、前方部墳頂平坦面と墳丘東側裾に2箇所を設定した。前方部に埋葬施設があるか否か、前方部の墳丘構築方法の解明を目的とした。調査は7月1日から3月27日まで実施した。

以上4年に渡る発掘調査を終了し、平成21年は報告書作成に取り掛かっている。したがって、ここに記述した内容は過去4年にわたる報告書と異なる点がある。

出土遺物については平成18年度から整理作業並びに保存処理を実施した（註4）。平成18年度から実施した整理作業は、平成17年度出土した遺物のうち銅鏡、筒形銅器、銅鏃、鉄製武器・武具・農工器具は保存処理が必要であるため、処理前の実測図作成を行った。処理は委託業務とし、18年度末に完了した。19年度から20年まで、副葬品の整理を実施した。

以下、調査日誌にて提示しておく。

○の数字はトレンチ番号

■ 後方部墳頂調査区

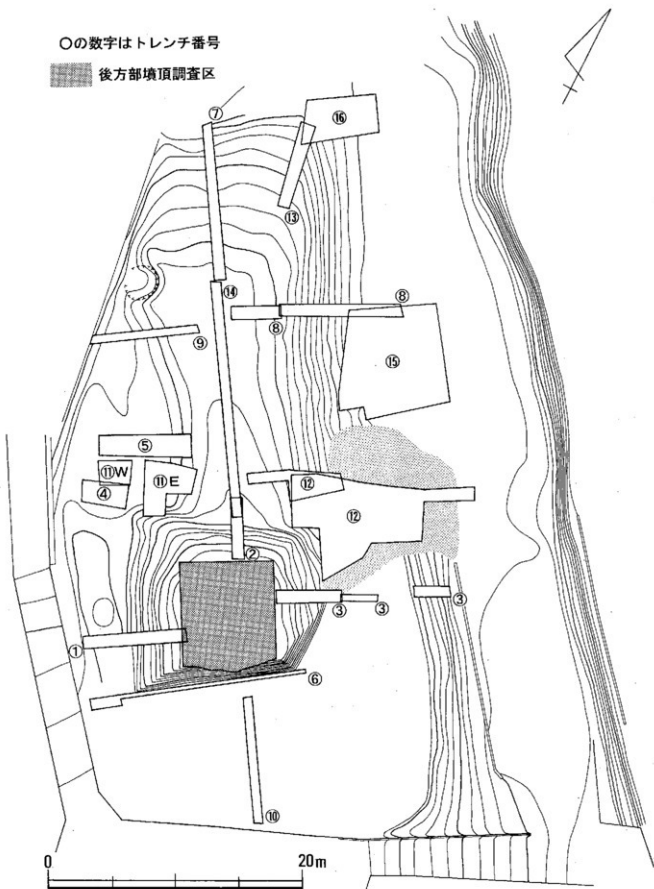


図4 調査配置図

## 庭鳥塚古墳調査日誌（2005）

6月6日（月） 松村課長・吉澤係長・高野係長・河内主事4名参加  
 ・墳丘部分の竹藪を伐採する。墳形は方墳であるようだ。墳丘裾に拳大の川原石が表土から露出しており、葦石が存在するようだ。墳輪については表採できない。樹立の有無は発掘調査に譲る。

6月7日（火） 松村課長・吉澤係長・武村係長・河内主事4名参加  
 ・作業は午後から半日。塵芥車が確保できたので、昨日伐採した竹を回収し、破棄する。思った以上にこずり1回しか回収できなかった。墳頂部の平坦に少し凹みがあり、拳大の川原石が散乱しているの盗掘されている可能性がある。表面には落ち葉が堆積しているの、掘影前には取り除かなければならない。

6月8日（水）  
 吉澤係長・武村係長・河内主事  
 墳丘の立木を伐採、回収作業。墳頂部の落ち葉を回収。2屯ダンプで3回破棄。

①墳頂部の落ち葉を取り除いたところ、中央から東側には少し凹みがあり、その周辺には3cm前後の礫石が散乱している。盗掘されている可能性が高くなった。

②また、南側の削平された近辺には1cmぐらいの小礫が散布していた。断面で観察できた粘土槨の礫敷の可能性がある。西側にも散布していることから墳丘頂部の表面に葺かれている可能性がある。

③南西墳頂部から須恵器片2点表採する。

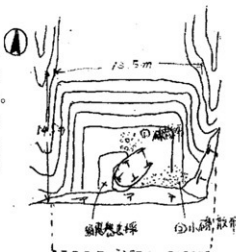


図5 6月8日調査略図

6月9日（木）  
 吉澤係長・武村係長・河内主事  
 ・墳丘周囲の落ち葉の回収。北側裾部の葦石は遺存度が良好である。午後から塵芥車が確保できたので、落ち葉や伐採樹や竹の回収、破棄する。削平された粘土槨断面に鉄製品が露出しているのを確認した。断面から鉄刀か。当古墳の被葬者が北枕であった場合、胴部部分から足元を削った可能性がある

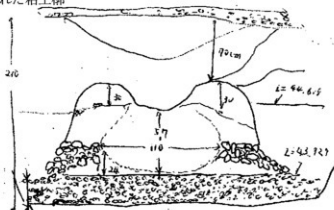


図6 6月9日調査略図

6月10日（金）  
 作業なし

6月13日(月) 河内主事

・午前中、中嶋・河内2名でレベル移動した。(B. M42.968m) 午後から墳丘測量を開始する。スケールは50分の1とし、25cmコンタで測る。測量中、墳頂部西側から須恵器等3点を表採した。

6月14日(火) 河内主事

・午前中、墳丘測量の続き。東側墳丘部完了した。残りは西側墳丘裾部のみ。落ち葉が厚く堆積し、その除去が必要である。伐採木も数本残る。墳丘測量は一旦中断し、古墳周辺平板測量図作成した。スケール100分の1。  
・午後から作業室にて製図作業を実施。50分の1の墳丘測量図の合成と平板測量図への墳丘測量図を合成する。

6月15日(水) 吉澤係長・河内主事

・本日予り報であったが、晴天に恵まれ午後から墳丘西側の樹木伐採と墳丘裾の落ち葉を回収する。ゴミも多く投棄され、作業に思いのほか時間を要し、すべて排除できなかった。墳丘西側の測量は先送りになりそうだ。

6月16日(木) 吉澤係長・河内主事

・調査前の現場写真を高所作業車で撮影する。南側・東側・南東側の3ヶ所。  
ネガ・カラー、スライド、プローニ(モノクロ・カラー)  
古墳の近景も撮影。

6月20日(月) 河内主事

・墳頂平坦面に十字のセクションを設け四分割に区割りを行った。各区の名称は南西部をⅠ区、南東部をⅡ区、北東部をⅢ区、北西部をⅣ区とする。  
本日から作業員による人力掘削を実施する。作業員は3人。Ⅰ区表土掘削。黒褐色腐葉土に礫が多く含まれていた。近世の陶磁器に混じって須恵器が出土した。明黄褐色土の面まで下げた(厚さ23cm)。Ⅳ区表土掘削。黒褐色腐葉土に10~13cm大の河原石が見られた。塚状に積み上げられていた可能性あり。近世の陶磁器に混じって須恵器、弥生土器、石器(石槍)が出土した。明日も継続。

6月21日(火) 河内主事

・墳頂平坦面Ⅳ区(北西部)表土掘り下げ続き。午前中に完了。続いてⅢ区(北東部)の表土(黒褐色腐葉土)の掘り下げ。多くの川原石に混じって、主に近世陶磁器が見られたが、古墳時代の須恵器や中世の白磁も包蔵されている。Ⅰ区、Ⅳ区で南北2.5m、東西1m以上の範囲に黒色土が見られ盗掘孔と考えられる。深さについては掘り下げていないので不明である。今のところ主体部の粘土塊が検出されていない。盗掘は小規模か？



6月22日（水）

・墳頂平坦面Ⅲ区（北東部）表土掘り下げ続き。午前中に完了。続いてⅡ区（南東部）の表土（黒褐色腐葉土）の掘り下げ。近世陶磁器が包蔵されているが、遺物の出土量はⅠ、Ⅳ区に比べ少ない。Ⅱ区、Ⅲ区においても盗掘孔らしい黒色土の面を確認した。東西は3.4mである。

6月23日（木）

河内主事

・墳頂平坦面の精査。盗掘孔の検出状況写真を撮影。黒色土を下けると40cmの深さで掘り上がってしまった。黒褐色腐葉土の下に黄褐色土（10Y R5/6）の面を確認した。Ⅰ区（南西部）を掘り下げ。近世の遺物が包蔵することから黄褐色土は近世の盛土であることがわかる。

6月24日（金）

河内主事

・墳頂平坦面Ⅲ区・Ⅱ区の黄褐色土を掘り下げる。補助員の中嶋とⅣ区の黄褐色土のコンター取り。（50分の1縮尺、25cmコンター）とセクション断面図を作成。

6月27日（月）

河内主事

・作業員6人。

・墳頂平坦面Ⅳ区（北西部）、黄褐色土掘り下げ。こぶし大の川原石が集中して検出された。石を積み上げたように見える。セクションの一部を取り外し。

6月28日（火）

河内主事

作業員4人。

・墳頂平坦面Ⅳ区掘り下げ。川原石が他の地区より多い。一部セクション取り外しを完了する。墓壁のラインを検出を開始した。

6月29日（水）

河内主事

作業員4人。

・墳頂平坦面で墓坑面検出完了する。規模は東西6.4m、南北5.1mを測る。  
午前中、検出状況の写真撮影。高所作業車にて撮影。  
墓坑の掘り下げ実施。4分割法で、南側を掘り下げ。

6月30日（木）

河内主事

作業員4人。補助員1名（中嶋）

・墳頂平坦面。墓坑平面プランの平板測量。スケール50分の1で作成。  
墓坑南側掘り下げ。粘土層を平面で検出する。被覆粘土の陥没が断面で確認した部分よりも大きい。

7月1日(金)

・悪天候のため発掘作業を見送り。古墳と駐車場の間に安全柵設置と墳丘に階段設置する。  
 降雨のため、作業は午前中で終了した。

7月4日(月)

・雨天のため、作業中止。

7月5日(火)

河内主事

作業員4人。補助員中嶋午後から半日

・墳頂平坦面の調査。

墓坑の北側掘り下げ。粘土椀の小口部を検出。

墓坑北東部に斜道らしい突出部を検出。

墓坑セクション20分の1スケールで作成。

東セクションをはずす。南セクションの断面写真撮影をする。

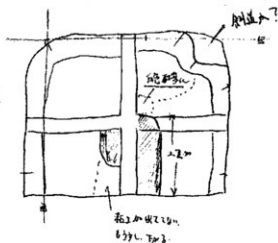


図7 7月5日調査略図

7月6日(水)

河内主事

作業員4人。補助員1名(中嶋)

・墳頂平坦面の調査。

墓坑北側掘り下げ。赤色顔料を確認。

サンプル採集のみ。周辺精査。副室の存在を

考えるが今の段階では掘り下げはしない。

墓坑内のセクションすべてを除去する。

粘土椀の全形が確認できた。

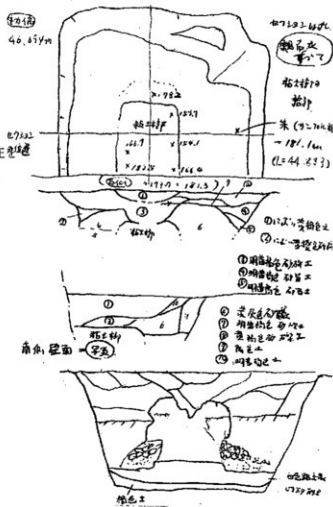
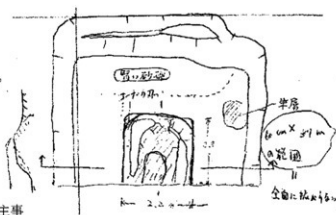


図8 7月6日調査略図

7月7日(木)

河内主事

- ・墳頂平坦面。
- 墓坑充填土の掘り下げ。朱層面の清掃。
- 写真撮影。
- 粘土椶の精査。陥没部分掘り下げ。
- 墓坑の肩面の精査。掘り下げ。



7月8日(金)

- ・墳頂平坦面
- 粘土椶の掃除。被覆粘土の表面検出。
- 墓塚北側の壁を精査。→2段落ちて、墓塚の東側と西側の両側の形態と異なる。幅30cmのテラス面をもつ。
- 墳丘測量の続き。西側部分を50分の1で測量。
- 本日で墳丘測量は終了する。墳丘周辺は必要があれば測量を実施する。



図9 7月7日調査略図

7月11日(月)

雨天のため作業中止。

7月12日(火)

河内主事

- ・雨天のため作業中止。

7月13日(水)

河内主事

- 作業員3人。補助員1人(中嶋)
- ・墳頂平坦面。
- 墓塚内充填土(埋土)の掘り下げ。
- 粘土椶東側に朱面を確認する。30cm四方の範囲。
- 墓塚北西の朱面をA、今回検出した朱面をBとした。
- 墳丘部にトレンチ設定。
- 後方部の西側1トレンチ、北側に2トレンチ。

7月14日(木)

河内主事

作業員3人。補助員半日(中嶋)

・墳頂平坦面

粘土榎平面図作成のため、地区割り。

墳丘部

墳丘西側の1トレンチの掘り下げ。

墳丘北側の2トレンチの掘り下げ。

7月15日(金)

河内主事

作業員3人。補助員1人。(中嶋)

・墳頂平坦面

粘土榎平面図作成。スケール10分の1。

墳丘部

第1トレンチ西側拡張。

7月19日(火)

河内主事

作業員3人。補助員2人。(中嶋・寿村)

・墳頂平坦面

粘土榎実測。コンター図作成。

墳丘部

第1トレンチ石組み検出。

7月20日(水) 図

作業員3人。補助員1名。

・墳頂平坦面

粘土榎の北小口に粘土で被覆しない  
礫が充填されている。

粘土榎に東西方向のサブトレ。

西側粘土端で朱を検出。

墳丘部

第1トレンチで検出した石組みの精査。

後方部北西に第4トレンチを設定し、  
掘り下げを始める。第1トレンチの石  
組みの実測。

第1トレンチで検出した石組み遺構の  
北側延長を確認するために第4トレン  
チを墳丘北西部に設定した。調査区南  
東で石が出始める。

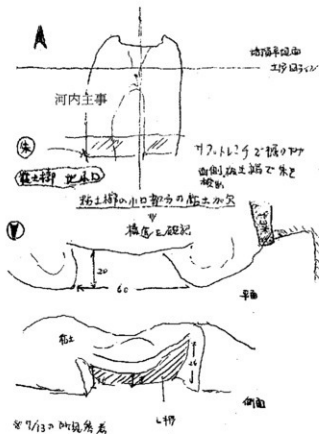


図10 7月20日調査略図

7月21日(木) 図

作業員3人。補助員1名。

墳頂平坦面

粘土梯の掘り下げを本日から開始する。  
西側の被覆粘土から除去。筒型銅器が出土した。

この段階で古墳は前期末に絞られるとともに三角縁神獣鏡の出土をあきらめる。  
そのほか鉄鍔、銅鍔が出土し始める。

黒い物体は何か。

墳丘部

第4トレンチ掘り下げ。

第1トレンチの石組み実測。レベル入れ。

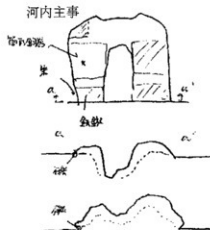


図11 7月21日調査略図

7月22日(金)

河内主事

作業員3人。補助員1名。

墳頂平坦面

昨日に続き粘土梯掘り下げ。

小口部を除き精査をする。

粘土梯の縁に幅14cmの襷が巡る。

調査の検討項目を

- ①小口部の構造
- ②棺形態と大きさ
- ③副葬品の種類

と配列の3点を重点とし被覆粘土の除去に努める。

筒形銅器は南に口を向けている。

周辺に銅鍔が出土。筒形銅器に比べ残りが悪い。

墳丘部

第4トレンチ掘り下げ。調査区の南東部で川原石が多くなる。表土下20cm。土が固い面に石が多く現れる。北側はやわらかい。

石が礫石だとすれば、北西コーナーとなり墳形は方墳となる。

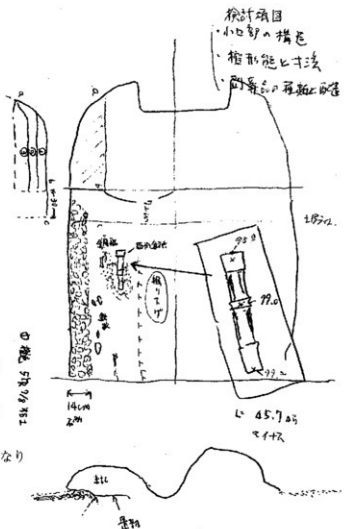


図12 7月22日調査略図





7月28日(木)

河内主事

作業員3人。補助員1人。

墳頂平坦面

鏡の上の木質は棺材であるようだ。写真撮影をとる。

粘土塚西側、鉄の塊部分を精査。袋状鉄斧と煙冊形鉄斧とわかる。かなり馬鹿でかい品である。

墳丘部

第4トレンチ掘り下げ。

第2トレンチ掘り下げ。

7月29日(金)

河内主事

作業員3人。補助員1人。

墳頂平坦面

粘土塚木棺部分の掘り下げ。鉄製品出土。朱塊検出。

鏡は三角縁神獸鏡とわかる。縁が鈍いので仿製鏡か。

鉄鍔・銅鍔の黒色有機質は靱の可能性あり。

墳丘部

第4トレンチ。礫の掃除。

8月1日(月)

河内主事

作業員3人。補助員2人。調査員0.5人

墳丘部

来客が多く棺内の調査に集中できず、墳丘の調査に重点をおく。測量ポイント移動。墳丘測量。

第4トレンチ。サブトレンチ設定掘り下げ。円筒埴輪が出土。庭鳥塚古墳に埴輪が伴うことが明らかとなった。共通編年のⅡ期であるが、スカシ孔の数が不明。

第1トレンチの葦石の転落石を取り上げ。羽釜が出土する。

8月2日(火)

河内主事

作業員3人。補助員0人。

墳頂平坦面

粘土塚周辺の精査。木棺痕跡の検出に努める。棺の側板は立ち上がるようだ。鏡の周辺に見られた黒灰色粘土は棺が粘土になる直前で、完全に粘土化すると白色になるようだ。

墳丘部

第4トレンチ。出土した埴輪の精査。列をなさない。単独か？

第5トレンチ設定。前方部の存在確認するため東西方向に設定。表土剥ぎ。



8月3日(水)

河内主事

作業員3人。

墳頂平坦面

粘土槨精査。木棺の痕跡を探す。今日の段階では木棺の構造は組合せ式と判断する。棺身横断面は底が平らで両方に直線に立ち上がる形状でいわゆる箱形を呈するようだ。小口部外様は未確認。

墳丘部

第4トレンチ検出中の埴輪の横から土器を発見。葺石らしき石組みを確認。

第5トレンチの表土・黄褐色土掘り下げ。テラス状の平坦面を検出。

8月4日(木)

河内主事

作業員3人。補助員2人。

墳頂平坦面

本日から粘土槨の東側の被覆粘土を除去する。いきなり2本目の筒形銅器の出土に驚き。ほか銅鏃、鉄鏃が出土。

棺内の赤色顔料の北側で刀子が出土。柄と考えられる木質部が遺存する。

墳丘部

第5トレンチ。西側に調査範囲を拡張する。表土掘削。

第4トレンチ北側で土器が割れた状況で出土。葺石の転落石を除去し、10分の1スケールで出土状況図作成。

8月5日(金)

河内主事

作業員3人。補助員0.5日×2人。

墳頂平坦面

東側の被覆粘土の除去続き。筒形銅器は西側と異なる山田分類のⅢ類。内側は空洞で、銅棒が入っている。袋か?スカシ孔からの粘土の進入は認められない。周囲に黒色の有機質が取り巻いている。挿入口は不明。確認できなかった。

鉄鏃や銅鏃が多く出土し始める。

墳丘部

第4トレンチ。土器出土状況図にレベル入れ。エレベーション図を作成する。

第5トレンチの西側をさらに拡張する。トレンチの北側にサブトレンチを設定し、掘り下げる。

8月8日(月)

河内主事

作業員3人。補助員0.5人。

墳頂平坦面

木棺の北側小口の確認を急ぐ。

棺北側の鉄刀?鉄剣?がさらに北に伸びる

墳丘部

第5トレンチの西側をさらに拡張したところ、葺石らしき石敷きを確認した。

4時過ぎに大阪府教委から2名視察。墳形と規模の確認調査を指導される。

8月9日(火)

河内主事

作業員3人。補助員1人。

墳頂平坦面

粘土層に灰白色粘土が南北に長く直線状に確認する。棺の東側ラインか? 棺幅が1.1mを測るので、少し大きいすぎるのでは。

墳丘部

第5トレンチの石敷き精査。第4トレンチで検出した葦石の位置が不自然。→造出し? 葦石上面から中世の土器が出土する。3.1mの平坦部が存在する。

8月10日(水) 河内主事・吉澤係長

作業員3人。補助員2人。

墳頂平坦面

棺東側を精査。幅20cmにわたり白色粘土が存在するが、掘り下げたところ鉄鏡が35本、銅鏡13本が落ち込んだ状況で出土した。

墳丘部

前方部の竹を伐採・片付け。

前方部の測量を実施。

8月11日(木) 吉澤係長・河内主事

作業員3人。補助員1人。

墳頂平坦面

棺の西側掘り下げ。

刀もしくは剣の基部を確認。棺の東側の白粘土の北への広がりを精査し、追いかける。銅鏡の上に覆っていた木棺の残骸を除去する。三角縁神獸鏡と判明する。鏡背は粘質土、木質で不鮮明である。

墳丘部

墳丘部の測量。

8月12日(金)

河内主事

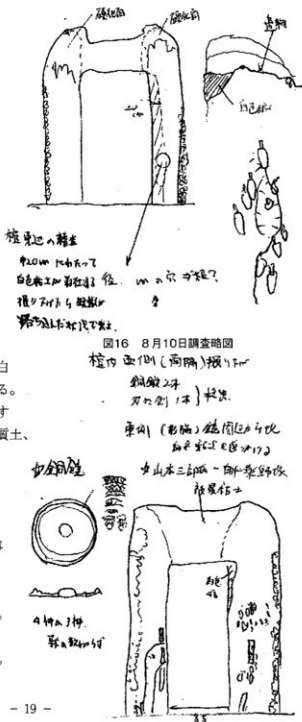
作業員2人。補助員0人。

墳頂平坦面

鏡の出土写真をカメラマンにお願いする。

墳丘部

墳丘南側壁面トレンチを西側に拡張する。



溝状遺構を検出、写真撮影と図面作成。

第5トレンチと第4トレンチで検出した葺き石の位置確認。前方後方墳の可能性もあり。

8月13日（土）

河内主事

作業員0人。補助員0人。

お盆休みで作業員も補助員も休み。見学者も午前中に地権者のご家族が来られただけだ。穏やかな1日と思った矢先、この日は驚きの1日となった。野帳には「昨夜、吉澤係長が棺材に付いていた鏡を（保存）処理し、割がすことに成功。クリーニングも終え、神獣がはっきり見えていた。そのため、昨日撮った鏡の写真を再度取り直すことになり、阿南氏にお願いした。午後3時半から撮影準備に入り、現場に残る鏡のクリーニングを実施。ところが鏡に銘帯があるのに気がつき、仿製鏡が一転して、舶載鏡となった。」と文章で経過を書いている。撮影は7時過ぎまでかかった。

8月15日（月）

河内主事・吉澤係長

作業員0人。補助員0人。

粘土榎東側の小口付近を精査。粘土榎北端から40cm南まで副葬品は確認できない。

午後から鏡の取り上げ。粘土榎の一部を含めての取り上げ作業で、鏡の下に木棺の底板が一部残っていることが確認できた。

8月16日（火）

河内主事

作業員3人。補助員1人。

ユンボ0.1 搬入・搬出

墳頂平坦面

小口部分を精査したところ、側板の痕跡が小口板より40cm外側に延びることが判明した。箱式木棺が确实になる。

墳丘部

古墳東側の土砂を重機により押し出し、平坦面を作る。墳丘東側の整地部分を重機で掘り下げる。（第3トレンチ）

墳丘南側壁面撮影のため分層ラインはすべて削り取る。また、墳丘南側のトレンチ掘り下げ。12日検出した溝状の遺構を掘り下げたところ葺き石が検出された。

8月17日（水）

河内主事

作業員3人。補助員2人。

墳丘部

重機で掘削した第3トレンチを精査する。地山の傾斜変換点を確認するが、葺き石は認められなかった。

第5トレンチで検出した葺き石の平面図作成。

本日、富田林記者クラブへ事前のレクチャー。記者発表が25日、現地説明会を9月3日にすることに。

8月18日(木)

河内主事

作業員3人。補助員0.5人。

南側壁面のトレンチを第6トレンチとする。葦石の精査。南側墳丘を精査。南東側も精査。

第5トレンチの掘除終了。

午後から橿原考古学研究所の樋口先生に銅鏡を覗いていただく。

8月19日(金)

河内主事

作業員3人。補助員2人。

第5トレンチの葦石平面図のレベル入れ。

第3トレンチの土層断面図を作成する。

カメラマンによる墳丘断面の撮影。

第1トレンチの石組みを掘り下げ。

8月20日(土)

河内主事

作業員3人。補助員0人。

撮影のための準備。高所作業車によるカメラマンの全景写真。大掛かりな撮影に近所の人の見学多数。東側の道路の工事で大量の石が出ていたとの目撃情報を得た。

8月22日(月)

河内主事

作業員0人。補助員0人。

疲労が見え出したので本日作業員の休養日とする。

8月23日(火)

河内主事

作業員0人。補助員0人。

雨天のため、作業中止。

8月24日(水)

河内主事

作業員3人。補助員1人。

第5トレンチ。土層確認のため北側壁に沿って断ち割りする。墳丘盛土内から弥生土器が出土した。

第1トレンチの石組みを掘り下げ。

8月25日(木)

河内主事

作業員3人。補助員1人。

台風11号の影響で風が強い。雨の心配をしていたが問題はなし。本日2午後2時から西浦東小学校で記者発表。新聞、テレビなどの報道関係者が集まる。説明後、現地へ移動。

墳丘部

第5トレンチの北側壁の分層。

第1トレンチの石組みを掘り下げ。

第6トレンチの葦石平面図を作成。

8月26日（金） 河内主事

作業員0人。補助員0人。  
休息日のため作業中止。

8月29日（月） 吉澤係長・河内主事

作業員3人。補助員0人。  
墳丘の東側に第3トレンチを設定し、人力掘削。  
第1トレンチ下層で葦石を確認した。  
吉澤係長、南側墳丘の土層剥ぎ取りを本日から開始。

8月30日（火） 吉澤係長・河内主事

作業員3人。補助員1人。  
研究者対象に現地見学を実施する。  
土層剥ぎ取り。午後から運搬。

8月31日（水） 河内主事

作業員0人。補助員0人。  
雨天作業中止。

9月1日（木） 河内主事

作業員3人。補助員2人。  
新聞朝刊に記事が載る。本日から現地説明会の準備作業。  
第6トレンチの葦石平面図にレベルを入れる。土層断面図を作成する。

9月2日（金） 河内主事

作業員3人。補助員0人。  
現地説明会の準備作業。

9月3日（土） 松村課長・高野係長・吉澤係長・武村係長河内主事

作業員5人。 補助員0人。内業作業員 人。  
本日現地説明会。準備等の作業があり午前7時から開始した。  
9時に地元説明会。一般見学は10時とし、13時で片付け。16時で終了した。

9月5日（月） 河内主事

作業員0人。補助員0人。  
台風14号接近のため作業中止。

9月6日（火） 河内主事

作業員0人。補助員0人。  
台風14号接近のため作業中止。

9月7日(水)

河内主事

作業員0人。補助員0人。  
台風14号接近のため作業中止。

9月8日(木)

河内主事

作業員3人。補助員2人。  
本日から南側のセクション部分の掘削を始める。表土剥ぎ。近世の遺物が出土した。  
午後から現地説明会の片付けを行う。

9月9日(金)

河内主事

作業員3人。補助員2人。  
墳頂平坦面  
セクション部分の掘り下げ。粘土層上面出現。  
墳丘部  
第4トレンチの葺石平面図作成。  
第5トレンチ土層断面図作成。

9月12日(月)

河内主事

作業員3人。補助員2人。  
墳頂平坦面  
粘土層実測。  
墓壙充填土で土嚢作り。養生用。  
墳丘部  
第6トレンチの葺石を断ち割り。

9月13日(火)

河内主事

作業員3人。補助員1人+0.5人。  
今日から関西大学の細川晋太郎君がボランティアで参加。第2トレンチ断ち割り。  
第1トレンチの基底石を掃除。  
粘土層の平面図を10分の1スケールで作成する。レベル入れ。  
第6トレンチの土層断面図を作成。

9月14日(水)

河内主事

作業員3人。補助員1人。  
墳頂平坦面  
粘土層の図面が終了したので、粘土層の掘り下げを行う。  
粘土層の表面に凹凸が観察された→工具痕跡？

9月15日(木)

河内主事

作業員3人。補助員1人。

墳頂平坦面

粘土槨掘り下げ。小型鉄斧を検出。中央部北面断面図作成。棺内底近くを掘り下げる。中央に朱層が明確に残る。両脇に白色粘土。

墳丘部

第1トレンチ。葦石基底石の検出状況写真撮影。平面図作成。

第6トレンチ。葦石の転落石を除去する。葦石の上面で瓦器、羽釜が出土する、基底石を確認した。葦石の上部の残りは余り良くない。

9月16日(金)

河内主事

作業員3人。補助員0人。

墳頂平坦面

粘土槨の縦断面の土層図作成。粘土槨中央の被覆粘土を掘り下げる。灰白色粘質土が面的に確認。その下から赤色顔料が検出されるので、灰白色粘質土は棺蓋の痕跡か。被覆粘土から土器片が出土した。

墳丘部

第4・5・6トレンチの掃除。写真撮影。

第1トレンチ。レベル入れ。土層図作成。

9月17日(土)

河内主事

作業員0人。補助員1人。

墳頂平坦面

粘土槨のセクションベルト土層写真。セクションベルト除去。

粘土槨西側から鉄斧。銅鏃・鉄鏃・刀剣類が出土。西側には銅鏃が目立つ。

東側で鉄板が顔を出す。期待の短甲か。方形板でないようだ。結論は明日へ持ち越し。

9月18日(月)祝日

河内主事

作業員3人。補助員1人。

墳頂平坦面

粘土槨を掘り下げ。西側の掘削が完了。ヤリ先に木質が遺存する。取り上げた粘土塊に直弧文の入った漆膜片が付着していることを発見。本体はヤリ先に残っている。東側の鉄板は20cm程度で端が確認できたので、形状から箆手と考えた。

9月20日(火)

河内主事

作業員0人。補助員2人。

墳頂平坦面

粘土槨の東側を掘り下げ。箆手のきれいに検出。

第4トレンチの葦石平面図のレベル入れ。

9月21日(水) 河内休み  
作業員0人。補助員0人。  
休養日。作業中止。

9月22日(木) 河内主事  
作業員3人。補助員2人。  
墳頂平坦面  
カメラマンによる出土遺物の撮影。撮影準備。ヤリ先の漆膜の掃除。  
墳丘部  
第2トレンチの南側拡張。

9月23日(金) 祝日 河内主事  
作業員3人。補助員1人。  
墳頂平坦面  
粘土槨の気になる部分2ヶ所を掘り下げ。一つは西側の筒形銅器と鉄斧の間の落ち込み部分(A地点)。もう一つは棺側板の東側の南端で、粘土槨と棺の間に当たる(B地点)。A地点では鉄片が出土。冑か、甲か種類わからず。B地点からは鉄鏝が2点出土した。副葬品の落ち込みか。  
墳丘部  
第2トレンチ断面。

9月26日(月) 河内主事  
作業員3人。補助員1人。  
墳頂平坦部  
粘土槨西方の前壊面から鉄片が多く出土。全体の判る破片はない。冑の小札か。  
墳丘部  
第2トレンチ。完掘。土層写真の撮影。  
第1トレンチ。墳丘の断ち割り。北側壁に沿って深掘りをする。

9月27日(火)  
休息日。現場休み。

9月28日(水)  
雨天のため作業中止。  
9月29日(木) 河内主事  
作業員3人。補助員0人。  
墳頂平坦面  
粘土槨の小口部調査。小口板の痕跡が認められない。  
墳丘部  
第1トレンチの掘り下げ。黒色砂質土の層を検出する。



9月30日(金)

河内主事

作業員3人。補助員0.5人。

墳頂平坦面

粘土槨の遺物出土状況写真。カメラマンによる。

墳丘部

第1トレンチ。土層断ち割り。

本日で作業員による作業は中断。

10月3日(月)

河内主事

補助員1人。助っ人3人

本日から粘土槨の遺物出土状況図面作成(初日)。鹿児島大学橋本達也先生、鹿児島大学学生甲斐康大君が新たに助人として加わる。区割り図作成。

区割り

10月4日(火)

河内主事

補助員1人。

粘土槨遺物出土状況図面作成。(2日目)

粘土槨の西側が大きく陥没している箇所は空洞であったか。

10月5日(水)

河内主事

補助員1人。

雨天の中、粘土槨遺物出土状況図面作成。(3日目)

10月6日(木)

河内主事

補助員1人。

粘土槨遺物出土状況図面作成。

(4日目)東側の鎌のうち切っ先が北側を向くものを検出(鉄鎌85)。

南側の断面図まだ完成せず。分層作業を再開する。

10月7日(金)

河内主事

補助員1人。

粘土槨遺物出土状況図面作成。(5日目)

10月11日(火)

雨天作業中止。

10月12日(水)

河内主事

補助員0.5人。

昨日の雨がシートに溜まり、粘土槨を覆う

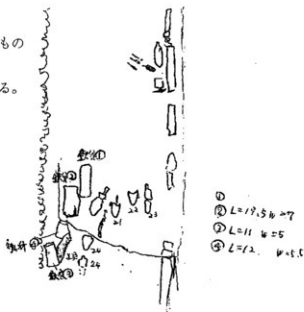


図18 10月7日調査略図

シートの骨組みが大きく湾曲した。幸いに遺物は無事であった。粘土槨遺物出土状況  
図面作成。(6日目)

本日から出土状況図にレベル入れ。(1日目)

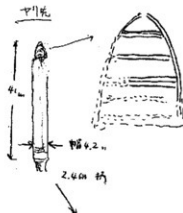
10月13日(木)

河内主事

補助員1人。

粘土槨遺物出土状況図面作成。(7日目)完了

レベル入れ。(2日目)



10月14日(金)

河内主事

補助員1人。

粘土槨遺物出土状況図面レベル入れ(3日目)

第1トレンチ土層断面図作成。

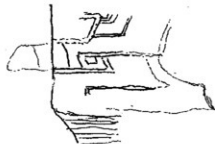
10月17日(月)

河内主事

補助員1人。

粘土槨遺物出土状況図面レベル入れ(4日目)。完了。

墳丘東南部の断面精査。



10月18日(火)

河内主事

補助員1人。

墳丘東南部の断面精査。

第3トレンチ断面図作成。

図19 10月19日調査略図

10月19日(水)

河内主事

補助員1人。

粘土槨遺物精査。直弧文のある漆膜。

墳丘断面図作成。

10月20日(木)

河内主事

補助員0.5人。

カメラマンによる粘土槨遺物出土状況写真撮影。墓塚に作った覆屋を撤去する。資材を片付け。撮影準備・片付け。午後から高所作業車を搬入。

第4トレンチ断面精査。

10月21日(金)

河内主事

補助員1人。

カメラマンによる粘土槨遺物出土状況写真。高所作業車。

第4トレンチ土層断面図作成。

10月22日(土)

河内主事

補助員0人。

本日から遺物の取り上げ予定が朝から雨降り。現場にて作業を見合わせていたが10時半に雨が上がり、棺内の遺物取り上げをする。昼食後、再び雨が降り作業を中止とした。

10月23日(日)

河内主事

補助員0人。

墳頂平坦面

棺内の朱の厚みを確認するため半裁したところ、翡翠製の勾玉が出土した。玉類はこれが最初である。出土状況図作成後、写真撮影して早々に遺物取り上げた。

墓壕内北西コーナー掘り下げ。

墓壕の砂礫の間に硬くしまった砂質土が観察された。構架の休止面か。朱層は見られなかった。北側小口部分は砂礫層の下に朱層が観察できた。朱層の下は粘土でその下に排水の礫が見られた。

棺外遺物取り上げ。

墳丘部

第1トレンチ掘り下げ。墳頂近くで炭と焼土が混じる層を確認した。出土状況から儀礼に伴うものではないようだ。

第2トレンチ再精査。前方部側の盛土方法を確認する。

10月24日(月)

河内主事

作業員2人。補助員1人。

ユンボ(0.1)重機搬送

墳頂平坦面

墓壕内北西部掘り下げ。

粘土柳小口部サブトレンチ掘り下げ。

赤色顔料による直弧文がある黒漆の膜が出土した。

粘土柳崩壊部分を精査。鉄片や鉄鏝2点

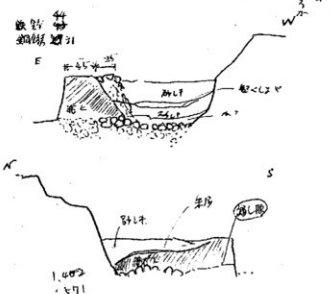
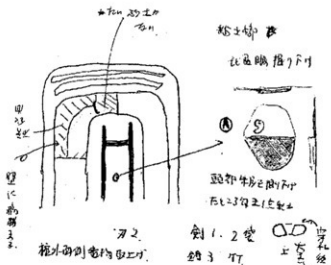


図20 10月23日調査略図

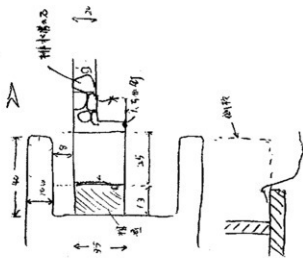


図21 10月24日調査略図(1)

出土する。黄褐色泥じりの粘土から銅鍍が1点不思議な状況で出土した(銅鍍53)。粘土部に埋め込まれた状態であった。棺外遺物取り上げ。夕方から2名の助っ人を加え、遺物の取り上げをする。終了は9時半までかかってしまった。

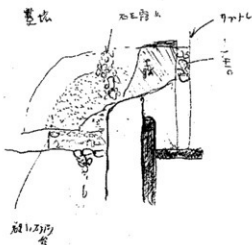


図22 10月24日調査略図(2)

10月25日(火) 河内主事  
作業員2人。補助員1人。ユンボ(0.1)  
粘土層小口部断ち割り。側板の痕跡を保存するためトレンチは拡張しなかった。遺物の損傷につながるため、漆膜の取り上げは断念した。

バカ棒を置いて筒形銅器の先に何が着くか調べたところ、西側の筒型銅器はヤリ3があった。銅器の底からヤリの切っ先までの総長2.4mを測る。東側の筒形銅器はヤリがあった。銅器の底からヤリの切っ先までの総長2.5mを測る。

埋め戻しの真さ土の搬入が始まる。

10月26日(水) 河内主事  
作業員3人。補助員0.5人。 ユンボ(0.25) 重機搬入  
朝一番に粘土層の実測図にレベル入れて、作業をすべて終わらせる。終了後、墓塚の南側縁に土囊を積み上げ壁を作る。その中に真さ土によって墓塚内を埋め戻す。

10月27日(木) 河内主事  
作業員3人。 ユンボ(0.25) 重機搬出  
各墳丘トレンチの埋め戻し。  
墳丘断面の下部に歩板と杭で土囊を置く段を築く。  
午後から土囊積み養生を始めたが、土砂サンプル採集のため養生作業が中断する。土囊積み作業は夜中まで続行する。

10月28日(金) 河内主事休み  
作業員4人。  
土囊積みによる養生完了する。今夜から明朝に雨が予想されているのでブルーシートで覆う。

10月31日（月）

河内主事

作業員2人。

墳丘をブルーシートで覆って養生する。ブルーシートが飛ばないように土嚢を置いて固定する。道具類撤収する。すべての現場作業は本日で完了した。

## 庭鳥塚古墳調査日誌（2006）

8月22日（火） 河内主査

- ・墳丘前方部東側部分の竹藪を伐採する。

8月23日（水） 河内主査

- ・伐採作業の継続。

8月24日（木） 河内主査

- ・伐採作業の継続。
- ・墳丘測量。スケール100分の1。スケールは50分の1とし、25cmコンタで測る。

8月25日（金） 河内主査

- ・伐採作業の継続。伐採草木の回収。

8月28日（月）

- ・伐採作業の継続。

8月29日（火） 河内主査

- ・伐採作業の継続。

8月30日（水） 河内主査

- ・伐採作業の継続。
- ・前方部に杭を設置。

8月31日（木） 河内主査

- ・伐採草木の回収。

9月1日（金） 河内主査

- ・雨天のため作業中止。

9月4日（月） 河内主査

- ・前方部に南北方向のトレンチを設定する。昨年度から続きとし、第7トレンチ。表土を掘り下げる。

9月5日（火） 河内主査

- ・前方部、第7トレンチ表土掘り下げ続き。午後から雨のため作業中止。

9月6日（水） 河内主査  
・墳丘・地形測量。発掘作業は中止である。

9月7日（木） 河内主査  
・第7トレンチ掘り下げ。流土から土師器1点が出土した。羽釜の髷の部分。  
東側の地形測量

9月8日（金） 河内主査  
・第7トレンチ掘り下げ。石の集積を確認する。トレンチ北端で土質が粗い砂礫に変わる。  
地山か。墳丘裾の可能性ある。須恵器片が出土。

9月11日（月） 河内主査  
・第8トレンチ設定。竹の伐採から。表土を剥く。

9月12日（火） 河内主査  
・第8トレンチ掘り下げ。墳丘斜面の裾で集積を検出する。須恵器が出土する。

9月13日（水） 河内主査  
・雨天のため作業中止。

9月14日（木） 河内主査  
第7トレンチの北側を掘り下げる。墳丘裾か。地山の平坦部を確認した。  
第3トレンチを再掘する。

9月15日（金） 河内主査  
第8トレンチの掘り下げ。集石は葺石の転落石か。斜面に小石が目立つ。

9月19日（火） 河内主査  
第3トレンチの掘り下げ。  
第7トレンチ。転落石のスナップ撮影。石の間に隙間が見られ、土砂も充填していない。

9月20日（水） 河内主査  
第7トレンチの断ち割り。葺石の基底石と考えられる石列は41.65mで、これは第5トレン  
チの葺石の基底石のレベルと合致する。  
第8トレンチ。葺石の転落石の掃除をする。

第3トレンチ。調査区断面の掃除と分層。

9月21日(木) 河内主査

第7トレンチ。断面図作成の準備。

第3トレンチの東側トレンチで多くの川原石が浮いた状況で検出する。葺石の転落石と考えられ。石の除去をする。下で地山か。削平されている可能性もある。

9月22日(金) 河内主査

第3トレンチの断面図作成。

9月25日(月) 河内主査

第3トレンチの断面図作成の続き。

9月27日(水) 河内主査

第7トレンチ。葺石の可能性のある石列を実測する。スケール10分の1で作成する。

10月3日(火) 河内主査

第8トレンチの葺石転落石を10分の1のスケールで実測。

10月4日(水) 河内主査

第8トレンチの葺石転落石の実測の続き。

現場の日程調整のため少し中断とする。

10月18日(水) 河内主査

本日から現場再開。前西部西側に新たに第9トレンチを設定する。第8トレンチに対応するように東西トレンチである。西側の表土を除去し始める。トレンチの西側は道路のコンクリート擁壁の裏込めの石が現れた。

10月19日(木) 河内主査

第8トレンチの葺石転落石のレベル入れ。

第9トレンチの表土剥ぎ。須恵器片が出土する。

10月20日(金) 河内主査

第9トレンチの掘削終了。

第8トレンチの転落石の除去し、墳丘裾の葺石を精査する。



10月24日（火）

河内主査

第9トレンチの土層断面図を作成する。

後方部南側の駐車場に第10トレンチを設定し、掘り下げを始める。駐車場契約者との協議で23日の月曜日からトレンチの掘削を予定していたが、昨日は雨のため本日からの作業となった。トレンチ北端から南に8mまで削平された後方部の盛土を確認した。

10月25日（水）

河内主査

第10トレンチに作業を集約し、南側の墳丘裾の確認に努める。墳丘の落ちを確認したが埋土が新しく、本来の墳丘裾ではないようだ。

10月26日（木）

河内主査

葦石と考えられる川原石が顔を見せだしたので、トレンチを南側に拡張する。後方部南側の葦石か。本日、文化庁、大阪府教育委員会の視察があり、調査進行の指導を受ける。午後から転落石を除去しながら葦石を検出する。転落石に埴輪片が数点含まれていたため、埴輪の配列がくびれ部以外に樹立されていることが判明した。

10月27日（金）

河内主査

第10トレンチの埋め戻し。

10月30日（月）

河内主査

第9トレンチの掘り下げ。断ち削りをする。鈍い黄橙色砂礫土から遺物が出土した。

10月31日（火）

河内主査

第9トレンチの掘り下げ。西端のコンクリート用壁近くで石垣状に積まれた川原石を検出した。葦石か。

11月1日（水）

河内主査

第9トレンチ断ち削り

11月2日（木）

河内主査

第9トレンチ断ち削り。第9トレンチの西側の石垣精査。  
土層断面図作成。

- 11月8日(木) 河内主査  
第7トレンチの断ち割り。葦石部分を除き、東壁に沿って南と北側を掘り下げる。
- 11月9日(木) 河内主査  
第7トレンチ断ち割り。  
第3トレンチの埋め戻しを始める。
- 11月10日(金) 河内主査  
第7トレンチの断ち割り  
第3トレンチの埋め戻し完了する。
- 11月13日(月) 河内主査  
第8トレンチの土層断面を作成する。  
第9トレンチの土壌サンプルを採集して埋め戻しを完了。
- 11月14日(火) 河内主査  
埋め戻し作業なし。サンプリング。
- 11月15日(水) 河内主査  
第7トレンチで検出した葦石を土叢で養生し、掘削土でトレンチの埋め戻し。
- 11月16日(木) 河内主査  
埋め戻し
- 11月17日(木) 河内主査休み  
埋め戻し
- 11月21日(火) 河内主査  
埋め戻し終了。  
伐採木や草の回収。
- 11月22日(水) 河内主査・吉澤係長  
道具撤収。現場の片付け。本日ですべての作業を終える。

## 庭鳥塚古墳調査日誌（2007）

12月20日（木） 河内主査

・墳丘くびれ部の草刈を始めるが、飛鳥千塚の調査が急遽始まったので、明日からの庭鳥塚古墳の調査は順延となった。

1月7日（月） 河内主査

・本日から作業予定であったが、雨天のため現場作業を中止とした。

1月8日（火）

・くびれ部の草刈を再開する。

1月9日（水） 河内主査

・墳丘東側の平坦部の草刈をする。

1月10日（木） 河内主査

・後方部の北西側、くびれ部に東西4.5m、南北2.1mの調査区を設け、掘り下げを実施する。第11トレンチとする。

1月11日（金） 河内主査

・第11トレンチ掘り下げ続き。表土の下のにぶい黄褐色を下げるが遺物はない。

1月15日（火） 河内主査

・第11トレンチ掘り下げの続き。変化無し。

1月16日（水） 河内主査

・午前中に草刈した草木類の回収。第11トレンチの掘削。伊万里の染付け片が出土する。

1月17日（木） 河内主査

・本日から現場にユンボを搬入する。後方部の北東のくびれ部に第12トレンチを設定し、機械による掘削を開始する。平成17年度に墳丘削平した土砂の取り除き。調査区の西側は人力による掘削を行う。

1月18日（金） 河内主査

・第12トレンチの機械掘削。墳丘削平した土砂の下に建築廃材による整地土を確認した。それを取り除くと黒褐色の表土を検出する。表土から下を人力による掘削を実施。後方部の東側で川原石の集積を確認する。トレンチ内の表土検出状況で墳丘測量を実施する。盛土、整地以前の墳丘図を作成するのが目的である。

- 1月22日（火） 河内主査  
・中絶していた第11トレンチを掘り下げ。雨天のため出土遺物の回収は明日にする。
- 1月23日（水） 河内主査  
・雨天のため作業員は作業を中止するが、遺物回収するために現場稼働。
- 1月24日（木） 河内主査  
・第11トレンチ拡張するが、墳丘崩壊土もしくは流土から川原石を多数確認。葺石の転落石か。
- 1月25日（金） 河内主査  
・第11トレンチ掘り下げ継続する。変化無し。  
第12トレンチの北側の壁面を精査する。北側にまだ旧表土が残るので人力で除去。
- 1月28日（月） 河内主査  
・第12トレンチ掘削。調査区の南側の建築廃材を除去する。18日に確認した集石から東側が急に旧表土が落ち込んで崖状になることが判った。1.6mの比高がある。  
トレンチ北側壁面の断面図を書くために水糸を張る。3m弱の高さの断面は思ったより時間がかった。
- 1月30日（水） 河内主査  
・第12トレンチ北側断面図作成。東側斜面の精査。円筒埴輪片が1点出土。東側くびれ部にも埴輪の配列が予想された。集石は東西1.9m、南北3mで墳丘のテラス部と判断する。
- 1月31日（木） 河内主査  
・第12トレンチの機械掘削を終了する。本日の夕方回収する。トレンチ北側を掃除する。調査区中央部で東西方向の溝を検出するが、埋土はバサバサしている。後方部の北辺に沿うので土地の境界溝か。
- 2月1日（金） 河内主査  
・第12トレンチの南側にサブトレンチを設け、地山の確認。トレンチ内のコンター測量をする。

2月13日（火） 河内主査

・第11トレンチ、第12トレンチの図面作成。

2月18日（月） 河内主査

・本日から作業員による作業再開する。第12トレンチの東側を拡張する。東側の墳丘裾の確認の目的とした。

2月19日（火） 河内主査

・第12トレンチの集石の掃除をする。並んだ石を検出した。基底石の可能性あり。レベルを測ると、標高41.8mであり平成17年度の第1トレンチや第6トレンチで検出した葺石の高さと合致する。

第13トレンチ設定し、表土剥ぎ。

2月20日（水） 河内主査

・第13トレンチの掘り下げ。トレンチの北東隅で拳大の石が出土した。葺石の転落石か。トレンチの東側がまだ掘り下げが可能。

2月21日（木） 河内主査

・第13トレンチの掘り下げ。川原石が出てくるが表土直下なので、レベルとポイントを確認して除去する。

2月22日（金） 河内主査

・第13トレンチの北側を3m拡張する。総長7mとなる。

2月25日（月） 河内主査

・第11トレンチのコンター測量。第11トレンチの西側に2m×2.4mの新たな調査区を設け、表土掘削。

2月26日（火） 河内主査

雨天のため作業中止。

2月27日（水） 河内主査

第11トレンチの西側を第11トレンチWとし、東側を第11トレンチEとする。第11トレンチWの東側で川原石が顔を出し始める。葺石か。

第13トレンチの全景写真撮影。断面図作成する。

- 2月28日(木) 河内主査  
第11トレンチの掘り下げ。東側からにぶい黄褐色土を掘り下げていくが、川原石も東から西へ下降する形で検出し始める。
- 2月29日(金) 河内主査  
第11トレンチWの川原石の検出。トレンチの北西を掘り残して川原石の頭だしを終了。第13トレンチのレベルをとって、北側を少し掘り下げた。転落石が固まっている事を確認する。
- 3月3日(月) 河内主査  
雨天作業中止
- 3月4日(火) 河内主査  
第11トレンチW。29日に掘り残した部分から遺物が集中。埴輪片か。葺石の直上から瓦器が出土した。葺石はトレンチ全面にわたるか。遺物を置いて掘り下げ。  
第12トレンチの集石の部分を掃除する。思っていたより残りが悪い。
- 3月5日(水) 河内主査  
第11トレンチWの掘り下げ。第13トレンチ 人力掘削  
文化庁から視察。
- 3月6日(木) 河内主査  
第11トレンチ 掃除・撮影
- 3月7日(金) 河内主査  
第13トレンチ 掃除・撮影  
第12トレンチ 人力掘削
- 3月11日(火) 河内主査  
第11トレンチWの埴輪出土状況の図面を作成する。
- 3月12日(水) 河内主査  
第11トレンチの北西隅に羽釜集中する。テラス面から浮いた状況で出土した。
- 3月13日(木) 河内主査

3月14日（金） 雨天のため作業中止	河内主査
3月17日（月） 第11トレンチ 北側土層断面図作成 第12トレンチ 墳丘斜面人力掘削	河内主査
3月18日（火） 第12トレンチ	河内主査
第11トレンチ 埴輪取り上げ	
3月21日（金） 第12トレンチ 土層断面図	河内主査
3月24日（月） 第12トレンチ埋め戻しを始める。トレンチ西北で確認した落ちを精査したところ石組みを検出する。L字状に並ぶことからくびれ部の葺石基部か。 第11トレンチ埋め戻し	河内主査
3月25日（火） 第12トレンチ埋め戻し 石列の平面図・土層断面図の追加	河内主査
第11トレンチ埋め戻し	
3月26日（水） 第12トレンチ埋め戻し終了する。本日ですべての作業を終える。	河内主査

## 庭鳥塚古墳調査日誌（2008）

7月1日（火） 河内係長

・本日から平成20年度の庭鳥塚古墳の調査を着手。墳丘を覆った雑草の草刈を開始する。墳丘東側の一段低い部分の雑草を伐採する。

7月2日（水） 河内係長

・今日は前方部に生い茂った笹を中心に伐採。

7月3日（木） 河内係長

・今日も昨日の作業に引き続き前方部側の竹を伐採。早朝に激しい降雨があったが、作業時に天候が回復。真夏の青空であったが、時折吹く風は木陰では心地よい。明日と月曜日の作業は、中止とする。

7月8日（火） 河内係長

・作業開始前までの降雨により蒸し暑さと蚊の大群に襲われながら、前方部の竹の伐採を継続する。草刈、伐採が終了した前方部に南北方向のトレンチ（幅1m、長さ19m）を設定し、表土掘削を実施する。

7月9日（水） 河内係長

・昨日から掘削を開始したトレンチの番号を14トレンチとする。現場では鐸の音が。表土をすべて除去し、トレンチを掘り下げた。トレンチ北端から南へ10.3mの地点でこぶし大の川原石が集中する。現地表面から40cm下で、黄褐色土である。

7月10日（木） 河内係長

・第14トレンチの掘り下げを続行する。にぶい黄褐色土から近世の遺物が出土した。上面からの攪乱の可能性もあるので土層断面で確認すること。

7月11日（金） 河内係長

・第14トレンチ。昨日の続き。石が多く出土している箇所を精査を実施する。石はこぶし大で、並べたり、敷き詰めたりした状況ではない。南北120cm幅に集中する。石の上層から近世の瓦片が出土したが、上層のにぶい黄褐色土の遺物かどうか判断できない。石の検出状況の写真撮影。ネガ・カラー、スライド、ブローニ（モノクロ・カラー）、本日の作業を終了する。

7月15日（火） 河内係長

・14トレンチの集石の検出状況平面図を作成。



- 7月16日（水） 河内係長  
・午前中に伐採した草木の回収。第14トレンチの掘り下げ。
- 7月17日（木） 河内係長  
・第14トレンチに掘り下げ。N130地点で弥生土器片が出土。現地表面下80cm。
- 7月18日（金） 河内係長  
・降雨のため現場の状況が悪く、調査区の掘削を断念。前方部の北東端の竹を伐採した。
- 7月28日（月） 河内係長  
・第14トレンチの北側を掘り下げ。  
・本日から機械を搬入する。前方部東側の排出土の除去をするためだ。15トレンチを設定し、併せて表土の除去も実施する。
- 7月28日（月） 河内係長  
・第15トレンチの機械掘削。表土剥ぎを始める。  
3時頃から天気が急変。突風が吹き始め、3時半から雨が降り始める。待機していたところ4時に強風を伴う雨となり作業を中止した。この日古市変電所に落雷があり、近鉄電車が不通となる。
- 7月29日（火） 河内係長  
・朝から曇り空で、作業を始めだすと小雨がふる不安定な天候。第15トレンチの機械掘削の続き。東寄りで石の頭が見え出す。南西隅で地山を検出し、墳丘裾にあたるのか。トレンチの位置を測量する。
- 7月30日（水） 河内係長  
第15トレンチの褐色土を掘り下げ。
- 7月31日（木） 河内係長  
第15トレンチの褐色土を掘り下げ。
- 8月1日（金） 河内係長  
第14トレンチ・第15トレンチ掘り下げ。本日、PL花火芸術のため作業時間を前倒しする。午後4時にすべての作業を終了した。

8月6日(水) 河内係長  
第14トレンチを掘り下げ。

8月7日(木) 河内係長  
第14トレンチを掘り下げ。土器片、サヌカイト剥片。  
明日から17日まで現場作業休み。

8月18日(月) 河内係長  
第14トレンチの掘り下げ。

8月19日(火) 河内係長  
第14トレンチ掘り下げ。

重機による排出土の除去。

8月20日(水) 河内係長  
重機による作業

須恵器表採。

8月21日(木) 河内係長  
重機による排出土除去。

8月22日(金) 河内係長  
第12トレンチの再掘。

8月26日(火) 河内係長  
第16トレンチの掘り下げ。第13トレンチの北東部から東に東西5.5m、南北3mの調査区を設定する。掘削は重機による表土剥ぎ。  
第12トレンチの再掘をする。昨年度に設定したトレンチの北西隅から幅90cmのトレンチを延長する。長さ3.4mである。

8月27日(木) 河内係長  
第8トレンチと第12トレンチの間の墳丘を測量する。スケール50分の1の図を作成。  
第8トレンチ再発掘。

8月28日(木) 河内係長  
昼前の降雨が激しくなり、作業中止。

8月29日(金) 河内係長  
12トレンチ拡張  
8トレンチ

9月1日(月)  
8トレンチ西拡張  
第16トレンチの調査区の壁を精査。

9月2日(火) 河内係長  
第8トレンチ拡張  
第16トレンチの南側にサブトレンチを設定し、掘り下げる。

9月3日(水) 河内係長  
15トレンチの排水作業。

9月4日(木) 河内係長  
第15トレンチの掘り下げ。  
第16トレンチの掘り下げ

9月5日(金) 河内係長  
第16トレンチの北側と南側にサブトレンチを掘り下げる。  
第15トレンチの西側を拡張する。

9月8日(月) 河内係長  
第15トレンチの掘り下げ。

9月9日(火) 河内係長  
第15トレンチ掘り下げ。  
第15トレンチ平面図作成。

- 9月10日(木) 河内係長  
第15トレンチの葦石精査。  
第16トレンチの葦石精査。
- 9月11日(木) 河内係長  
第15トレンチの葦石の掃除。15世紀の土師皿出土。  
第16トレンチの掘り下げ。
- 9月12日(金) 河内係長  
第15トレンチの掃除。全景写真撮影。
- 9月16日(火) 河内係長  
墳丘の周辺の立ち木伐採。  
第16トレンチ葦石を検出する。
- 9月17日(水) 河内係長  
第14トレンチの断面図作成。  
第16トレンチの掃除。撮影。
- 9月18日(木) 河内係長  
早朝の雨のために作業中止。
- 9月19日(金) 河内係長  
第16トレンチ掘り下げする。
- 9月22日(月) 河内係長  
第16トレンチの葦石精査。所々に不自然な段差があり、地震による地割れか。
- 9月23日(火) 河内係長  
第11トレンチの土囊除去。壁と調査区を掃除。  
第12トレンチの掃除。くびれ部基底石の南側の黒褐色から旧石器が出土した。
- 9月24日(水) 河内係長  
第11トレンチの掃除。  
第12トレンチの掃除  
第13トレンチの土囊除去。掃除。

- 9月25日（木） 河内係長  
現地説明会の準備。
- 9月26日（金） 河内係長  
雨天作業中止。
- 9月28日（日） 河内係長  
現地説明会を実施する。  
休み無しで作業をしたので休息日とし、明日、明後日の2日間の作業を中止する。河内も夏休暇をとる。片付けと実測は来月から行うことにした。
- 10月1日（水） 河内係長  
9月29日に移動の内示があって、休み明けの本日から担当者の河内は所属が市民協働ふれあい課へ移る。庭鳥塚古墳の調査は、兼務辞令で作業の継続をすることになる。本日は辞令交付などの事務手続きのため作業員による発掘は休み。午後から第11トレンチのレベルをとる。
- 10月2日（木） 河内係長  
現地説明会の片づけを行う。  
第11トレンチのレベルとり。第12トレンチの断面図作成。
- 10月3日（金） 河内係長  
第12トレンチの土層断面の図を作成する。  
庭鳥塚古墳の図面は、平行して調査している西山古墳に移行したので、現場は東面凍結となる。10月で西山古墳の調査を終えて、庭鳥塚古墳の調査に体制を戻す予定で調整中。
- 12月2日（火） 河内係長  
本日から作業を再開する。第8トレンチの掘り下げと壁面精査。直口壺の口縁部片が1点出土した。くびれ部以外に出土したのは初めてである。
- 12月3日（水） 河内係長  
第8トレンチで検出した石組みを精査する。石組みの内側の埋土から15世紀代の土師皿が出土した。中世の遺構か。

12月4日(木) 河内係長  
第8トレンチの掘り下げ。第14トレンチを挟んで西側に第8トレンチの延長上に調査区設定する。

12月8日(月) 河内係長  
第8トレンチの精査。写真撮影。

12月9日(火) 河内係長  
昨日の天気予報の降水確率がたかかったので、前日から作業中止としていた。ところが、午前中の天候が思ったより晴れていたため、15トレンチのレベルの数値をとる。

12月11日(木) 河内係長  
15トレンチ、くびれ部の転落石を取り除き作業をする。墳丘掘の検出に勤める。  
転落石からは遺物がまったく出土しない。

12月12日(金)  
15トレンチ、転落石の精査。

12月15日(月) 河内係長  
15トレンチの葦石の転落石の除去。幅1.1mの範囲で堆積する。

12月16日(火) 河内係長  
8トレンチの土層断面図を作成する。  
15トレンチの葦石の転落石を除去の続き。埴輪など含まない。

12月17日(水)  
15トレンチの現場写真

3月9日(月) 河内係長  
本日から現場作業を再開する。重機を搬入し、埋め戻し作業。

3月10日(火) 河内係長  
重機による埋め戻し作業。

3月11日(水) 河内係長  
重機による埋め戻し作業

3月12日(木)  
重機による埋め戻し作業。

3月13日（金）

河内係長

雨天のため作業中止。

3月16日（月）

河内係長

重機で排出土の整形。後方部を意識して土盛する。ユンボを回収して作業を終了する。  
すべての作業を完了した。

#### 4. 調査成果の活用

調査の費用は、一部が国庫補助金によるものであり、調査の成果報告や活用に努め実施内容について以下、年度毎に列挙した。

##### 【平成17年度】

調査初年度の成果報告並びに活用は、調査現場の公開が中心となった。

平成17年8月30日の午前と午後の作業時間中を研究者、埋蔵文化財担当者、考古学専攻生に現場を公開した。当日、小雨にもかかわらず150名の参加があった。A3サイズ1枚の簡単な現場説明資料を作成し、見学者に配布した。

一般の現地説明会は平成17年9月3日に実施した。午前9時から午前10時の1時間、庭島塚古墳の周辺住民限定の現地公開を実施する配慮をした。10時からの現地公開は、早朝から集合場所の西浦小学校に公開を待つ見学者の列ができ、説明会が終わった15時までに全国から1700名に及ぶ参加者を得た。説明会の資料は、A4版の6ページで、遺構や遺物の実測図を記載した。同、現説資料は9月現在の調査内容であったため、調査終了時の新しいデータの追加分を「大阪府担当者会議資料」(文献2)に載せ、ホームページにおいても情報を得られるように配慮した。

平成17年度の調査報告は『古市遺跡群XXVII』(文献3)を刊行した。

三角縁神獸鏡の速報は、月刊科学雑誌『ニュートン』(文献4)に取り上げられた。調査速報を『季刊考古学』で紹介された(文献5)。

古代学研究会1月例会で調査成果を報告する。

##### 【平成18年度】

調査2年目にあたる平成18年度は、発掘現場の公開は調査日程などの理由で実現できず、昨年度出土した遺物の公開を中心に資料の活用を行った。

出土遺物の活用の一環として、保存処理の途中であるが大阪府立近つ飛鳥博物館で開催された『応神大王の時代』(平成18年9月11日～12月15日開催)において三角縁神獸鏡、筒形銅器、勾玉、鉄鏃、銅鏃、土師器、埴輪を出品した。同展示図録にカラーで庭島塚古墳の墳丘断面写真が掲載された(文献6)。また、開催中の平成18年11月11日に同博物館で庭島塚古墳の調査成果(「羽曳野市庭島塚古墳の調査成果—巨大古墳の出現前の前方後方墳—)を報告した。当日、B4サイズの11ページの資料を配布した。

発掘調査の成果は、報告書『古市遺跡群XXVIII』(文献7)を刊行し、さらに日本考古学協会の刊行の『日本考古学』(文献8)で速報を掲載した。5月には調査担当者が日本考古学協会(東京学芸大学)で調査成果をもとに南河内の埋葬施設について発表した(文献9)。

##### 【平成19年度】

調査3年目の平成19年度も発掘現場は公開できなかった。

出土遺物の活用の一環として、保存処理が終了した遺物や断面剥ぎ取りの資料を羽曳野市立陵南の歴史資料室で『庭島塚古墳速報展』において平成18年10月から平成19年7月まで公開した。

発掘調査の成果は、報告書『古市遺跡群XXIX』を刊行した(文献10)。

羽曳野市老人クラブ連合会主催による歴史教養講座で「羽曳野市庭島塚古墳の調査成果」と題して7月24日に報告した(文献11)。



#### 【平成20年度】

平成20年度は発掘調査の最終年度にあたるため、現地説明会の計画を立てた。調査開始を夏前から実施し、昨年度の調査区も含めて平成20年9月27日に現地説明会を開催した。羽曳野市民はもとより府内・府外の見学者約150名の参加があった。当日の資料として『庭鳥塚古墳見学ノート』（14ページ）を作成し、現地説明会時に配布した。

今年度の出土遺物の活用の一環として、現地説明会に併せて羽曳野市立陵南の森歴史資料室で、『庭鳥塚古墳遺物展』を平成20年9月から12月まで実施した。主な展示品は、三角縁神獣鏡、筒形銅器のほか、庭鳥塚古墳から出土した埴輪と比較する目的で2箇所の機関から埴輪を借用した。

大阪府教育委員会所蔵の御旅山古墳の楕円筒形や壺形埴輪と太子町立竹之内街道資料館から九流谷古墳出土の円筒埴輪や円筒棺を借用し、公開をした。展示にあたってリーフレット（A4両面印刷1枚）を作成して資料室に備え、見学の一助とした。

その他、調査担当者による成果報告は、12月13日にリックはびきので「庭鳥塚古墳の発掘調査報告…発見の経緯とその歴史的価値…」と題して羽曳野市民対象に実施した。当日、A3サイズの4ページを配布した。2009年1月31日には、考古学研究会関西例会第156回研究会にて「大阪府羽曳野市における前期古墳の調査－庭鳥塚古墳の調査成果を中心として－」と題する調査成果を関西在住の研究者に報告を行なった。当日、A4サイズの12ページの資料を配布した。

出土遺物の活用については、大阪府和泉市のいずみの歴史館に三角縁神獣鏡、筒形銅器、翡翠製勾玉、土師器壺を貸し出した。同館では、「和泉黄金塚の時代」と題した平成20年度特別展に展示し、図録『和泉黄金塚の時代』に写真が掲載された（文献12）。公開期間中に庭鳥塚古墳の調査担当者が「未盗掘の前期古墳－庭鳥塚古墳の発見－」と題して調査成果や意義を報告した。当日、A3サイズの4ページを配布した。

調査成果は、報告書『古市遺跡群XXX』を刊行した（文献13）。

#### 【平成21年度】

報告書作成とともにできる限り調査報告と遺物の展示の活用を実施してきた。

平成21年5月30日、調査担当者が日本考古学協会（早稲田大学）で調査成果を発表した「羽曳野市内の前期古墳の調査」。（文献14）

出土遺物については、堺市博物館において9月20日から11月8日まで「仁徳陵古墳築造」開催された展示会で、三角縁神獣鏡、筒形銅器、勾玉、鉄鏃、銅鏃を貸し出した（文献15）。大阪府立近つ飛鳥博物館では10月10日から12月13日まで開催された「河内平野の集落と古墳」において鉄刀、鉄剣、鉄ヤリ、鉄鏃、銅鏃、鉄鎌を貸し出した（文献16）。

整理作業を進めている途中に新たな発見があった。鏃である。記者発表後、近つ飛鳥博物館において初公開した。

一般向けの概報として『庭鳥塚古墳』を刊行した（文献17）。

- 文献1) 大阪府教育委員会1972「近飛鳥遺跡分布調査概要Ⅱ」『節・香・仙』第17号
- 文献2) 2006「庭鳥塚古墳現地説明会資料の付記」『大阪府埋蔵文化財研究会(第52回)資料』
- 文献3) 羽曳野市教育委員会2006『古市遺跡群X XⅦ』
- 文献4) 2005「古墳時代の謎に迫る庭鳥塚古墳」月刊雑誌『Newton』2005年11月号
- 文献5) 2006「前期後半の前方後方墳－羽曳野市庭鳥塚古墳」『季刊考古学』第94号、雄山閣
- 文献6) 大阪府立近つ飛鳥博物館2006『応神大王の時代』
- 文献7) 羽曳野市教育委員会2007『古市遺跡群X XⅧ』
- 文献8) 河内一浩2006「庭鳥塚古墳の調査成果」『日本考古学』第21号 日本考古学協会
- 文献9) 河内一浩2006「南河内における粘土椀の構造の地域性」『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』
- 文献10) 羽曳野市教育委員会2008『古市遺跡群X XⅨ』
- 文献11) 羽曳野市老人クラブ連合会2008『みやびの友』第15号
- 文献12) 和泉市いずみの国歴史館2008『和泉黄金塚の時代』
- 文献13) 羽曳野市教育委員会2009『古市遺跡群X XⅩ』
- 文献14) 河内一浩2009「羽曳野市内の前期古墳の調査」『日本考古学協会第75回総会研究発表要旨』
- 文献15) 堺市博物館2009『仁徳陵古墳築造－百舌鳥・古市の古墳群からさぐる－』
- 文献16) 大阪府立近つ飛鳥博物館2009『河内平野の集落と古墳－謎の4世紀を探る』
- 文献17) 羽曳野市教育委員会編2010『河内の前期古墳庭鳥塚古墳調査概報』、学生社

註1) 大阪府教育委員会の玉井功・三宅正浩両氏のご協力を得た。平成21年8月24日羽教生社第652号で借用・掲載許可を提出し、許可を得た。

註2) 大阪府教育委員会の玉井功にご教示を得た。

註3) 平成17年11月に大阪府教育委員会あてに埋蔵文化財包蔵地の取り扱い変更協議書を提出した。「大阪府における開発事業等に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて」(平成12年3月24日付け教委文572号大阪府教育委員会教育長通知)の規定に基づいて、東阪田遺跡内で実施した発掘調査において新たに古墳が確認されたため、「庭鳥塚古墳」として種類・時代を追加した。同年11月14日付けで大阪府教育委員会から通知があり、大阪府文化財分布図と大阪府文化財地名表に登録された。文献1には「ニワトリ塚」と明記されているが、小字から名称を取り漢字で表記した。

註4) 大阪府教育長あてに「埋蔵文化財発掘調査について(報告)」平成17年10月27日羽教歴1432号、「埋蔵文化財保管証」平成17年10月27日羽教歴1428号を提出した。また、羽曳野警察署長あてに「埋蔵文化財発見届出書」平成17年10月27日羽教歴1429号を提出している。

## II. 古墳をめぐる環境

### 1. 東阪田遺跡について

図23は羽曳野市東阪田の等高線を図示したものである。図の北側に明示した★印が庭鳥塚古墳にあたる。標高図からは、石川の氾濫原と開析谷に挟まれた東西400幅の北へ緩慢に下降する地形が読み取れる。

この等高線図の北側に位置するのが東阪田遺跡であり、庭鳥塚古墳も同遺跡の分布範囲に含まれる。東阪田遺跡の名称は、かつては弥生時代の集落跡で有名な喜志遺跡が富田林市域から北へ広がるため羽曳野市側の別称であった。ところが、図23の①において昭和44年（1969）タケヤ化学工業の社屋建設が始まり、工事に伴って縄文時代や弥生時代の石畿が多量に出土することが当時高校教諭であった北野耕平氏の努力によって明らかとなったのである。（文献1）。

1971年にタケヤ化学工業（小字ももうえ）で大阪府教育委員会が実施し、縄文土器が出土の報告されている（文献2）。その後、昭和47年（1972）には図23の②の東阪田81番地を大阪府教育委員会が試掘している。試掘調査の結果は、地山の削平が著しく顕著な遺構は検出されていない（文献3）。

調査はまた、木村木材工業の敷地内の調査では、奈良時代の蔵骨器と弥生時代後期の溝を検出している（文献4）。

東阪田遺跡の調査が頻繁に実施されるのは昭和50年（1975）代からである。それまでは東阪田地域の開発は少なく田園風景が残っていたのを記憶する。当時の国道170号線整備工事の際に、庭鳥塚古墳の周辺で石斧が採集されている。

昭和53年（1978）に図23の③の東阪田170～174番地で分譲住宅建設の事前試掘が大阪府教育委員会の手で実施されたところ、遺構が検出され翌年から本調査が実施されている（文献5）。

昭和54年（1979）からは大阪府教育委員会が国庫補助により東阪田遺跡の緊急発掘を実施している（文献6）。調査地点は、昭和53年に調査を実施した調査区から北へ約30mに位置する図23の④の1979-2区、北へ約15mに位置する図23の⑤の1979-3区の2ヶ所のほか、図23の⑥の1979-4区がある。

1979-4区は、分譲住宅に伴って発掘が実施されている。調査では平安時代の建物跡が検出された（文献7）。同調査区からは縄文時代の石器として注目される横形石匙が出土している。石材にチャートを使用しているので縄文時代前期と考えられている（文献8）。また、巫女を表した人物埴輪も出土している（文献9）。周辺に古墳時代後期の古墳が存在する可能性がある。1979-4区は東阪田遺跡の南端の位置し、喜志遺跡に隣接する。

昭和55年（1980）に羽曳野市教育委員会は、大阪府教育委員会が調査を実施した1979-1区の南に位置する第23図の⑦で調査を実施している（文献10）。布留式の土器が出土した隅丸方形の堅穴式住居跡が1棟検出されている。奈良時代の掘立柱建物跡は1979-1区からの広がりを示す。遺物には掘立柱建物の時期を示す須恵器や土師器のほか、弥生時代前期の土器片が出土している。翼状剥片や縦長状剥片の出土が報告されている。

昭和58年（1983）には裏ノ池（註1）の西側にあたる第23図の⑧を羽曳野市教育委員会が調査している（文11）。奈良時代の掘立柱建物跡と12世紀末の土釜や土師皿を用いた地鎮跡が検出された。

以上、出土遺物から旧石器時代から中世までの遺跡であり、中位・低位段丘の開発史を知ることができる。

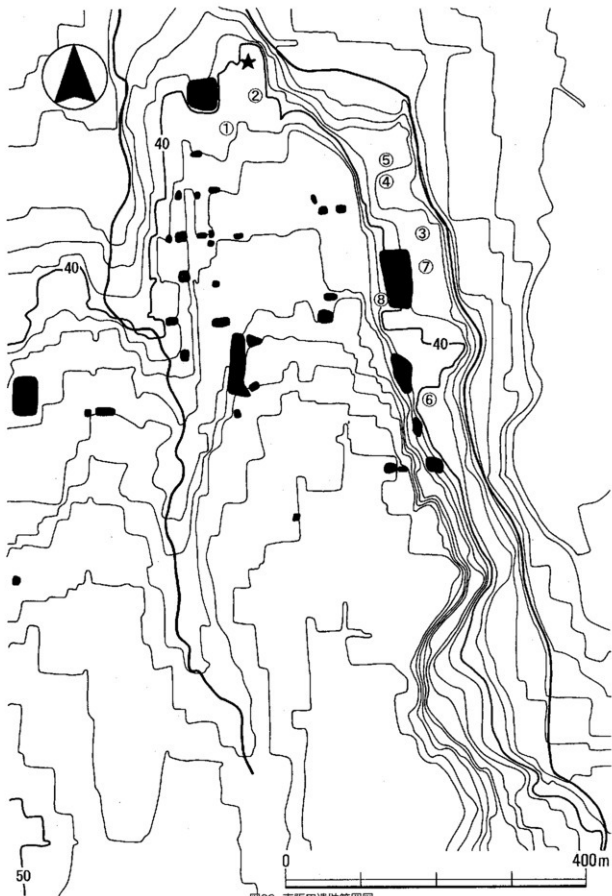


图23 東阪田遺跡範圍圖

## 2. 地理的環境

大阪府の南東部に位置する羽曳野市は、東は奈良県との府県境にそびえる金剛山系を仰ぎ、市域の中央には石川、市域の西に東除川が北流し、現在の大和川と合流する。この2つの河川に挟まれたかたちで羽曳野丘陵が南北に延びる。ここから東西に派生する中位、低位段丘の段丘面には数多くの遺跡が存在し、古くから人々が営みを垣間見ることができる。

そこで、古墳が築かれた地形を見るために『羽曳野市史』の第1巻（文献12）を基に改変し図25のような羽曳野・藤井寺両市の地形分類を作成した。そして、庭島塚古墳の位置を図に★印で入れてみた。

図25から読み取れる古墳の立地は、中位段丘（図25の地形分類の②）である。墳丘は、標高40mあたりで段丘の東縁に沿う形に築かれていることがわかる。羽曳野市の中央を北流する石川と羽曳野丘陵の間には5つの中位段丘があり、庭島塚古墳が立地する段丘Aは羽曳野丘陵の東縁に展開する。その他、段丘Dや段丘Eも羽曳野丘陵北縁に展開する。対して、段丘Bと段丘Cのような河川に分断された段丘がある。

地質学的には、河川の形成した中位段丘を基盤層とするものであり、段丘の東側を南から北へ流れる石川の浸食によって形成された河岸段丘である。古墳が築かれた地盤は礫層で構成される。

この段丘の西方には、近鉄南大阪線の路線に沿って旧流路と思われる小浸食の低地が南北に延びる（図25の地形分類の⑩）。さらにその奥は河川丘陵の東縁部を構成する羽曳野丘陵が緩やかな高まりを有し広がっている。南側は、段丘が富田林方面へ拡がり、さらに河泉丘陵に接して和泉山脈へと連続する地形を示す。

古墳の東側は視野が開け、石川を挟み対岸には壘井丘陵がある。その向こうに二上山を望むことができる。さらに、目を南に転じると葛城・金剛山地が遠望できる。東側の眼下には石川の氾濫原が拡がり、その高低は約10mの差がある。段丘の東縁に沿って一段低くなった低位段丘が伸びる（図25の地形分類の③）。低位段丘に沿って南北方向に現在も北流する水路があり、水源を石川から取水して大乗川に合流する水系をもつ。

大乗川の集水域は、地形から羽曳野丘陵や中位段丘と考えられる。したがって水は東へ流れるが、現状では段丘Aの北側で北流する。北流した水は誉田断層の断層崖に沿って、誉田御南山古墳の西辺からかつては平野川へ合流する流路が指摘されている（文献13）。現在の大乗側の流れは石川へ合流するが、これは宝永元年（1704）の大和川の付替え工事を契機に段丘Bの北辺を接するように東側にむけて掘削したものである。

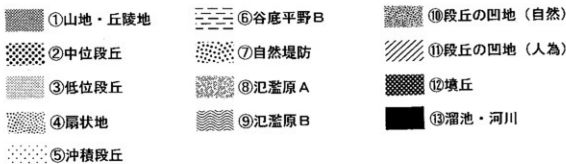


図24 地形分類凡例

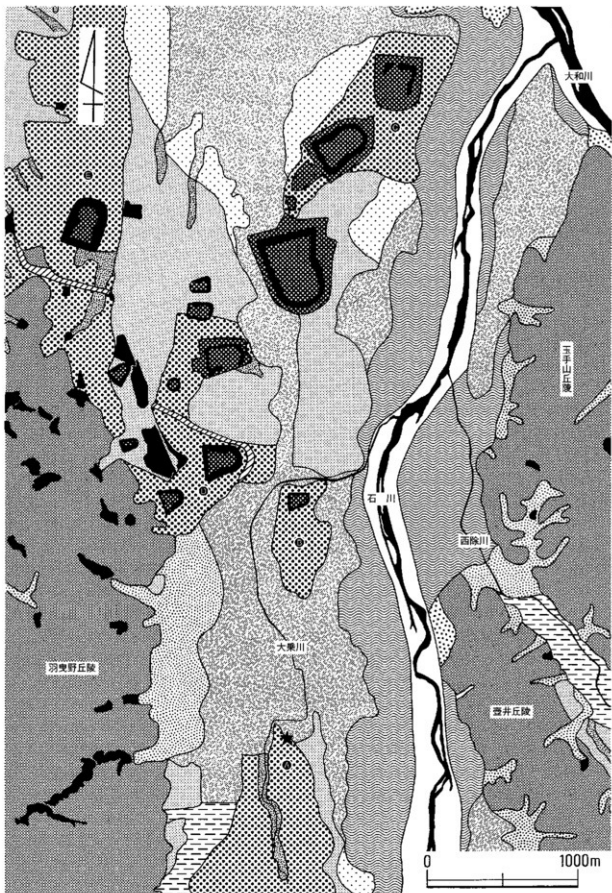


圖25 地形圖

### 3. 歴史的環境

庭鳥塚古墳は東阪田遺跡に属することはすでに述べたが、東阪田遺跡周辺の遺跡を東阪田遺跡の活動が認められる旧石器から中世までの遺跡を時代ごとに記述しておく。

旧石器時代の遺跡は、調査地の東南5kmに石器材料を産出する二上山が位置し、その北麓の山地部に位置する旧石器の散布地が有名である。60ヶ所以上知られており、「二上山北麓遺跡群」と総称されている(文献14)。

庭鳥塚古墳周辺では、城山遺跡から旧石器の出土が報告されている。出土した石器の種類は、ナイフ形石片、翼状剥片、翼状剥片石核、縦長剥片、縦長剥片石核、細石刃石核、横長剥片、横長剥片石核、盤状剥片、盤状剥片石核、裸器、ピエス・エスキエ、尖頭器、角錐状石器、削器、搔器などで、その数120点あまりであった。旧石器は後世の包含層から出土であり、石器製作などの直接に窺い知ることができないが出土品には製品としての石器のほか製作途中の剥片が見られることから、本遺跡が旧石器時代の一時的な居留地であったことは疑えない。石器から考えられる時期は翠鳥園遺跡で見られる国府型ナイフ形石器の段階から尖頭器出現までの間に位置づけられ、八尾南遺跡の石器群に相当するものと報告されている(文献15)。

縄文時代の遺跡は、西浦東遺跡から北白川上層式の縄文後期の土器が出土している。同遺跡は、東阪田遺跡の北側に隣接し、かつて「西浦地区散布地」として周知されていた。南阪奈道路建設に先立ち平成10年(1998)に(財)大阪府文化財調査研究センターが確認調査を実施した成果から、平成19年(1999)から「西浦東遺跡」と改称し現在に至っている。調査によって落ち込み状土坑や屋外炉などの遺構が検出されたが住居跡は確認されなかった。出土遺物の中には石棒や舟形石器の祭祀関連遺物が出土している(文献16)。

弥生時代の遺跡は、東阪田遺跡の南隣に喜志遺跡(東阪田・富田林市喜志町、木戸山町)が、東阪田遺跡の北方に城山遺跡(古市6丁目)が、東阪田遺跡の北西に尺度遺跡(尺度)が存在する。

喜志遺跡は、石鏃が大量に散布する遺跡として有名で、大正6年(1917)には鳥居竜蔵による発掘が実施され、さらに翌年には京都帝国大学の梅原末治・鳥田貞彦による調査が行われている(文献17)。

昭和45年(1970)以降になると宅地開発などに伴う工事が増加し、大阪府教育委員会、富田林市教育委員会、羽曳野市教育委員会による本格的な発掘調査が実施されるようになり遺跡の内容が明らかになりつつある。調査で検出された堅穴住居は、昭和52年(1977)の大阪府教育委員会が直径7.2mの円形住居1棟と東西5.0m、南北6.0mの方形住居がある(文献18)。前者は第Ⅲ様式の土器が出土し、弥生時代中期ごろの時期と推定されているが、後者は土器の出土が顕著でなく形態から弥生時代後期以降と推定される。また、柱穴と考えられる小穴を多数検出していることから、堅穴住居とともに平地式や高床式の掘立柱建物が存在していたとわかる。大阪府教育委員会が昭和54年(1979)に検出した焼土壇は、東西1.9m、南北2.0、深さ0.3mの方形を呈していた(文献19)。壁面や床面は粘土を貼り付けていたようで、その表面が焼けていた。かなり長時間にわたる高温による加熱であったようで、固く焼きしまっていた。床面には弥生時代中期ごろの土器片が大量に出土している。状況から土器を焼成した土坑である可能性が最も高い。集落遺跡を区画すると思われる溝も確認できている。段丘の縁に沿って幅1.8m、深さ1.0mの断面がV字形に掘削されていた。

昭和63年の羽曳野市教育委員会の調査で、大型竈に大型の鉢を蓋をした土器棺が出土している(文献20)。帝塚山大学や富田林市教育委員会が実施した調査では方形周溝墓と考えられる遺構が検出されている。

喜志遺跡からは、出土している土器から中期前半頃に集落の造営が始まり、中期中頃から後半にか

けて最盛期を迎え、後期になると急速に衰退している。

城山遺跡は、大阪府営城山住宅の立替に伴う事前の調査を昭和60年(1985)に実施したところ、遺跡の存在が明らかとなった。当該地は高屋城の一角にあたるが、遺跡の性格が異なることから「城山遺跡」として周知した(文献21)。

大阪府教育委員会刊行の『高屋城(城山遺跡)発掘調査概要』によると、

「切りあいのある2棟の隅丸方形の堅穴住居跡(一辺約4m)のほか、東西1.2m、南北0.9mの方形で深さ0.3mの焼土層が検出された。焼土層からは石鏃、石錐、石槍、石核、剥片が大量に出土した。調査で出土したサヌカイト製の打製石器は製品と石器製作過程を示す原石、板状剥片、剥片、チップ、たたき石があり、弥生時代中期における武器型石器を中心とする石器製作所と位置づけられ、先の喜志遺跡とともに拠点集落と考えられる国府遺跡の交易網のひとつとして構成された集落遺跡と考えられる。」とある。

尺度遺跡は、弥生時代後期の高地性集落として知られている、大阪府農林技術センターの南側の尺度クケ山に所在していた。羽曳野丘陵の東面を開析する谷によって挟まれた、標高70m程度の小さな枝尾根の先端を占有し、その場所を中心に東西150m、南北150mの範囲に遺跡がひろがると推定されている。東側に石川流域が見渡す非常に眺望の優れた場所を占地していると考えられる。しかしながら、1900年代前半から鋳型の素材となる土を得るために、大規模な土砂採取によって削平されてしまい、現在は本来の地形の面影がほとんど残していない。

尺度遺跡の北に小さな谷があるが、その谷の北側にかつて馬谷遺跡と呼ばれた弥生時代の遺跡がある(文献22)。食とみどり技術センターの敷地内が遺跡にあたるが、その造成に際し大阪大学が調査を実施している。現在は古い景観がほとんど残されていない。

昭和46年(1971)、一般国道165号線南河内バイパスの建設の計画に伴って元興寺仏教民俗資料研究所(現在、財団法人元興寺文化財研究所)が、大阪府南河内郡美原町(現在、堺市美原区)から南河内郡太子町までの間の埋蔵文化財の分布調査を実施した。羽曳野市域では羽曳野丘陵の東裾に位置する東西700m、南北600mの範囲に遺物の散布が確認され「尺度地区散布地」と命名された(文献23)。

昭和49年(1974)、元興寺仏教民俗資料研究所が尺度遺跡の範囲確認を実施し、農林センター内の調査を実施した(文献24)。昭和50年(1975)に大阪府教育委員会は予定地内の遺跡確認のため分布調査を実施するため、大阪文化財センターに委託した(文献25)。平成8年(1996)に(財)大阪府文化財調査研究センター(当時)が試掘調査を実施し、翌年から2年にわたって発掘調査を実施した。遺跡の名称も「尺度遺跡」と変えられた。調査の成果は、庄内式期の首長の居館と考えられる遺構が検出された。居館は溝と掘立柱扉に囲まれた方形区画に囲まれた空間があり、隣接地に大型堅穴住居が確認されている(文献26)。

新たな範囲の尺度遺跡の中には銅鐸の出土地がある。昭和53年(1978)に西浦小学校の校舎建設工事中に偶然に発見された。9月27日の午後2時ごろのことである(文献27)。出土した銅鐸は双頭渦巻飾耳を含む高さが89.6cmで、当時としては埋納状況が判明した例であることと銅(あかがね)色であったので話題を呼んだ。平成 年に国指定の重要文化財に指定された。近畿式銅鐸と呼ばれる銅鐸は、佐原眞氏の分類によればIV式銅鐸(突線紐式)に該当する(文献28)。

銅鐸が出土した地点は、10月11日から一週間程度の2次調査が大阪府教育委員会の手で実施された。その結果、堅穴住居や南北溝が検出された。溝からは布留式土器が出土している(文献29)。

庭島塚古墳周辺の前期古墳は、石川を隔てた対岸の壺井・通法寺地域には北から壺井丸山古墳、壺井御旅山古墳、通法寺裏山古墳、九流谷古墳が周知されている。詳細については論考編に譲り、ここ



では中期古墳から概観していこう。

石川の左岸下流域には14基の前方後円墳で構成されている古市古墳群が存在する。大型の前方後円墳は、宮内庁が管理する「天皇陵」に指定されている。出土する埴輪から考えられる築造時期は、藤井寺市の津堂城山古墳を嚆矢とし、白髪山古墳を終焉とする。この間約120年にならうか。

ちなみに埴輪編年に基づいて古墳の変遷を列挙すると、津堂城山古墳が4世紀末、中津山古墳が5世紀初頭、誉田御廟山古墳が5世紀前葉、市野山古墳が5世紀中葉、白鳥陵が5世紀葉、岡ミサンザイ古墳が5世紀末、白髪山古墳が6世紀前葉となる（文献30）。

大型前方後円墳の終焉は羽曳野市の西端、西隣の松原市とまたがる河内大塚古墳と思われる。かつては吉田東吾によって雄略陵の候補としてあげられてるが（文献31）、墳丘形態から雄略天皇が活動していた年代より新しいと考える。墳丘長335mの全国5位の規模は大王墓にふさわしいもので被葬者が気になる所だ。河内大塚古墳をもって前方後円墳の終焉と考えている。と同時に羽曳野市域で飛鳥地域や羽曳野丘陵東縁に後・終末期古墳が築かれる。

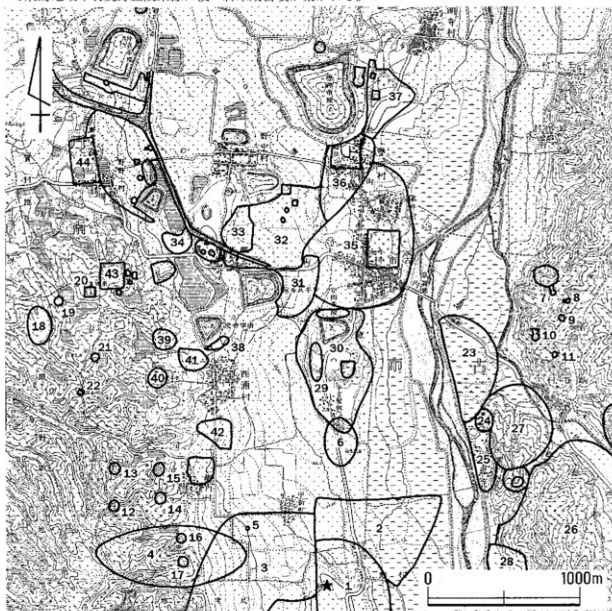


図26 遺跡分布図

後期・終末期古墳は埋葬施設に横穴式石室や横口式石槨をもつ。羽曳野丘陵の東縁には、『日本書紀』に記載がある聖徳太子の弟である来目皇子の墓と考えられる塚穴古墳が7世紀の初めに築かれる。その後、小口山古墳で代表される横口式石槨が出現し、7世紀後半のヒチンジョ池西古墳が存在する。当地は「船・津・葛井」の墓地とされ、8世紀になっても火葬骨を入れた蔵骨器がみられる。

飛鳥地域は後期になると群集墳が築かれ、飛鳥千塚と呼ばれている。7世紀の中ごろには横口式石槨を内部主体にもつ古墳が築かれはじめるが、観音塚古墳やオーコ8号墳などが古くから学会で知られていた。ブドウ畑の開墾で早くから開口し、副葬品はもちろん時期を決める土器などの出土は知られていない。調査が実施された鉢伏山西峰古墳では埴輪や須恵器が出土した。土器から7世紀の第2四半期に位置づけられる。

飛鳥・奈良時代には道路の完備と寺院建造、律令社会機構の施設が造営される。

『日本書紀』によれば東西方向の幹線道路としての丹比道があり、東西道は長尾街道がある。南北道については後に東高野街道が古代の道と重複していると考えられる。

東阪田遺跡からは平城宮6282型式軒丸瓦と平城宮6664型式軒平瓦が出土している（文献32）。東阪田遺跡周辺では平城宮6282系の軒丸瓦が出土する遺跡には、長原遺跡、国府遺跡、挾山遺跡、土師寺、衣縫庵寺、河内国分寺、茶山遺跡、高屋城などである。

『日本書紀』の推古天皇15年条には河内に戸刈池を掘削し、屯倉を設置したことが書かれている（文献33）。7世紀初頭に畿内地域で国家的開発が行われたことを示す。戸刈池は蔵之内にあり、式内社の戸雁神社がかつて鎮座していた。水の管理は渡来人のリ刈村主が行っていたのであろう。

No	遺跡名	所在地	時代	遺跡No	No	遺跡名	所在地	時代	遺跡No
3	尺度遺跡	尺度	弥生～	60	23	大黒散布地	大黒		147
2	西浦東遺跡	西浦	古墳～	134	24	大黒寺遺跡	大黒		149
★	庭鳥塚古墳	東阪田	古墳	141	25	大黒遺跡	大黒	古墳	191
1	東阪田遺跡	東阪田	縄文～	61	26	駒ヶ谷遺跡	駒ヶ谷	弥生	153
4	農林センター散布地	尺度	弥生	195	27	駒ヶ谷第1散布地	大黒	弥生	148
5	西浦銅鐸出土地	西浦	弥生	151	28	壺井第1散布地	壺井	弥生	154
6	城山遺跡	古市6丁目	旧石器	181	29	高屋遺跡	古市7丁目	弥生	39
7	古市東山古墳	駒ヶ谷	古墳	50	30	高屋城跡	古市5丁目	中世	43
8	狐塚古墳	駒ヶ谷	古墳	46	31	栄町遺跡	栄町	古墳	146
9	駒ヶ谷北古墳	駒ヶ谷	古墳	48	32	誉田白鳥遺跡	白鳥3丁目	古墳	27
10	宮山古墳	駒ヶ谷	古墳	47	33	翠鳥園遺跡	翠鳥園	旧石器	189
11	藤池南古墳	駒ヶ谷	飛鳥	49	34	軽里遺跡	軽里1丁目	古墳	124
12	徳楽山古墳	羽曳ヶ丘6	飛鳥	55	35	古市遺跡	古市1丁目	弥生	145
13	蔵之内西古墳	蔵之内	古墳	54	36	上堂遺跡	譽田3丁目	弥生	28
14	蔵之内古墓	羽曳ヶ丘7	奈良	57	37	茶山遺跡	譽田	弥生	128
15	蔵之内遺跡	蔵之内	弥生	56	38	白髮山遺跡	西浦6丁目	古墳	122
16	天智の坂古墳	蔵之内	古墳	59	39	坂戸庵寺	西浦5丁目	奈良	23
17	戸雁山古墳	蔵之内	古墳	58	40	西浦古墓群	西浦5丁目	奈良	22
18	石曳遺跡	壺生野	旧石器	182	41	西浦遺跡	西浦5丁目	奈良	95
19	ヒチンジョ池西古墳	はびきの3	飛鳥	12	42	西浦ツヅミ田遺跡	西浦3丁目	奈良	135
20	塚穴古墳	はびきの3	飛鳥	16	43	善正寺跡	はびきの2	飛鳥	15
21	埴生野南古墳	羽曳ヶ丘1	古墳	14	44	野中寺跡	野々上5	飛鳥	7
22	乃木寺北古墳	羽曳ヶ丘4	古墳	13					

表1 遺跡地名表

渡来人による寺の造営は西琳寺、野中寺、善正寺などがある。

中世末には高屋城が築かれる。高屋城は、畠山氏や三好一族が河内に勢力を延ばすための拠城とし、室町時代から戦国時代を通じて絶えず抗争の舞台となった。河内国の守護所が置かれていたこともあり、織田信長によって河内攻めによって廃城になるまで、河内の国の中心的役割を持っていた（文献34）。

元亀元年（1571）に三好実休（義賢）は高屋城の攻撃にあたり水守に付城を築いている（文献35）。

- 文献1) 野上丈助1972「東阪田試掘立会調査概要」『節・香・仙』第14号 大阪府教育委員会  
文献2) 中村浩1973「東阪田遺跡」『日本考古学年報』24 日本考古学協会  
文献3) 野上丈助1972「東阪田試掘立会調査概要」『節・香・仙』第14号 大阪府教育委員会  
文献4) 大阪府教育委員会1978『喜志遺跡発掘調査概要』  
文献5) 大阪府教育委員会1980『東阪田遺跡—1979年度第1区の調査』  
文献6) 大阪府教育委員会1980『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要』Ⅲ  
文献7) 大阪府教育委員会1981『東阪田遺跡—1979年度第4区の調査』  
文献8) 大阪府教育委員会1981『東阪田遺跡—1979年度第4区の調査』  
文献9) 大阪府教育委員会1981『東阪田遺跡—1979年度第4区の調査』  
文献10) 羽曳野市教育委員会1980『東阪田遺跡—1980—』  
文献11) 羽曳野市教育委員会1984『古市遺跡群』V  
文献12) 羽曳野市史編纂委員会1997『羽曳野市史』第1巻 本文編1  
文献13) 一瀬和夫2006「4世紀末における河内平野の覇権移動前夜」『喜谷美宜先生古稀記念論集』  
文献14) 同志社大学旧石器文化談話会1974【ふたがみ】  
文献15) 宮野淳—1994「城山遺跡」『羽曳野市史』第3巻  
文献16) 大阪府文化財調査研究センター—2002「西浦東遺跡—南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書—」  
文献17) 京都大学1918『河内国南高安及び喜志石器時代遺跡調査』  
文献18) 大阪府教育委員会1978『喜志遺跡発掘調査概要』  
文献19) 大阪府教育委員会1980『喜志・東阪田遺跡発掘調査概要』Ⅲ  
文献20) 羽曳野市教育委員会1989『古市遺跡群』X  
文献21) 大阪府教育委員会1987『府宮城山住宅建替に伴う高屋城（城山遺跡）発掘調査概要』  
文献22) 三木精一—1980「石川流域の弥生遺跡について」『羽曳野史』第5号（羽曳野市史編纂紀要）、羽曳野市史編纂室  
文献23)（財）元興寺仏教民俗資料研究所1972『一般国道165号線南河内バイパスに関する埋蔵文化財調査報告書』

- 文献24) (財) 元興寺仏教民俗資料研究所1972『尺度遺跡範囲確認調査概要』
- 文献25) (財) 大阪文化財センター1976『国道166号線バイパスに関する第2回埋蔵文化財予察調査報告書』
- 文献26) (財) 大阪府文化財調査研究センター1999『尺度遺跡Ⅰ－南阪奈道路建設に伴う発掘調査－』
- 文献27) 古田実1980『銅鐸発見のいきさつについて』『羽曳野史』第5号(羽曳野市史編纂紀要)、羽曳野市史編纂室
- 文献28) 佐原眞1980『銅鐸のなぞ』『羽曳野史』第5号(羽曳野市史編纂紀要)、羽曳野市史編纂室
- 文献29) 野市教育委員会1991『西浦銅鐸』
- 文献30) 白石太郎編2008『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』
- 文献31) 吉田東吾1969『大日本地名辞書』(増補版) 富山書房
- 文献32) 大阪府教育委員会1980『東阪田遺跡－1979年度第1区の調査』
- 文献33) 羽曳野市史編纂委員会1981『羽曳野市史』第4巻 史料編2
- 文献33) 河内一浩2006『高屋城の最近の調査成果から』『大阪府埋蔵文化財研究会(第53回)資料』

註1) 裏ノ池は、文禄3年(1594)の検地帳には記載がなく、延宝4(1676)の検地帳には池の存在が認められるので近世以降に灌漑目的で掘削されたことが窺える。したがって、奈良時代から平安時代の掘立柱建物が低位段丘面に広がっていたことになる。

### Ⅲ. 古墳の調査

#### 1. 墳丘

##### (a) 墳丘測量

羽曳野市教育委員会が実施した墳丘測量は、発掘調査の開始前の平成17年の6月が最初である。その際の測量作業は、調査当初の墳形が方墳と考えたので後方部のみで測量を終えている。翌年の平成18年に墳形が前方後方墳であることが判明したので、平成18年度の発掘調査を実施する前に前方部を中心に測量した。平成19年度と平成20年には、整地工事や平成17年度の発掘で排出された土砂に覆われていた東側くびれ部付近の測量を行った。また、古墳周辺の地形の測量を行い、4年にわたり墳丘測量図面を書き加えたのが図27である。測量実施にあたり、縮小は50分の1のスケールとし、50cmコンターで行った。

以下、測量図から得た所見は次のとおりである。なお、方角の表現については墳丘の主軸が東へ30°程度振るので、実際は「西南」や「北東」となり煩雑になるので、ここでは大雑把に「東」、「西」、「南」、「北」とする。

①墳丘は、現状では南北44.5mの前方後方墳であるが、後方部の南側の駐車場造成にあたり墳丘が大きく削平されている。駐車場は、道路側から5～6m北側（墳丘側）に東西27mの範囲で整地している。標高はT.P.43m付近で、ほぼ平坦である。駐車場の西側は庭烏塚古墳の南にある住宅地への進入路があり、東側は2mの比高がある傾斜面がある。東側の傾斜面の後方部と思えるような東への張り出しが図から窺えるが、昭和47年の測量図には見られないので比較すると古墳時代当初の墳丘ではなく駐車場造成時に盛られたことが明らかだ。また、くびれ部も平成17年度の調査時の排出土が後方部裾を覆っていたが平成19年度、平成20年度のくびれ部の調査で、排出土を除去し測量をしたところ後方部の東側を確認した。しかし、後方部のコンターラインは発掘調査の成果や昭和47年に実施した測量の墳丘図を比較したところ、古墳時代当初の墳丘ではなく駐車場造成時に盛られたことが明らかとなった。その範囲は南北21m、東西8mに及び、東側墳丘を覆い、墳丘の東側にある平坦面までいたる。そのため、測量では標高T.P.43.25m以下の東側のくびれ部を明らかにできなかった。

②前方部と後方部のくびれ部は、標高T.P.44mのコンターが後方部裾を廻り、前方部が北に緩やかに下降し標高T.P.43.25mのコンターが前方部平坦面の北辺上端に廻る。したがって前方部の墳頂平坦面は、幅8m、長さ20.5mとなる。後方部墳頂の比高は2mである。前方部前面（墳丘東側）の上端は標高T.P.42mで、標高T.P.41mで境界明示のための溝がある。そこから平坦面が北へ続くので前方部前面の裾とした。なお、北に広がる平坦面は、測量調査の範囲外であるため図化していない。また、前方部の北西角は、旧国道により墳丘の一部が損失していること測量図から判明した。また前方部北西隅にあたる墳頂は径3mにわたり掘削されて窪地になっている。掘削した土砂は周辺に山積みされているため土手状に高まりが廻る。

③墳丘東側の標高T.P.40m～T.P.39.5m付近に不自然な平坦面が存在する。幅が7m～10mを測り、墳丘に沿って南北方向に認められる。平坦面の東側は急峻な崖面が認められた。崖面の麓にT.P.37.25mのコンターが廻るので、2mの比高がある。中位段丘の東縁を示す地形である。したがって、平坦面は人工的なものであり、可能性としては墳丘盛土の上取り跡の可能性も指摘できよう。

墳丘の縦断面は、後方部の南側の駐車場は標高T.P.43mを測る。現状の南北の長さが44.5mである。墳丘横断面は、西側の道路側の擁壁から東側の住宅のフェンスまで1～2mの比高がある。

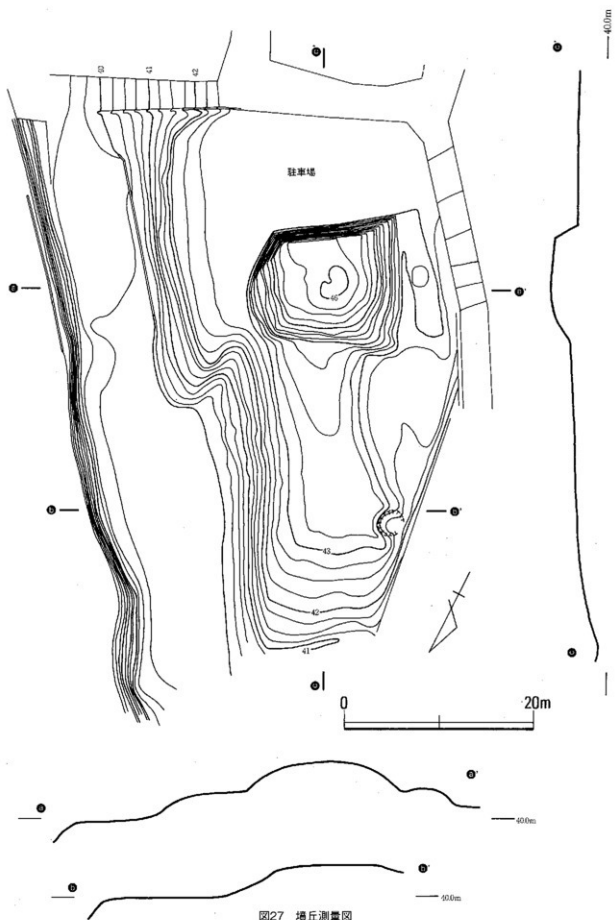


图27 填丘測量圖

(b) 発掘調査

【後方部墳頂調査区】

平成17年、墳丘断面に露出した粘土椽の広がりを確認するために後方部墳頂平坦面の調査を実施した。調査地の呼称を平成17年度に実施した調査のうち後方部墳頂調査区とした。

調査はまず、雑木林に化した方形隆起の伐採作業から始めた。伐採完了段階で、東西13.5m、南北14mの方形隆起であることが踏査で判明した。したがって、墳丘は一辺14m前後、高さ3mの墳頂と考えたのである（図版1）。

墳頂は工事で削られた南側を除くと、西側と東側が急峻な角度で立ち上がる。雑木林による枯葉と腐葉土で覆われている斜面には10cm～20cm程度の角礫が露出していることから葺石と判断した。しかし、埴輪の破片は調査前の踏査ではまったく採集できなかった。したがって、調査前に考えた外部施設は墳丘法面の全面には葺石を施すが、埴輪については樹立されなかったと推測した。

高さ3mの墳丘の上に登ると東西9m、南北6mの平坦面があり、その中央が4m四方の範囲でやや窪んでいるのが観察できた。平坦面の北西部分には拳大や人頭大の川原石が散乱していた。墳丘南側の削られた断面で見られた粘土椽には排水施設があり、墳頂で確認した石材は排水溝の石材が掘り出されたと思われ、窪みを盗掘の痕跡と考えた。しかしながら、盗掘孔の周辺には粘土椽の残骸と考えられるような粘土塊が見られないことや盗掘された伝聞、あるいは出土品の伝承もないので未盗掘の可能性も考えられた。なお、削り取られた墳丘の南東部の平坦面に観察できる1cm大の小礫は表面観察からはその性格についての解明には至らなかった。

調査は盗掘の痕跡と考えられる窪みを中心に十字のセクションを設けることにした。図9の上段に示した通りセクションにより4区分した調査区は、南西がⅠ区、南東がⅡ区、北東がⅢ区、北西がⅣ区とした。

墳丘の土層を図28の下段に示した。土層断面図の黒く塗りつぶした層が表土で4cm程度の厚さで堆積する。その下のaが黒褐色腐葉土である。腐葉土は厚さ10cm～20cmで、しまりがなかった。その下がbの黄褐色土があり、その上面で盗掘孔の埋土と考えられる黒色土が検出できた（写真2）。図9の平面図でAとした短辺3.0m、長辺3.5mの不定形の土坑である。埋土を掘り下げたところ、深さ20cmで底が現れ、掘削が埋葬施設に及んでいないことが明らかとなった。

表土を掘り下げているところ、墳頂平坦面の北西部において東西2.4m、南北1.8mの範囲に拳大あるいは人頭大の川原石が積み上げられた遺構を確認した。写真3は石の検出状況で、散乱した川原石が見て取れる。川原石が積み上げられていた位置は図28のBの部分である。庭鳥塚古墳の墳頂平坦面の北西にあたる。

積み上げられた川原石を立ち割ったところ、最も残存していた高さが約0.27mを測る。そして、石積まれていた川原石の間には18世紀に生産された陶磁器片の混入が確認された。そのほか、弥生土器や弥生時代の石槍などの石器、中世の遺物も川原石と混ざっていた。なお、近代以降の遺物の混入が認められなかった。

川原石の大きさは人頭大と拳大の2種類があるが比較的同時に認められることから推察すると積み上げられた川原石は本来庭鳥塚古墳の墳丘に使用された葺石を転用した石材が使用されたことを示唆している。

石が積み上げられた状況やその範囲からこれが近世に築かれた石塚の残骸であることが理解できるが、その性格については石塚にかかわる遺物が出土しなかつたので明らかにし得なかった。宗教的な施設の一部と推定するのに留まった。



写真2 黒褐色腐葉土除去後の墳頂部



写真3 積み石の状況



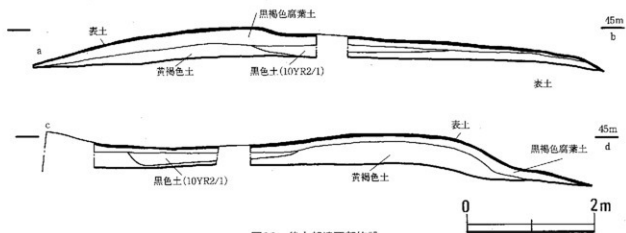
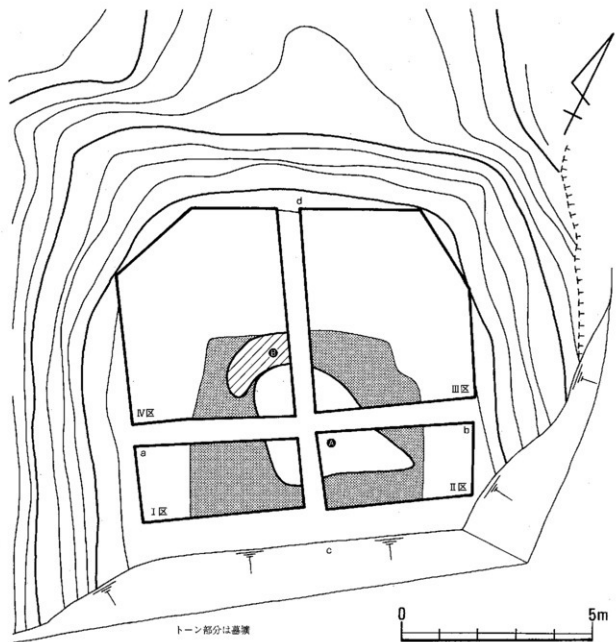


図28 後方部墳頂部施設

調査前に見た平坦面の北西に散乱していた石材は、この石塚が崩壊して散乱した石材と判断したのである。積まれた石を除去したところ黄褐色土が現れ、塚の下には土坑などの遺構は認められなかった。また、積まれた川原石を洗浄したが文字などの墨書が見られなかった。したがって、この石塚が経塚や一石経塚と判断できなかった。

黄褐色土は厚さ20cm～30cmで小礫を大量に含むことから古墳の墳丘盛土と考えたが、層にしまりが無いことから墳丘盛土の可能性は低かった。そして、調査の結果は同層内から近世遺物の出土が確認されたので、近世以降の盛土であることが判明した。

墳頂においての大掛かりな造成の目的は今回の調査成果からは断定できないが、可能性としては塚として造成された可能性があげられる。それは、当該地に残る「庭鳥塚」の小字から墳丘を「塚」と見立てて、その上に宗教性の強い施設を営んだと考えたのである。調査ではお堂と言ったような具体的な施設の痕跡は検出できなかった。しかしながら、平面図のBとした川原石の集積は、石積みによる塚として機能していたと考えたい。出土遺物から江戸時代の前半代に築かれた石積みの塚は、やがて忘れ去られて月の流れと共に積み上げた石が崩壊して行った過程が読み取れる。ただし、信仰対象については明らかにすることができなかった。また、後方部北西側角は北東角に比べて斜面角度が緩やかなことから塚へ上る通路的な役割を果たした可能性がある。

近世の造成された黄褐色土を除去すると、バラス敷きと思えるような1cm程度の小礫を面を確認することができた。この小礫は、調査前に墳丘断面の南東部で観察した小礫と同じもので、調査で面的に広がり確認できた。検出した小礫は約3.0cmの厚みがあり、ある程度のしまりをもつので墳頂平坦面を保護するように敷かれものと判断して、円筒埴輪による埴輪列や家形埴輪などの形象埴輪の配列の検出に努めたが確認はできなかった。埴輪の破片が1点も出土していないので、埴輪は当初から存在しないものか、あるいはこのバラス敷きが古墳時代のものではなく後世のものかは検出当初は判断できなかった。

その後の調査の進展で墳丘断面に観察できる粘土層に包まれた木棺は腐朽によって被覆粘土が陥没していることが認められるが、検出した平坦面のバラス敷きには陥没した状況は認められなかったのである。これは、バラスが敷かれたのは墳頂部の陥没が埋まった後に行われたことを意味している。したがって、墳頂に見られた小礫は古墳に伴う施設ではなく、後世のものであると考えた。その施行はバラス敷きを取り除く際に出土した16世紀の遺物から中世後半であることが判断できた。

バラス敷きを取り除いたところ、図28平面図のスクリーントーンで示した範囲に硬くしまった平坦面と砂礫の層が検出でき、両者の違いが埋葬施設の墓壇のラインである。墓壇の調査成果は3章2節に報告することとする。

以上、墳丘平坦面の成果を述べたが、調査前の所見で盗掘されているものと思われたが、調査が進んでいくなかで未盗掘古墳と判明した。そして、その後の埋葬施設の調査で多くの副葬品を見出す結果となった。周囲より高く目立つ墳丘が盗掘されることがなかったのは、近世においては塚として、中世においては古墳の認識がされていなかった結果と考える。

余談ではあるが、小字に残る「庭鳥塚」の由来は残念ながら解明できなかった。「庭鳥」は「鶏」に通じることはまず間違いはないだろう。だとすれば、全国に残る金鶏伝承との関連も無視できない。民俗からみる鶏の力も思慮する必要性を感じている。いずれにせよ、古墳時代に築かれた墳丘がまったく異なるものに転用されたことなどを含め、地域史のひとつの資料として今後の検討を進めていきたい。

【第1トレンチ】

平成17年度に後方部西側に設定した幅1.0m、長さ8.4mの東西トレンチである。墳丘裾と外部施設の確認と墳丘の盛土方法を確認する目的とした。

図29は、第1トレンチの北壁断面土層の実測図である。観察できた基本層序は、黒色で塗りつぶした表土を除去するとaの**明黄褐色砂質土**が現れる。にぶい**明黄褐色砂質土**の厚さは墳丘側で10cm～30cm、墳丘西側の平坦部分で40cmを測る。この層には**瓦器や土師質土釜**などの中世の遺物が含まれている。

トレンチの西側において中世遺物を含む堆積土である**褐色砂質土**と**葦石の転落石**が観察されたが、東側は墳丘の盛土面が現れた。

調査区の西側の褐色土と葦石の転落石を取り除いていくと、現地表面下1.2mで**葦石**と考えられる川原石を確認した(写真4)。現状の墳丘裾から1.8m東にあたる。葦石は15～20cm大の基底石と考えられる大き目の川原石を据えて、その上に拳大から人頭大の角礫を用いていた。施行法方は墳丘の法面に葦石を乱雑に置いたような状況で検出した。これが古墳時代当初の状況と判断しているが、葦石の直上から土師質の羽釜と瓦器椀の破片が出土しているので移動している可能性もある。

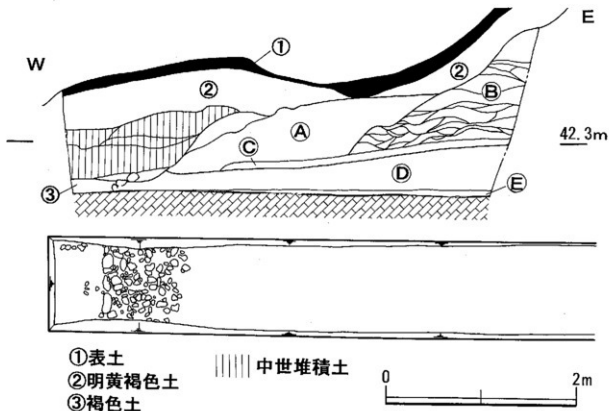


図29 第1トレンチ土層断面図・葦石実測図



写真4 第1トレンチ墓石検出状況

基底石は、長さ20cm、直径6cmの長細い川原石が長辺を外側に向くように並べられていた。トレンチの北側壁際の基底石は2段に積みあげられていたが、他は1段で保存状況は悪い。基底石は地山の直上で、標高41.76mを測る。基底石の確認で現状の墳丘東側が削られていることが判った。

このトレンチからは円筒埴輪の破片も確認できず、出土遺物は中世の遺物のみに限られる。

墳丘盛土を確認するために断ち割ったところ、地山の上でAとした黒色砂質土が8cmの厚さで長さ3m以上に渡って堆積することが観察された。これは古墳造成以前の旧表土と考えられ、その下の褐色細砂のBが堆積土になる。標高42.1m～42.3mである。したがって、古墳盛土の下に弥生時代の包含層があって、墳丘の盛土はその上から積み上げられることになる。図のCは細かい単位で盛土された壇である。この壇から西側にDが盛土され、また東側にも東へ順次盛土されていることが図から読み取れる。第1トレンチで検出した基底石から墓壇検出面まで3.7mの高さとなる。そして、後方は盛土によって造営されていることが確認できた。

### 【第2トレンチ】

平成17年度に後方部北側に設定した幅1.0m、長さ5.0mの南北トレンチである。調査区の南北上端の比高は約1.5mである。後方部のテラスの存在確認と前方部と後方部との盛土方法を確認する目的とした。

図30は、第2トレンチの東壁断面土層の実測図である。観察できた基本層序は、黒色で塗りつぶした表土を除去すると、直ぐ古墳の盛土が現れる。盛土の構築法を確認するため後方部北側斜面を断ち割ることとなった。

後方部の下にあたる標高43.6mで堅くしまった砂質土が水平に検出でき、その上に約25cmの厚さで砂礫を盛り上げた平坦面を築いている。この上に厚さ約20cmの緻密な土（硬く締まる土）と砂礫を下幅4.5m、高さ0.9mの土手状の盛土に築きあげる。土手状の盛土の外側は削って表面を整えていた。その土手状の盛土の南側を段丘礫で充填する盛土工法であることがわかる。

断ち割りにより北側の墓壇壁は、東西両壁同様に緻密な土を土手状に積み上げられていることが判明した。高さ1.0mまで積み上げられるが、盛土にあつたては厚さ20cm程度の緻密な土と砂礫を積み上げる工法を採用していた。

後方部の北側は、1.8mの高さまで盛った墳丘をさらに盛土で覆っていた。テラスや葺石が検出されなかった。表土に混入していた川原石は、墳頂部に築かれた石塚が崩壊した川原石が転落したものと判断した。



写真5 第2トレンチ断面土層

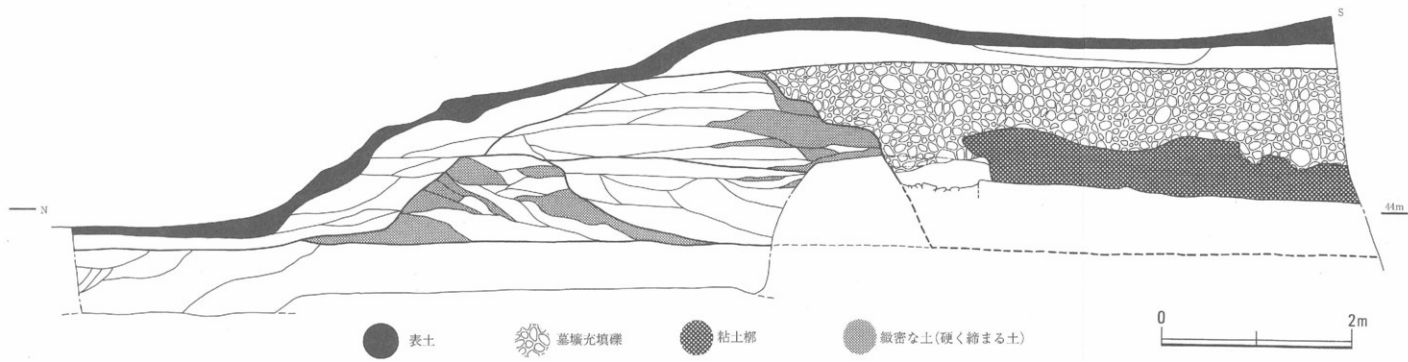


図30 第2トレンチ土層断面図

### 【第3トレンチ】

平成17年度に後方部東側の墳丘裾と外部施設の確認を目的として設定した。調査地点には、駐車場を整地した際の墳丘掘削土が1m以上盛られていたので、重機により土砂を取り除き引き続き幅0.7m、長さ3.0mの部分で掘削した。

基本層序は駐車場の盛土が0.5mの厚さで整地され、その下には建築廃材が大量に投棄されていることがわかった。現地表面下1.7mで地山を検出し、後方部東側の葺石は存在しない可能性が高くなった。平坦面は標高41.22mで、地山が西側へ斜めに立ち上がる地山が確認できた。粘土標の中心から10.2mを測る。地山に沿って厚さ10cm～25cmの厚さでぶい黄褐色土が覆っていた。トレンチ内では、基底石や葺石の転落がまったく検出できなかった。墳丘が削平された可能性もある。遺物や葺石と考えられる川原石がまったく出土しなかった。ただし、調査区の東側斜面に散乱する石が葺石の転落石とすれば、本来は存在していた可能性が高い。そこで機械で掘削した第3トレンチの西側の墳丘東斜面に幅1.0m、東西3.5mの東西トレンチを設定した。葺石の残存状況と墳丘盛土が遺存しているかどうかの確認するためである。

結果は、表土を除去すると墳丘盛土が直ぐ検出でき、葺石が流出していることが明らかとなった。東側の墳丘斜面に見られた川原石は墳頂平坦面にあった石塚の転落の可能性が高い。なお、墳丘盛土の状況は時間的な制約のため、盛土の確認調査を翌年の平成18年に実施することにした。

平成18年度の調査成果は、幅1mのトレンチ幅の北壁断面と南壁断面の土層堆積が大きく異なることが判明した。これは、第2盛土とした墳丘の盛土の方法が水平に積み上げたのではなく、山形に積み上げた盛土の内側に砂礫を充填しく方法によっていることが理解できる。したがって、主体部を中心に平面が環状（ドーナツ状）を呈する土手ではなく、放射状に三角錐状にボタン山を築くようである。

T.P.41.9m付近で地山が検出し、弥生土器片が混入するにぶい黄褐色土が厚さ

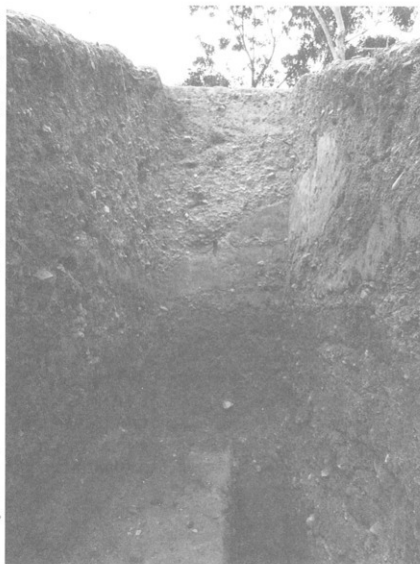


写真6 第3トレンチ断面土層

0.6mの上に盛土がなされる。

同年に墳丘東側の斜面にトレンチを設け、平成17年度に設定したトレンチの東側で墳丘裾の検出に努めた。結果は、大きく攪乱されて残念ながら墳丘裾を確認するに至らなかったが、東側の平坦部分まで墳丘の裾になる可能性を得た。そうだとすれば、昨年の1トレンチの葦石から東側推定ラインまで約30mとなる。トレンチの東側で標高39.0mを測る。

#### 【第4トレンチ】

平成17年度に前方部と後方部の西側のくびれ部に設定した幅2.0m、長さ4.0mの東西トレンチである。墳丘裾と外部施設の確認と造出しの有無を確認する目的とした。

土層断面図は図31に提示した。観察できた基本層序は、表土の下に明黄色土、黄色土、褐色土がほぼ水平に堆積する。褐色土からは12～13世紀の土器片が出土することから中世に整地されている事が推測される。トレンチの東南部で現地表面下0.2mから葦石が現れ始める。調査区は南東角から西北角へ緩やかに下がる傾斜を呈する。両者の比高は0.8mの差がある。トレンチでは明確な基底石を検出することができなかった。これは、墳丘裾を確認した第1トレンチと第6トレンチの基底石を延長すると本調査区ではわずかにずれ込むためである。

検出した葦石は直径15cmから20cmのちょうど準大の川原石を用いている。目地が通るような石列は検出できていない。

このトレンチの葦石は保存状況が良好だったので断ち割りをしなかった。そのため、葦石の裏込めや墳丘盛土の堆積状況は観察できていない。

特筆できることとして円筒埴輪が出土したことだ。埴輪はトレンチの北壁付近で葦石を覆う形で破片が散布し、その破片の下で円筒埴輪の底部を検出した。このことにより、庭島塚古墳に埴輪祭祀がおこなわれていることが判明した。

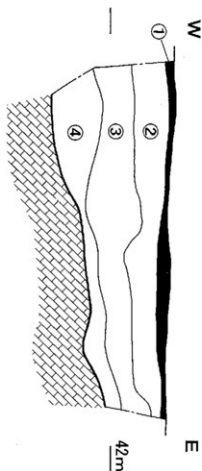
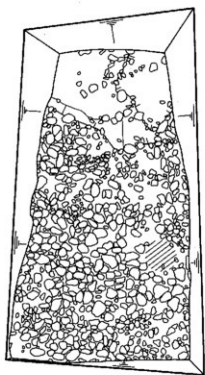
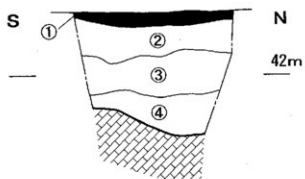
埴輪は、葦石が直径0.35mの範囲で施されていない箇所があり、そこから底部が出土した。確認した円筒埴輪の底部は残存状況が悪く、完周していなかった。精査したところ埴輪の樹立させるための掘形は検出できなかった。その精査中に口縁部が上を向いた潰れた状況の直口壺が現れた。さらに、胴部の破片が口縁部の下に折り重なるように出土した。このことから、直口壺は円筒埴輪の中に置かれていたものと判断した。

埴輪や土器の出土状況から埴輪の樹立は、葦石が施される前であった可能性が高い。そのため、掘形が検出できなかった理由は、掘形の肩が葦石の下に存在するためであろう。その確認のために葦石を取り上げて調査は実施していない。

トレンチの南北幅が2mで、埴輪の樹立が1箇所しか確認できなかったことにより円筒埴輪の囲繞はされているが、その樹立間隔はかなり広いものと理解している。また、樹立された状況で出土したのは第4とトレンチのみで、円筒埴輪が特定の場所に限られて立てられている可能性も考える必要がある。

調査目的である造出しの存在はトレンチの設定位置が悪く、本トレンチでは確認できなかったが、平成17年の第5トレンチや平成19年の第11トレンチの調査成果でも確認されていないので西側には存在しないことが判明した。





- ①表土
- ②明黄褐色土
- ③黄色土
- ④褐色土

 土師器出土地点



図31 第4トレンチ土層断面図・葦石実測図

【第5トレンチ】

平成17年度に前方形西側に設定した東西トレンチである。幅1.8m、長さ7.7mの東西トレンチである。

土層断面図は図32に提示した。観察できた基本層序は、黒色で塗りつぶした表土を剥ぐとaとした明黄褐色土が18～54cmの厚さで堆積する。それを除去すると墳丘の盛土が検出された。トレンチ西端から1.8mの地点でこぶし大の石が現れ、その間は墳丘盛土ではなくbとした黄褐色土であった。

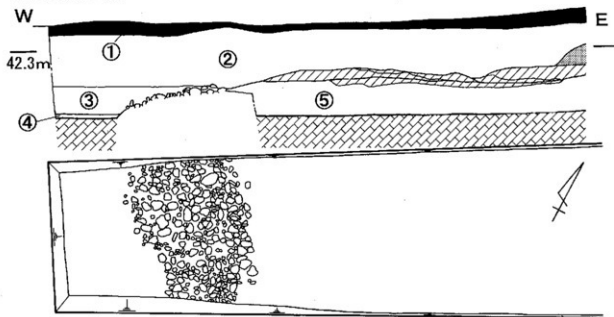
黄褐色土を除去すると拳大の川原石が検出でき、葦石と判断した。葦石端部は主軸から西へ8m地点で、現地表面から1m下で検出した。

葦石の角度は、17°で他のトレンチで検出した葦石の角度に比べ緩やかであった。葦石が検出のレベルはT.P.41.6mである。葦石は断ち割らなかったので、基底石の有無は確認できなかった。墳丘盛土は葦石の西端から4.5m東まで厚さ10cm～20cmと薄く、墳丘斜面が平坦である。墳丘斜面の角度が見られるのは、葦石西端から4.5m東からである。

このトレンチにおいても円筒埴輪を確認することができず、葦石上面から出土する土師器片は中世の遺物であった。

墳丘測量図をみると西側くびれ部が前方形側に入り込んでいる。そのため、前方形西斜面はバチ型に広がる前方前端を形成するが、平成18年度から平成20年度に実施した前方形の調査で当初の形態ではないことが明らかとなっている。したがって、5トレンチで検出した不自然な平坦は削り取られている可能性が高い。

墳丘を断ち割ったところ地山の上にcの層が堆積している。この層から完形に近い弥生土器の鉢が出土している。



- ①表土
- ②明黄褐色土
- ③黄褐色土
- ④褐色土
- ⑤黄褐色土

緻密な砂質土

緻密な砂質土以外の古墳盛土

図32 第5トレンチ土層断面図・葦石実測図

【第6トレンチ】

整地工事で削られた後方部の南側断面土層図作成のために設けた幅0.5mの断ち割りの西端に幅1.0m、長さ2.5mの東西トレンチを新たに設けた。平成17年度に調査した第6トレンチは、第1トレンチで検出した葺石の南側への広がりを検出し、後方部西側の墳丘裾と墳丘の盛土方法を確認する目的とした。

土層断面図は図33に提示した。観察できた基本層序は、黒色で塗りつぶした表土を除去するとaとした明黄色土が18～54cmの厚さで堆積する。それを掘り下げると古墳の盛土とトレンチ西側で石敷が検出した。石敷きの中央に幅0.5mの溝状遺構が検出され、埋土は褐色土であった。サブトレンチで断面を確認したところ、溝状遺構の西側の石敷きは葺石の転落石で、溝状遺構の東側の石敷きは後方部の西側の葺石であることが判明した。葺石を覆う形の転落石を取り除くとは葺石が良好に残っていることが判明した。転落石はにぶい黄褐色土で埋没していた。同層からは中世の遺物が出土している。

葺石は、傘大の石が角度を変えて川原石を葺いていた。角度が変わるところから使用石材が直径6cm、長さ20cm弱の細長い川原石となる。川原石の側面を外側になるように0.35mの高さまで積み上げて、最大で3段が確認された。一番下の石が少し大振りの川原石を用いていることから基底石と考えられる。基底石の下面は標高41.9mであった。基底石は、粘土椀の中心から11.5mの地点で検出された。このことにより後方部の東西復原幅を約23mとし、同高さは基底石から墓壕検出面まで3.7mを測る。

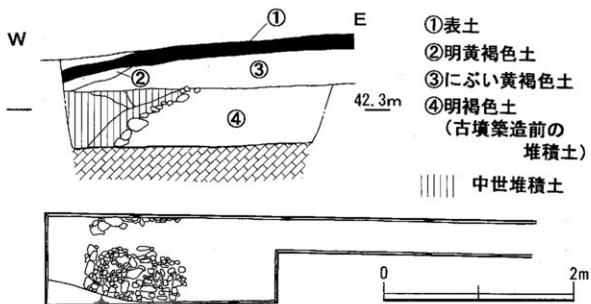


図33 第6トレンチ土層断面図・葺石実測図

#### 【第7トレンチ】

平成18年度に前方部の北面に設定した幅1m、延長12.5mの南北方向のトレンチである。前方部の前線の検出と外部施設の状況、そして前方部の盛土の構築状況が確認する目的で設定したトレンチである。

土層断面図は図12の上段に提示した。観察できた基本層序は、表土の下に褐色砂質土が確認された。厚さ8.0～20.0cmのしまりのない層からは近世陶磁器が出土している。褐色砂質土の下で墳丘盛土の面が検出できた。トレンチの南端から8.2mの地点で葺石を確認した。

葺石は15～20cm大の川原石を基底石に据え、拳大から人頭大の角礫を用いる。残りが最も良好な所で2段分の葺石を検出するに留まった。検出した基底石の標高がT.P.41.8mをはかる。基底石と考えられる川原石の北側にテラスと考えられる幅0.65mの平坦面が確認された。

墳丘はさらに北側へ下降し、葺石の北面から2.35m北側で傾斜が緩やかになる。この傾斜変換点が墳丘裾と考えるが、トレンチ内では葺石や転落石はまったく検出できなかった。レベルはT.P.40.8mである。墳丘はさらに緩やかに下降し、その上に褐色砂礫土がレンズ堆積する。厚さ0.15mの堆積状況から調査区の北側で立ち上がる可能性があり、前方部北側の墳丘裾に沿って掘削状遺構の存在を考えている。埴輪などの遺物はまったく出土しなかった。

トレンチを断ち割って断面を観察したところ、墳丘裾は地山を削って成形していることが判明した。想定される掘削状遺構は地山を掘削していることになる。検出した地山の標高はT.P.41.1mで、その上に褐色土が20cm、黒褐色土が10cmの厚さで堆積する。後者の黒褐色土は旧地表と考えられ、墳丘の盛土は旧地表の上から施行されている。盛土の方法は、緻密な土を土手状に盛り上げられ、その外側に砂礫層を積み上げている。



写真7 第7トレンチ

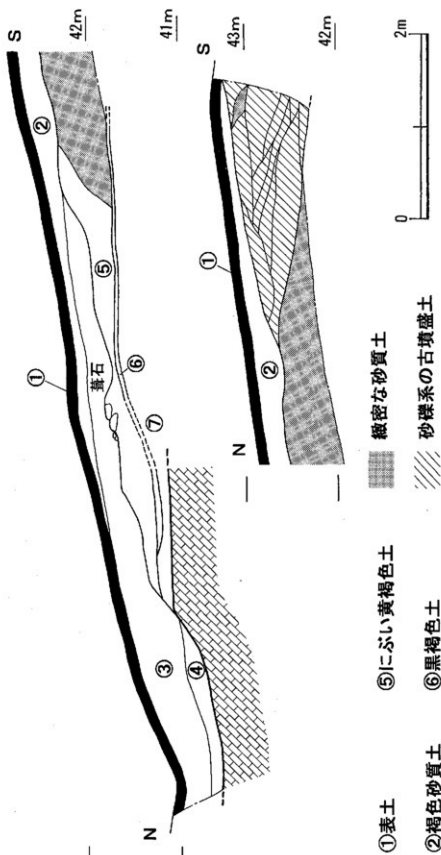


図34 第7トレンチ土層断面図

#### 【第8トレンチ】

平成18年度に前方部の東側法面に設定した幅1m、延長9.8mの東西トレンチで、東端と西端は3.25mの比高がある。

基本層序は、表土の下に褐色土が確認され、近世陶磁器が出土する。その層の下で墳丘盛土の面が検出できる。

トレンチの西端から2.6mの地点で葺石の基底石を確認した。基底石は15~20cm大の川原石で、その上の斜面は小礫を確認した。石材の大きさより裏込めの礫と考えられる。基底石の検出レベルがT.P.41.6mであった。40cmの平坦面はテラスとなろう。トレンチの西端から6.2mの地点で墳丘変換点を確認できた。標高T.P.39.25mを測り、川原石の集積を検出した。転落した葺石であろう。

平成20年度は平成18年度に調査した東西トレンチの西側を拡張し、前方部平坦面の壇輪列の存在と盛土の状況を確認する目的で実施した。

基本層序は、厚さ20cmの表土を除去すると黄色土が厚さ30cmに渡ってみられる。黄色土から円筒壇輪の破片が数点出土したので、墳頂平坦面にも壇輪が樹立されているものと思われる。黄色土の下が砂礫層である。第12トレンチで確認した墳丘法面の小礫は本トレンチにおいては確認することができなかった。前方部墳頂平坦面もこぼし大の石と締まりのない鈍い黄色土が検出された。こぼし大の石は葺石が流れたような状況ではなく、性格を明らかにするためにトレンチを掘り下げて盛土の積み方を確認するため断ち割った。

断ち割ったところ、墳丘斜面に掘り込みが見られた。掘り込みは、深さ0.8m、東西長2.5mの大きさを有し、標高92m付近で水平に面を形成する。こぼし大の川原石は、掘り込みに包蔵されることが明らかとなった。掘り込みの埋土である砂礫層からは、16世紀の灯明皿に使用した土師皿が出土し

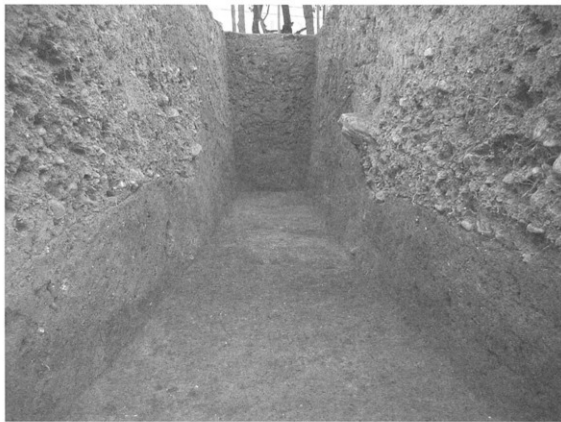


写真8 第8トレンチ

た。したがって、中世末の遺構であることが判明したが、幅1mの調査区の範囲では落ち込みの性格までは明らかにできなかった。

墳丘の西側斜面が中世以降の改変が確認された以外は古墳築造当初の盛土が検出された。現地表面から30cmの下では、にぶい砂礫土と褐色土の互層が厚さ20cmの単位で観察できる。さらに、現地表面から1.1mで黒色土とにぶい褐色土の互層が見られた。黒色土とにぶい褐色土の互層は非常に固く叩き締められ、第14トレンチの断面から前方部において観察できる土層である。強固な盛土が存在することが明らかにしえた。本トレンチでも地山を検出するには到らなかった。

#### 【第9トレンチ】

平成18年度に前方部西側に設定した幅1m、延長8.3mの東西トレンチである。平成17年度の第5トレンチで検出した葦石の延長の確認、葦石の遺存状況の確認を目的とする。

基本層序は、表土の下に明黄色土が確認され、その層の下で墳丘盛土面が検出できた。トレンチの西側は旧国道のコンクリートブロックのよう壁に隣接する。そのため、トレンチの西端で擁壁の裏込めの礫が確認された。

墳丘を断ち割って盛土を観察したところ、地山確認できなかったが、黒褐色土、にぶい黄褐色砂質土が水平堆積し、墳丘の盛土は標高T.P.42.0mから積み上げられていることが判明した。

トレンチの西側端に近いところで川原石を積み上げた石垣状の遺構を検出した。直径15cm～20cm大の川原石を垂直近くに積み上げて、最大3段分を確認できた。この遺構が庭鳥塚古墳の葦石となるか思案している。それは、他のトレンチで確認した葦石の形態と大きくかけ離れていることによる。一番下の石の標高は41.5mを測るので、葦石が施工されている高さは問題はないが、その積み方は中世の石垣とも思えてならない。本トレンチから遺物がまったく出土していないため遺構の時期決定ができないのも不安要素の一つである。したがって、石垣状の遺構の性格や築造時期を現状では保留しておく。

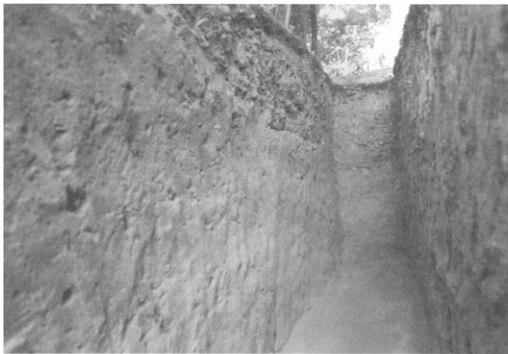


写真9 第9トレンチ

#### 【第10トレンチ】

平成18年度に後方部南側の駐車場に設定した幅1m、延長10mの南北トレンチである。駐車場造成工事によって削られた墳丘の範囲確認と後方部南側の墳丘裾の確認が目的である。

土層断面図は図12の下段に提示した。観察できた基本層序は、黒く塗りつぶした層が駐車場に敷かれた砕石である。砕石を除去すると、墳丘寄りで墳丘盛土の面が検出できた。墳丘盛土を断ち割ったところ、トレンチ北端から6.5m南に緻密な土の盛土の端を確認した。その下に黄褐色粘質土が0.27mの層で水平堆積がする。その下が段丘礫の地山であり、標高42m前後である。トレンチの南端からは葦石の転落石と円筒埴輪に破片が確認された。転落石を取り除いたところ葦石を検出できた。

葦石が検出された面は駐車場の砕石面から0.75m下で標高42.37m付近である。検出した幅は2.2mの規模であり、平坦面の南に南側葦石の法面が、平坦面の北側に墳丘の立ち上がりがある。この面は古墳築造時のテラス面にしては広い。平坦面の上に中世の遺物を含む黄褐色粘質土が0.4mの厚さで堆積することから後方部西側と同じように中世の段階で墳丘を削り取った可能性が考えられる。

黄褐色粘質土が堆積する北側、墳丘の立ち上がりの部分に幅1.2m、深さ0.35mの溝が検出された。埋土にビニールなどが混入していたので駐車場造成時に埋められた溝であることがわかった。駐車場に整地される前の状況は、地権者や削平される以前の状況を知る人達の話し通り、墳丘の裾に浅い溝の存在が確かめられた。

葦石は、拳大から人頭大の角礫を用いていた。葦石の検出レベルはT.P.41.35mであった。葦石は調査区の南側にさらに拡がり、トレンチ内では基底石は確認できなかった。駐車場の南にある道路



写真10 第10トレンチ葦石検出状況（北から）



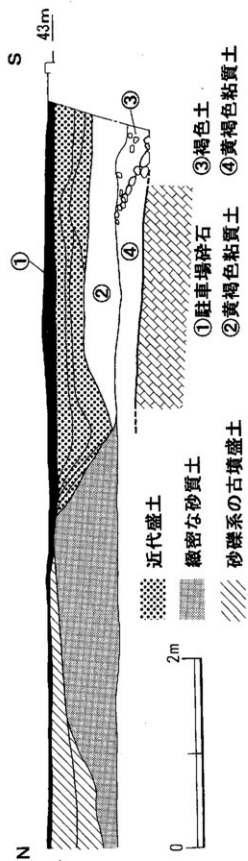


図35 第10トレンチ土層断面図

下に基底石が埋もれていることになる。現状から整地された墳丘南端から約7.6mになる。

今回の調査によって確認できた後方部の南北長は、昨年度設けた第2トレンチの墳丘裾から24mとなる。後方部の南側のトレンチから円筒埴輪片が出土したことは、埴輪の樹立がくびれ部だけでない事を示すこととなった。転落石とともに出土した埴輪の出土状況は、検出された葺石の上面にテラスがあって、そこに圍繞されていたものなのか、あるいは後方部の墳頂から転落したものかは現状では判断できない。トレンチの南半で中世の包含層の下で確認された平坦面を古墳時代当初のものともみるか、中世に墳丘を削ったものかも検討しなければならない。

### 【第11トレンチ】

平成19年度に前方部と後方部の西側くびれ付近に設定したトレンチで、平成17年度に調査した第4トレンチと第5トレンチの間にあたる。第4トレンチで検出した葦石の広がりたくびれ部の外部施設の残存状況を確認する目的で設定した。

調査は、樹木の関係で東側にL字状の調査区（第11トレンチE区）と西側の東西4m、南北2mの調査区（第11トレンチW区）を設定した。結果的には両調査区の間には土層確認のための呼が残ったことになる。

基本層序は、表土をめくるとにぶい黄褐色土が墳丘斜面を覆っていた。この層には中世遺物が包蔵される。にぶい黄褐色土を掘り下げると古墳の墳丘盛土が検出された。

第11トレンチE区は前方部側を大きく削り取られ、墳丘斜面の傾斜が古墳当初のものでないことが判明した。したがって、前方部西側の側面がバチ状を呈する形態は古墳当初のものではない可能性が高くなった。また、後方部の北西側の葦石が露出していた箇所を掘り下げたが、石と石の間に隙間があり、且つ川原石同士が密接していない状況であった。したがって、すべて転落石であることが確認できた。

第11トレンチW区からは、平成17年度に調査を実施した第4トレンチと第5トレンチに繋がるように葦石が検出された。調査区の東側では葦石が検出できなかったことから墳丘を大きく抉られていることになる。西側のトレンチからは埴輪片とともに、5世紀末の須恵器の破片が出土した。なお、円筒埴輪の破片と共に12世紀末～13世紀の瓦器片や土師質羽釜片が葦石の直上から出土している。

前方部に見られた墳丘の改変は遺物から中世の段階と考えられる。

2箇所のトレンチの所見から第4トレンチで検出した葦石は北側に広がるということが確認できた。しかし、埴輪列の存在をこのトレンチでも検出できなかった。したがって、くびれ部の前方部側の外部施設は緩やかな葦石を施し、埴輪の樹立が広い間隔である可能性がでてきた。

### 【第12トレンチ】

平成19年度に前方部と後方部の東くびれ付近に設定したトレンチである。平成16年度に調査した第3トレンチの北側にあたる。現状は近代の盛土がされて大きく旧状を損ねている。近世の盛土の排除と第3トレンチの調査成果から幅の狭いトレンチ調査では攪乱に当たる可能性が高いことから面的な調査区を設定することにした。

土層断面図は図36に提示した。観察できた基本層序は、表土を除去すると、にぶい黄褐色土が覆い、その下が墳丘盛土であった。

後方部の東側で川原石を敷き詰めた平坦部が検出され、東側のテラス面と考えた。その後の精査により石敷きにしまりが無いことから古墳の築造当初の遺構でないと判断した。

くびれ部については、かなり改変が認められ大きく削り取られていることが判明した。調査終了直前に西側壁面を断ち割ったところ、トレンチの北西隅からこぶし大の川原石の堆積が検出され、川原石と共に円筒埴輪片や土師器の直口壺片が出土している。浮遊した川原石を除去するとやや大きい目の川原石が現れた。長さ30cm、直径13cmの大きさで、細長い形状を呈する。その長辺を外に向くようにL字状に配列し、石は水平に据え置かれていた。検出状況から葦石の基底石が残存したものと判断した。そして、川原石の堆積を東くびれ部の葦石が転落したものと考えたのである。したがって、後方部の東側は、あまり遺存状況が良いとは言えない。さらに、基底石はくびれ部から東側に1m程度しか残っておらず、後方部の東方への広がりを明確にできなかった。底石のレベルは、T. P. 41.5 mを測る。後方部西側の基底石のレベルとほぼ同じである。また、埴輪層を確認するために幅1mのト

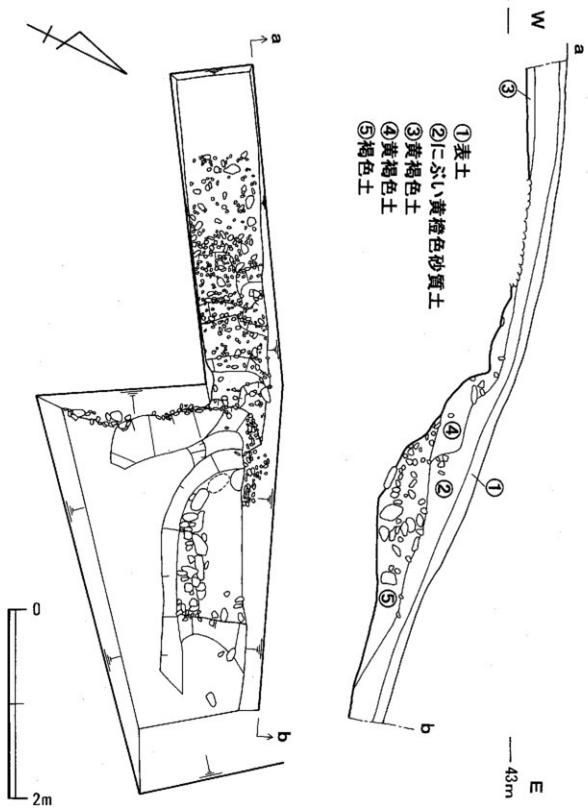


図36 第12トレンチ土層断面図・寶石実測図

レンチを東西に設定して東方へ拡張したところ、粘土礫の中心より東へ19mの地点で落ちが確認された。

平成20年度の調査は、平成19年度に検出したくびれ部の基底石から墳頂部の葦石残存状況を確認するため、昨年度のトレンチの西北から西側に幅1m、長さ3.3mに規模でトレンチを拡張した。表土を剥くと、黄色砂質土が厚さ0.25mで認められ、その下から葦石が残存していることが確認できた。本トレンチから遺物はまったく出土していない。

葦石は、径2cm程度の小礫（川原石）を墳丘にばら撒いた状態で、区画石と考えられるような目地が通る石列などはトレンチの範囲内では見られなかった。

前方部の墳頂平坦面には、小礫が認められず墳丘盛土が露頭するような状況で検出できた。埴輪列などの外部施設の検出につとめたが、トレンチの範囲内では確認することができなかった。

#### 【第13トレンチ】

平成19年度に前方部北東側の後線上に設定した幅1m、長さ7mの南北トレンチである。墳丘後線上の葦石構造と東側斜面の葦石の残存状況を確認する目的とした。

基本層序は、表土をめくると黄色砂質土が見られた。黄色砂質土を除去すると、川原石の頭が見え出した。

川原石は、トレンチの主軸に平行してこぶし大の大きさと小口面を外側に向けて並べていた。この石列は後方部に向けて真っ直ぐ延長することが確認された。したがって、前方部の側辺が直線状に延びていることになる。このことから、前方部の西側斜面が大きく内向する曲線は古墳築造当初のものではなく、後世に削り取られた結果によることが追認することとなった。さらに、調査区の北端で葦石の転落と考えられる川原石が堆積しているのが確認できた。墳丘裾はその北側になる。

このトレンチからは表土から出土した近世陶磁器の他遺物はなかった。

#### 【第14トレンチ】

平成20年に度前方部の墳頂平坦面に設定した幅1m、長さ11m南北方向のトレンチである。トレンチの南端は平成17年度に実施した第2トレンチ、北端は平成18年度に実施した第7トレンチにそれぞれつながる。前方部の盛土方法や前方部に埋葬の施設有無の確認を目的とする。

基本層序は、厚さ15cmの表土の下に黄褐色土が認められ、バサバサした層で中世の遺物が出土した。にぶい黄褐色土を掘り下げると墳丘盛土が確認された。

第14トレンチで検出した遺構は、調査区の北端から南に8mの地点で径15cm大の川原石が集中する箇所を確認した。川原石は、墳丘上面から40cm程度下がったところで、南北120cmの幅で集中していた。東西の範囲は、調査区（幅1m）の外側に拡がるため明らかにできなかった。

検出した川原石は平面的に広がるものではなく、墳丘盛土面から掘り込まれた土坑状の遺構に落ち込んだ状況であることが判った。埋葬施設の可能性を考えながら写真や検出状況図を作成しながら掘り下げたところ、川原石の周辺から平瓦片が出土した。瓦の時期から中世もしくは近世初めの土坑であることが判明した。遺構の性格は不明であるが、盗掘を目的としたものであるかの判断はできなかった。

土層断面からトレンチの南側で緻密な土と段丘礫を交互に堤状に積み上げた状況が確認された。前方部の墳丘盛土は、この堤状の高まりと第7トレンチで検出された前方部北側の緻密な砂質土による土手状高まりの間に段丘礫で充填している。段丘礫の盛方は前方部北側から後方部に向けて構築していることが判明した。盛土の構成は1回のみで、その下に黒色砂質土が広がっていることが検出できた。現地表面より下へ1.3mであるが、同層は非情に硬くしまり、サヌカイト片や土器片が包蔵して

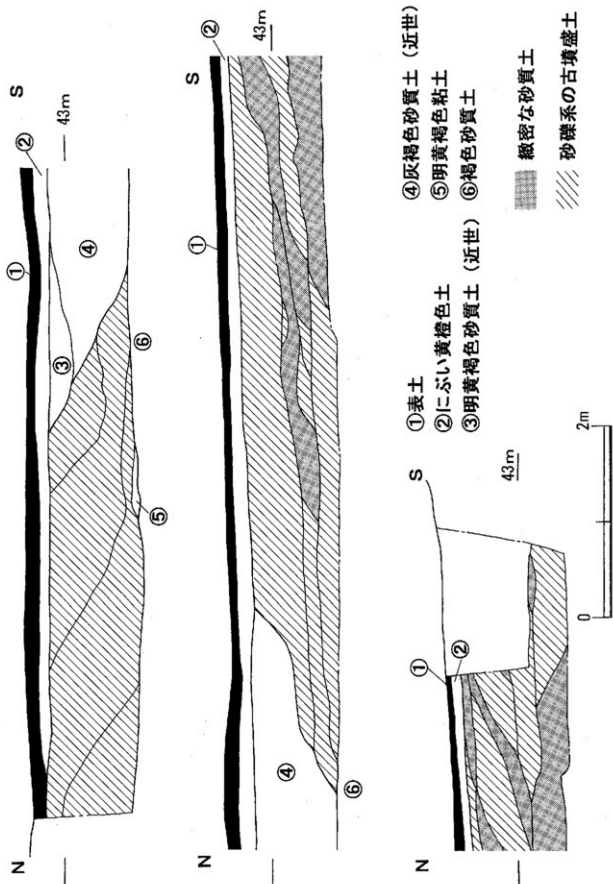


図37 第14トレンチ土層断面図

いることから、古墳築造前の堆積と考えられる。土器片には弥生時代の臺の底部片があり、弥生時代中期以降の遺物包含層となろう。標高は42.3mを測る。

地山である段丘礫の確認するために調査区の一部を掘り下げた。現地表面から1.7m下では包含層の黒色砂質土を検出したので本トレンチでは段丘礫が確認できなかった。

本調査区の目的である前方部の埋葬施設の有無については、結論から述べると調査範囲において検出することができなかった。ただし、トレンチの断面では緻密な土砂を堤状に積み上げた中に充填されていた砂礫層には後方で築かれたような粘土層が確認できなかったが、主軸に対して直行するのでは平行に築かれている可能性も捨てきれない。また、埋葬施設が粘土層ではなく木棺直葬であれば今回設定した調査区の範囲外にも存在している可能性もあることを述べておく。

#### 【第15トレンチ】

平成20年度に墳丘東側の平坦部に設定した東西9m、南北9mの調査区である。くびれ部の確認を目的とし、平成18年度に実施した第8トレンチの転落石の南側の広がりや墳丘の東に広がる平坦面の遺構の残存状況を確認した。第15トレンチを設定した部分の調査前は、平成17年度に調査した際の掘削土が墳丘斜面を厚く覆っていたために、トレンチ設定にあたり掘削土の除去から始めた。掘削土の除去にあたり掘削土の土量から人力での排除は無理と判断し、小型のバックホーを用いることにした。重機による掘削に際してバックホーが墳丘直上に乗らないように細心の注意をはらい、最後に作業員による人力掘削で排出土の完全除去を行った。

調査区に基本層序は表土が除去されると、近世の陶磁器、瓦が包含される褐色砂質土があり、その下に褐色砂礫層が地山を覆っていた。褐色砂質土は締まりがなく、中世の土師皿や羽釜などが包蔵されていた。新しい時期の遺物が出土したことにより墳丘の盛土でないことが判明したので、掘り下げたところトレンチの南西隅において墳丘の一部を確認することができた。

確認された墳丘は、後方部の北東角にあたり東西1.6m、南北1.4mの範囲で、地山である段丘の礫層を削り出して造成していることが判った。残念ながら墳丘は後世に平らにされ、わずかに20cm程度の地山の高まりが残存するだけであった。後方部東辺の墳丘裾には葦石の転落が認められず、くびれ部から東方の張り出しが1.6mと短いことを考えると、後方部東辺は削り取られている可能性があることを指摘しておきたい。

前方部の墳丘裾については、くびれ部から前方部前面までの北方へ川原石の堆積が存在していた。川原石の堆積は、厚さ30cmあるが、石のしまりが無く、石の間には土砂が混入していることから前方部の葦石が転落したものと考えられる。

転落した葦石を除去したところ、墳丘裾には葦石基底石が検出できなかった。このことから二段築成の下部については、葦石は存在するものの大き目の基底石を持たない構造と考えられる。

確認できた墳丘裾は、傾斜角度12°を測る法面を呈する。墳丘の一部を東西に断ち割ったところ、地山を削り出して墳丘法面を成形していることが判った。また、緩やかな墳丘斜面にはこぶし大の川原石を並べたような葦石状の石敷きを認めることができた。石敷きには目地と思えるような筋は観察できるが、使用する川原石の大きさに変化はない。

葦石以外の外部施設の確認のために墳丘裾や傾斜が緩やかになる部分を精査したが、円筒埴輪の拵立の裏付けの埴輪配列の掘り方の存在は確認できなかった。さらに、本トレンチから円筒埴輪の破片が一点も出土しなかったことを考えると墳丘裾には円筒埴輪の囲繞がされず、葦石以外の外部施設は無いものと判断した。

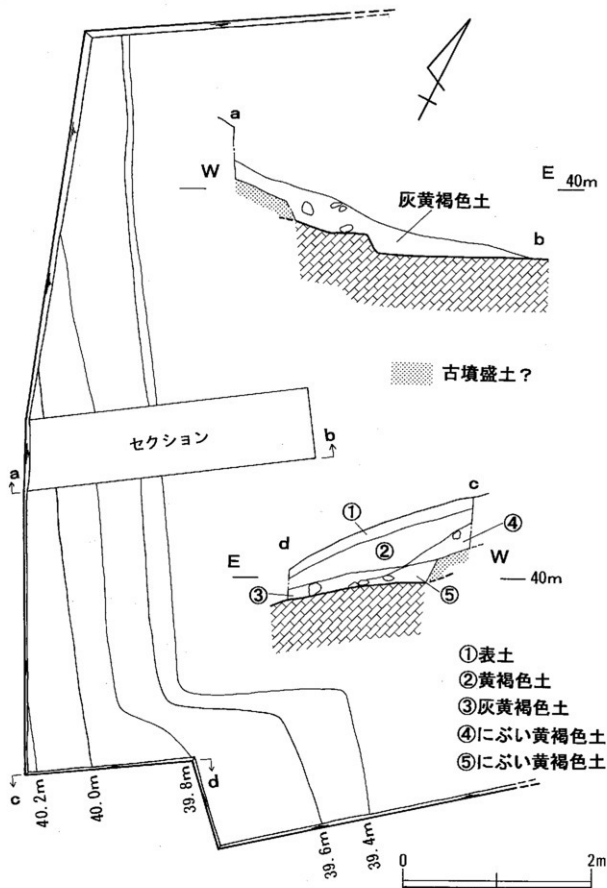


図38 第15トレンチ墳丘測量図・土層断面図

外周溝についても今のところ、存在しなかったと判断している。墳丘裾から東に広がる平坦面は、調査で検出した東側くびれ部の裾から段丘崖線まで約13mの距離である。第15トレンチの東西長は7mを測り、したがって平坦面の約半分を調査したことになる。設定したトレンチの断面では外周溝の立ち上がりが確認できなかった。外周溝の幅が調査区よりかなり広いと考えると、トレンチの東側において検出される可能性も考えられる。ただし、トレンチ内の土層観察した所見から堆積層を確認できなかったため、存在していた可能性は極めて低い。

第15トレンチの北壁の東西断面の観察では、表土の下にぶい褐色土が認められた。ぶい褐色土層は、墳丘から流失した土砂が堆積したと考えているが水が溜まったような状況の水成堆積層は確認できなかった。段丘礫である地山の土質から水が保留する状況でない可能性も捨てきれないが、確認された土層からの外周溝の判断は難しい。ぶい褐色土からは遺物はまったく出土しない。

#### 【第16トレンチ】

平成20年に前方部の北西方向の傾斜地に設定した東西5.5m、南北3mのトレンチである。第16トレンチの西南は、平成19年度に設定した第13トレンチと重複する。第13トレンチの北端で葦石の転落と考えられる川原石が堆積しているのが確認できたので、第16トレンチの設定にあたり転落した葦石の広がりを確認するために第16トレンチとして第13トレンチの東へ拡張した。トレンチの西側と東側は0.9mの比高がある。

基本層序は、竹の根が生えた表土を剥くと、厚さ15～25cmの黄色砂質土が見られた。黄色砂質土はしまりがなくバサバサした層であり、中世の遺物が包含されていた。これを掘り下げたところトレンチ全面にこぶし大から数cmの小礫（川原石）が確認された。

川原石の検出状況は、墳丘に堅固に施行した葦石というよりも、墳丘斜面に川原石をばら撒いたような状況であった。南北3mのトレンチにおいて区画石と呼べるような目地が通る石列の検出はできなかった。同じような葦石の施行は第12トレンチ拡張区で検出した葦石に似通っている。

川原石の傾斜角度は12°で、西から東へ緩やかに下降する。トレンチの東端で小口面を外側に向けて直線状に並んでいる川原石を検出した。川原石は、長さ24cm、幅17cmの大きさで細長い形状を呈する。検出した石列は、保存目的とした調査のために葦石の断ち切りを実施していないが、状況から基底石と考えられる。

当トレンチからは中世の遺物のほか、葦石の直上から古墳時代後期の須恵器片が数点出土している。ところが、円筒埴輪といった庭島塚古墳に係わる遺物はまったく確認することができなかった。第15トレンチの調査成果と考え合わせるならば、東側の墳丘裾には円筒埴輪は樹立されていないのであろう。

なお、葦石が施された墳丘の斜面に高さ10～15cmの段差が存在する。段差は、墳丘斜面に平行して7段確認したが、意図して段になるように川原石を葦いたと考えるよりは、自然変動によってできた段差と考えている。自然科学の専門家による調査を待たねば結論は出ないが、遺跡で検出できた地震痕跡であろう。具体的には、地震による表層地盤が水平方向に移動したことにより緩やかに傾斜する墳丘に段差が生じたと解している。



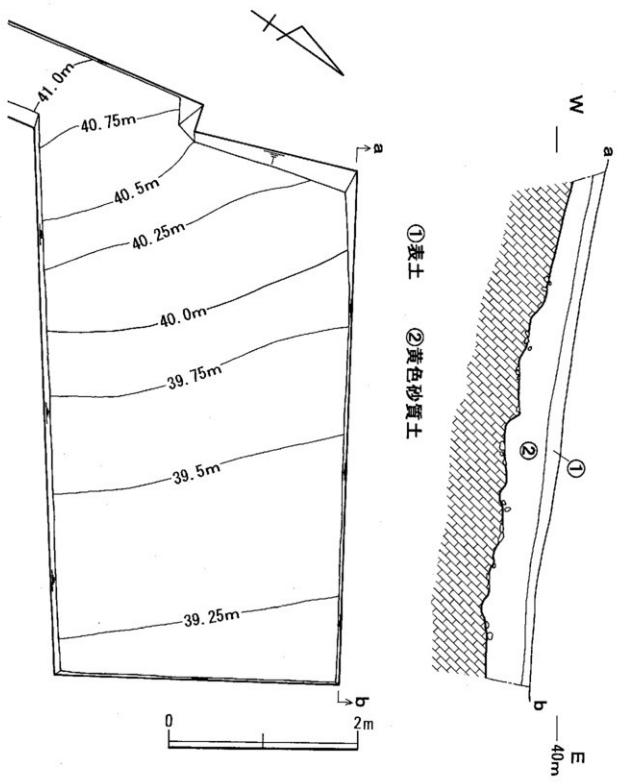


図39 第16トレンチ填丘測量図・土層断面図

(c) 出遺物

各トレンチから出土した遺物は、古墳が築かれた時期の遺物とその前後の3時期に分けられる。

【埴輪】

埴輪が出土した調査区は第4トレンチ、第8トレンチ、第10トレンチ、第11トレンチ、第12トレンチの5箇所であり、その出土量は多くない。観察できた埴輪はすべて円筒埴輪である。

観察した破片は外面に赤色顔料が塗布されていた。外面はヘラや指によるナデ調整が認められ、内面もナデによる調整が施されている。器壁の厚みが0.7cmと薄いことも特徴的であるが、ヘラ削りによる内面調整は確認できない。以下、図40に提示した埴輪の概説をする。提示した埴輪は平成17年度調査の第4トレンチと平成19年度調査の第11トレンチ出土資料で、いずれも西側くびれ部にあたる。第11トレンチは、平成17年度に埴輪片が多く出土した第4トレンチの北側に隣接するトレンチである。出土した破片総数28点のうち6点を図化し得た。

1から3は口縁部の破片である。1は、円筒埴輪の口縁部の破片で、口径を復元することができなかった。口縁部高は、現存する破片で6cmを測る。口縁部の形態は、緩やかに外反する口縁の端部は平坦である。端面をヨコナデ調整し、内外面は、ナデによる調整を施す。器壁の内外面には赤色顔料による塗布が観察できる。器壁厚は1cmである。2は、緩やかに外反する曲線を描くことから円筒埴輪の口縁部付近の破片と考えられる。内外面は、ナデによる調整を施す。赤色顔料は、器壁の内面のみ施される。器壁厚は1cmである。3は、円筒埴輪の口縁部付近の破片で、緩やかに外反する曲線を描く。内外面は、ナデによる調整を施す。器壁の内外面に赤色顔料を塗布する。器壁厚は1cmである。

4から15は胴部の破片である。4は、突帯は高さ12mmで、断面が方形を呈している。突帯に接して方形もしくは正三角形の底辺部が確認できる。穿孔位置は突帯間隔の判明する資料が無く、推定の域を越えないが同一の段に千鳥式に配されていた可能性がある。5から7もスカシ孔が確認できる破片で、突帯に接して穿孔される。突帯上下に近接して穿たれる破片から正三角形、逆三角形の両者が存在する。

8はスカシ孔をもつ破片であるが、斜め方向の穿孔からスカシ孔の形状は三角形と考えられる。

9は円筒埴輪の胴部片である。調整は、外面がタテハケのちナデ調整で、内面は板ナデによる調整を施す。赤色顔料は確認できなかった。胴部の残存高は9.8cmを測り、突帯の貼り付ける際のヨコナデが破片には認められないことから想定される突帯間隔は12cm以上である。スカシ孔も観察できなかった。器壁の厚は0.8~1cmであった。

11は円筒埴輪の胴部片で、突帯の剥離痕跡が2cm幅で観察できた。剥離痕跡の上下には、突帯を貼り付けたさいのヨコナデが見られる。胴部の器壁の調整は、外面がナデによるものであった。また、赤色顔料による塗布が見られた。内面はナメ方向のハケメ調整後、突帯の裏面のみナデ調整が見られた。器壁の厚は1cmを測る。

14は、円筒埴輪の胴部片で、残存高は8cmを測る。調整は、外面がタテハケを施した後ナデによって丁寧に仕上げられている。内面は、横方向の板ナデが見られた。また、器壁の外面には赤色顔料を塗布する。突帯やスカシ孔は観察できなかった。器壁厚は1cmを測る。

15は突帯を含む胴部片である。

16は、底部の破片である。小片のため底径を復元できなかった。

以上、図化した円筒埴輪の説明を述べたが、埴輪についての位置づけは類例と比較してまとめて詳しく報告する。

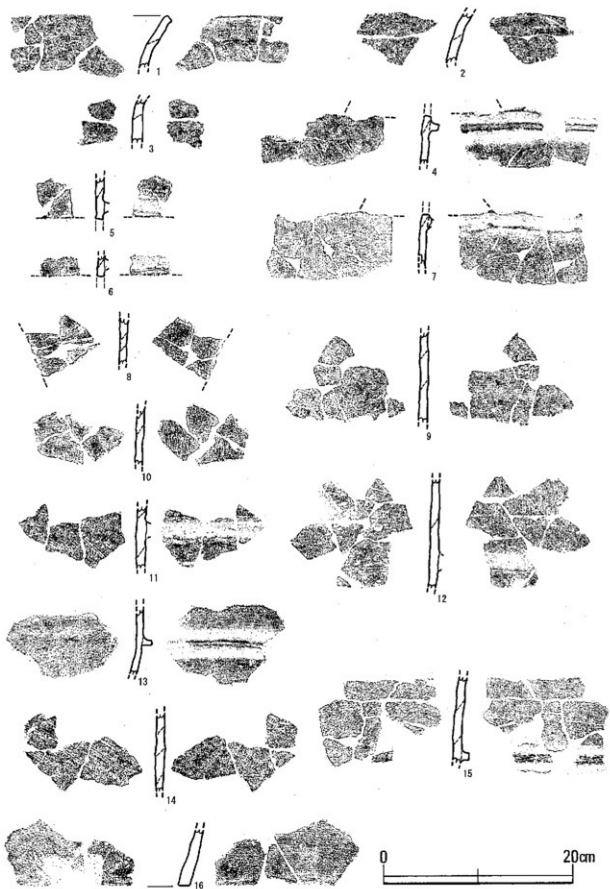


圖40 埤輪實測圖

### 【土師器】

図41に提示した土師器は、第4トレンチと第12トレンチから土師器片が転落した葦石とともに出土した。このうち図41の4が第4トレンチから出土した土師器の直口壺である。

第4トレンチ出土の土師器は後方部北西角の北面、前方部とのくびれ部付近で出土している。円筒埴輪の底部を取り上げたところ土師器片が出土した（写真11）。土師器の破片は胴部が折り重なった状況で、口縁部が上に向けた状況で出土したことから円筒埴輪の中に入れていた可能性がある。取り上げた胴部の破片は復原ができなかった。底部も不明で、穿孔の有無について確認できなかった。

図化した土師器の直口壺は、外面にハケメ調整を施し、内面はヘラケズリによる調整で胴部の器壁を薄く仕上げていた。口縁部は外面ナデ調整で、口縁端部はヨコナデを施す。口径18.6cm、口縁高7.5cmを測る。胎土に角閃石を含むことから生駒西麓の土器で、河内産特有の茶褐色を呈する。

4以外が第12トレンチ出土の土器である。破片から数個の土器が復原できるが、出土した破片でできる限り図化をする目的で実測図を作成した。したがって、提示した実測図には同一固体の可能性もあるため、必ずしも個体数を示すものでないことを予めお断りしておく。

出土した破片から復原できる器種は、壺形土器であった。直口壺に復原できた図41の5は口縁部の高さ8.8cm、口径17.6cmが計測できた。「く」の字状を呈する頸部からやや直立気味に外反し、口縁端部を丸く仕上げていた。同じように端部を丸く仕上げていた口縁は図41の3がある。口径を復原し得なかったが、端部が平坦な破片、図の1・2に二分できた。

頸部片は、図41の6から11があげられる。いずれも「く」の字状を呈するが、口縁端部に向けて外反する角度に若干の差があるものの4や5と大きく変わることはない。復原できた頸部の直径は、6が11.4cm、7が10.8cm、8が11.2cmを計測でき、法量的にも差異は無いことを示している。



写真11 第4トレンチ土師器出土状況

口縁部の調整技法については、外面はタテ方向のハケ目を施し、頸部付近、口縁端部付近を幅広くナデ調整する。内面は、横や斜め方向のハケメ調整を施し、口縁端部付近はヨコナデすることにより端面を整えている。

胴部の形状については復原が不可能で、出土した破片から部位を断定するには限界がある。11・13に立ち上がり部分を観察できることから頸部に近い胴部上半、12も破片の曲線から肩部分になろうか。胴部片としたのは、14から22が該当する。

胴部の調整技法については、外面にハケメ調整を施す。内面は、ヘラケズリによる調整が大半であり、胴部の器壁厚は3～4mmである。僅かにナデ調整が図41の18に見ることができた。

底部形態は、底と考えられる破片が判らず、焼成前に底部穿孔をしていたかどうかも現状では不明と言わざるを得ない。また、焼成後の穿孔については、破片において見出すには限界がある。

胎土は緻密で、1mm大の砂粒を多く含む。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。

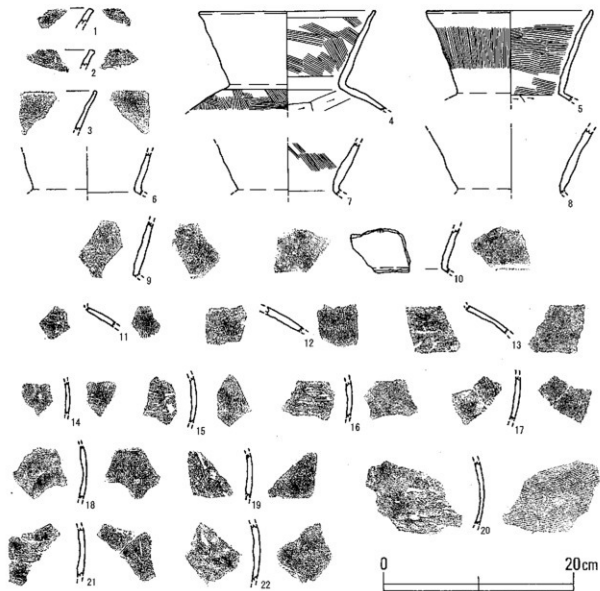


図41 土器実測図

### 【弥生土器】

弥生土器は、墳丘盛土の下で確認した包含層から出土する資料と後方部の墳頂平坦面の表土に含まれていた資料がある。

前者の遺物の多くは図化が可能ではなく、唯一平成17年度に実施した第5トレンチから出土した鉢があげられる。ほぼ完形品で、図42の14に提示した。

14の鉢は、口径14.8cm、器高6.6cmの法量をもつ。底径5.5cmの中央が内側に挟れる底部の付近に焼成後の穿った孔が認められる。いわゆる穿孔土器である。口縁部に内側と外側の双方から刻み目を入れている。外面調整はナメ方向のミガキが施され、口縁部はヨコナデを施す。内面もミガキによる調整を施す。土器の製作年代は畿内第3様式の前段階から前半に該当する。

対して後者の墳頂平坦部の表土中から出土した土器のうち4点を図化した。図42の10から13に提示した。

10と11は甕の底部である。底径4.0cmと4.7cmを測る。

13は甕の底部と考えられる。底径が7.2cmを測る平底である。内外面が磨耗のため調整方法を観察するのが不可能であった。

12は高杯の脚部である。直径3.8cmの柱状であるが、杯の接合方法は不明である。

土器の製作年代は、畿内第3様式の範疇であろう。

### 【中世・近世遺物】

中世遺物は、平成17年度実施した後方部の墳頂平坦面の調査時の表土及び黄褐色土をはじめ各トレンチで出土する。

1は、第4トレンチの葦石直上から出土した土師皿である。底面を欠損する。口径11.3cm、器高は残存する部分で2.3cmをはかる。口縁部を強くヨコナデして、少し上方へ立ち上がる。外面に指頭痕が観察できる。

2は、後方部墳頂から出土した。瓦質土器の摺鉢片である。口縁部のみで、小片のため口径は復原できなかった。端部はヨコナデで下方に少し垂下する。破片では摺り目を認められない。内面に細かいハケメを施す。

3は第5トレンチで検出した葦石直上から出土した土師質の羽釜である。口縁部と胴部が欠損し、鈔のみが遺存する。内傾する口縁部が僅かに残る幅2.7cmの鈔は、薄手で水平に延びる。

4は第1トレンチで検出した葦石直上から出土した土師器の羽釜である。胴部が欠損する。幅2.3cmの鈔の厚みは薄く、胴部から水平に貼り付けられている。口縁部は鈔から内傾し、その高さ4.7cmを測る。口縁端部水平近く折り曲げ、端面は丸くおさめている。

5は、第4トレンチ葦石直上から出土した土師質の羽釜である。胴部が欠損する。水平に延びる短めの鈔から内傾する口縁部はもつ。口縁部の高さは4.1cmで復原できた口縁部径は、32.6cmを測る。口縁端部を「く」の字状に折り曲げ、端面を丸くおさめる。

菅原正明氏分類による「河内B型」に該当し、13世紀の製作年代が与えられる。(文献1)

6から8は後方部の墳頂平坦面から出土した輸入陶磁器である。6と7は青磁の腕胴部の破片であるが、外側の施文から竜泉窯系の製品とわかる。(文献2)

6は、片切彫の竊蓮弁文がみられる。15世紀後半に位置づけられる。

7は、外面片影蓮弁文13世紀末から14世紀前半期に位置づけられる。

8は白磁碗である。口縁部と底部が欠損するが、内面に見られる白磁が中心に流通していた11世紀

後半から12世紀前半の時期が与えられる。

9は、第1トレンチで検出した葦石直上から出土した東播系の須恵器の鉢である。口径21.3cm、器高8.6cmの法量をもつ。口縁部はナデにより平らに仕上げ、端部内側がやや立ち上がる。外面は回転ナデ調整の痕跡が残る。内面もユビナデを施す。見込み部に凹みがなく、平らである。底部は円盤状の粘土板を用い、側面には調整が施されていない。底径8.4cmの平底には糸切りが見られる。森田稔氏による分類では第Ⅱ期第1段階に該当し、製作年代は12世紀中葉から後半に位置づけられる。(文献3)

以上、中世の遺物から見た庭島塚古墳は12世紀末から13世紀の鎌倉時代に最初の活用期があり、次に15世紀代の遺物群が確認されたことから室町から戦国時代に2回目がかかる。

15と16は、平成17年度に実施した後方部墳頂平坦面から出土した近世陶磁器である。陶磁器類は表土及び黄褐色土に包含されていた。

15は肥前系陶器で、京焼写しの平碗である(文献4)。高台付近が遺存する。高台径4.6cmを測る高台は高く、高台脇まで釉を施している。高台の内側は平らで「清水」の刻印がある。見込みには鉄絵による山水画が描かれている。

16は伊万里のくらわんか手の染付け碗である。口縁部を欠損する。安定した高台を有し、底径3.4cmで、残存高さ4.4cmを測る。見込みに蛇の目軸ハギが見られる。

以上、近世の遺物のピークは18世紀前半から中葉に位置づけられ、庭島塚古墳の3度目の活用時期として捉えることができた。

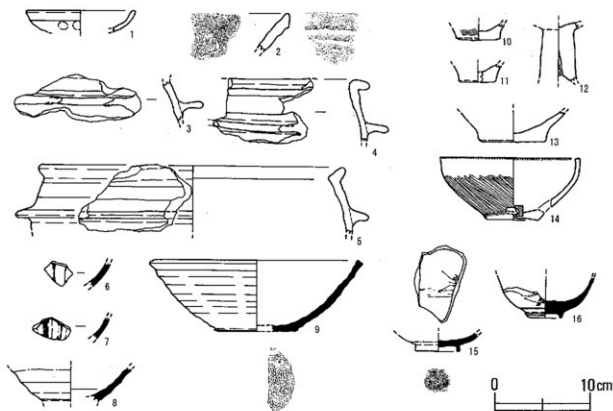


図42 その他の遺物

## 2. 埋葬施設

埋葬施設の調査は、1章2節で述べたように工事によって削られた粘土椀が露出したので実施した。平成17年度の調査では、埋葬施設は後方部の中央に1基が存在するだけであった。前方部における埋葬施設の確認を平成20年度の調査で実施したが確認できなかった。幅1mのトレンチであるため東西方向の埋葬施設はなく、東西方向であれば見逃している可能性は捨てきれない。ただし、トレンチの所見では墓壇を確認することができなかったことから、大掛かりな埋葬施設の存在は望み薄である。

ここでは後方部で確認できた埋葬施設について、(a)墓壇、(b)粘土椀、(c)木棺の順に報告することとする。

### (a) 墓壇

墓壇は、墳頂で検出した北西隅と北東隅に角を持たず、検出した東西辺は6m、南北辺は残存する長さが6.5mの規模を有する。したがって、墓壇の平面は隅丸の長方形を呈する形態であったことが推察できる。削られた長さは判らないが、後述する副葬品の配列から復元できる南北長はおおよそ10mの規模を有していたと考えている。

南側の削平された墳丘断面の所見では、墓壇底の東西の長さは3mで、墓壇底から墓壇検出面までが1.9mを測る。墓壇の断面形態は逆台形を呈し、墓壇の東、西の壁は58°の急峻な角度をもつ。この角度の墓壇斜面の昇り降りは困難を極めるが、これを解消するために墓壇北辺の壁面が2段に掘削され、さらに墓壇北東隅に1m幅で傾斜角度が周囲の角度より緩くなった部分が検出された。昇降のための斜路と推測できる。

墓壇に充填された土質は、10mm程度の砂礫を用いていた。墓壇検出面で南北にぶい黄褐色土が見られたが、これは粘土椀の被覆粘土が陥没と同時に充填土も陥没した部分に埋まった墳丘盛土である。ぶい黄褐色土からは埴輪や土器など出土していないので、墳頂には配列されていなかった可能性が高い。墓壇内に充填された砂礫は、粗い砂礫から細かい砂礫に変化する面が認められ、この面で墓壇の北西隅、先に斜路とした斜面を降り部分に直径10cmの範囲で赤色顔料を検出した。遺物の出土はなかった。この砂礫の変化が木棺蓋を被覆する粘土の下面に合致する。

砂礫の変化が見られた面の下に粘土椀が構築される。粘土椀の構造は次節にゆずるが、本節では粘土椀を構築するための墓壇底に見られた地業について述べることにする。

墓壇の底に緻密な土を入れる。厚さ7.0cmで水平である。墓壇壁面同様に硬く構築され、これを基礎地業Ⅰとする。

次に、小礫を混入させた良質の粘土を厚さ10cm程度の厚さで敷き詰め、その中央が幅1.85cm、高さ12cmの壇になるように築く。その形状は壘穴式石室に見られる基部に似ている。非常に硬く仕上げられている。この壇の周りに細かい砂礫を壇上面まで充填し、平坦面を築く。これを基礎地業Ⅱとする。

粘土椀は基礎地業Ⅱの上に構築される。

保存目的の調査のため、断ち割りを最低限に止めた。墓壇内は北西部分に断ち割りを入れている。南側断面に見られた川原石は粘土椀に沿って北側に延びることが確認された。



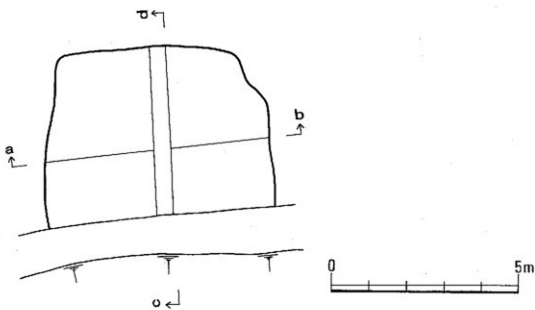
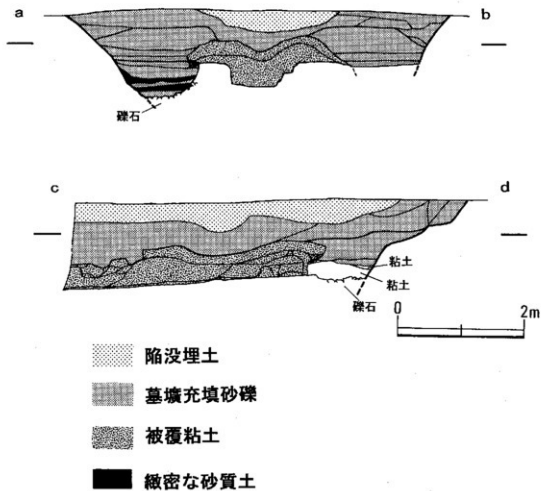


図43 墓壙平面図・土層図

## (b) 粘土塚

墳丘断面に現れた粘土塚は中央が大きく窪み、粘土塚の最高所との差が最大で80cmを測る。木棺が朽ちて被覆粘土が陥没した状況が看取された。平面で確認した被覆粘土は粘土塚の中央部分が木棺の主軸に沿って落ち込んだ状況で認められた。落ち込んだ部分でその深さが異なることから、木棺蓋が朽ちて一斉に被覆粘土が落ち込んだのではなく、時間の経過とともに部分的に朽ちていった様子が窺える。

被覆粘土の表面には幅3cm～5cmの丸みをもつ圧痕が東・西の長側部に東西方向で見られた。小口部分は緩慢な凹凸がみられ、粘土表面に見られる圧痕が異なる。これは被覆粘土を叩き締めた工具痕であり、前者は丸太を被覆粘土の上に乗って叩いたもので、後者は足の裏で墓坑充填土の面から片足で踏み固めたものと推測できる。被覆粘土の厚みは60cmである。

被覆粘土を外すと木棺の側板と小口の痕跡が認められ、副葬品が棺の両脇で検出された。副葬品は粘土の上に置かれ、いわば儀礼の場であるが、この粘土は木棺の側板を留める粘土帯の機能を兼ね備えているが、便宜上、側粘土（がわねんど）と呼称することにする。側粘土は断面が確認したところで高さ34cm、上面幅60cm、下面幅80cmを測る。側粘土の下には直径10cm程度の川原石が厚さ35cmに敷かれている。一見、排水機能のための施設であるが、私には側粘土を支える基礎地業に思えてならない。あるいは、排水と基礎の機能を持ち合わせていたかもしれない。

川原石に挟まれた粘土は上端で幅1.1mを測る。この粘土が木棺の底板を置くための棺床粘土にあたる。断面形態は上面が湾曲する台形を呈する。その大きさは両脇の高さ35cm、中央で15cm、下辺幅140cmである。その下が、墓坑の項で述べた基礎地業Ⅱになる。



写真12 粘土塚被覆粘土表面叩き痕跡

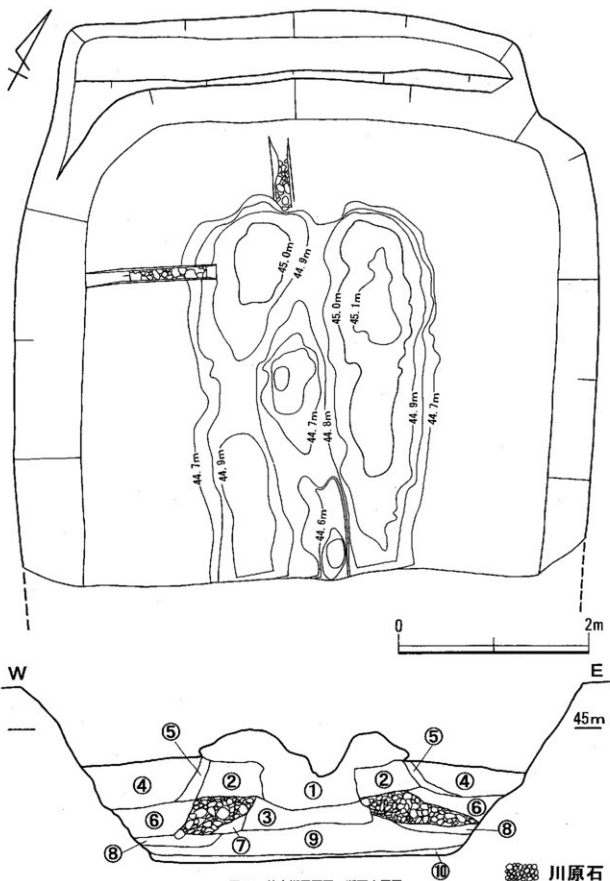


图44 粘土梯平面图·断面土层图

(c) 棺

木棺は木質が朽ちて粘土層の側粘土に痕跡が確認できる状況である。一部が遺存するが、そのほかは粘土化していた。粘土層に使用されている粘土と土質や色調が明らかに異なり、目が慣れてくるとその違いがわかる。木棺の痕跡と考えられる粘土は幅8cmを測り、棺の厚みを示している。

遺存していた木棺は、銅イオンの作用で鏡の形に添って検出した（写真13）。銅鏡の上に存在するので木棺の蓋材と考えられる。厚さ3.5cmを計測し、材質はコウヤマキであった。鏡の下には棺底と考えられる木質も見られたが残りが悪く、有機質混じりの黒色粘土になっていた。

棺の形態については棺底に散布された朱や鏡など副葬品の出土状況から棺底は平らであることがわかる。棺底のレベルが北側より南側の方がやや低い。側板の痕跡が北側小口板の痕跡より北側、つまり外方に延びるので組合式の棺を復原した。その大きさは内側の長さ2.7m以上、幅約0.8m、高さ0.4m以上の規模をもつ。

北側的小口から南に1.8mで厚さ2cmの朱の塊が検出され、その北に鏡が副葬されていたことを考えると被葬者の頭位は北側であろう。頭側である北側小口の幅と遺存する足元に近い部分の棺の幅員の違いが認められなかったので、側板は頭側と足側の幅員を変えない平行する形で、北側は小口板を挟む形態と思われる。南側的小口については不明である。棺内や側板両端の仕切り板は存在しない。

木棺蓋の被覆粘土は、棺内に陥没していた。木棺内に落ち込んだ粘土と被覆粘土の端の状況からその形状は平らであったとは考えられず、したがって、木棺の蓋の形状の平らではなく蒲鉾形を呈していたと推定する。小口の上辺については現状で痕跡を検出することはできなかった。

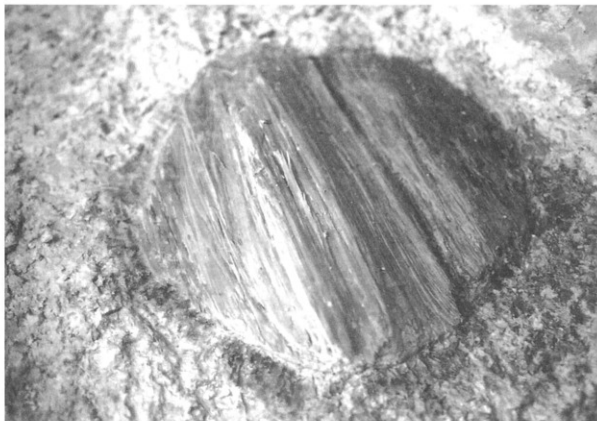


写真13 棺蓋の残骸

### 3. 副葬品の配列

副葬品は、木棺内から出土したと遺物群と、棺の周囲に置かれ被覆粘土に覆われた遺物群の二者に大きく分けられる。前者は“棺内遺物”と後者は“棺外遺物”となる。

棺外遺物は、木棺の東西両脇と北側小口外側の木棺側板に挟まれた空間の木棺底板の上から出土した遺物群の三つにさらに分けられる。遺物群の一覧を表2に提示し、副葬品の配列は図45に示した通りである。

#### a. 棺内遺物

棺内遺物とした銅鏡、勾玉、鉄刀、短剣は、残欠する棺蓋材と木棺の粘土化した白色粘土が覆っていたので棺内に転落した副葬品は存在しないことになる。

棺内遺物の配列状況は、北側小口寄りの中央に鉄刀（a）が、その東側に銅鏡（b）が鏡背を上に向けた状態で置かれていた（図版4）。鉄刀は鞘に入った状態で、木棺主軸の平行に刃を東向けにして柄部分が頭端であった。銅鏡と鉄刀の南で検出された朱の存在と棺底の高低差から被葬者は北頭位と考えられる。鉄刀・銅鏡は頭に隣接して置かれたことになるが、朱と鏡との間に仕切り板の痕跡を見出すことができなかった。朱の西側では短剣（c）が鞘に入った状態で、切っ先を足元に向けていた。朱の中からは勾玉（d）が出土した。被葬者の頭部付近であり、被葬者に装着していたと思われる。勾玉以外の玉類は出土が皆無であった。

朱の塊より南側において副葬品が検出されなかった。足元と推定する部分も副葬品は皆無である。ただし、棺の南小口付近についても不明である。

副葬品名		棺内	棺外		
			西側	北側	東側
銅鏡		1			
玉		勾玉 1			
筒形銅器			1		1
武 器	鉄刀	1	2		1
	鉄剣	1	2		
	鉄ヤリ		1		2
	鉄鏃		55		80
	銅鏃		33		23
	靱		1		
	弓				▲
武具	籠手		1		1
鉄 製 工 具	斧形冊短		1		
	斧状袋		3		
	鎌		1		
	鋸		1		
その他				直弧文	

表2 副葬品一覧表

b. 棺外遺物

・棺外遺物東側の配列

粘土槨の北端から80cmのところから約60～80cm間隔で鉄鏃80本と銅鏃23本が出土し、粘土槨に銅鏃の痕跡1ヶ所が検出できた。鏃の基部から伸びる幅1cm前後の漆膜は、検出状況から矢柄の口巻から本羽までに塗られた漆と考えられる。末期や箸巻の部分には漆の塗布はないようである。矢羽は腐食して残っていなかったが、復原される矢の長さは約80cmとした。矢は結束したような痕跡は確認できなかった。

鏃の配置は4群に別けられ、便宜上北からⅠ群、Ⅱ群…とした。

Ⅰ群は、鉄鏃が16本に銅鏃15本（内1点が痕跡）が加わる。鉄鏃の内訳は、片鑿定角式が10本、両鑿定角式が5本、鉄鏃形式が不明な1本である。

Ⅱ群は、鉄鏃27本で銅鏃は伴わない。鉄鏃の内訳は、片鑿定角式が11本、両鑿定角式が5本、鉄鏃形式が不明な1本である。

Ⅲ群は、鉄鏃24本に銅鏃6本が伴う。鉄鏃の内訳は、柳葉式が17本、腸袂柳葉式が4本、無茎三角式が1本で、鏃形式不明が4本ある。

Ⅳ群は、鉄鏃13本と銅鏃2点である。鉄鏃の内訳は、無茎三角式が6本、柳葉式が5本、腸袂柳葉式が1本で不明が1本ある。

鉄鏃、銅鏃の配列は、庭鳥塚古墳から出土した東側と西側を合わせた鉄鏃、銅鏃191本内、Ⅲ群の腸袂柳葉式の1本を除くすべてが南側、すなわち足側に切っ先を向けて置かれていた。なお、Ⅳ群付近に矢はずと考えられる黒漆の膜が検出されたので、矢の副葬はさらに南側へ拡がるのが判明した。このことにより鉄鏃もしくは銅鏃の保有数は現状より多くなるのが明らかとなった。

筒形銅器2は、粘土槨の北端から150cmの地点に口縁部を南側に向けていた。口縁部内部に柄と考えられる木質がわずかであるが検出された。銅イオンで木質が遺存したが、口縁部から先については柄の痕跡がまったく検出できなかった。筒形銅器の延長上には鉄ヤリ1が存在する。両者の距離は、筒形銅器2の底部からヤリ1の切っ先まで2.6mを測る。現状から筒形銅器はヤリの石突であった可能性がある。

鉄ヤリ1は、錆びが全体に見られ詳細は不明である。鉄ヤリ1の南にある鉄ヤリ2は基部分に糸巻きと漆が認められる。

粘土槨の北端から約200cmより南には鉄刀や鉄ヤリ、箠手が配列される。

鉄刀3は木質が見られたので、鞘に入れられていた。刃を東に向けて置かれていた。箠手は粘土槨の外側に寄りに出土した。箠手を広げた状態で表側を上に向けて置かれていた。出土状況から箠手の手首側は北側、つまり頭部方向に向けられていた。

粘土槨の北端付近で棺の主軸に平行して、幅2.5cmの黒色の漆膜が3ヶ所検出した。その内の1つが約1.3mの長さに渡って確認され、本来はもう少し長い棒状品と思われる。発掘調査中、熊本大学の杉井健氏からヤリの柄の可能性をご指摘いただいたが、長柄の先に取着く武器が確認できなかった。弓の可能性も指摘しておく。

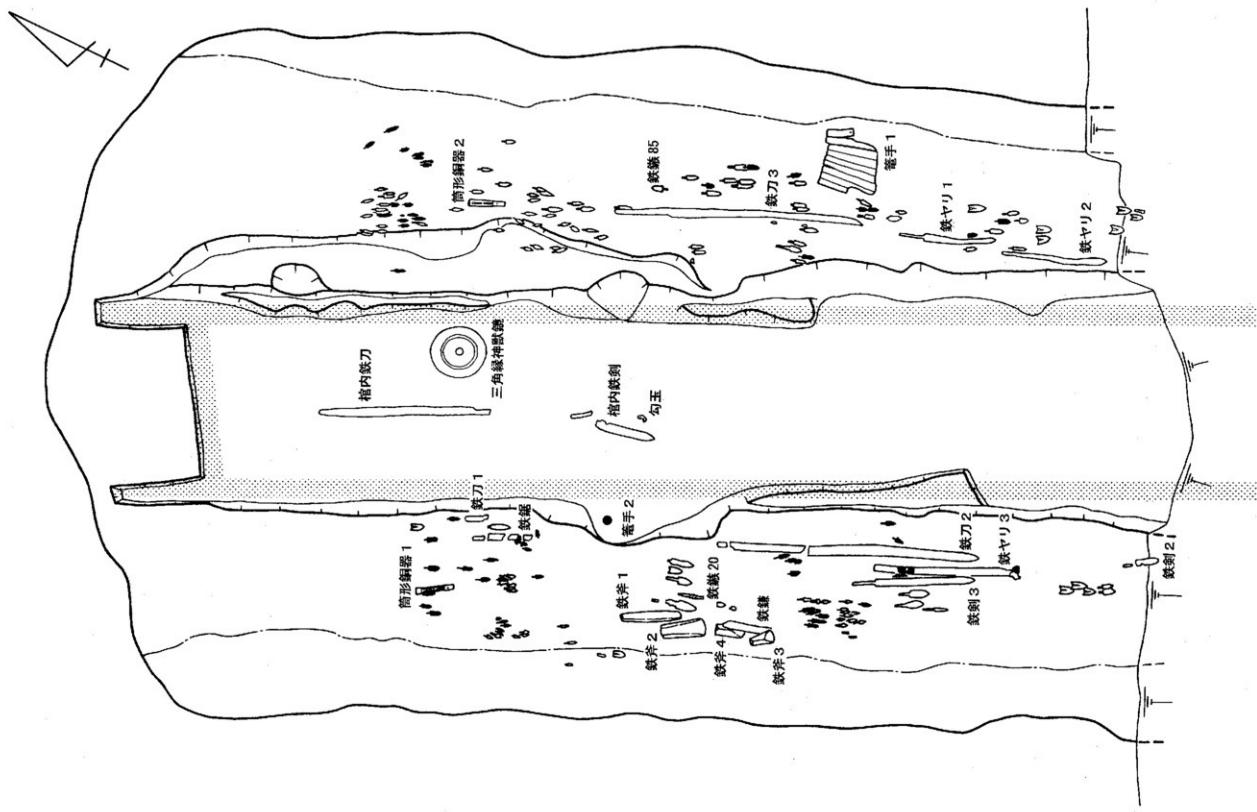


図45 副葬品配置図



#### ・棺外遺物西側の配列

西側も東側同様に鉄鏃と銅鏃が粘土椁の北端から100cm南に約60～80cm間隔で出土している。鉄鏃55本と銅鏃32本が出土し、粘土椁に銅鏃の痕跡1ヶ所が検出できた。鏃のすべてが南側、すなわち足元に向けられていた。矢柄には黒漆が塗られ、復原できる矢の長さは東側と同様約80cmであった。

西側の鏃の配置は5群に別けられ、便宜上北からI群、II群…とした。

I群は、17本の小型三角式の鉄鏃を中心に無茎三角式1点、平根系大型柳葉式1点、そして銅鏃19本が配置される。

II群は、平根系大型柳葉式が4本、腸袂柳葉式が2本、無茎三角式が3本などの大型鉄鏃が見られたほか、柳葉式の2本が加わる。さらに振りを加えた鉄鏃1本が出土した。銅鏃は伴わない。

III群は、小型三角式が11本、不明が3本の鉄鏃に銅鏃11本が伴う。内1点は粘土椁に銅鏃の圧痕が残っていた。

IV群は、腸袂柳葉式が1本、平根系大型柳葉式が2本の大型鏃に銅鏃3本が伴う。

V群は、無茎三角式が3本と柳葉式が2本の鉄鏃である。

西側の筒形銅器1も南側に口縁部を向けていた。口縁部の内部に挿入された柄の一部が残存していた。口縁部から先については東側の筒形銅器2同様に痕跡も認められなかった。ただし、筒形銅器の延長上にヤリ3が存在する。両者の距離は2.4mを測る。

ヤリ3の刃先の呑口部分と切っ先部分には「忍ヶ岡系文」のある漆膜が見られた。検出状況から鞘が存在したと思われるが、木質が残っていないので皮などの有機質製の鞘と考えている。

筒形銅器の上に黒漆の皮膜が認められた。

鉄刀、鉄剣いずれも木質が認められ、鞘に入った状態で納置する。

粘土椁の北端から200cmの地点で工具類が発見された。出土した工具類は、短冊形鉄斧が1点、大型有袋鉄斧が1点、その南には小型の有袋鉄斧が2点や鉄鏃が1点あった。鉄斧や鉄鏃には柄が装着していた痕跡が認められず、工具のみ納められていた可能性がある。刃先は刀剣類同様に南へ向けていた。

工具類はそのほか鏃がある。鏃は整理中に鉄剣1とした取り上げた資料であった。したがって、鉄剣1は欠番とする。鉄刀1と同様に棺外西側の粘土椁が崩壊した際に元位置から遊離し、破片のため詳細が不明であった。

工具類の東側、棺に接する部分が幅30cmに渡って倒粘土が陥没していた。この陥没した箇所からは鉄刀2の切っ先や鏃の断片が出土した。そのほか緩やかな曲線をもつ鉄板片が20点程出土した。陥没した際に副葬当初の位置から浮遊している副葬品である。鉄板の何枚かは重なっていたが、処理後の遺物を見るとその形状は巻手に最も近い。接合資料が少なく全体の形状を復原できなかった。

西側においても漆膜や有機質皮膜が観察できた。有機質皮膜の性格を熊本大学の杉井健氏からご教示を得た。筒形銅器1の周辺の有機質皮膜を靱の横帯と考えられた。全体は残りが悪く、形状を復原できないが出土状況から開口部は南に向いていると考えられる。鏃の出土状況から靱には矢は納めず、靱は空の状態であったと思われる。

皮膜は、筒形銅器や鉄鏃、銅鏃の上を覆っていることから納置された副葬品の順番は、まず刀や剣、ヤリ、工具類を並べてから銅鏃と鉄鏃をある程度に束ねた状態で納める。そして最後に靱を頭部近くに置いたことになる。



・棺外北小口

粘土槨の小口側を断ち割った際に、木棺の東西に配列された副葬品が置かれた面より50cm下で直弧文のある漆皮膜が検出された。漆皮膜は、木棺の底板が粘土化した高まりに沿って確認された。

漆皮膜の上には粘土槨の粘土が覆われていたので、木棺を納棺し東西の側粘土を置いた時には木棺小口が空間で開放されていたことになる。判断が難しいが、側粘土の上面に置かれた副葬品群とは埋納される時期が異なる可能性もある。その際は、北小口部に副葬品を置いてから粘土で埋め、平坦にしてから棺の東西に副葬品を納めたことになる。

漆皮膜はトレンチの外側に広がるが、粘土槨を保存するために小口部の断ち割り部分を拡張していない。したがって漆皮膜の広がり把握していないし、その性格についても明らかにすることができなかった。

木棺の側板に挟まれた北小口の空間に副葬品が置かれる例は多い。



写真14 北小口の漆膜

#### 4. 副葬品

##### 【銅鏡】

図47は、棺内から出土した三角縁四神四獣鏡である。出土当初は13片に割れていたが、保存処理後の接合と欠損部分は樹脂で補修した。すべての破片の接合を目標としたが、木棺蓋や被覆粘土の落下及び土圧で割れた破片に歪みが生じ、割れた面は接合するものの全体を密着させることができず、4分割にならざるを得なかった。

鏡の表面は、部分的に文様の欠損が見られるが、錆上がり状況は良好である。

色調は淡緑色から濃緑色を呈する。表面観察をすると、鏡面には布帛の付着が認められた。鏡背には赤色顔色の付着がみられた。

出土した鏡の法量は、直径21.5cm、内区の厚さが約3.5mm、外区の厚さが約4mmで、重量は696.52gであった。反りは図面上では0.6cmを測る。

鈕は直径2.9cm、高さは鏡面から1.4cmを測る。鈕孔は幅約6.5mm、高さ3.5mmの長方形を呈する。鈕孔底辺は鏡背面から約1.0mmの高さにある。鈕座は蒲鉾状の圏の外側に有節重圈文を配する二重圏である。節は珠文で表現される。

鏡背文様は、内区は四つの乳と傘松によって四分割された区画に二体の獣と二体の神仙を対峙して配置する対向型である。神獣像配置は小林行雄氏の分類によるA式で、鏡式名は複像式四神四獣鏡である（文献5）。

内区を四分割にする乳は、乳座は装飾をもたないが、頂部に小孔が付く。乳の上部から鈕に向かって傘松形文様が伸びる。



図46 鏡面図（処理前）



写真15 三角縁神獸鏡細部写真(神像)



写真16 三角縁神獸鏡細部写真(獸像)

傘松は、新納泉氏により中国の皇帝が臣下に信頼を与える「節」を模したものと推定されている（文献6）。庭島塚古墳の例では4つの笠松のうち軸の表現があるのは一つだけで、残りの三つには軸が略され毛飾りのみで表現されていた。また、笠松の毛飾りについては三段表現された一つ以外は残りの三つは四段表現であった。軸表現の有無と段数表現とは対応は見られなかった。傘松の下は素乳と組み合わせられている。傘松文様の分類をした澤田秀実氏による4種の分類案のb類にあたる（文献7）。

2体の並ぶ神像は、右側が「渦状冠」と称する渦巻き状を呈する冠をかぶるのに対し左側は三つの三角形を配した冠である「三山冠」をかぶっている。したがって、前者が（東王父）で後者は（西王母）となる。冠以外に衿、袂、翼、神座といった表現の違いは2体の神像には認められなかった。神座は渦巻きを呈する。

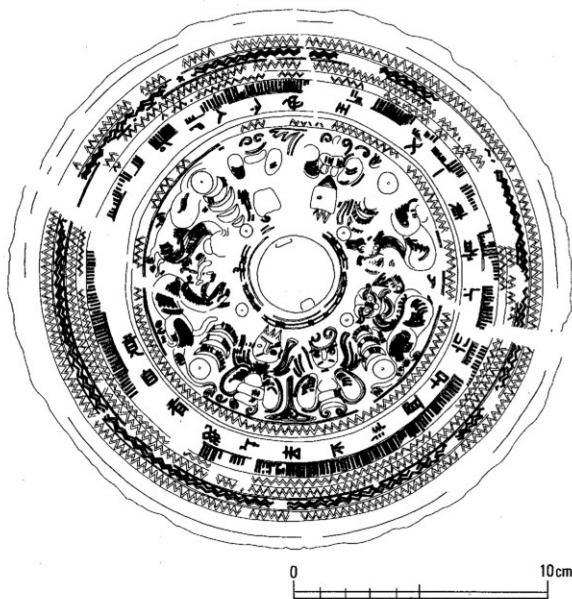


図47 鏡実測図

四体の獣の内一獣は側面を向いて表されているに対して後の三獣は頭部を正面に向けている。側面を向く獣は頭部が真横を向け、向かい合って羽仙が現されている。羽仙は側面を向く龍に雲芝の類を与えている、いわゆる「泰龍」のモチーフを表す。対峙する獣像区の正面を向く獣像の一つは頭部をややナナメに傾けている。両獣像の間に長い脚をもつ小神仙が表現されている。神像や獣像の彫りは浅く平面的な表現となっている。

内区の外側に鋸歯文を配した断面三角形の界圈帯と櫛歯文の間に銘帯が存在する。銘文は反時計回りに「□□竟自有紀 辟去不羊宜古市 上有東王父西王母 令人長命□□□」の28字が記されている。□の部分の5文字が欠損している。欠損した文字を除く銘文が合致する鏡を探すと、静岡県磐田市から出土した新豊院山2号墳の三角縁四神四獣鏡があげられる(文献8)。同鏡から援用すると欠損した前2字が「吾作」、後ろ3字が「多孫子」である。七字句を基本とするが、令人長命の文字間隔が他の字間に比べ詰まっている。なお、新豊院山2号墳の三角縁四神四獣鏡では「多」の字が上下逆さまになった銘文が見られたが、残念ながら庭鳥塚古墳では銘帯の該当箇所が欠損しているため対比できなかった。

車崎正彦氏の訳読によると、「吾れの作った鏡には自ずから規範が有り、不祥を辟去して買市(商売)に宜しく、上に有るのは東王父と西王母で、令人は長命にして子孫が多い」という意味である。

外区文様は、鋸歯文+複線波文+鋸歯文であった。外区と内区の段差は高くないが、その斜面に鋸歯文が施されている。外区の厚さに着目した新納泉しにより3つの型式に設定しているが、その中の1式に該当する。

三角縁の立ち上がりは鈍い。

以上の観察から庭鳥塚古墳より出土した三角縁神獣鏡の名称は、「吾作銘三角縁四神四獣鏡」となり、京都大学目録の50番に該当する(文献9)。

神獣像は、岸本直文氏による表現分類の⑩に帰属する(文献10)。表現⑩をもつ鏡は、現在のところ銘帯の銘文と同じであった新豊院山2号墳出土の吾作銘三角縁四神四獣鏡のほか、岡山県鏡野町の郷観音山古墳から出土している京都大学目録51番に登録されている「天王日月・獻文帯四神四獣鏡」の2点である。表現⑩は表現の識別される工人グループでは少数で、郷観音山古墳の龍の表現が嘴状になっていることなど内区の文様表現が特異な一群と評価できる。

このうち新豊院山2号墳は神像や獣像の表現が合致する(文献11)。法量は21.5cmである。鈕は小振りで平坦である。鈕孔口は鏡背面より上に位置し、長方形を呈している。ただし、庭鳥塚古墳の鏡は有筋重圏文の鈕座をもつがそれに対して新豊院山2号墳では円座である。鈕座に差異が見られるが同范関係が認められる。まだ同型鏡番号は付されていない。

「新豊院山古墳群」の報告書において三角縁四神四獣鏡の報告をされている森下章司氏によれば、「鈕座は現状では不整な円形を呈しているが、その縁に沿って部分的に断面薄針状の突出が残る。湯流れにより本来の形状を損なっている可能性がある。」と鋭い観察がなされている。庭鳥塚古墳の鈕座の径と同寸であることを考えれば、森下氏の報告にあるように本来の形状を損なっているのであれば同范の可能性が高い。

車崎正彦氏のご教示によると「吾作竟自有紀 辟去不羊宜古市 上有東王父西王母 令人長命多孫子」とある新豊院山2号墳と庭鳥塚古墳の両鏡の銘文に対し、五島美術館の画像鏡の銘文は「吾作竟有文章 辟去不羊宜古市 上有東王父西王母 令人長命多孫子」の違いはあるが、吾作明竟の「明」を脱すること、「多」が逆字になることをふくめて珍しい銘文がほぼ一致することや字体も良く似ているという。

庭鳥塚古墳の鏡に見られた竜のひとつに餌をあたえている養竜像と呼ばれるモチーフが見ることができた。

三角縁神獸鏡に表された「養龍」のモチーフについては西田守男氏によって画像鏡を経て、あるいは直接、獸帯鏡と四神鏡から継承したという（文献12）。表現①の系譜の解明の手がかりとなるであろう。

鏡の年代は、鏡背文様の構成から福永伸哉氏はA～Dの4段階に分類した船載B段階にあたり、245年代に鑄造されたものとされている（文献13）。岸本直文氏による分類の第Ⅲ段階である。新納泉氏による福年の外区Ⅰ式に属する（文献14）。したがって、庭鳥塚古墳の鏡は最古級の船載鏡ではないが古墳時代前期前半代の型式に比定できる。

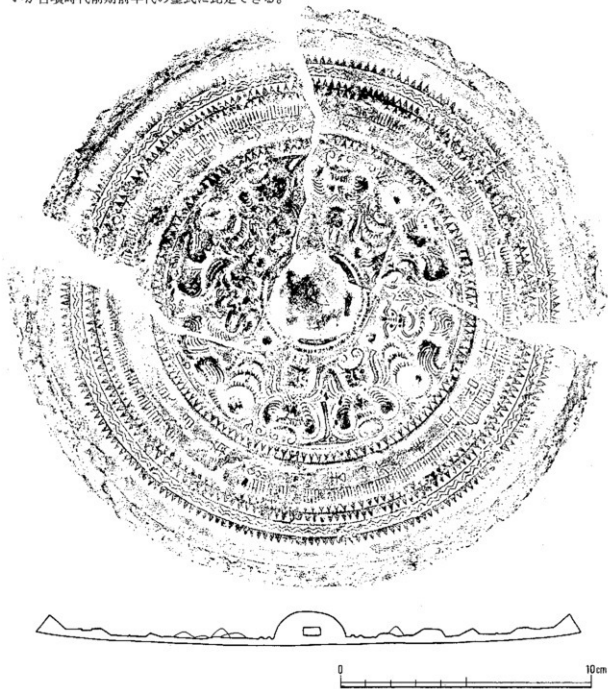


図48 鏡拓影・断面図

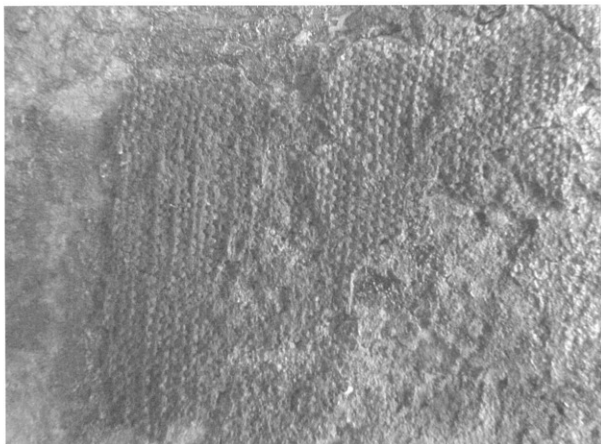


写真17 鏡面 残存布目

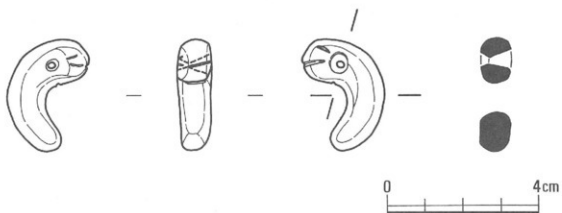
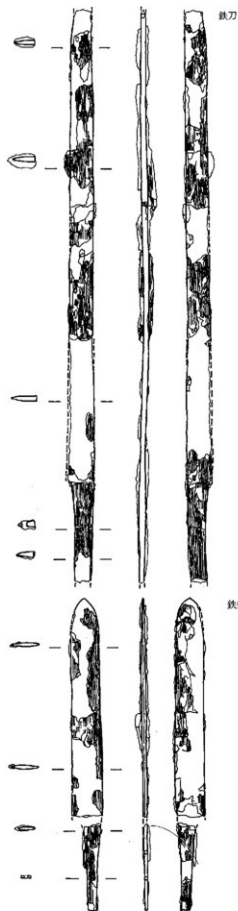


图49 勾玉实测图



### 【勾玉】

翡翠を素材とし、色調は半透明の薄緑をなす。一部に白い貫入がみられる。

平面がアルファベットの「C」の形態を呈している。胴部の断面は円形を呈する。計測できた大きさは長さ30mm、幅12mm、厚さ8.9mmを計測する。

便宜上「C」側をa面(図49の左側)、逆「C」側をb面(図49の右側)とすると、頭部に径5mmの孔がb面から片側穿孔されている。a面、b面それぞれの頭部に穿かれた孔を中心に放射状の条溝が2本刻み込まれていた。「丁子頭」をなした勾玉となる。

a面はb面より平坦面を呈し、丁子頭である2本の条溝が浅くなっていることから二次的な研磨で再加工していることが窺える。

### 【刀剣類】

棺内から出土した鉄刀は、現存長さ61.0cmの直刀である。刃部の切っ先と茎尻が欠損する。刃部の幅2.4cm、茎部幅1.8cmを測る。把の構造は、茎の背側に木質が残っていないことから豊島直博氏による分類の落とし込み式と考えられる。茎尻から5.5cmのところ直径0.4cmの目釘穴が存在する。刃部には木質が見られるので鞘に入れた状態で副葬されていた。残念ながら残存状況が悪く、鞘の構造を明らかにすることができなかった。

鉄剣は全長32.8cmで、茎が片闘式である。刃部の幅が3.0cmを測る。鞘の構造は、身に残る木質部の1面だけに木目の異なる線が観察できるので豊島直博氏による分類の鞘口一体式になる。

茎尻から3.2cmと6.0cmのところ直径0.4cmの目釘穴が2ヶ所ある。

図50 棺内刀剣類実測図



【筒形銅器】

庭鳥塚古墳から出土した筒形銅器は2本で、棺外の西側と東側で各1本が検出された。便宜上、検出された順番で西側から出土したのを筒形銅器1、東側から出土したのを筒形銅器2とした。筒形銅器の部位名称は

筒形銅器の型式分類については昭和44年（1969）に発表された山田良三氏の「筒形銅器考」の型式分類を踏襲して分類した田中晋作氏による（文献15）。

図51の1は、筒形銅器1である。全長15.2cm、口縁径2.3cmの法量をもつ円筒形を呈し、やや裾広がりがりとなり、底径3.5cmを測る。口縁部は長さ4.5cmで、口縁部と底部の間に幅2.2cm突帯を巡らす。上下二段に方形のスカシ孔が4方向に見られる。口縁部には目釘穴がスカシ孔と筋が通る。底部の底面はすこし膨らむ。底部径は1.9cmを測る。山田氏によって分類された中間有帯式にあたり、山田分類のⅡ類にあたる。筒内に挿入された鉄棒が錆付いていた。重量は筒内の鉄棒も含めて105.2gであった。また、筒形銅器には挿入された柄が遺存していたが、柄には目釘が観察できなかった。木質を鑑定したところヒノキ科であると報告を受けている（註1）。筒形銅器1は南側に口縁部を向け、延長上にもヤリ3が存在する。両者の距離は2.4mを測る。

図51の2は、筒形銅器2である。全長14.5cm、口縁径2.4cmを測る円筒形で、重量74.6gであった。底部や中央の突帯は認められないタイプで、上下二段に長方形のスカシ孔が穿かれる。山田分類のⅢ類にあたる。類口縁部の長さは5.5cmで、目釘穴がスカシ孔の筋と合致する。底面は平らで底径が3.3cmある。筒形銅器の中から長さ5.5cm、太さ0.6cm、重量15.1gの鋼の棒が出土した。口縁部は南側を向き、延長上にヤリ1が存在する。両者の距離は2.6mを測る。

筒形銅器は、北は埼玉から南は熊本まで2府21県で確認されているが、庭鳥塚古墳のように複数出

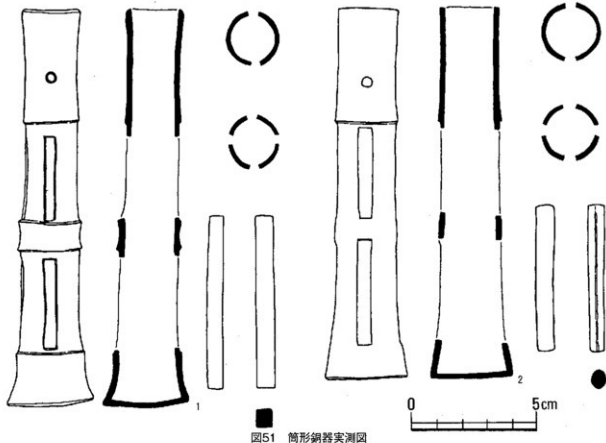


図51 筒形銅器実測図

上する古墳は11基ある。その出土本数は新沢500号墳から出土した5本を最大とし、石清尾山猫塚古墳の3本が次ぎ、安土瓢箪山古墳、柳柳符軍塚古墳、三池平古墳、尼塚古墳、吹上の森1号墳、タニグチ1号墳、山地古墳、(伝)御蔵上古墳は2本ずつである。

田中晋作氏は筒形銅器が2基の埋葬施設からそれぞれ1本ずつ出土した山地古墳を例にあげて、時期差のない2基の埋葬施設存在から筒形銅器は本来2本という複数で受容されていた可能性が高いと指摘した(文献16)。そして、複数出土する古墳の築造時期については概ね前期後半という時期に集中する。この時期に朝鮮半島の古墳にも筒形銅器の存在を知ることができる。

朝鮮半島の筒形銅器については、申氏の論考をもとに複数副葬する古墳とその数をあげると、大成洞古墳群の1号墳の8本を最大とし、同古墳群の2号墳、18号墳、39号墳から2本確認されている。良洞里古墳群の443号墳や304号墳からは3本、331号墳や352号墳、447号墳から2本ずつ出土している。福泉洞古墳群の60号墳で3本、38号墳、73号墳、64号墳、71号墳からは2本ずつ出土している(文献17)。このようにみると朝鮮半島の複数副葬の数字は決して少ないものでない。

再び、田中晋作氏は論を参考にすれば、半島と列島で見られる単数副葬と複数副葬の違いを鄭・洪氏の論考を受ける形で筒形銅器の副葬原形が半島にあった可能性が高いとを示す根拠とした。

庭鳥塚古墳から出土した筒形銅器の筒内部に舌が挿入されていた。確認できた舌は、筒形銅器1(Ⅱ類)が鉄製であり、筒形銅器2(Ⅲ類)が銅製であった。舌が伴う筒形銅器は国内出土総数 本の内 本に認められる。その内訳は、鉄製のものが鳥取県生山29号墳、岡山県浅川3号墳、京都府尼塚古墳の3例、銅製の14古墳で、福岡県立野10号墳、岡山県岡高塚古墳、金蔵山古墳2点、徳島県(伝)勢見山古墳、高知県高岡山1号墳、兵庫県松田山古墳、京都府尼塚古墳、奈良県新沢500号墳2本、奈良県西浦古墳、奈良県タニグチ1号墳、奈良県谷畑古墳、滋賀県安土瓢箪山古墳、静岡県三池平古墳、長野県川柳符軍塚古墳である。その他に碧玉の管玉を使用している山地古墳第2主体、京都府のカジャ古墳がある。

対して、確実に舌が伴わない筒形銅器は山地古墳第2主体の出土例をはじめ、亀山1号墳、紫金山古墳、安土瓢箪山古墳、三池平古墳と新沢500号墳の3本の8例が知られている。

大阪府下に限って筒形銅器の出土した古墳は、茨木市の紫金山古墳、交野市の交野車塚古墳、藤井寺市の盾塚古墳の3基があげられる。その他、現物が無いものの枚方市の赤塚古墳(古墳も消滅している)から出土していることが江戸時代に書かれた絵図からその存在を窺える(文献18)。これらの筒形銅器の目釘穴と透かしの位置関係を見ると、目釘穴の下に透かしが存在する例は紫金山古墳があり、目釘穴と透かしがずれる例は盾塚古墳、赤塚古墳に二分できる。交野車塚古墳の筒形銅器は、口縁部の端部が欠損しているため目釘穴が確認できない。韓国の良洞里340号出土の筒形銅器は目釘穴が無い例として報告されているので、交野車塚古墳の筒形銅器の口縁部は規格的には目釘穴が存在しない可能性もある。この目釘穴と透かしの位置関係の違いはすでに岩本崇氏によって鋳型構造によるものと指摘している(文献19)。岩本氏は、日本において筒形銅器を出土した52基の古墳例から、目釘穴と透かしが一致する筒形銅器(岩本分類のA群)から見釘穴と透かしがずれる筒形銅器(岩本分類のB群)、そして口縁部に目釘穴が存在しない筒形銅器(岩本分類のC群)へと技術的変遷を考えたのである。さらに、各群の筒形銅器の共伴した遺物からA群が前期後半古墳から前期末にかけて、B群が前期後半から中期前半、C群が中期前半の所産と想定している。したがって、庭鳥塚古墳の例は出土した2本の筒形銅器とも目釘穴と透かしが一致する例で、岩本分類のA類であることから製作時期を前期後半古墳から前期末にかけての年代に位置づけることが可能である。

### 【鉄鏃】

鉄鏃の点数は、粘土椽内の東側、西側の両者を合わせると135点であった。椽内の鉄鏃配列から推定すると、削平された粘土椽の南側にも副葬されていた可能性があるため、現況の出土点数に $+a$ を考慮せねばならない。

庭鳥塚古墳から出土した鉄鏃135点は、前期古墳に多量副葬された古墳とその数を『紫金山古墳の研究』の第31表を参考にあげると248点の樽井大塚山古墳が最も多く、黒塚古墳が170点以上、紫金山古墳の165点、雪野山古墳の139点に次ぐ量である。庭鳥塚古墳に近い保有量をもつ前期古墳として桜井茶白山古墳が124点、長法寺南原古墳が123点、園部垣内古墳が121点である。

庭鳥塚古墳から出土した鉄鏃の形式分類は、図52のとおり大きく無茎と有茎に二分した。これは、鏃を単に遺物と見るのではなくあくまでも矢の一部として捉えるべきで、鏃の装着の仕方でも分類したのである。そして、有茎鏃の装着方法を鏃身部と茎部の間の頸部と呼ぶ軸状の存在で無頸と有頸に別けることにした。

「無茎鏃」、「有茎無頸鏃」、「有茎有頸鏃」の3つに形式分類した鉄鏃は、平面形、刃部の断面、大きさから型式分類した。図52に提示した①片鋸定角式、②両鋸定角式、③柳葉式、④平根系大型定角式、⑤小型三角式、⑥腸扶柳葉式、⑦振りを加える鉄鏃、⑧無茎三角式の7種類に分類した。さらに各型式の鉄鏃をさらに類として細分した(註2)。

報告にあたり鉄鏃の部分名称は、杉山秀宏氏が「古墳時代の鉄鏃」で使用されている図を参考にし、さらに鏃の関部の分類は川畑純氏が提案している分類を使用した。

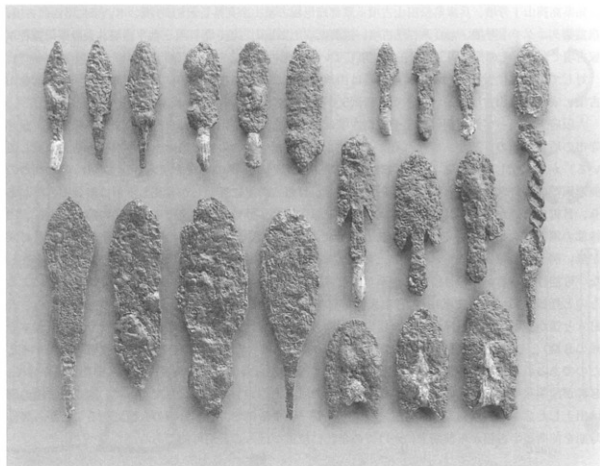
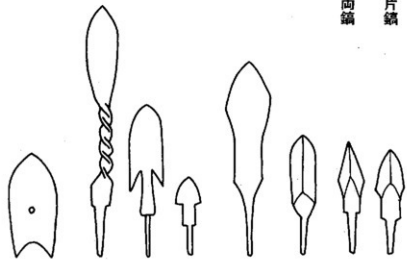
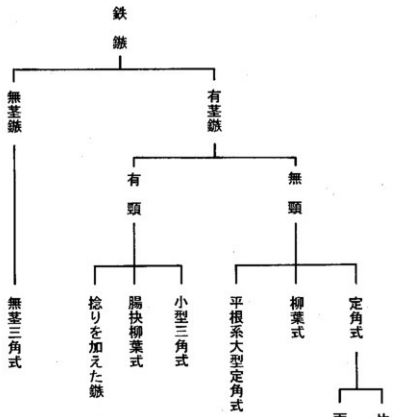
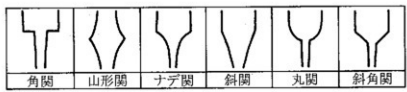


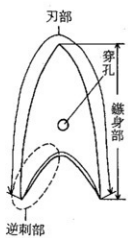
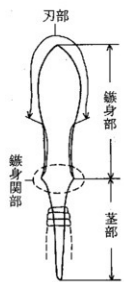
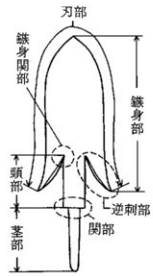
写真18 鉄鏃



鉄鎌の分類



関部の名称



鎌の部分名称

図52 鉄鎌分類

鎌分類

①片鑄定角式

図53・図54は定角式のなかで片側に鑄がある一群で、21点が確認できた。鉄鎌はすべて棺外の東側から出土している。

全長7.0～7.4cmで、鎌身長4.4～4.6cm前後、鎌身幅1.9～2.0cmをはかる。刃部長は鎌身長長の2分の1以上のものが多数占める。刃部の外形ラインは直接的なものがほとんどで、鎌身部の上半に刃を有し、中程で屈曲し基部を構成する。鑄は中央で二股に分かれる。刃部の断面は三角形。基部の断面が四角形である。角閥をもつ。

刃部の形態と刃部間の張りの強弱により刃部がわずかに膨らむものと（3型式）と刃部が強く膨らむもの（4型式）とに二分できる。

鉄鎌49に張り付いているのは銅鎌54である。

②両鑄定角式

図55・図56は、定角式のなかで両側に鑄があるものを両鑄定角式とし、20点が出土している。鉄鎌はすべて棺外の東側から出土している。

全長が6.7～7.3cm、4.3～4.7cm前後、鎌身幅1.8～2.0cmに集中する。片鑄と同じ形態を呈し、刃部長が鎌身長長の2分の1以下を多数占める。刃部の外形ラインは直接的なものがほとんどであった。鑄は中央で二股に分かれる。刃部の断面は菱形を呈する。基部の断面が四角形である。

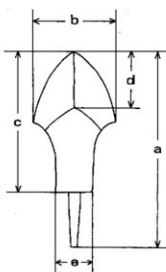
鎌身部の形態から2類に細分できる。刃部の形態と刃部間の張りの強弱により刃部がわずかに膨らむものと（3型式）と刃部が強く膨らむもの（4型式）とに二分できる。

片鑄

両鑄

No.	a	b	c	d	e	No.	a	b	c	d	e
45	68	20	44	22	13	46	▲76	16	▲51	▲31	10
47	62	▲20	44	22	13	54	-	19	-	-	14
48	▲72	▲20	▲47	▲32	13	56	71	18	45	25	11
49	76	20	51	31	▲12	57	68	16	37	20	14
50	74	20	50	28	13	58	-	19	-	-	14
51	66	▲18	44	25	▲12	59	68	16	42	21	12
52	-	19	-	-	12	61	67	17	43	26	12
53	74	▲18	45	28	12	62	-	16	-	-	12
55	74	20	50	25	15	63	-	16	-	-	11
60	70	19	43	26	12	64	81	18	49	31	12
72	74	18	48	25	12	65	63	18	36	18	11
73	-	21	-	-	13	66	-	18	43	22	11
74	▲70	18	45	25	13	67	-	16	-	-	11
75	-	19	-	-	13	68	-	▲20	-	-	11
76	-	19	-	-	14	69	-	20	-	-	13
77	-	19	43	18	12	70	73	18	47	23	12
78	-	19	-	-	12	71	-	▲18	44	22	11
81	70	20	46	26	12	79	69	16	43	22	12
82	-	-	43	26	13	80	-	18	-	-	10
83	70	20	46	20	13	119	-	19	-	-	12
84	-	▲20	44	21	12						

定角式計測値



計測部分

-は破損で計測不可

▲値は図上復原計測

表3 定角式計測値

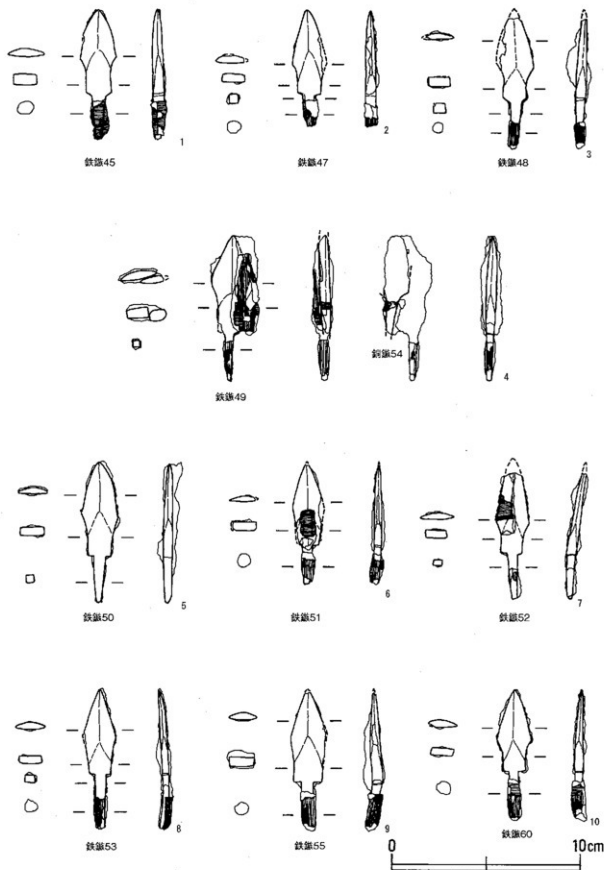


图53 铁器实测图(1)

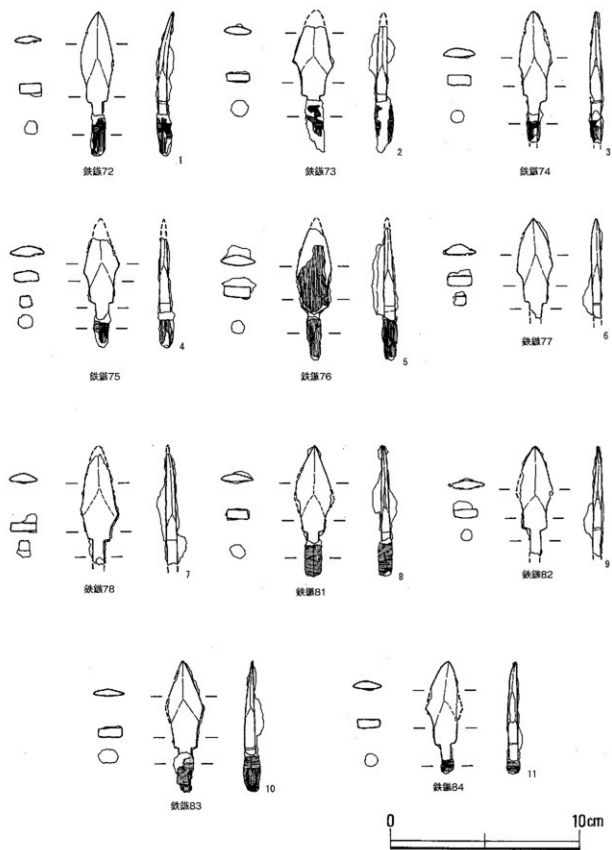


图54 铁器实测图(2)

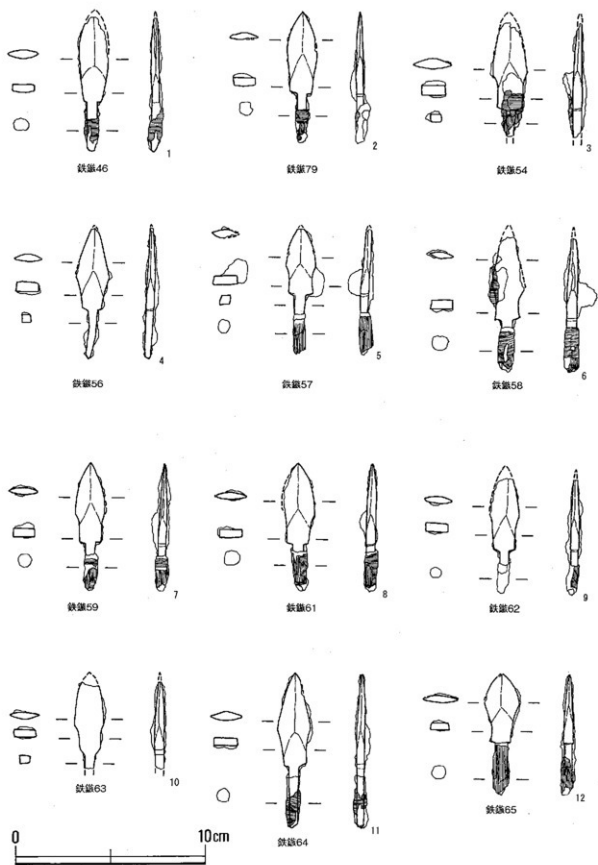


图55 铁器实测图(3)



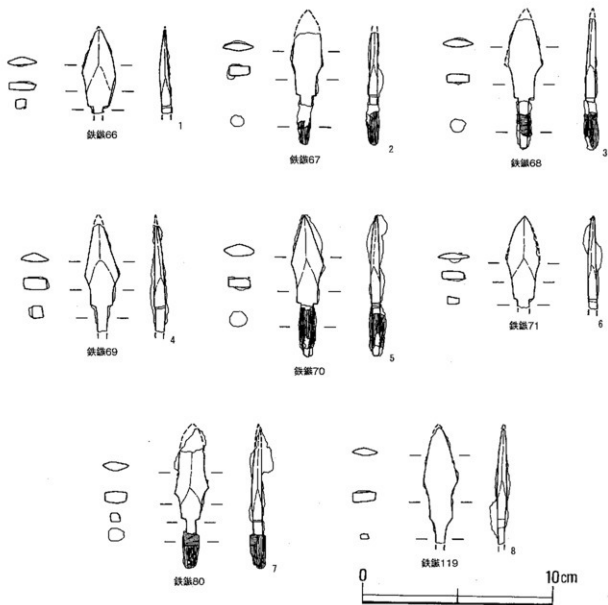


図56 鉄鏃実測図(4)

### ③柳葉式

図57・図58が柳葉式で26点を数える。この内の4点が棺外西側から出土したもので表4の鉄鏃番号枠を網掛けた鏃が対応する。

計測ができた鏃は15点で、全長は6.9~8.0cmである。鏃身部の長さは鉄鏃92の7.0cmを最大におおむね5cm前後である。鏃身部の幅は鉄鏃113の1.6cmが最小で他の25点は1.8~2.2cmにおさまる。法量からは大きな差を見出せない。

鏃の形態から大きく3つに分類した。すなわち、鏃身部側縁の刃部と茎部がS字カーブを描く一群で、鏃身部上半で鏃身部幅が最大となるもの。鉄鏃87、鉄鏃100、鉄鏃101、鉄鏃110、鉄鏃127、鉄鏃113が該当する。表4のAとしたもの。

鏃身部側縁に直線的な刃部をもち、そのまま茎関に至るもののうち、茎関が丸関のものである。鉄鏃44、鉄鏃88、鉄鏃90、鉄鏃93、鉄鏃94、鉄鏃95、鉄鏃97、鉄鏃99が該当する。表4のBとするが、

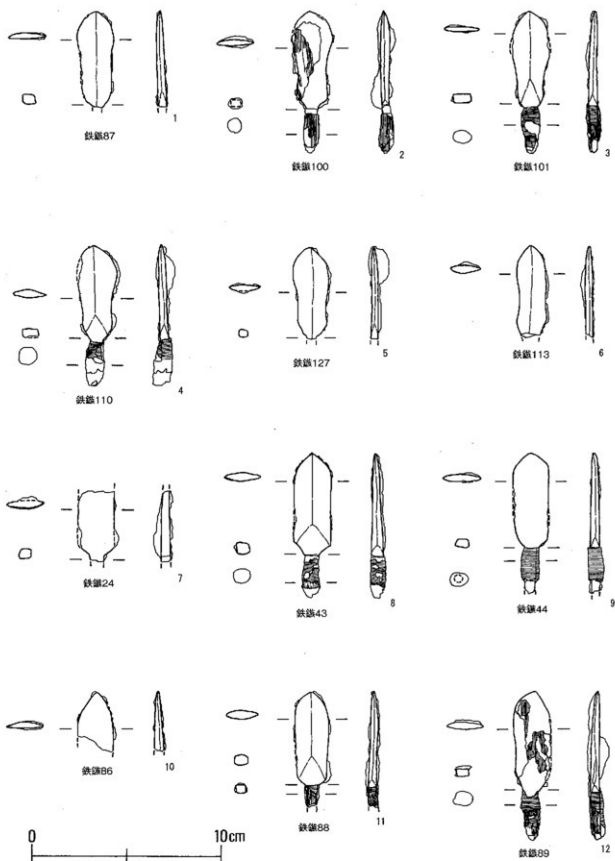


图57 铁器实测图(5)

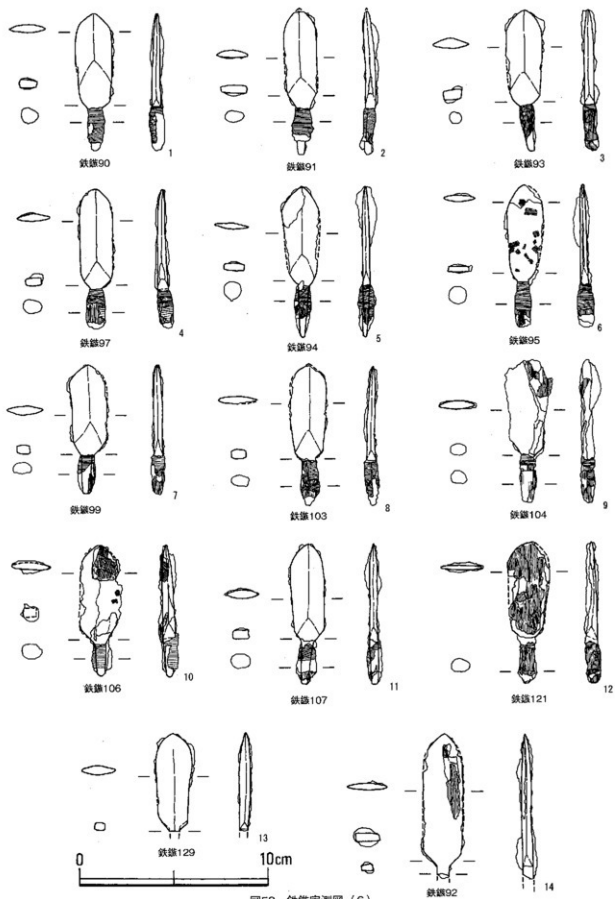


图58 铁鏃实测图 (6)

丸関タイプをB1として細分が可能である。

鎌身部側縁に直線的な刃部をもち、そのまま茎関に至るもののうち、茎関がナデ関のもの。表4のBとした資料の中でナデ関の一軍をB2として細分した。鉄鎌43、鉄鎌89、鉄鎌91、鉄鎌92、鉄鎌103、鉄鎌106、鉄鎌107、鉄鎌121、鉄鎌129が該当する。

鎌身部側縁に直線的な刃部をもち、刃部の他は柳葉式鉄鎌に比して長い特徴を持つ。表4の分類でCとしたものである。

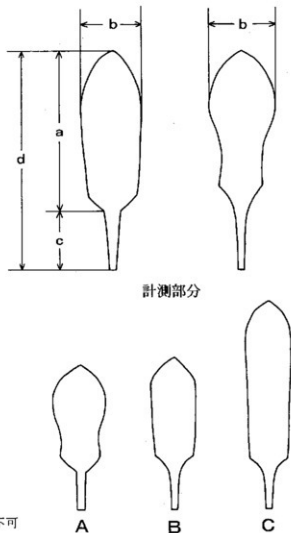
口巻きの区別は静岡県東の磐田市鎌田松林塚古墳は銅鎌が麻繊維、鉄鎌が樹皮を使用していることを川西宏幸氏が指摘している。(文献20)

柳葉式

No.	a	b	c	d
24	-	20	-	-
43	53	20	22	75
44	50	20	-	-
86	-	19	-	-
87	50	20	-	-
88	50	18	-	-
89	52	20	27	79
90	50	20	23	73
91	53	18	25	78
92	70	21	-	-
93	51	20	24	75
94	53	20	27	80
95	49	20	-	-
97	53	18	22	75
99	48	20	21	69
100	52	22	25	75
101	52	22	25	75
103	49	20	25	74
104	-	-	25	-
106	52	21	18	70
107	51	18	23	74
110	51	21	23	74
113	-	16	-	-
121	50	22	25	75
127	49	19	-	-
129	50	20	-	-

柳葉式計測値

は棺外西側出土 -は破損で計測不可



計測部分

表4 柳葉式計測値

#### ④平根系大型定角式

図59が平根系大型定角式とした一群で、7点が確認されている。副葬位置は7点すべてが棺外西側である。

平根系大型定角式は大型の扁平な鏃で、形状や大きさに多様性が見出せ、鏃身関部の形態から山形関、ナデ関、ナナメ関の3種類に分類した。

山形関をもつタイプは鉄鏃39、鉄鏃125、鉄鏃19である。鉄鏃39は完形品で全長が12.9cmであった。刃部を鏃身部の先端にもち、鏃身長3.2cm、鏃身幅3.0cmを測る。大きく内湾する長さ4.8の頸部をもち、そのまま山形の関に至る。鉄鏃125は関から基部が欠損するが、鏃身部から頸部にかけての形状や大きさから鉄鏃39と同型式とした。鉄鏃19も山形関であるが、残存長が12.7cmで庭島塚古墳出土の鉄鏃の中では大型の部類に入る。鏃身長が約7.1cmで鉄鏃39の2倍以上の鏃身部をもつ。関幅は2.7cmであった。

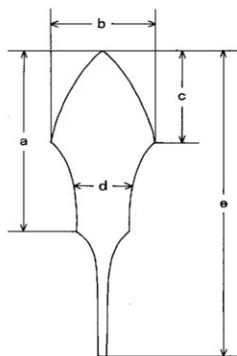
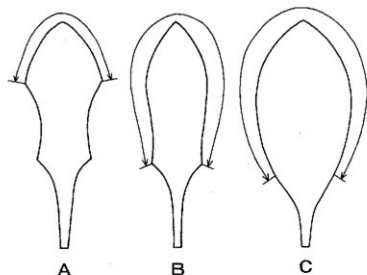
ナデ関をもつ鉄鏃38は、茎の先端が欠損するが残存の全長は12.2cmを測る。3.4cmの鏃身幅をもつ鏃身部側縁が大きく曲線を描いてそのままナデ関となる。鏃身部と基部が明瞭に区別できない。鉄鏃126は基部が欠損し関の形状が明らかでないが、大きく曲線を描く鏃身部から鉄鏃38と同じ形態をもつ鏃と思われるナデ関タイプとした。

ナナメ関をもつ鉄鏃23と鉄鏃26は残存長11cm前後で鉄鏃39の全長を大きく上回るものではない。形勢的には頸部がやや湾曲し、そのまま関幅2.6cmのナナメ関に至る。

平根系大型定角式

No.	a	b	c	d	e
19	▲107	40	▲72	22	-
23	87	31	45	26	-
26	85	31	22	27	-
38		34		x	-
39	80	30	32	18	129
125	-	30	28	18	-
126	-	39	-	x	-

平根系大型定角式計測値



計測部分

- は破損で計測不可
- ▲値は図上復原計測
- ×は部位なし

表5 平根系大型定角式計測値

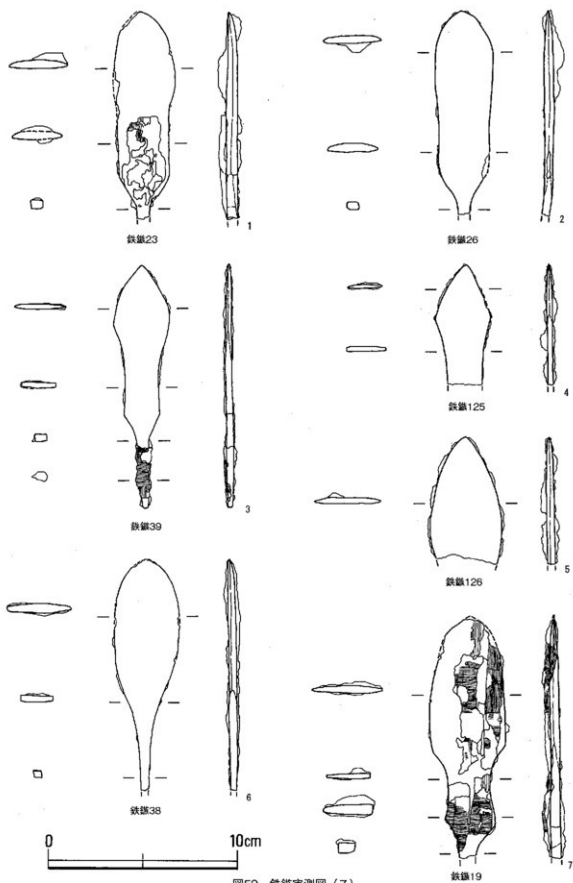


图59 铁器实测图(7)

⑤小型三角式

図60・図61が小型三角式とした鉄で、28点出土している。粘土礫の西側に限られる鉄鍔である。三角頭の鍔身部と茎の間に「頸部」があり、頸部長は1.1~2.0cm、頸部幅0.5~1.1cmである。鍔身部長と頸部長を合わせた長さが3.0~4.0cmほどの短身で、鍔身部は三角形を呈する。鍔身部の形態から3種類に細分できる。

鍔身部が菱形を呈し、頸部幅が広い。鉄鍔4、鉄鍔12、鉄鍔32の3点である。

鍔身部が正三角に近く、短い頸部をもつ。鉄鍔7、鉄鍔8、鉄鍔9、鉄鍔11、鉄鍔17、鉄鍔30、鉄鍔33、鉄鍔123の8点が該当する。

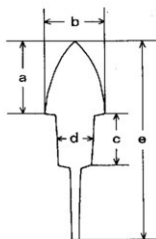
それ以外の鍔身部や頸部の長いタイプを一括する。鉄鍔2、鉄鍔3、鉄鍔5、鉄鍔6、鉄鍔10、鉄鍔13、鉄鍔14、鉄鍔15、鉄鍔16、鉄鍔25、鉄鍔31、鉄鍔34、鉄鍔35、鉄鍔36、鉄鍔124、鉄鍔122、鉄鍔124'（鉄鍔131）の17点である。

頸部をもつ鉄鍔は一般的には古墳時代中期に出現する形態とされている（文献21）。庭鳥塚古墳出土の小型三角式鍔と中期初頭に出現する短頸鍔を比較すると頸部断面が薄い長方形を呈する古墳時代中期の鍔に対し頸部が厚い長方形の断面を有する庭鳥塚古墳出土鍔の違いが見られる。庭鳥塚古墳に類似する鉄鍔を求めると、岐阜県東之宮古墳や静岡県赤山古墳の例がある。

小型三角形

No.	a	b	c	d	e
2	-	15	20	6	-
3	20	16	20	7	63
4	▲18	▲18	20	6	48
5	20	16	20	8	57
6	19	15	17	7	50
7	20	16	15	11	54
8	-	▲20	-	9	-
9	21	17	15	8	50
10	21	16	17	6	49
11	19	17	16	9	58
12	▲20	▲15	15	9	▲53
13	19	20	17	6	-
14	21	16	16	7	51
15	-	▲15	17	6	-
16	21	14	14	8	54
17	▲20	14	11	9	-
25	25	16	17	9	57
30	18	18	14	9	52
31	21	15	13	7	57
32	17	15	20	8	60
33	22	15	11	9	52
34	20	15	15	7	52
35	25	18	12	8	64
36	22	18	18	9	▲62
122	13	18	18	7	52
123	18	18	13	8	49
124	▲24	17	16	7	▲57
131	18	13	-	5	-

小型三角式計測値



計測部分

-は破損で計測不可  
▲値は図上復原計測

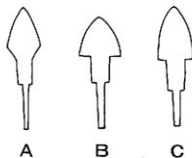


表6 小型三角式計測値

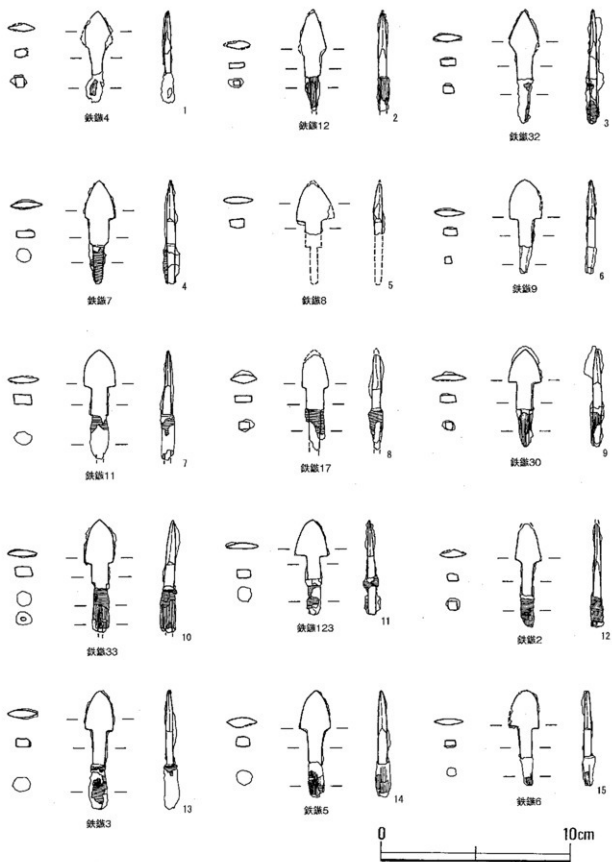


图60 铁器实例图(8)



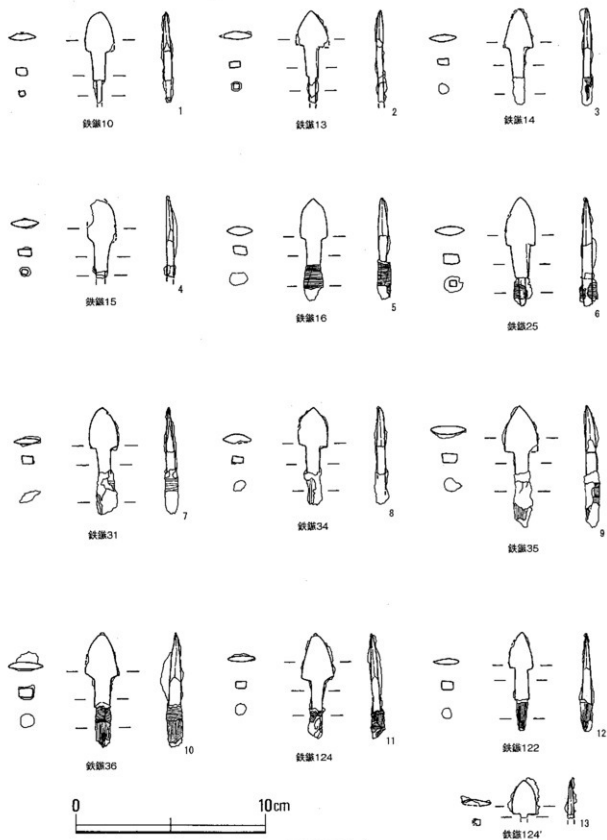


图61 铁鏃实测图 (9)

小型三角式の莖部の多くに口巻きの漆膜が良好に遺存していた。口巻きとは、矢の筈の先端に鐵を差し込んだ口もとを糸で固く巻き締めている部分である。「香巻」や「鹿巻」ともいう。小型三角式鉄鐵が出土した粘土槨の西北側では矢柄部分については残念ながら腐食して遺存していなかった。矢羽も同様でその痕跡すら観察できなかった。ただし、幅1cm程度の漆膜が細い棒状に検出した。出土位置がすべて鐵から50~80cmの範囲内にあることから判断して、塗りられた矢柄の本矧や末矧部分であるとみなしうる。矢羽は矢柄（筈）に装着するさいに矢柄の上下端を糸や樹皮などで巻き留めが、鐵に近い側の巻き止め部を本矧、管に近い側を末矧と呼称する。その巻き留めの範囲は、一般的には本矧の方が大きい。さらにその本矧や末矧には最後の仕上げとして漆が塗布されることが多いことから庭鳥塚古墳での状況と合致する。

口巻きの遺存は、他の鐵でも散見できる。中には矢柄の一部に朱が見られた。同じような例は、桜井茶白山古墳から出土した鉄鐵の矢柄に見ることができる。桜井茶白山古墳の例では赤色顔料の付着が破片を含む117点のうち20点に確認できた。口巻きの下端で明確に塗切れており、口巻部分を漆で黒に、矢柄部分を朱で赤に塗り分けていたと見られている。また、古墳時代後期の例ではあるが、瓜破遺跡では、5世紀後半に属する可能性が高い長頸鐵に挿入した状況の矢柄が出土している。矢柄はタケ・ササ類を材料とし、全体を黒漆を塗布し、樹皮を巻き、その上に赤漆を部分的に塗布していることが観察できた(文献22)。裝飾性の強い矢柄の用途について慎重に検討する必要性を指摘している。

裝飾のある矢は赤や黒といった色の塗り別けだけでないようだ。雪野山古墳では、矢の末矧に漆の表面につや消し部が見られた。つや消しは矢柄に鉄の粉を砕いてその上から黒漆を塗ることによって作っていることが中川正人氏によって明らかにされている。庭鳥塚古墳の出土資料の中では見出すことができなかった。見た目を変えた矢柄も裝飾性を帯びたものとするならば、後述する無蓋三角式鐵も矢柄と質の異なる素材の根バサミは裝飾した矢として捉えるのではなかろうか。

#### ⑥腸扶柳葉式

図62が腸扶柳葉式で8点出土している。うち3点が棺外西側から出土し、表7の番号欄にトーンで塗り潰している番号の鉄鐵が該当する。鐵身部の形態から3種類それぞれ分類できる。

鉄鐵21と鉄鐵37と鉄鐵96は腸扶柳葉式Aとした。全長は鐵身部の腸扶が欠損する以外、保存状況が良好である鉄鐵21で10.0cmをはかる。鐵身長4.5~5.0cm、鐵身幅2.0~2.2cmで、腸扶柳葉式Bや腸扶柳葉式Cに比べると細身の鐵身部である。鉄鐵37は短い腸扶が残る。頭部の幅0.7cm前後で、長さ2.4~2.6cmをはかる。山形闊で、莖部長は3.0cmであった。鉄鐵21は樹皮に黒漆を塗った矢柄が残る。

鉄鐵109と鉄鐵115は腸扶柳葉式Bとした。稜線をもつ鐵身部は、刃部先端と腸扶が欠損するが、残存部から復原できる鐵身長は4.5cmを超えることはない。鐵身幅2.4cm、鐵身厚0.5cmを測る。鉄鐵109は鐵身部と頭部と接合しないが、図上では全長10.0cmと復原した。山形闊を有し、闊幅1.0cmである。莖部長は3.1cmで、樹皮を巻いたのちに黒漆を塗布する

鉄鐵130は鐵身部が欠損するが、頭部の山形闊から腸扶柳葉式とした。山形闊をもつ鉄鐵は庭鳥塚古墳では腸扶柳葉式に限られる。残存長2.7cmで、闊幅1.0cmである。

鉄鐵85と鉄鐵98の2本は腸扶柳葉式Cとした。鐵身長が4.8cmを計測でき腸扶柳葉式Bより長い。鐵身幅が2.7cmを越える大型品で庭鳥塚古墳から出土した腸扶柳葉式の中では最も大きい。頭部長は鉄鐵85が3.0cm、鉄鐵98が2.3cmを測り、両者いずれも莖部のほとんどが欠損する。闊部幅1.1cmであった。

腸袂柳葉式

No.	a	b	c	d	e	f
21	▲58	23	70	11	100	44
97	▲53	20	71	11	▲104	▲48
85	-	27	78	11	-	49
96	-	22	70	10	99	45
98	-	25	▲75	12	-	▲53
109	-	23	-	10	-	▲42
115	-	25	-	-	-	-
130	-	-	-	11	-	-

腸袂柳葉式計測値

は棺外西側出土

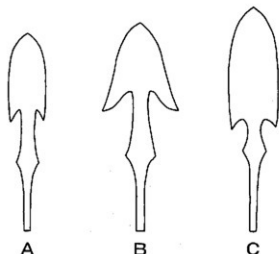
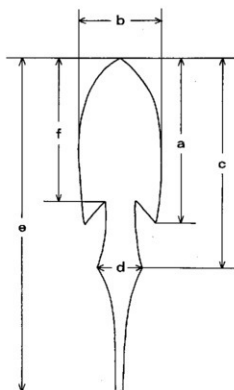


表7 腸袂柳葉式計測値



計測部分

-は破損で計測不可

▲値は図上復原計測

⑦ 掬りを加えた鉄

図62の右下に図示した鉄鏃20は掬りのある鏃である。庭島塚古墳からは1点のみの出土である。鏃身部の一部が欠損しているが図面上では復原全長16.4cmである。鏃身部は柳葉で、鏃身幅2cm、復原した鏃身長6.2cmであった。幅1.3cmの板状の頸部を5回捻り、径1.0cmになっている。角間で、茎部は3.4cmの長さである。

掬りを加えた鉄鏃は石山古墳、百舌鳥大塚山古墳、恵解山古墳に代表されるように古墳時代中期の鏃形式と考えるのが一般的である。ただし、東大寺山古墳や長光寺山古墳といった古墳時代前期後半の古墳にも副葬されているので、必ずしも中期まで下げる必要がないと考えている。また、多くの例は鏃身部が腸袂であるのに対して庭島塚古墳の例は腸袂を有しない。

鈴木一有氏は鉄鏃に掬りを加える技術的な系譜を朝鮮半島に求め、前後葉から中期初頭に行われた朝鮮半島との活発な交流の中で成立したと捉えた(文献23)。

朝鮮半島では東萊福泉洞38号が最古で、4世紀前葉から中葉に相当する。現在のところ東萊地域に出土例が集中することから掬りを加えた鉄鏃の起源を朝鮮半島南部に求める根拠の一つとしている。日本列島では東大寺山古墳や長光寺山古墳が比較的早く採用された例で逆刺を鏃身部をもつ。古墳時代中期になり逆刺をもたず鏃身二段間の形態が出現し、細根系統として把握される。

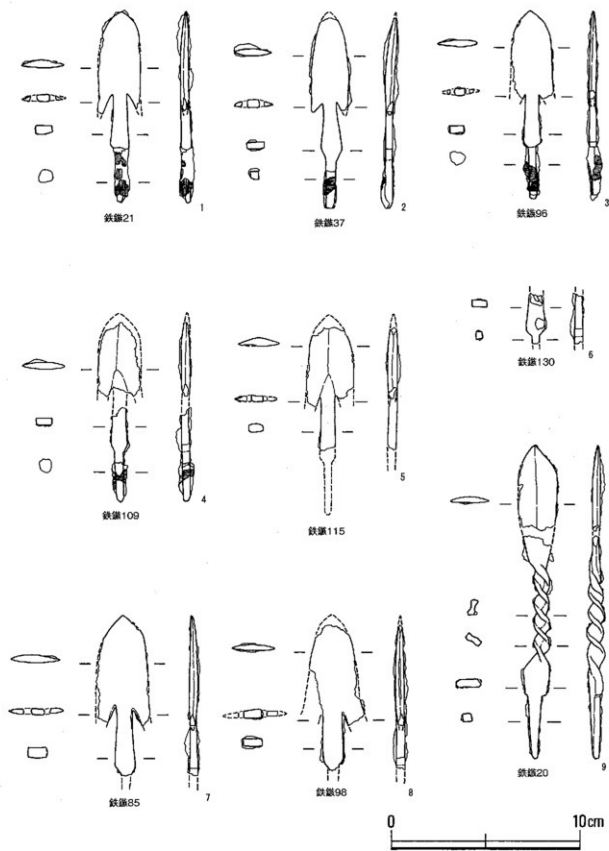


圖62 鉄鏃実測図 (10)

⑧無茎三角式

図63が無茎三角式で14点出土している。うち6点は棺外西側から出土している。表8の番号欄をトーンで表した番号欄の鉄鍔が該当する。

鍔身部の大きさにより3種類であった。

保存処理を進めて行く過程で、根バサミによる無茎三角式鉄鍔と矢柄の装着方法が確認できた。根バサミは径6mmの木製で、その先端を尖らすように長さ13mm削り、そこから11mmの長さに根バサミを細くなるように削り込んでいる。細くなった部分に繊維状の紐が観察された。無茎三角式鉄鍔のレントゲン写真で確認したところ、矢柄が細く削られた部分に4mmの孔が穿かれ、その孔に観察された紐は鍔に挟み込まれた矢柄の先端同士を合わせるものと判明した。さらに、根バサミを十字に紐で結縛する。無茎式の鍔において双孔であれば、二つの孔に紐を通して鍔と矢柄と密着させることが容易に思慮されるが、単孔での紐の通し方の類例が乏しく類推するしかなかった。

6世紀前半の資料であるが、奈良県大宇陀町岩清水ワジガ谷古墳群から出土した大型無茎鍔に類例を見ることができた(文献24)。

無茎三角式

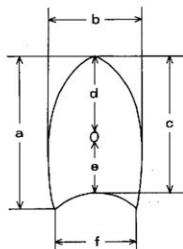
No.	a	b	c	d	e	f
1	70	31	58	40	14	20
22	-	31	57	38	14	-
40	-	31	▲58	-	12	▲22
41	▲63	32	▲50			27
42	71	32	58			27
102	-	31	-	-	15	-
105	-	31	65	45	17	-
108	68	31	58			▲22
111	66	32	53	35	13	-
112	61	31	46	35	7	-
116	-	32	52			-
117	-	31	-	▲39	-	-
128	-	28	-	-	12	-

無茎三角式計測値

■ は棺外西側出土

-は破損で計測不可

▲値は図上復原計測



計測部分

表8 無茎三角式計測値

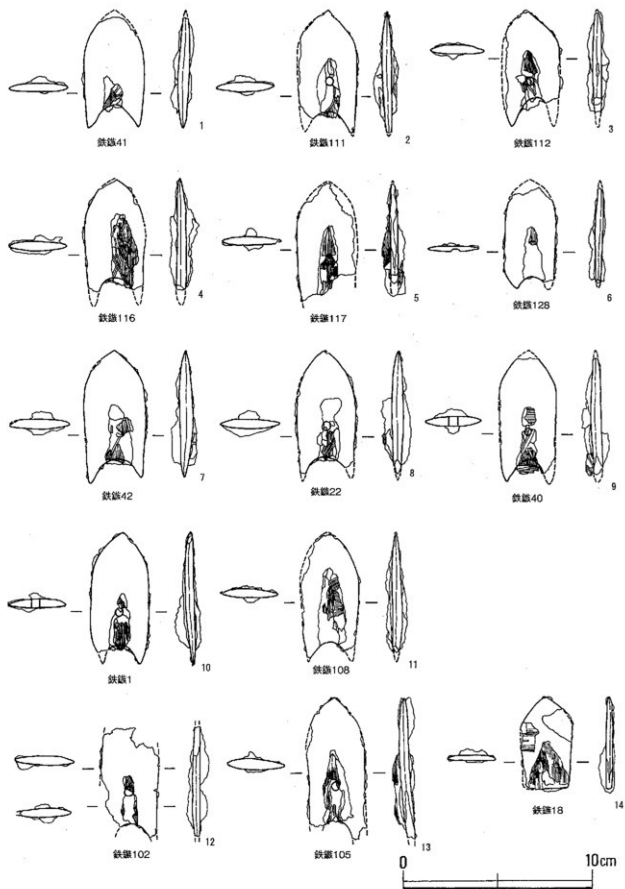


图63 铁器实测图 (11)

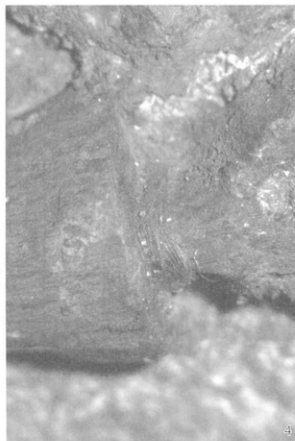
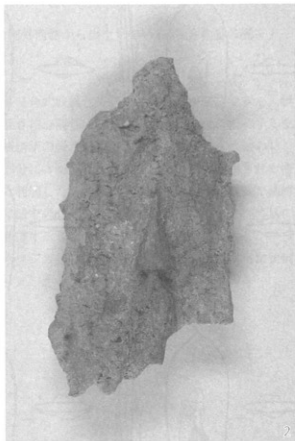


写真19 無茎三角式鉄槌の装着方法

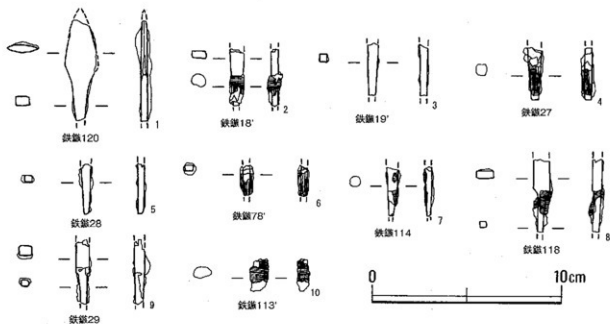


図64 不明鉄鏃実測図

その他

図64は鏃形式等が不明な鉄鏃で、以下の10本が該当する。

鉄鏃120は棺外西側出土でI群の定角式鉄鏃の1点であるが、鏃身部分が大きく錆膨れし、鏃の判断ができなかった。

鉄鏃18'は鉄鏃18と一緒に取り上げた棺外西側出土の資料である。茎部分に口巻きが見られる。鉄鏃番号を新たに鉄鏃132と附した。

鉄鏃19'は鉄鏃19と一緒に取り上げた棺外西側出土の資料である。断面正方形の茎部分と考えられる。鉄鏃番号を新たに鉄鏃133と附した。

鉄鏃27は棺外西側で出土した茎部の破片である。周辺は、小型三角式の鏃が集中する一群に含まれることから小型三角式である可能性は非常に高い。

鉄鏃28も棺外西側から茎部の破片である。鉄鏃27の東に隣接して出土したことから鉄鏃28も小型三角式の可能性が極めて高い。

鉄鏃78'は鉄鏃78と一緒に棺外東側から取り上げた茎部分である。矢柄の木質が遺存する。鉄鏃番号を新たに鉄鏃134と附した。

鉄鏃114は棺外東側から出土した茎部の破片である。鉄刀の胎で単独に置かれた鉄鏃の周辺には柳葉式が多く見られるほか腸扶柳葉式が数点見られる群に属している。

鉄鏃118は棺外東側から出土した茎部と頸部の破片である。ナデ関が認められる。茎部に樹皮を巻いたのちに黒漆を塗布する。

鉄鏃29は棺外西側から出土した角関が認められる破片である。残存長3.0cmを測る。周辺は小型三角式が集中する地点で先の鉄鏃27や鉄鏃28の一群に含まれる。したがって、鉄鏃29も小型三角式の可能性が高い鏃といえる。

鉄鏃113'は鉄鏃113と一緒に棺外東側から取り上げた茎部分の破片である。矢柄の木質が遺存する。鉄鏃番号を新たに鉄鏃135と附した。



表9 鉄道一覧表

鉄道No.	図面No.	線型式	位置	群	備 考
1	図63-10	無茎三角	西		
2	図60-12	小型三角形	西		
3	図60-13	小型三角形	西		
4	図60-1	小型三角形	西		
5	図60-14	小型三角形	西		
6	図60-15	小型三角形	西		
7	図60-4	小型三角形	西		
8	図60-5	小型三角形	西		
9	図60-6	小型三角形	西		
10	図61-1	小型三角形	西		
11	図60-7	小型三角形	西		
12	図60-2	小型三角形	西		
13	図61-2	小型三角形	西		
14	図61-3	小型三角形	西		
15	図61-4	小型三角形	西		
16	図61-5	小型三角形	西		
17	図60-8	小型三角形	西		
18	図63-14	無茎三角	西		
19	図59-7	平根系大型	西		
20	図62-9	擬じり	西		
21	図62-1	腸扶柳葉式	西		
22	図63-8	無茎三角	西		
23	図59-1	平根系大型	西		
24	図57-7	柳葉式	西		
25	図61-6	小型三角形	西		
26	図59-2	平根系大型	西		
27	図64-4	不明	西		
28	図64-5	不明	西		
29	図64-9	不明	西		
30	図60-9	小型三角形	西		
31	図61-7	小型三角形	西		
32	図60-3	小型三角形	西		
33	図60-10	小型三角形	西		
34	図61-8	小型三角形	西		
35	図61-9	小型三角形	西		
36	図61-10	小型三角形	西		
37	図62-2	腸扶柳葉式	西		
38	図59-6	平根系大型	西		
39	図59-3	平根系大型	西		
40	図63-9	無茎三角	西		
41	図63-1	無茎三角	西		
42	図63-7	無茎三角	西		
43	図57-8	柳葉式	西		
44	図57-9	柳葉式	西		
45	図53-1	片鑄定角形	東		
46	図55-1	両鑄定角形	東		
47	図53-2	片鑄定角形	東		
48	図53-3	片鑄定角形	東		
49	図53-4	片鑄定角形	東		
50	図53-5	片鑄定角形	東		
51	図53-6	片鑄定角形	東		
52	図53-7	片鑄定角形	東		
53	図53-8	片鑄定角形	東		
54	図55-3	両鑄定角形	東		

鉄筋No.	図面No.	鉄型式	位置	群	備 考
55	図53-9	片鎮定角形	東		
56	図55-4	両鎮定角形	東		
57	図55-5	両鎮定角形	東		
58	図55-6	両鎮定角形	東		
59	図55-7	両鎮定角形	東		
60	図53-10	片鎮定角形	東		
61	図55-8	両鎮定角形	東		
62	図55-9	両鎮定角形	東		
63	図55-10	両鎮定角形	東		
64	図55-11	両鎮定角形	東		
65	図55-12	両鎮定角形	東		
66	図56-1	両鎮定角形	東		
67	図56-2	両鎮定角形	東		
68	図56-3	両鎮定角形	東		
69	図56-4	両鎮定角形	東		
70	図56-5	両鎮定角形	東		
71	図56-6	両鎮定角形	東		
72	図54-1	片鎮定角形	東		
73	図54-2	片鎮定角形	東		
74	図54-3	片鎮定角形	東		
75	図54-4	片鎮定角形	東		
76	図54-5	片鎮定角形	東		
77	図54-6	片鎮定角形	東		
78	図54-7	片鎮定角形	東		
79	図55-2	両鎮定角形	東		
80	図56-7	両鎮定角式	東		
81	図54-8	片鎮定角形	東		
82	図54-9	片鎮定角形	東		
83	図54-10	片鎮定角形	東		
84	図54-11	片鎮定角形	東		
85	図62-7	腸快柳葉式	東		
86	図57-10	柳葉式	東		
87	図57-1	柳葉式	東		
88	図57-11	柳葉式	東		
89	図57-12	柳葉式	東		
90	図58-1	柳葉式	東		
91	図58-2	柳葉式	東		
92	図58-14	柳葉式	東		
93	図58-3	柳葉式	東		
94	図58-5	柳葉式	東		
95	図58-6	柳葉式	東		
96	図62-3	腸快柳葉式	東		
97	図58-4	柳葉式	東		
98	図62-8	腸快柳葉式	東		
99	図58-7	柳葉式	東		
100	図59-2	柳葉式	東		
101	図57-3	柳葉式	東		
102	図63-12	無茎三角	東		
103	図58-8	柳葉式	東		
104	図58-9	柳葉式	東		
105	図63-13	無茎三角	東		
106	図58-10	柳葉式	東		
107	図58-11	柳葉式	東		
108	図63-11	無茎三角	東		
109	図62-4	腸快柳葉式	東		
110	図57-4	柳葉式	東		

鉄器No.	図面No.	鎌型式	位置	群	備 考
111	図63-2	無差三角	東		
112	図63-3	無差三角	東		
113	図57-6	柳葉式	東		
114	図64-7	不明	東		
115	図62-5	腸袂柳葉式	東		
116	図63-4	無差三角	東		
117	図63-5	無差三角	東		
118	図64-8	不明	東		
119	図56-8	両鍔定角形	東		
120	図64-1	不明	東		
121	図58-12	柳葉式	東		
122	図61-12	小型三角形	西		
123	図60-11	小型三角形	西		
124	図61-11	小型三角形	西		
125	図59-4	平根系大型	西		
126	図59-5	平根系大型	西		
127	図57-5	柳葉式	東		
128	図63-6	無差三角	西		
129	図58-13	柳葉式	西		
130	図62-6	腸袂柳葉式	西		
131	図61-13	小型三角形	西		
132	図64-2	不明	西		
133	図64-3	不明	西		
134	図64-6	不明	東		
135	図64-10	不明	東		

### 【銅鐵】

確認された銅鐵の合計は56点である。この中の2点が錆で本体の原形を止めず、粘土椀に圧痕が残るものである。したがって、現物は54点である。鉄鐵と同様に削平された粘土椀の南側に銅鐵が副葬されていた可能性も否めない。

図化できたのは細片で図化不能の銅鐵5以外の53点で、図65・図66に示したほか、銅鐵54は鉄鐵49と密着しているため実測図は図27に提示している。

出土した銅鐵は全体にもろく、鐵身の保存状態が悪い。本来の表面が残らず錆で色調が淡青灰色を呈する。型式が判る41点は柳葉式であった。残りの13点については断定できないが、出土総数の約7割が柳葉式ということになる。

柳葉式と認定できた41点の銅鐵は、錆化による欠損のため厳密な比較は困難であるが、ほぼ同形同大であると思われる。現状の全長が5.7cm前後を測り、図上から6.3cmに復元できる。数値で現せないが、鐵身幅が広い。銅鐵の観察、実測をお願いした南部裕樹氏のご教示よれば妙見山古墳出土の銅鐵の平面形態が類似するとのことである。

庭鳥塚古墳出土の銅鐵の年代的位相づけは、高田健一氏による柳葉式の編年によると関高と関厚の対応関係を分析し、関の位置が高く厚いものから関の位置が低く薄いものへの変遷を考えた(文献25)。庭鳥塚古墳の例は、関の厚みが0.6cmと薄く、関高が計測できた銅鐵11や銅鐵38では0.4cmであった。

銅鐵の出土量については、東大寺山古墳の260本を最大とし、メスリ山古墳が236本、妙見山古墳が106本、雪野山古墳が96本、松林山古墳が80本、ホケノ山古墳の75本と続き、石川県国分塚1号墳の57本や同泉雨の宮1号墳の52本が庭鳥塚古墳の出土量に近い。

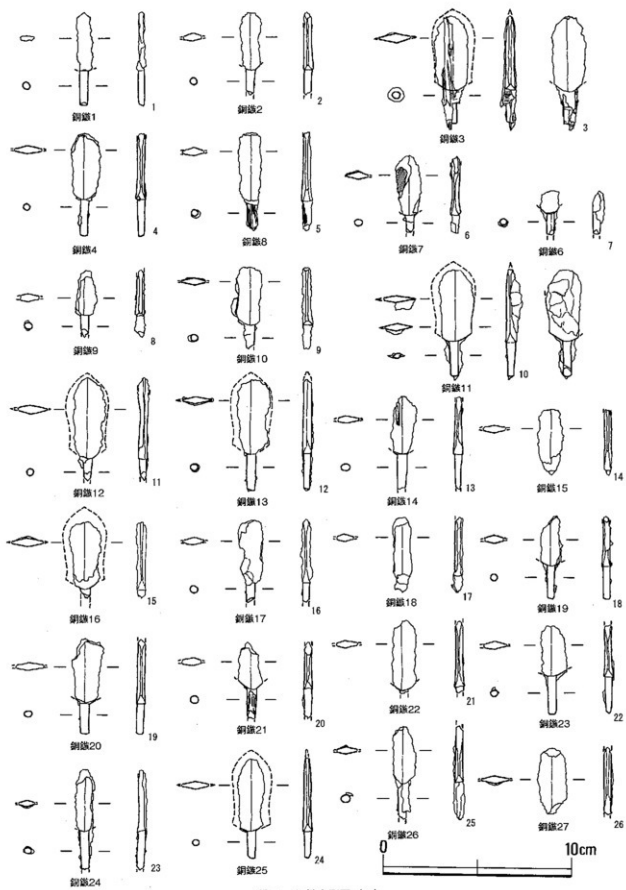


图65 铜剑实测图(1)

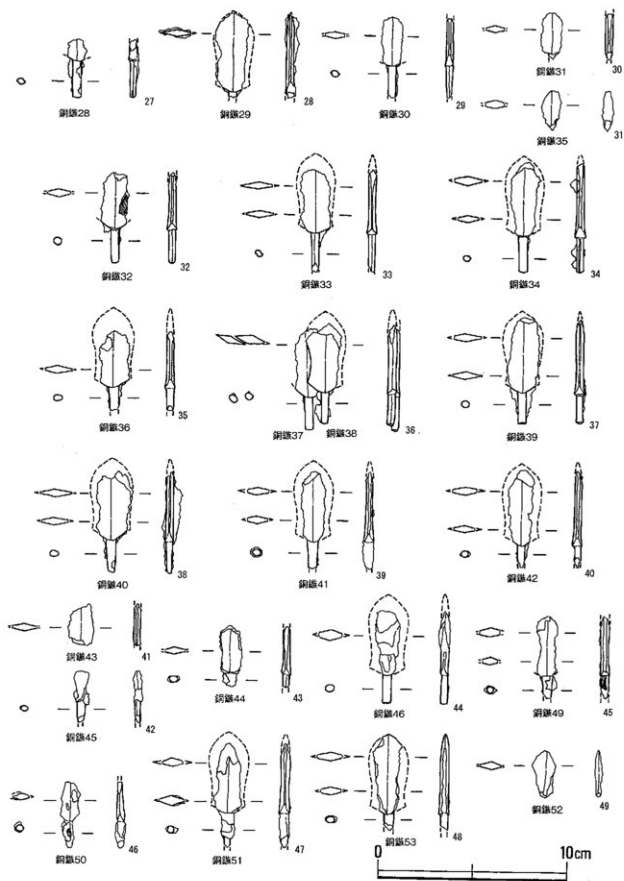


图66 铜器实测图(2)

表10 銅鏃一覧表

銅鏃No.	図面No.	残存状況	位置	群	備 考
1	1	確定困難	西	I	
2	2	良	西		
3	3	良	西		
4	4	良	西		
5			西		
6	7	良	西		
7	6	良	西		
8	5	良	西		
9	8		西		
10	9	良	西		
11	10	良	西		
12	11	良	西		
13	12	良	西		
14	13	良	西		
15	14		西		
16	15	良	西		
17	16	良	西		
18	17	良	西		
19	18	良	西	II	
20	19	良	西		
21	20	良	西		
22	21	良	西		
23	22	良	西		
24	23		西		
25	24	良	西		
26	25	良	西		
27	26	刃部残存	西		
28	27	茎部・頭	西		
29	28	良	西		
30	29	良	西		
31	30	刃部残存	西		
32	32	刃部残存	東		
33	33	良	東		
34	34	良	東		
35	31		東		
36	35	良	東		
37	36	良	東		
38		良	東		
39	37	良	東		
40	38	良	東		
41	39	良	東		
42	40	良	東		
43	41		東		
44	43	良	東		
45	42		東		
46	44	良	東		
47			東	II	
48			東		
49	45	良	東		
50	46	良	東		
51	47	良	東		
52	49	刃部残存	東		
53	48	良	西	I	
54			東	I	鉄鏃 49 に付着。図 30-4
55			西	II	痕跡
56			東	I	痕跡

### 【鋸】

図67の1は、粘土槨の西側棺外から出土した鉄製の鋸である。調査していた当初は、長さ20cm程度の鉄剣片として認識し、遺物取り上げの際にも鉄剣1の番号を附した。ところが、保存処理を終えて実測作成をしていたところ剣でないことが判った。そして、鉄剣が出土した地点のすぐ南側にある粘土槨が陥没していた地点から出土した鉄板の破片と接合して短冊形の鉄板が復原できた。その形状は古墳時代に見られる鋸であった。

鋸を分類した伊藤実氏によると短冊形のI類に属する(文献26)。両端部に柄の痕跡と考えられる木質が遺存する。木質の範囲は2.8cm×1.5cmである。多くの例はこの部分に凹孔が存在するが、庭島塚古墳の鋸はレントゲンによる観察においても凹孔は確認できない。推測できる柄の形は、鋸の両脇から単体で伸びる柄ではなく鋸の両脇を曲線を描く逆「U」の字を呈している柄であろう。鋸の本体と柄の接合方法は現状から不明である。

破片が接合して全体の大きさが判明した。その法量は横幅24.5cm、最大縦幅2.9cm、最大厚0.22cm前後を測る。

歯は全般的に著しく錆化しており、その形状や1本あたりの大きさなどは判然としない。レントゲン写真で観察すると、痕跡から素歯と考えられ、アサリやナゲシをもたないと推定される。

前期の鋸は現在まで21例を数える。大阪府下では弁天山C1号墳、紫金山古墳に次ぐ3例目になっている。

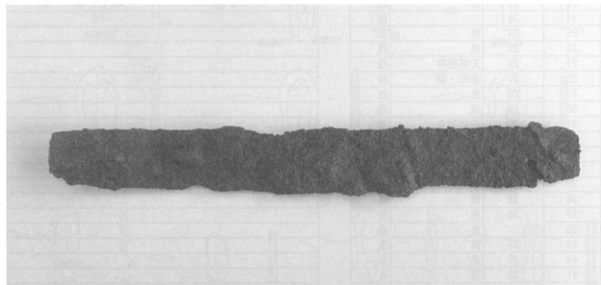


写真20 鋸

### 【鉄鎌】

図67の2は、棺外西側から出土した工具の一つで、図44の3の鉄斧4に付着していた。出土当初は錆びや付着していた土で工具の種類が解らなかつた。保存処理を実施したところ鉄鎌であることが判明した。

確認できた鉄鎌は、全長18.4cm、幅約3cm、背厚約0.6cmの直刃鎌である。刃の反対側の角を叩いて折り曲げている。

古瀬清秀氏による大形式分類の中型鎌に該当する(文献27)。機能差を示す重要な要素として着柄角度を重視した古瀬氏は、刃弦と柄のなす角度が110度であるので、鉄製鎌Ⅱ類に該当し、鉾鎌としての機能をもつ。

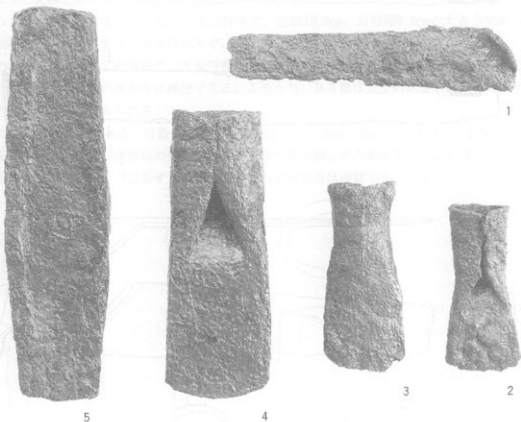


写真21 鉄斧・鎌

【鉄斧】

鉄斧は4点が確認され、図67と図68に提示した。すべて棺外西側で出土した。内訳は有袋鉄斧が3点、短冊形鉄斧が1点である。庭鳥塚古墳の農工具類は棺外西側に配置され、確認できた重なりから鉄斧3が最後に置かれ、その下に鉄鎌、鉄斧4が一番下となる。北から南へ置かれたとすれば、離れた出土した鋸を除くと鉄斧1が最も北に位置するから最初に置かれたと推測される。大きい斧から南に小さくなるように並べられた配置は、斧に柄が着いていないことから威信材としての意味合いをもつものであろうか。以下、鉄斧各自の形状と大きさを概述する。

図67の3は、鉄斧3である。全長10.8cm、刃部幅4.8cmを測り、出土した有袋鉄斧の3点の中で最も小さい。



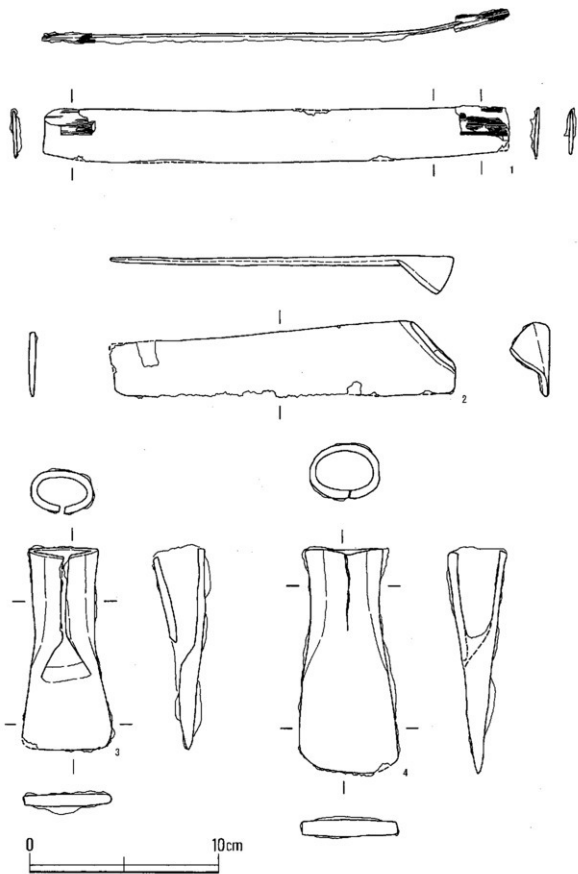


图67 锯·锤·铁斧实测图

図67の4は、鉄斧4である。全長12.2cm、刃部幅5.5cmの法量を有する。刃部に鉄鏝が付着していた。刃先部は少し丸みを呈する。

図68の2は、鉄斧2である。分厚く丈夫な作りで、全長18.3cm、刃部幅6.8cmの大きさである。形態は、縦長の長方形を呈する。刃部は両刃で、弧状をなす。

以上の有袋鉄斧はすべてが無肩で、古瀬清秀の分類による有袋鉄斧B類となる。法量からB2類の鉄斧3と鉄斧4、B3類の鉄斧2に細分できる。このうち、B3類は大型の短冊形鉄斧と共伴する例が白山古墳(文献28)で見られる。

図68の1は、鉄斧1である。短冊形を呈し、全長25.5cm、刃幅6.7cm、厚さ1.2cm、重量748.7gの大きさを有する。全長及び歯部幅の数値から大きく3つに分類した古瀬清秀氏によれば、庭鳥塚古墳の短冊形鉄斧は中型グループに属する。表面観察から柄の装着は確認できなかった。

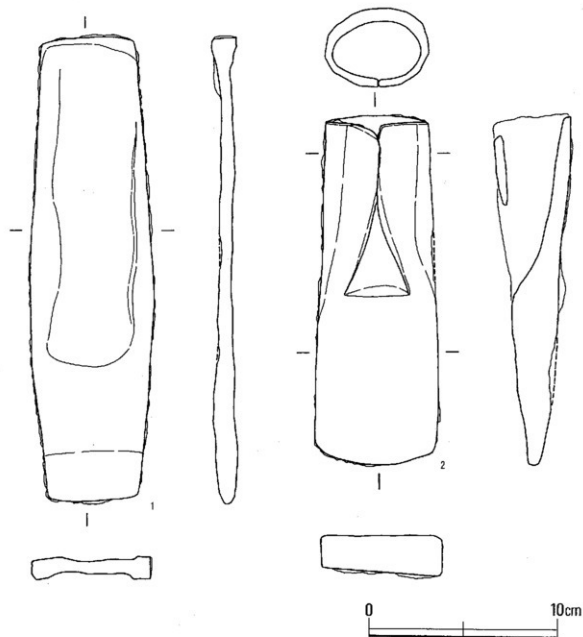


図68 鉄斧実測図

### 【鉄刀】

棺外出土の鉄刀は3点であり、図69に提示した。

鉄刀1は、棺外西側の崩壊した粘土椀に沿って刃部が数本に折れて出土した。接合して3つの破片となった。50.7cmの身、莖8.4cm、刃13.3cm。復原すれば90cmぐらいの直刀になろう。身部は残存長44.0cm、刃部幅3.4cm。関部の幅4.0cm、最大厚12mmである。深さmmの段差の直角をもつ。断面が楔形を呈する平造りの刃部である。刃部には木質部が付着している。木製鞘におさめられていた。莖部は、莖部幅2.2cm、長さ現状14.0cm。最大厚9mm。莖断面は腹側がやや薄い台形状となる。莖は、莖尻までおおむね一定の幅を保ち、一文字尻をなす。目釘孔は1ヶ所認められた。径5mm。木製把の木質部の上に布目が認められる。把間に巻いた布と思われる。莖の背には木質が残らないことから把の片側面に溝を掘り込んで莖をはめ込む「落とし込み式」の把と考えられる。

鉄刀2は、棺外西側から出土した。接合できた全長は81.8cmで、接合面を持たない長さ5.8cmの莖部の破片がある。出土時の錆びた部分は100cmを越えていた。身部の先端と莖尻の一部が欠損する。身部は残存長70.8cm、刃部幅3.0cm。関部の幅3.1cm、最大厚10mmである。直角をもつ。断面が楔形を呈する平造りの刃部である。刃部には木質部が付着している。木製鞘におさめられていた。莖部は、莖部幅2.3cm、復原した現状の長さが14.0cm。最大厚9mm。莖断面は腹側がやや薄い台形状となる。莖は、莖尻までやや狭くなる。目釘孔は認められない。木製把の木質部の上に布目が認められる。把間に巻いた布と思われる。莖の背には木質が残らないことから把の片側面に溝を掘り込んで莖をはめ込む「落とし込み式」の把と考えられる。

鉄刀3は、棺外東側から出土した。残存する全長98.5cmを測り、身部の先端と莖尻の一部が欠損する。身部は残存長84.5cm、刃部幅2.9cm。関部の幅3.1cm、最大厚12mmである。直角をもつ。断面が楔形を呈する平造りの刃部である。刃部には木質部が付着している。木製鞘におさめられていた。莖部は、莖部幅2.7cm、長さ現状14.0cm。最大厚9mm。莖断面は台形状となる。莖は、莖尻までおおむね一定の幅を保ち、一文字尻をなす。目釘孔は認められない。木製把の木質部の上に布目が認められる。把間に巻いた布と思われる。莖の背には木質が残らないことから把の片側面に溝を掘り込んで莖をはめ込む「落とし込み式」の把と考えられる。

### 【鉄剣】

図69の右端に提示した鉄剣の実測図は鉄剣2と鉄剣3の2点である。鉄剣は平成17年度の調査段階では3点としたが、鉄剣1とした取り上げた資料は、鋳と判明したので欠番となった。

南断面に見えていた鉄器の鉄剣2は、棺外西側から出土した。切っ先部は墳丘南側の削り取られた際に消失している。残存するのは身部が長さ8.5cm程度の破片で長さ3.8cmの莖部である。非常に残りが悪い。身部の幅は3.2cmを測る。鞘と考えられる木質部が遺存し、木目から関部分の破片であることがわかる。最大の厚みは5mmで、レンズ状の断面を呈する。莖は幅1.3cm。目釘孔が認められる。最大厚6mmの断面長方形を呈する。

鉄剣3は、棺外西側から出土している。最も残りの良い鉄剣である。全長49.3cmを測る、莖の長さが11.3cm細長いタイプである。刃部幅2.6cm、関部幅3.0cm、莖部幅1.2cmの法量をもつ。最大厚5mmで、断面は長方形であった。莖尻から刃部へ5.1cmのところ直径0.3cm目釘穴がある。

身部に木質部が認められることから鞘におさめられていたことがわかる。鞘や把の構造は明らかにできなかった。

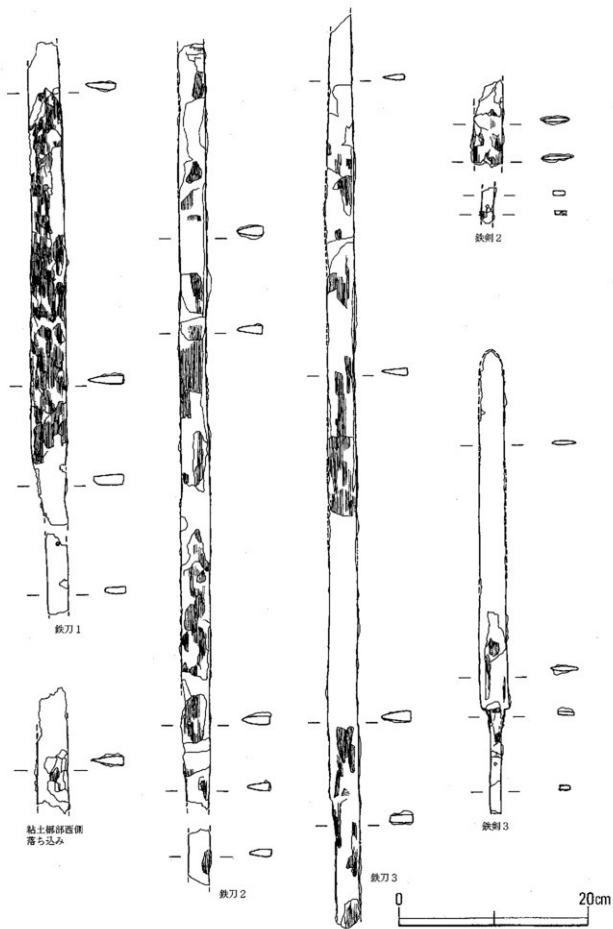


図69 鉄刀1・鉄刀2・鉄刀3・鉄刺2・鉄刺3実測図

## 【ヤリ】

長柄の武器としてヤリが確認でき、図70に提示した。出土位置は棺外東側から2点と棺外西側1点の計3点が出土した。ここでヤリとするものは柄に装着する武器を指し、本報告での表記は「ヤリ」とした。

図70-1は、棺外東側から出土した鉄ヤリで、ヤリ1とした。茎部に欠損するが認められるものの、出土した状況から全長39.2cmのヤリ先を復原している。計測できる身部の長さは28.6cmで、身幅は2.5cmである。身部の関付近では3.0cmの幅をもつ。約1mmの段差で茎部に繋がるが、茎幅1.5cmを測る。目釘孔は認められない。身部に木質部の痕跡が残ることから鞘におさめられていたことが判る。鉄ヤリ1の茎の延長に筒形銅器2があり、したがって筒形銅器はヤリの石突と考えられる。両者の距離は2.6mを測る。

図70-2は、棺外東側から出土した全長47.0cmを測る鉄ヤリである。ヤリ2としたその形状はヤリ1やヤリ3と比べると特異である。相違点は、関付近から身の中央付近までヤリの柄に見られる端部がV字形の鉄製の拵が刃部を包む形で二重に施される。類似する資料が兵庫県榎現山51号墳に見られ報告書では“槍状鉄器”として呼称しているが、本報告では「ヤリ」として報告する。以下、榎現山51号墳の槍状鉄器の報告を参考にして概観を説明する。

身部長は21.8cm、身部幅2.5cm、厚さ0.6cmで、断面が杏仁形を呈する。ここから茎にかけて端部がV字形の鉄製の拵が二重に施される。前半分はその厚さが1.3cm～1.8cmと茎へ向かい徐々に厚さを増していき、身部幅は先端部で2.8cmあり、最大で3.5cmを測る。後半分のつくりとの接点で2.4cmとその幅を減じている。断面は杏仁形である。後半分は断面形が円形で厚さ2.1cm、幅2.3cmである。榎現山51号墳では前半分、後半分とも裏表の二枚を合わせて鍛造したものと推定されるが、庭島塚古墳の例では明らかにできなかった。茎部分は長さ10.2cm、幅2.0cm、厚さ0.8cmであり、断面は長方形を呈する。茎尻から7.3cmの位置に、直径0.45cmの目釘穴がある。茎部には糸巻きと漆が認められる。糸巻きは直線であり、その接合方法も柄が刃部まで食い込む部分の「突出部」を作らずに、V字形の鉄製拵の後半部分に接して固定するものと考えられる。残存する状況から柄は通常ヤリに見られる杏仁形でなく円形と考えている。

類似するヤリ先はあまり例をみない。先にあげた榎現山51号墳が最も近い形状であり製作時期は副葬品から3世紀と考えられる。



写真22 ヤリ2の細部

図70-3は、棺外西側から出土した鉄ヤリ1点で、ヤリ3として取り上げた。鉄ヤリ3の全長は52.0cmを測り、庭島塚古墳出土した3本のヤリ先の中で最も長い寸法をもつ。身部の長さ40cmで、刃幅3.1cmで、関部分で4.0cmを測る。最大厚は7mmでやや薄い。茎部は幅1.7cm、厚さ8mmの断面が長方形を呈する。目釘孔が1ヶ所あり、径4mmであった。柄の装着は4枚合せ式の糸巻き頂点型であった。最大厚2.0cmを測る。柄の装着部分とヤリの切っ先に「忍ヶ丘系」の直弧文が施された漆膜が見られた。柄の部分に見られた漆膜は糸巻きの上に残ることから鞘口に施された直弧文と考えられ、さらに切っ先部で検出した直弧文は鞘尻に施されていたことになろう。鞘については、身部にはまったく木質が確認されていないことから皮裂と想定される。なお、遺存していた柄の木質部を鑑定したところ広葉樹木材を使用していることが報告されている(註3)。茎部の延長上には筒形銅器1があり、鉄ヤリ3の石突と考えている。両者の距離は2.4mを測る。

3点の鉄ヤリが出土した庭島塚古墳では、副葬された鉄ヤリ2点が筒形銅器の石突をもつものである。筒形銅器には鳴子が入った共鳴具の機能をもつ石突であり、取り付けられたヤリは特殊な機能をもつものであうか。また、鉄ヤリ2に見られた形態は、類似資料が少なく本来の武器としての機能も詳らかでない。柄の断面が円形を呈する長柄に装着する鉄製武器の出土例を待ちたい。

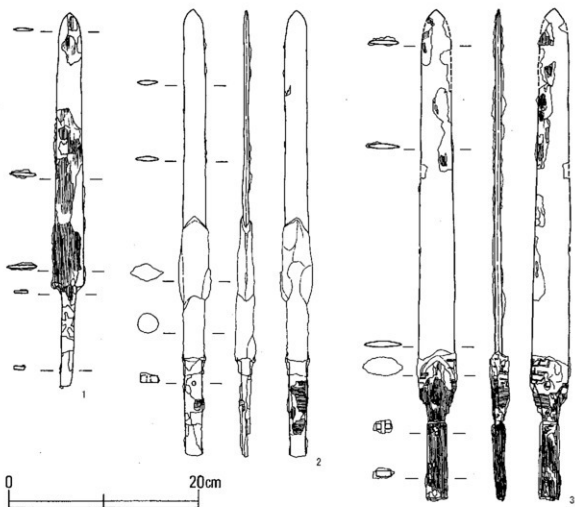


図70 鉄ヤリ1・鉄ヤリ2・鉄ヤリ3実測図

## 【箆手】

庭島塚古墳で確認された武器に箆手があげられる。出土地点は棺外東側の南寄り、箆手を広げた状態で検出した。細長い鉄板9枚によって構成され、前腕部を防御するため装着時は筒状を呈する。

図71の上段の実測図は、箆手を広げた状態の展開図で手首側を下にした。便宜上、図の左から板1、板2……と番号を附し、一番右側が板9となる。

箆手は形状から左右どちらの腕に装着するか判断できなかったが、後述する西側の箆手と考えられる鉄製品の存在から左手用の可能性が高い。

箆手の大きさは、広げた状態で幅約22cmを測る。幅約3cmの鉄板を長さ約11.5cmの短い板2枚、長さ約21.6cmの長板7枚で合わせる。復原図の左から2枚目と8枚目の鉄板の片方を曲線にカットしている。鉄板の長辺には縦孔が、短辺には覆輪が認められる。

イは長さ1.3cm、長辺幅3.0cm、短辺幅残存で1.1cm、復原2.5cm縦孔の間隔3.0～3.5cm。覆輪孔1.0cm。1.5cm。2.5cm。

ロは長さ21.4cm、手首側幅2.6cm。肘側の長さ13.0cmで斜めにカットされた鉄板は流線型に収束する。幅2.4cm。

ハは一部欠損する広端側3.5cm、狭端側2.5cm。覆輪孔間隔2.5cm。

ニは広端側は欠損。短端幅2.7cm。長さは不明。

ホは広端側に近い幅は2.9cm、狭端側に近い幅は2.5cm。

ヘは広端側に近い幅は3.1cm、狭端側に近い幅は2.6cm。

リは広端幅は3.4cm、狭端側に近い幅は2.3cm

チは長さ21.7cmで、長さ13.0cmで斜めにカット。1.7cmの幅手首幅2.1cm。

リは長さ11.8cm、手首2.6cm、肘側復原幅3.2cm。縦孔間隔2.2～2.5cm。覆輪孔間隔1.0cm。4.5cm。3.0cm。2.5cm。

革綴短甲に使用されている革綴の方法は末永雅雄氏によって、概観から第1手法と第2手法の2種類存在することが指摘された。小林行雄氏によって第1手法は重ね合わせる2枚の鉄板の穿孔孔位置が一致しないものとしている。

図71の下段の実測図は、木棺西側の粘土槨が陥没している地点から出土した鉄板であり、調査時は性格不明の遺物であった。保存処理を終え、幾つかの破片が接合した。ところ、湾曲するその形状から箆手の残骸と判断した。図化し得て14片を提示した。

1は両側辺が残る破片で、3.8cm、3.5cm、残存する長さ7.3cm。

2は両側辺が残る破片。3.5cm、3.1cm、残存する長さ7.0cm。

3は両側辺が残る破片。3.5cm、残存する長さ5.7cm。

4は残存幅3.3cm、残存長さ6.8cm。

5は残存幅3.0cm、残存長さ5.2cm。

6は両側辺が残る破片。2.5cm、2.2cm、残存する長さ5.3cm。

7は両側辺が残る破片。2.1cm、1.9cm、残存する長さ5.3cm。

8は残存幅2.7cm、残存長さ4.6cm。孔が確認できない。

9は残存幅2.3cm、残存長さ3.8cm。

10は残存幅2.3cm、残存長さ4.8cm。

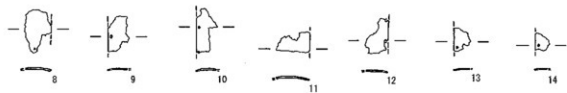
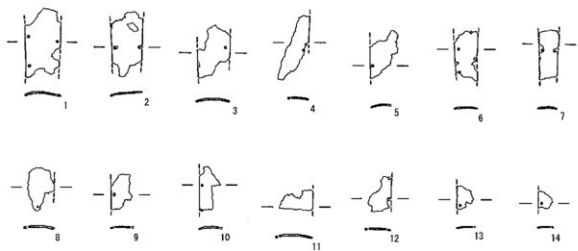
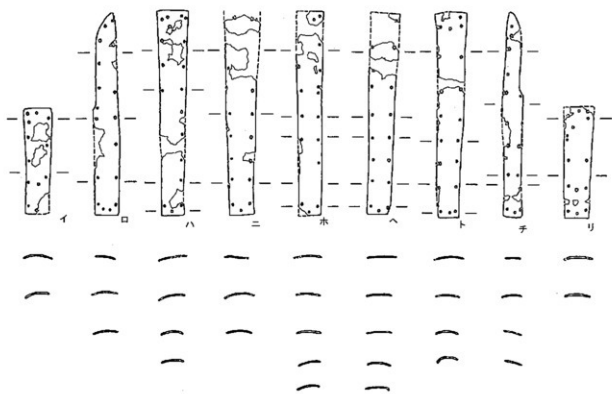


图71 箭手实测图



11は残存幅3.6cm、残存長さ2.2cm。

12は残存幅2.4cm、残存長さ3.8cm。

13は残存幅1.8cm、残存長さ2.5cm。

14は残存幅1.6cm、残存長さ1.9cm。

古墳時代前期の鉄製箆手は紫金山古墳、富雄丸山古墳、手古塚古墳の3基から出土しているだけで希少な遺物のひとつといえる。

手古塚古墳から出土した箆手は鉄板を曲げて作った箆手で、橋本達也氏の観察によれば形態は鉄板を合わせただけの単純な作りで絹と思われる布包覆輪を施すと報告されている。系譜など不明とされている。

庭鳥塚古墳のように鉄板を革綴した作りは、革組覆輪を施し、開閉部は密な穿孔を施す。堅矧板革綴短甲の製作技術に共通することから、同一系譜上に成立したと橋本氏は考えている。

古墳時代前期の鉄製付属武器には箆手しかなく、中期の甲冑類には箆手は存在しない。したがって、庭鳥塚古墳では鉄製甲冑が確認されていないが、組み合わせから甲冑類が副葬されていた可能性が高い。北側小口から出土した漆膜は有機質甲冑の存在も思慮せねばならない。

- 注1) 質鑑定は京都大学名誉教授 伊藤隆夫による。
- 注2) 分類にあたり次の文献をもとにした。①杉山秀宏2003「古墳時代の鉄鏡」『考古資料大観』7、小学館、②水野敏典2003「古墳時代中期における鉄鏡の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第14、③川畑純2009「前・中期古墳副葬鉄の変遷とその意義」『史林』92巻2号
- 注3) 質鑑定は京都大学名誉教授 伊藤隆夫による。

- 文献1) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」
- 文献2) 森田稔1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』
- 文献3) 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2
- 文献4) 鈴木重治1990「京焼と京焼写し－生産と流通－」『江戸の陶磁器』（江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨）
- 文献5) 小林行雄1971「三角緑神獸鏡の研究－型式分類編－」『京都大学文学部紀要』第13（『古墳文化論考』平凡社1976所収）
- 文献6) 新納 泉1991「権現山鏡群の型式学的位置」『権現山51号墳』
- 文献7) 澤田秀美1993「三角緑神獸鏡の製作動向」『法政考古』19
- 文献8) 磐田市教育委員会2006『新豊院山古墳群D地点の発掘調査』
- 文献9) 京都大学文学部1989「椽井大塚山古墳と三角緑神獸鏡」
- 文献10) 岸本直文1989「三角緑神獸鏡製作の工人」『史林』第72巻第5号
- 文献11) 磐田市教育委員会2006『新豊院山古墳群D地点の発掘調査』
- 文献12) 西田守夫1971「三角緑神獸鏡の形式系諸緒説」『東京国立博物館紀要』第6号
- 文献13) 福永伸哉1996「船載三角緑神獸鏡の製作年代」『待兼山論叢』第30号
- 文献14) 新納 泉1991「権現山鏡群の型式学的位置」『権現山51号墳』
- 文献15) 田中晋作2006「筒形銅器についてⅡ（上）・（下）」『古代学研究』第173号・第174号
- 文献16) 田中晋作2009「筒形銅器と政權交替」
- 文献17) 申敬澈2004「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集』
- 文献18) 武藤誠1977「中井俊顕『集古群輯』について」『兵庫県の古社寺と遺跡』武藤誠先生古稀記念会
- 文献19) 岩本崇2006「筒形銅器の生産と流通」『日本考古学』第22号
- 文献20) 川西宏幸1990「儀仗の矢鏃」『考古学雑誌』76-2
- 文献21) 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏡について」『橿原考古学研究所論集第8集』
- 文献22) 大阪市文化財協会2002「瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ」
- 文献23) 鈴木一有2002「振りりと渦巻き」『考古学論文集東海之路』
- 文献24) 奈良県立橿原考古学研究室2003『岩清水ラジカ谷古墳群』
- 文献25) 高田健一1997「古墳時代銅鏡の生産と流通」『待兼山論集』第31号
- 文献26) 伊藤実1993「日本古代の鋸」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集』
- 文献27) 古瀬清秀1991「農工具」『古墳時代の研究』第8巻
- 文献28) 柴田常恵1953「口吉加瀬古墳」

参考文献

- 相田則美1984「愛媛県伊予市吹上の森1号墳の出土遺物」『社会科』学研究』第8号
- 相田則美1985「古墳時代前期の松山平野（下）-墳輪の検討を中心に-」『伊豫史談259』
- 出雲市教育委員会1986『山地古墳発掘調査報告書』
- 庵原村教育委員会1961『三池平古墳』
- 梅原末治1933『讃岐高松石清尾山石塚の研究』
- 大阪市文化財協会2002『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 大谷宏治2004「赤門上古墳の実態-副葬品の再調査と権現山七号墳との関係-」『浜北市史』資料編
- 交野市教育委員会2000『交野東塚古墳〔調査編〕』
- 加藤徹「副葬状況からみた袋状鉄斧の地域性と機能について-古墳時代前期を中心として-」『川越哲志先生退官記念論文集 考古論集』
- 川畑純2009「前期・中期古墳副葬鐵の変遷とその意義」『史林』92-2
- 『権現山51号墳』刊行会1991『権現山51号墳』
- 阪口英毅2005「紫金山古墳出土鉄鏃の構成と副葬状況」『紫金山古墳の研究』
- 滋賀県1938「安土瓢箪山古墳」『滋賀県史蹟調査報告』第7冊
- 末永雅雄編1991『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』
- 鈴木一有1999「古墳時代中期前半における鉄鏃組成」『五ヶ山B2号墳』浅羽町教育委員会
- 鈴木一有2002「振りと渦巻き」『考古学論文集東海の路』
- 田中晋作2006「筒形銅器についてⅡ（上）・（下）」『古代学研究』第173号・第174号
- 田邊朋宏2001「三角縁神獸鏡の細部表現について-鈕座を中心に-」『立命館大学考古論集』Ⅱ
- 豊島直博2003「ヤリの出現」『古代武器研究』4
- 豊島直博2008「古墳時代前期の鉄製刀剣」
- 奈良県橿原考古学研究所1981『新沢千塚古墳群』
- 橋本達也1996「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究 考察篇』
- 原久仁子2007「筒形銅器研究の問題点」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』
- 松木武彦1991「前期古墳副葬鐵の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号
- 松木武彦1991「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価」『考古学研究』第39巻第1号
- 松木武彦1996「前期古墳副葬鐵群の成立過程と構成」『雪野山古墳の研究』
- 武藤誠1977「中井俊顕『集古群編』について」『兵庫県古社寺と遺跡』武藤誠先生古希記念会
- 森本六爾1929『川柳村將軍塚の研究』
- 山田良三1969「尼塚古墳発掘調査報告」『立命館文学』7

## IV. まとめ

### 古墳の立地

大阪府羽曳野市東飯田に所在する庭鳥塚古墳は、昭和40年の後半に発見され、東西17m、南北22mの方墳であると報告された。その存在は一部の研究者には知られていたが、古墳の築造時期などは確定されていなかった。これは、古墳の出土遺物が知られていないことや墳丘から遺物が表採できなかったことに起因する。私は、昭和54年に大阪府教育委員会が実施した調査で巫女形の人物埴輪が出土している点と3mに及ぶ墳丘の高さに注目した。つまり、巫女形埴輪の出土地点は削平された古墳の存在を示唆する遺物であり、高い墳丘は横穴式石室が埋葬施設の採用されているのであろうと考えた。それは、喜志から広瀬にかけて中段丘には古墳時代後期の小古墳墳群としての一つが庭鳥塚古墳であろうとした。そして、庭鳥塚古墳は古墳築造後の土地改変から逃れて墳丘が保存されたのであろうと推測したのである。

しかし、その予測は平成17年に粘土椀の発見によって覆えられたのである。庭鳥塚古墳は発見された埋葬施設によって、古墳時代前期から中期に築かれた古墳と判明した。そして、庭鳥塚古墳の存在により前期古墳の分布を新たに考えさせられることとなった。

### 前期古墳の分布

羽曳野市内に分布する前期古墳は、駒ヶ谷の丘陵尾根には北から駒ヶ谷北古墳、狐塚古墳、駒ヶ谷宮山古墳の3基が分布していた。また、壺井の地域でも北から丸山古墳、御旅山古墳、通法寺裏山古墳の3基と太子町になるが九流谷古墳が南北に一定間隔に築かれている。

この6基の古墳が分布する駒ヶ谷、壺井の2地域は石川の右岸に位置する。対して、石川の左岸に前期古墳を求めると、古市古墳群内にある五手治古墳の1基のみで、前期古墳の分布が希薄な地域であった。庭鳥塚古墳の存在により古墳の分布が新たに1基加わることとなった。さらに、かつて喜田貞吉氏によって軽里に所在する瓢形の古墳が前期の前方後円墳とわかった。羽曳野市の南に目を転じれば富田林市域では真名井古墳や甘山古墳が点在する分布状況を考える上で重要な発見となった。

図72は石川流域の前期古墳の分布図である。古墳名や概要は表11に対応している。羽曳野市内に分布する6基の前期古墳の墳丘は前方後円墳を採用している。それに対して庭鳥塚古墳の墳丘は前方後方墳を採用している点が注目できる。庭鳥塚古墳の墳丘は、昭和47年の墳丘側面図や調査当初の現状では24m前後の方墳と考えていた。調査をしている中に方墳の北側に突出部を見出し、平成18年度に測量で北北東に向く前方部を向ける前方後方墳であることが判った。南河内地域では太子町の九流谷古墳、富田林市の板持3号墳の2基の墳丘に前方後方墳が見ることができ、古墳時代前期後半に前方後円墳から前方後方墳に取って代るようで、いずれも前代から継続する古墳が存在し系譜的に連続している。ところが、庭鳥塚古墳は周辺に系譜が繋がる古墳が見られず、単独で築かれている。

番号	古墳名	墳形	埴輪	埋葬施設	副葬品				
					鏡	玉	腕飾	武器	その他
1	松岳山	前方後円墳	円	竪穴	●	●	●	●	石杵
2	茶臼山	長方形墳	円	竪穴	●				
3	向井茶山臼塚	円墳?		竪穴?	●				
4	市場茶臼塚	円墳?		?					
5	ヌク谷北塚	?	円	粘土	●	●	●	●	鉄斧
6	ヌク谷南塚	円墳		竪穴?		●		●	
7	ヌク谷東ノ大塚	円墳		竪穴?			●		
8	ヌク谷芝山西	円墳?	円	?					
9	ヌク谷芝山東	円墳?	円	?					
10	玉手山 1	前方後円墳	円	竪穴(粘土)					
11	玉手山 2	前方後円墳	円	竪穴					
12	玉手山 3	前方後円墳	円	竪穴				●	
13	玉手山 4	前方後円墳	円	粘土		●		●	鉄斧
14	玉手山 5	前方後円墳	円	竪穴(粘土)		●	●	●	巴
15	玉手山 6	前方後円墳	円	竪穴	●	●	●	●	
16	玉手山 7	前方後円墳	円	竪穴					合子
17	玉手山 8	前方後円墳	円	竪穴					
18	玉手山 9	前方後円墳	円	竪穴		●		●	琴柱
19	玉手山 10	前方後円墳	円	竪穴(粘土)	●	●		●	
20	玉手山 11	前方後円墳	円	竪穴					
21	玉手山 13	前方後円墳	円	竪穴					
22	玉手山 14	前方後円墳	円	竪穴					
23	駒ヶ谷北	前方後円墳	円	竪穴	●			●	
24	狐塚	前方後円墳	円	竪穴		●			杵形
25	駒ヶ谷宮山	前方後円墳	円	竪穴(粘土)	●	●	●	●	鉄斧
26	壺井丸山	前方後円墳		粘土?					
27	御旅山	前方後円墳	楕円・壘	粘土	●			●	鉄斧
28	通法寺裏山	前方後円墳	円・形	粘土?					
29	九流谷	前方後方墳	円・形	粘土?					
30	五手治	円墳	円・形	粘土?		●			
31	西山	前方後円墳	円・形	粘土?					
32	庭鳥塚	前方後円墳	円	粘土	●	●		●	鉄斧
33	美具久留御魂神社裏山 1号	前方後円墳	円	粘土?					
34	真名井	前方後円墳	円	粘土				●	鉄斧
35	甘山	前方後円墳		粘土?	●			●	
36	大師山	前方後円墳	円	粘土	●	●	●	●	
37	板持丸山	円墳	円・形	粘土	●				
38	板持 3	前方後円墳		粘土				●	鉄斧
39	寛弘寺 10	円墳	円	粘土					
40	寛弘寺 12	方墳							
41	寛弘寺 20	方墳	円	粘土					
42	寛弘寺 21	方墳							
43	寛弘寺 29	方墳		粘土					

表11 石川流域前期古墳一覽表

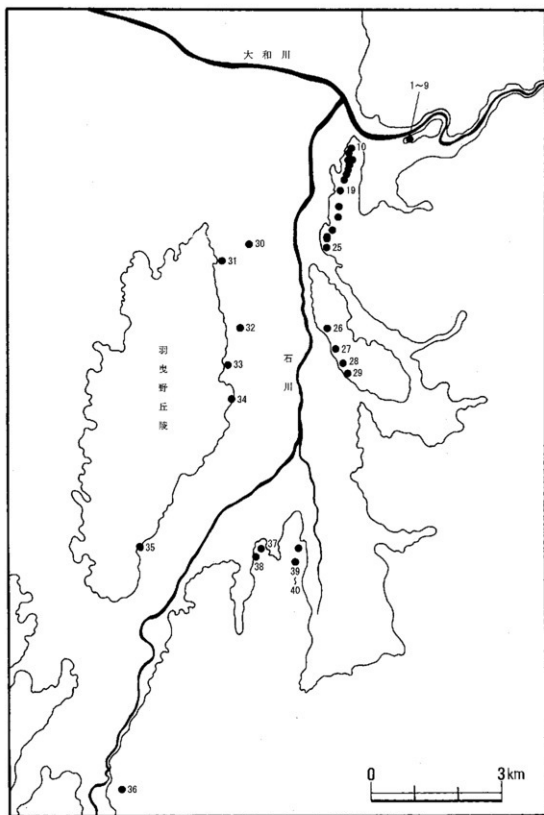


図72 石川流域前期古墳分布図

## 墳形の復原

墳丘は4年にわたる調査によって2段築成であることを明らかにした。トレンチ調査の成果から表12のとおり規模と図73に提示した墳丘図を復原することができた。以下、復原図にいたるまでの成果を列挙する。

墳丘の主軸を求めるのに第4トレンチで検出した円筒埴輪の位置と第12トレンチの第2段目のテラスで検出した葦石の基底部の距離が墳丘二段目の前方部幅であり、15mの数値を得、その前方部幅を二分して求めた。

後方は東側の二段目墳丘裾は改変で確認することができなかったで、前方部で得た主軸と第1トレンチと第6トレンチで検出した西側の葦石の基底部の距離を求め反転し、前方部で復原した主軸の延長上ラインで求めた。

復原した主軸での南北の墳丘裾は前方部北側の第7トレンチで確認できたものの後方部南側については第10トレンチのさらに南に位置することが明らかとなり、現状での墳丘長は56mとなる。したがって60mを超える前方後墳の墳丘規模は対岸に所在する九流谷古墳の70mとされている墳丘規模に匹敵する。南河内でも規模の大きい前方後墳になることが明らかとなった。

墳丘一段目は第15トレンチでくびれ部分の墳丘裾を検出することができた。後方部から延びる前方部は東側に広がるのではなく、後方部から直角に広がる状況であった。前方部で葦石が遺存していた第16トレンチは地滑りによる滑落で検出した葦石が復原した墳丘裾より外側で検出された結果とみている。

なお、前方部西側法面は改変により撥形に伸びるが本来は東側同様に後方部から直線的であった。また、後方部裾が削平されていたのは削られた墳丘の法面は、急斜面となりこれが「岸切り」と呼ばれる築城に際しての工法である可能性を考えれば、削られた理由が理解できる。削られた時期は、葦石直上の遺物から13世紀と考えている。

墳丘長		墳丘幅	
主軸	56m		
第1段(東側)墳丘裾	61m	第1段後方部	25m
		第1段前方部	20m
第2段(東側)墳丘裾	54m	第2段後方部	21m
		第2段前方部	15m
墳丘長平坦面		墳丘高	
後方部長	16m	後方部	6.1m
後方部幅	10m	前方部	4.0m
前方部長	20m	第1段目	2.4m
前方部幅	6m		

表12 墳丘各部計測値一覧表

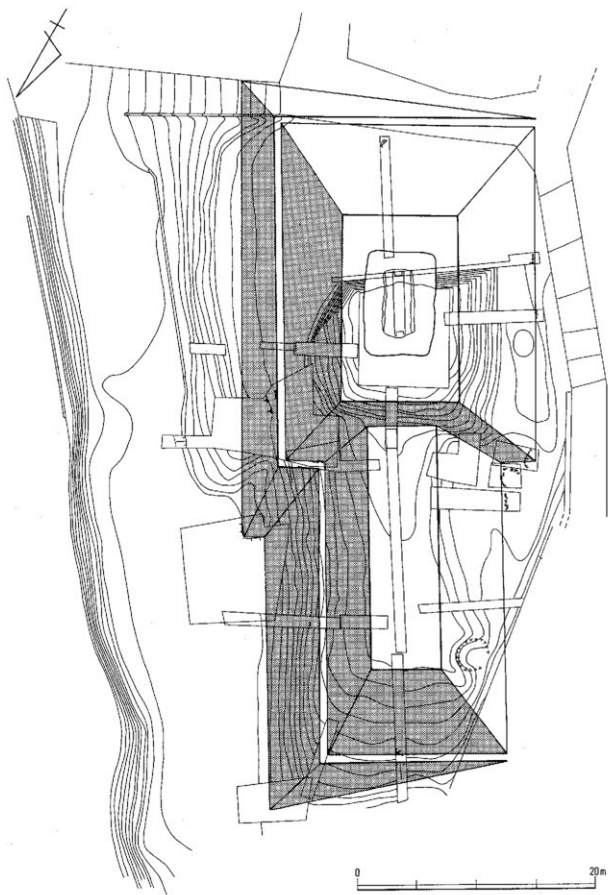


图73 增丘復原图



## 大阪府下の前方後方墳について

調査によって庭鳥塚古墳は前方後方墳を採用することが明らかとなった。墳丘に前方後方墳を採用する古墳は、府下においては表13にあげた15例が報告されている。その分布は大きくA～Dの4地域に築かれる。

Aとした三島地域は、淀川の右岸に位置する。古墳時代前期に築かれた弁天山古墳群では中期になって前方後方墳の弁天D2号墳が築かれる。その後、小古墳で構成される川西古墳群では前方後方墳の周濠をもつ川西1号墳、同2号墳が築かれている。

Bとした北河内地域では、寝屋川市の小路遺跡で丘陵の上に立地する溝を巡らした低墳丘をもつ前方後方墳周溝墓で、後世の開発等で墳丘が削平され埋葬施設が確認できない。北河内ではその後、丘陵に墳丘を築き、葦石で表面を覆う高塚系の古墳が交野市で築かれる。鍋塚古墳は検討の余地があるが、最古の前方後方墳と位置付けられている。交野市では時期が下るが古墳時代前期末に東車塚古墳においても前方後方墳が採用される。鍋塚古墳や東車塚古墳は周辺に古墳時代前期の古墳が築かれ、一つの墓域を形成する。

C地域とした中河内は河内平野に立地する。庄内期にあたる久宝寺遺跡1号墓は前方部の突出度も発展していない庄内期の末になって加美遺跡へ続くが前方部は短く、一般に墳墓とも言うべきものである。加美遺跡は周溝を伴い沖積平野に立地する。築造時期は周溝内から出土した土器は庄内期であり、府内でも前方後方墳形の古墳がいち早く出現したことになる。

そして庭鳥塚古墳が位置するD地域である南河内でも前方後方墳に混じって前方後方墳が丘陵尾根や段丘縁に築かれる。庭鳥塚古墳のほか九流谷古墳や板持3号墳が前期に位置付けられるが、平1号墳のように古墳時代の後期に属する前方後方墳も見られる。

No.	古墳名	所在地	墳丘長	外部施設	埋葬施設	棺形態	築造時期	備考
1	弁天山D2号墳	高槻市南平台	42	葦石・埴輪	木棺直葬3		5世紀	
2	川西1号墳	高槻市郡家新町	18	周溝	削平不明	削平不明	6世紀	
3	川西2号墳	高槻市郡家新町	22	周溝	削平不明	削平不明	6世紀	
4	鍋塚古墳	交野市森	60	葦石	竪穴式石室			
5	東車塚古墳	交野市寺村	65	埴輪	木棺直葬2		5世紀	
6	小路遺跡	寝屋川市小路	23	周溝・土器	削平不明	削平不明	3世紀前	
7	安堂5-1号墳	柏原市安堂	50		竪穴式石室			
8	久宝寺1号墳	八尾市久宝寺	17	周溝	木棺直葬		3世紀前	
9	久宝寺44号墳	八尾市久宝寺	34	周溝	削平不明	削平不明	3世紀前	
10	久宝寺古墳	八尾市北亀井	35	周溝・埴輪	削平不明	削平不明	4世紀中	
11	成法寺2号墳	八尾市光南町	20	周溝	削平不明	削平不明	3世紀前	
12	加美14号墳	大阪市平野区加美	14	周溝	削平不明	削平不明	3世紀前	
13	庭鳥塚古墳	羽曳野市東飯田	60	葦石・埴輪	粘土槨	組合せ	4世紀中	
14	九流谷古墳	太子町太子	70	埴輪	未調査		4世紀後	
15	板持3号墳	富田林市板持	40		木棺直葬		4世紀末	
16	平1号墳	富田林市梅の里	50		木棺直葬		6世紀	

表13 前方後方墳一覧

周溝を有するⅠ群と周溝を持たないⅡ群に類型化すると河内平野にⅠ群が多いことが指摘できる。

河内平野で見られた弥生から続く前方後方形の墓は一旦断絶し、布留になって前方後方の形をした古墳が出現する。それが庭鳥塚古墳である。前方後円墳が連続と築かれている南河内において新たな形式を採用する。前方部が主墳丘の二分の1以上に発達して規模が60mクラスの古墳は被葬者の性格に反映するものと考えられる。

墳形に見られる前方後方墳の性格は、象徴として捉えられる。奈良盆地の前方後方墳を検討した土部氏は出自に由来する家格を一目で表す機能と考えているが、傾聴に値する内容である。

墳形については、赤塚次郎氏によって分類された畿内型は正方形の後方に直線的な前方部をもつ（文献1）。庭鳥塚古墳の墳形も畿内型になるが、幅広に対して細身の墳形である。類例増加を待って検討しなければならないが、地域的なものと理解されよう。

墳丘長さが65mの東車塚古墳では三角板皮綴短甲が出土している。大型の前方後方墳が5世紀の初頭にも築造されること、副葬品に須恵器が伴う例が平1号墳で確認できるので終焉は5世紀末代と考えられる。

階層的な意味合いをもつ前方後方墳が突如でて出現することは新たな集団によるものであろうか。







	A 三島	B 北河内	C 中河内	D 南河内
庄内期				
布留期				 

図74 前方後方墳の変遷

## 外部施設について

古墳の南側は、墳丘裾が駐車場南側の道路敷きの下まで広がるため現状ではテラスの存在が明らかにはすることはできなかった。第1トレンチ、第5トレンチ、第9トレンチの所見から墳丘西側が2段築成であったとは現況の地形から考えられない。つまり、墳丘東側のみ段築を設けていることになる。

トレンチの断ち割りから、1段目が河岸段丘の段丘礫を掘削して前方後方墳形に成形して、第2段目を掘削した段丘礫を盛っていることが判っている。2段目の墳丘を築くにあたっての盛土工法は、緻密な土で土手状の高まりを幾つか盛って、その間に段丘礫を充填する。中段段丘の東縁に立地する理由は、地形をうまく利用して2段築成に築くためであった。

庭鳥塚古墳の墳丘には葦石と円筒埴輪を用いていた。葦石は川原石を用いて墳丘法面に葺いている。東側の墳丘裾を確認した第15トレンチでは葦石の転落石が確認されたが、第1段目には葦石が検出できなかった。第2段目と第1段目の葦石の有無は施工方法の使い分けと今のところ理解している。硬い地山を削っているので葦石を施行しなかった可能性を考えている。ただし、第16トレンチで検出した前方部東南斜面の石敷きは何らかの儀礼に伴う可能性を指摘するに止めたい。儀礼行為については遺物が出土していないため具体的には説明できない。

また、墳丘東側にある東西6～13m、南北約60mの平坦面は、第15トレンチの所見から古墳築造時の造成と考えられる。トレンチの断面を観察したところ、滞水していた状況を示す土層が認められなかったため、外周溝といえるような外部施設はこの平坦には存在しないことが明らかとなった。ただし、平坦面も古墳の一部であることは否定できない。その他の外部施設は、埴輪の樹立が平成17年の第4トレンチの墳丘裾で検出された。トレンチ内で1基のみの出土は、円筒埴輪の樹立は密接したものではなく、間を空けていたものと思われる。円筒埴輪の破片は、第4トレンチ以外では第8トレンチ、第10トレンチ、第11トレンチ、第12トレンチで出土しているが、その出土量は多くない。埴輪の樹立位置は、第8トレンチの墳丘上部で破片が発見されたことにより、前方部の墳頂平坦面に樹立されていたことが推測される。また、第11トレンチから出土していることから後方の北側にも樹立していたことが窺える。出土した円筒埴輪は、小破片であり全体を復原することはできなかった。スカシ孔や突帯の形状から古く位置づけられる。その他、出土した破片には朝顔形埴輪、形象埴輪が認められなかった。今のところ樹立されていた埴輪は円筒だけということになる。

外部施設ではないが、埴輪のほかに墳丘の東、西の両くびれ部から土師器の直口壺が出土している。西側から出土した直口壺は、第4トレンチで検出された円筒埴輪の中から壺の口縁を上にして押し潰された状況で出土している。儀礼に伴うものであろうか。東側から出土した土師器も直口壺で、第12トレンチから埴輪片とともに土師器片が多く出土した。別個体の破片が認められることから複数個の土師器を墳丘に置かれていたことが想像できる。

以上、段丘から墳丘を隔離するために南と北に掘削と考えられる施設が存在するが、盛土による墳丘部分に葦石を施し、円筒埴輪を樹立する演出効果を示す。

## 埋葬施設の検討

庭鳥塚古墳の埋葬施設は、後方部の中央に粘土礫が1基検出された。前方部においては平成20年度の第14トレンチでは埋葬施設の存在を示すような土層が今回確認できなかった。ただし、第14トレンチに平行して築かれた小規模な埋葬施設であれば見逃している可能性もある。

ここで、南河内における埋葬施設の中での庭鳥塚古墳の埋葬施設について位置づけを考えてみよう。埋葬施設を以下通り分類した。

### 竪穴式石室+割竹形木棺

割竹木棺の周囲を石材で囲んだ石室をもつ埋葬施設である。

玉手山9号墳、玉手山5号墳、茶臼塚古墳

### 竪穴式石室+剥貫石棺

石材を剥り貫いて作った石棺の周囲を板石で囲んだ石室をもつ埋葬施設である。

石棺は割竹形を呈している。

玉手山3号墳や形態は不明であるが玉手山2号墳などがあげられる。

### 竪穴式石室+組合式石棺

板石を組合せて作った石棺の周囲を板石で囲んだ石室におさめる埋葬施設である。

松岳山古墳があげられる。

### 粘土礫+割竹形木棺

巨木を剥り貫いた割竹形をした棺に粘土を巻いて保護する埋葬施設である。

駒ヶ谷北古墳、駒ヶ谷宮山古墳の前方部第2礫、ヌク谷北塚古墳

### 粘土礫+組み合わせ木棺

板材を組み合わせた棺に粘土で保護する埋葬施設である。

庭鳥塚古墳のほか、真名井古墳、玉手山10号墳、駒ヶ谷宮山古墳の前方部第1礫。

### 木棺直葬

箱式木棺を墓域に直接埋納し、棺を保護する施設は持たない。

板持3号墳

### 箱式石棺

板石を立て並べて被葬者を埋葬する空間を作っただけの埋葬施設。

玉手山4号墳隣接地

### 円筒棺・埴輪棺

棺として専用容器である円筒棺と古墳に並べられた円筒埴輪や盾形埴輪、朝顔形埴輪を棺桶として転用する埴輪棺とがある。両者とも棺を保護する施設は存在しない。

円筒棺は西山古墳で確認されている。埴輪棺は玉手山1号墳、玉手山4号墳隣接地、九流谷古墳隣接地、赤子山古墳下層、五手治古墳、西山古墳などがあげられる。

庭鳥塚古墳に見られた埋葬施設は組み合わせ木棺に粘土で覆うものである。同じ埋葬施設をもつ古墳の断面図を集成したのが図75である。

- ①は玉手山1号墳の前方部で確認された粘土礫である。
- ②は玉手山7号墳の後円部である。
- ③は玉手山5号墳の後円部。
- ④は玉手山4号墳。

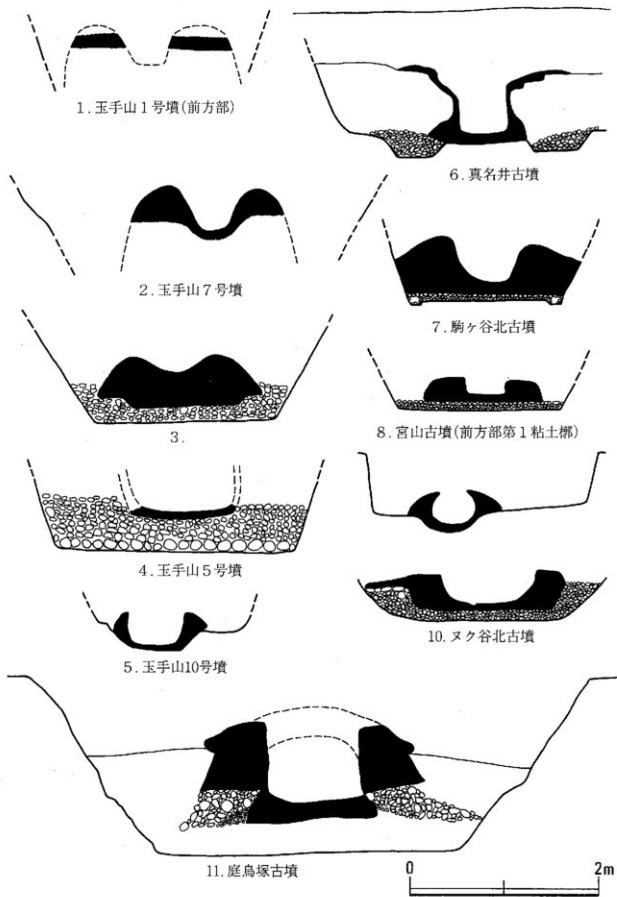


図75 南河内の前期古墳埋葬施設

- ⑤は玉手山10号墳の前方部。
- ⑥は真名井古墳。
- ⑦は駒ヶ谷北古墳。
- ⑧宮山古墳の前方部第1粘土槨。
- ⑨は宮山古墳の前方部第2粘土槨。
- ⑩はヌク谷北古墳の粘土槨。
- ⑪は庭鳥塚古墳である。

この埋葬施設はさらに定型化以前と定型化以後の二分することが提案されている。庭鳥塚古墳の構築方法は分類から定型化以後の構造と評価されている。古墳時代前期中葉頃から南河内は竪穴式石室から粘土槨へ移行する時期でもあり、棺の形態が割竹形を採用するのではなく斬新な組合せの木棺を使用していることが指摘できる。

粘土槨は木棺を包み込む施設であるが、庭鳥塚古墳の例は重厚な構造である。

## 埋葬施設の構築

後方で検出された粘土槨は、構築墓塚に丁寧な地業を施していることが断面から観察でき、以下の通り構築過程を復原できた。南側断面から考えられる埋葬施設の築造過程は図76、図77に提示した模式図を参照しながら、以下のとおり埋葬施設の築造過程を説明する。

庭鳥塚古墳の墳丘は2段築成で造られていることはすでに述べた。

### ①墓塚の構築。

墳丘2段目を平坦面から土手状に積み上げ、高さ1m程度で休止。墓塚法面を築くためにカットする。

### ②墓塚底の基礎地業

粘土を混ぜた小礫（A）を墓塚の底に敷き詰め、基礎を築く。その際、中央が少し高くなるように基台を築き、基台周辺に粘土を混入しない砂礫（B）で充填して平らな面をつくる。

### ③棺床粘土の設置

基台の上に棺床粘土（C）を設け、両脇に拳大の礫（D）を集積する。この礫は隙間が見られるので、排湿や排水の機能が考えられる。次に、拳大の礫の周囲に砂礫（E）を充填して平坦面をつくる。

### ④棺材の搬入と棺身組み合わせ

粘土棺床の上に組合せ式木棺の底板を安置し、引き続き木棺の小口板を挟むようにして側板を底板の上に置く。次に側板側に粘土（F）を置き、さらに粘土の外側に小礫（G）を貼り付けて葬を保護する。小礫（G）で保護された粘土槨の四周を砂礫（H）で充填し、平坦面を設けている。ここで粘土槨の築造作業が中断する。

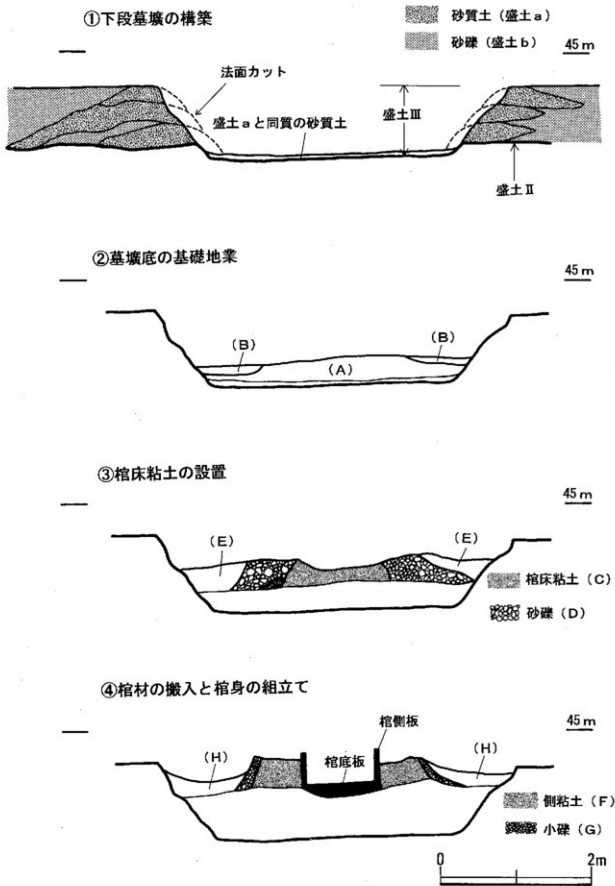
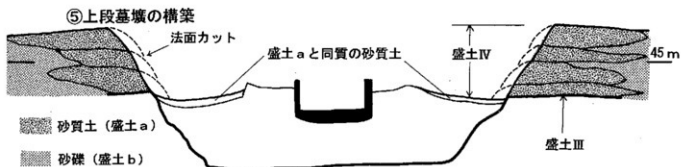
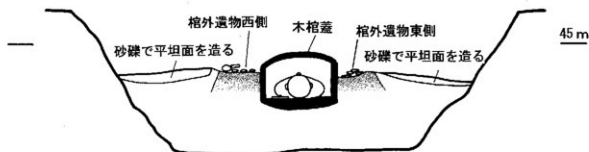


図76 埋葬施設築造過程模式図 (1)



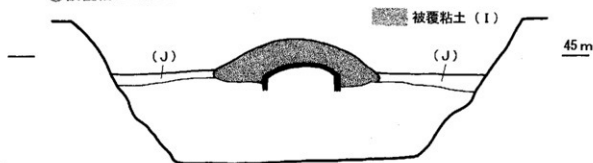


⑥棺蓋の搬入と儀礼



※被葬者と鏡の副葬を判りやすくするために頭位を逆にした (被葬者は北枕)

⑦被覆粘土の設置



⑧墓壇充填

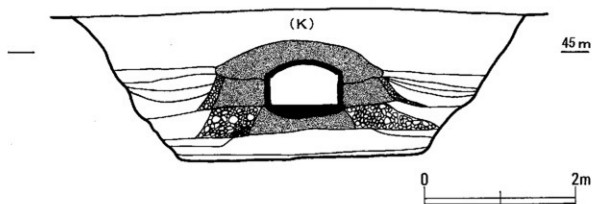


図77 埋葬施設築造過程模式図 (2)

#### ⑤墓壇の構築

この層には墓壇法面で見られた緻密な土が層状に堆積していた（盛土a）。ここで後方部の墳丘は完成するが墓壇内では開口した据え付けの木棺と礫で保護された粘土槨が露出している状況であったことが判る。つまり第4次盛土が完了後に遺体埋葬の儀礼を執り行われる「場」の設営が完了するのである。

#### ⑥棺蓋の搬入と儀礼

組み立てが完了した棺内に遺体を安置し、銅鏡、鉄刀、鉄剣、勾玉などの副葬品を納置する（棺内遺物）。

遺体納棺後、棺蓋を搬入・設置する。その後、棺の周辺（側板粘土の上面）に鉄刀4振、鉄剣4、鉄ヤリ（筒形銅器）を納置する。

鉄刀、鉄剣、鉄ヤリの上に鉄鍬、銅鍬を10本程度の束にして納置する（棺外遺物）。

#### ⑦被覆粘土の設置

棺蓋と棺外の副葬品を粘土（I）で被覆し、側粘土と被覆粘土の境目が見えなくなるまで墓壇内を砂礫（J）で充填する。赤色顔料を撒いて祭儀を実施。収納した遺体の保護・密封が完了する。

#### ⑧墓壇充填

墓壇上面まで砂礫（K）で充填する。

## 副葬品の検討

庭鳥塚古墳の銅鏡は「吾作鏡名三角縁四神四獣鏡」で、製作年代は福永氏の研究によれば240年代にあたる。埋葬にあたり副葬されたのは他の資料から350年以降となる。およそ100年のタイムラグが認められ、「伝世」という保有形態にあたる。森下章司氏の研究によって伝世の本質（背景）を保有主体が個人ではなく集団と考えられているが、庭鳥塚鏡も集団が保有していた可能性が高い。

銅鏡の出土状況は頭部に鏡背を上に向けて1枚が出土しているが、南河内における鏡の副葬位置をみると、⑤駒ヶ谷北古墳は、後円部に墳丘主軸に一致する方向に残存長6.5mの粘土槨が確認された。棺は割竹形木棺で北側が幅広く頭位は北と考えられる。鏡は北寄りに方格規矩鏡が1面出土している。

宮山古墳は、墳丘長65mの前方後円墳の後円部に壑穴式石室が1基、前方部に粘土槨が2基確認された。鏡は前方部の2つの粘土槨から出土している。③宮山古墳の前方部北側の粘土槨1は全長4.9mで箱形の木棺を納めていた。棺内の北寄りの床面に朱層が濃く遺存し、その中央に内行花文鏡が出土した。④宮山古墳の粘土槨2は長さ5.15mで幅は北側の方が広い。棺は割竹形を呈し、棺の幅員や両小口の高低で頭位は北側と考えられる。鏡は棺の中央から北寄りの木棺の外側に接して粘土槨に包蔵されている状況で出土した。鏡種は三角縁神獣鏡であった。

真名井古墳は、後円部に粘土槨が確認され、棺内中央の東寄りから鏡片と管玉があることから頭位は東側、足元に土師器の甕が据え置かれていた。頭部小口部に三角縁神獣鏡が鏡面を被葬者に向けてるように立てかけられて工具類とともに出土している。

⑥御旅山古墳は、調査で埋葬施設は後円部に1基が確認されている。わずかな痕跡から主軸に平行する墓塚が検出され、破壊された粘土槨があったと考えられている。副葬品が再埋納した石櫃のなかから22面の鏡が確認され、その中に三角縁神獣鏡が4面含まれていた。鏡に残る痕跡から副葬状況が並んで置かれていたことが判明したが、木棺のどの位置に副葬されていたかは明らかでない。

⑦国分ヌク谷北塚古墳は、大阪府柏原市国分町にある松岳山古墳の東側に隣接して営まれている古墳であるが、墳丘は早くに削平され、造成工事によって埋葬施設である粘土槨が出土した。割竹形木棺の北側に小口板で仕切る空間があり、そこに3面の鏡が棺に直行する形で並べられていた。

国分茶臼山  
船B・徐州鏡四神四獣  
船C・吾作鏡四神二獣

真名井

玉手山6号  
画文帝神獣

御旅山  
塚1・

茶臼塚  
徳・畷文帝三神三獣  
ヌク谷北塚  
徳Ⅲ・吾作三神三獣  
徳Ⅳ・吾作三神三獣

駒ヶ谷宮山

庭鳥塚

寛弘寺10号

表14 南河内前期古墳出土鏡一覧表

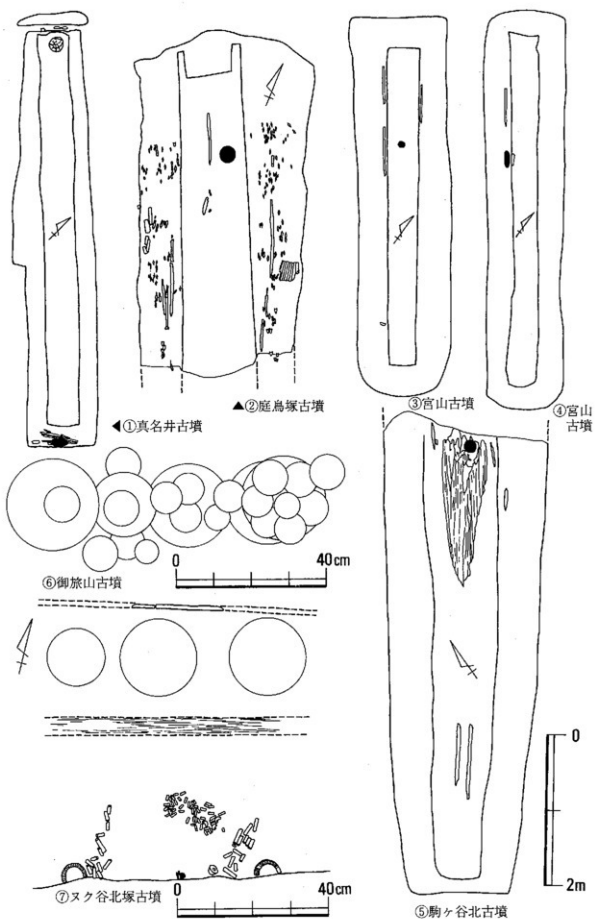


図78 南河内前期古墳鏡出土地点

## 副葬鉄について

庭鳥塚古墳から出土した鉄鏃135点と銅鏃56点は確認できた数量であって、削り取られた粘土梯部分に副葬されていたと考えられることから鉄や銅の鏃を装着した矢の保有量は現在確認されている前期古墳の中で多いといえる。

副葬された191本の矢を鏃別にグラフ化したのが表15の上である。表からは銅の鏃は柳葉式に限定でき鏃の29%を占める。銅鏃は、青銅製の有稜系鏃に属するが、出土した鏃は銅質の悪化が観察できる粗悪品であった。

対して、鉄鏃についてはパラティイに富み、その形態から7種類に分類した。先学によって分類されたされた鏃形式で出土鏃全体の割合は、「小型三角式」が最も多く15%で、続いて「柳葉式」が14%、「片鑄定角式」が11%、「両鑄定角式」が10%であり、「大型定角式」、「脇扶柳葉式」、「振りをくわえた鏃」が10%未満であった。これらの鏃身の平面的な特徴で区分したものである。機能、用途の差異に基づいた形式分類を考慮する場合にはこの区分方法が有効でないと指摘されていることも事実である。

そこで、ここでは古墳に副葬された鏃を「細根系」、「平根系」、「有稜系」の3系統に分けた松木武彦氏の分類案にしたがって、表15の下段に提示してみた。

庭鳥塚古墳では、鉄鏃が平根系、有稜系、細根系の3系統が確認され、系統が確認できた179本の鏃の内訳は、平根系鉄鏃が16%、有稜系鉄鏃が37%、細根系鉄鏃が16%、そして有稜系銅鏃が31%を占める。有稜系鏃が多く出土していることが表から読み取ることができる。銅製、鉄製合わせて7割である。また、細根系が庭鳥塚古墳では見ることができた。現在のところ石川流域ではこの手の鉄鏃は津堂城山古墳の出現を待たねばならない。

津堂城山古墳は出土した鉄鏃は細根系に限られ、銅鏃はまったく見ることができなかった。矢の保有形態は明らかに庭鳥塚古墳とは異なる。この差異を副葬された8面の銅鏡に三角縁神獸鏡を含まないなかったり、反対に庭鳥塚古墳で見られなかった車輪石、鏃形石の腕飾品や滑石製品、そのほか巴形銅器や三角板皮綴短甲の出土が報告されているので埋葬時期の違いと見ている。

円筒埴輪から庭鳥塚古墳より古く位置づけられる真名井古墳は、副葬された鉄鏃が6本確認されている。その内訳は平根系3本、有稜系3本で、細根系は確認できなかった。また、玉手山10号墳の鏃を見ると、後円部に架かれた竪穴式石室から鉄鏃と銅鏃が出土している。前者は脇扶柳葉式、平根系大型定角式、両鑄定角式、柳葉、後者は柳葉式6本、定角式2本が認められた。鉄鏃は13本で平根系が5本、有稜系が8本であった。

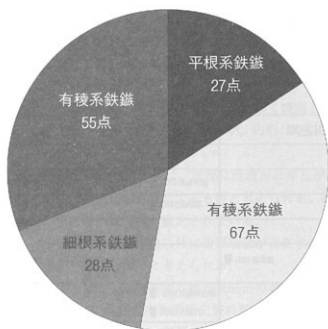
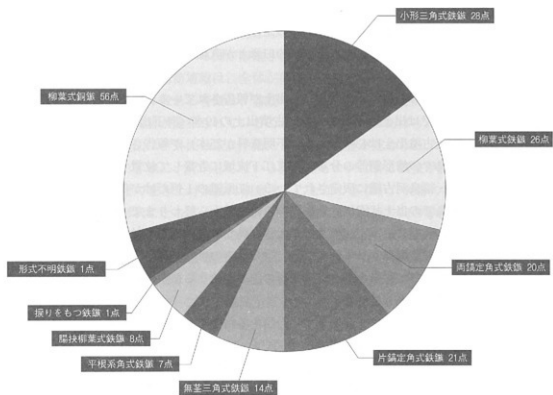


表15 出土鐵器の構成

## 筒形銅器について

庭鳥塚古墳から出土した2本の筒形銅器は、被葬者の頭部付近に置かれていた。そして、口縁部を南側、すなわち被葬者の足側を向ける状況であり、足元付近にはヤリ先が置かれていた。ヤリの茎と筒形銅器の口縁とが直線につながり、出土状況からヤリの石付と考えられる。

大阪府下からの筒形銅器は5点の出土が報告されているが、田中晋作氏の集成によれば日本列島では出土地不明の8本と古墳出土の49本（府下出土5本を含む）、朝鮮半島から68本（古墳出土は43本、出土地不明資料が25本）が報告されている。

朝鮮半島での筒形銅器の分布は洛東江下流域に近接して位置する大成洞古墳群、良洞里古墳群・福泉洞古墳に限定されている。江原道の1例だけが例外である。

朝鮮半島での出土状況は、筒形銅器の始まりから終わりまで一貫として複数副葬の比率が高く、時期によって複数比率が大きく異なる日本列島と対照的であることが指摘されている。複数副葬が日本列島で多く見られるのは庭鳥塚古墳の築造時期にあたる前期を二分した後半に該当する。筒形銅器の副葬が始まる前期前半、例えば紫金山古墳の事例では単体で出土している。

田中晋作氏によれば、前期後半に台頭する新興勢力と考えられる古墳に筒形銅器が副葬されていることを指摘している。

福永伸哉氏は、筒形銅器が出土した古墳の性格を仿製三角縁神獣鏡が大和盆地東南部の伝統的勢力によって配布されたのに対して、筒形銅器は大和盆地北部、河内平野の新興勢力によって配布されたものと考えている（福永伸哉1988「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格『青丘學術論集』第12集」）。

よって、筒形銅器から朝鮮半島の交渉を垣間見ることができると考えられる資料である。

埴輪編年	石川左岸	石川右岸
I-1		
I-2	香丹丸山(70) 罎	玉手山9(64) 罎
I-3	御旗山(45) 罎	玉手山8(80) 罎 玉手山6(89) 罎 玉手山3(95) 罎 玉手山2(80) 罎
I-4		玉手山5(75) 罎 玉手山1(107) 罎
I-5	庭鳥塚(65) 罎	神ヶ谷宮山(65) 罎 玉手山10(61) 罎 玉手山7(110) 罎
		鍋塚(90) 罎 玉手山4(60) 罎
II-2	玉手山(32) ● 西山(40) 罎	通法寺麓山(80) 罎 神ヶ谷北(50) 罎 九波谷(65) 罎
	III	深草城山(200) 罎

罎は遺構を築立しない古墳

\* ( ) 内の数値は墳丘長・単位 m

埴輪編年は埴輪検討会共通編年による

表16 埴輪から見た石川流域古墳編年

## 埴輪

報告書の最大の課題は、南河内の前期古墳なかで庭鳥塚古墳をどう位置付けるかである。そこで、検討する共通遺物として埴輪を取り上げる。他の古墳との比較する際に副葬品では、出土している例が限定されていることを考慮している。

庭鳥塚古墳の円筒埴輪は、全体が何える資料は現在のところ出土していない。出土した破片から読み取れる特徴は、器壁の厚みが0.7~1.0cmと薄いことである。また、胴部外面に赤色顔料が塗布されていることも特徴の一つにあげられよう。

製作の技法は、外面は工具や指によるナデ調整が認められ、整形に用いたと思われるタテハケを丁寧にナデ消している。内面もナデによる調整が施されている。したがって、粘土紐の巻き上げ痕跡は観察することができない。突帯の突出度は余り高くなく、断面が台形状になっている。スカシ孔の形状は、斜め方向の穿孔がある破片から正三角形と考えられる。穿孔方法については、突帯間隔が判る資料がないので、穿孔数などは断定できない。穿孔位置については、突帯の上や下に近接して穿たれていることから、偏る傾向が指摘できる。あるいは、正三角形や逆三角形の両者が同一段に存在する（例えば千鳥状に配列）ことも推測が可能であろう。また、今のところ円形スカシ孔になるような破片は確認できない。

以上、円筒埴輪について報告したが、朝顔形埴輪や形象埴輪の類は4年間の調査において出土していない。

羽曳野市内では、庭鳥塚古墳の前後に築かれた古墳として石川を挟んだ対岸の壘井・通法寺に所在する御旅山古墳、通法寺裏山古墳、九流谷古墳があげられ、出土した埴輪を参考に考えてみる。

御旅山古墳は、昭和42年に大阪府教育委員会が調査を実施し、墳丘長44.5mの前方後円墳であることが判明した。墳丘裾には壘形埴輪、前方部の2段目以上は筒埴輪が樹立されている（大阪府教育委員会1968）。大阪府教育委員会が所蔵している埴輪（コンテナー58箱）を再整理したところ、小片であるが楕円形埴輪が高い割合を示し、朝顔形埴輪は認められない。調整は、外面には板ナデ、ユビナデとタテハケがあり、内面には板ナデ、ユビナデとケズリが存在する。スカシ孔は、三角が多く確認され段に複数穿孔されている。三角形の他に方形、逆L字形が確認できるが、円形はないようだ。庭鳥塚古墳に比べ古い様相をもっている。

墳丘裾に囲繞されていた壘形埴輪は、底部に焼成前の穿孔がある二重口縁壺である。その形状から東四国（阿波）の影響によるものと考えられる。通法寺裏山古墳は、墳丘長60m程度の西向きの方後円墳と推定されている。

表採されている埴輪は、円筒埴輪以外に盾形埴輪が存在する。いずれも小片であるが、御旅山古墳や庭鳥塚古墳より後出と考えられる。

九流谷古墳は、太子町太子に所在する墳丘長65mの方後方墳で、埴輪片が表採されている（池田1998）。太子町立竹内街道歴史資料館が所蔵する円筒埴輪は、径20~30cmの規格が主流で、黒斑が見られる。突帯の断面形態は、台形もしくはM字形をしている。外面調整は、タテハケの後、断続的にヨコハケが見られる。家形や盾形と思われる形象埴輪の存在からも庭鳥塚古墳より後の築造で良いと思われる。



## 鉄ヤリ2の系譜

図79の2に提示した庭鳥塚古墳の棺外東側から出土した鉄ヤリ2は、関付近から身の中央付近まで二重の拵が施される特徴を呈する。類似する形態は図79の1に提示した岡山県の権現山51号墳の出土品に求めることができ、今のところ2点のみである。権現山古墳の庭鳥塚古墳に先行する3世紀代の資料である。

直接的な系譜を求めることができるか判らないがヤリの身の部分に鉄製の板で覆う従来見られるヤリ先と異なる資料が図79の3に提示した千葉県君津市の八重原1号墳と図79の4に提示した京都府宇治市の二子山古墳から出土している。

両者は供伴する遺物から5世紀後半に位置づけられる前者は、全長35cmを測る。槍身状の身部を別造りの柄装着部2枚で挟み込む。柄の断面は円形である。後者は、南墳から出土した「槍身矛」と仮称している資料で身と袋状柄装着部が一体となる通用の矛と伴に、槍身状の身部を別造りの装着部で挟み込む。

類例が少ない資料であり、武器の機能として槍や矛との違いがあるかは明確な答えをもたない。道具としての使われ方や性格については次の2点を考えている。

①通常長柄の武器にみられる刃先部分が厚く作られているのは柄を振り回す際に安定させるため重さをもたしている。②通常糸巻きである槍関節部分を鉄に代えて作成した儀礼用のヤリ先とした。

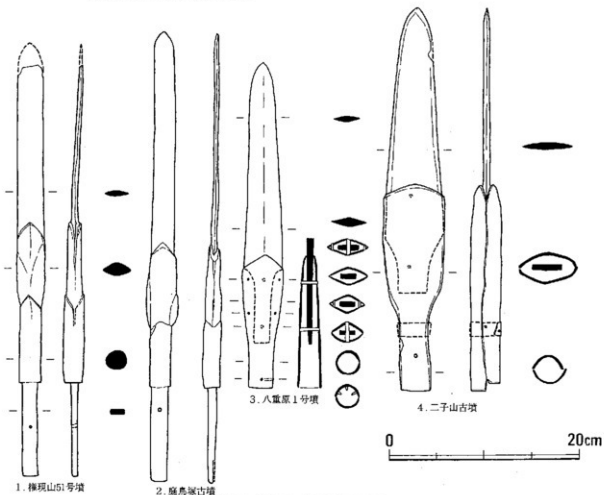


図79 鉄ヤリ2類例資料実測図

## 鋸について

古墳時代前期の古墳に副葬される工具類は鉄斧や鉋、刀子が一般的であるが、庭島塚古墳では鋸が出土した。

鋸は南河内の前期古墳では初例で、大阪府下でも茨木市の紫金山古墳、高槻市の弁天山C1号墳に次ぐ3例目で稀有な資料といえる。

鋸の副葬は、兵庫県たつの市権現山51号墳が最古例となり3世紀には行われている。副葬事例の増加は4世紀中葉からである。しかしながら副葬古墳は庭島塚古墳の事例を含めても前期古墳では22例を数える程度である。

鋸の副葬は中期以降、大阪府藤井寺市のアリ山古墳で代表される大量副葬の印象があり、前期古墳では単体の副葬である。

庭島塚古墳の鋸は、鉄斧や鉄鉋と違い柄が装着していたと推定できる木質部が鋸の両端に残っていた。刃先はすでに欠損していたが、現在の鋸に見られるようなナゲシといった切断にさいしての刃の工夫がなされていない。したがって、この工具をもって木材加工をしていたとはいささか考え難い状況である。ましてや、出土状況から祭式の道具立てに用いられたとは思えない。例えば、斧や鉋先、鋏先のなどのように大地を切り開く印象を与えうる工具をもって地域間の交流を示す。

№	古墳名	所在地	墳形(規模・m)	時期	出土数	蓋部	柄部	鑿部	文献
1	那須八幡塚	栃木県那須郡那須川町吉田八幡	前方後方(68)	4C後		無蓋	両柄	両鑿	『那須八幡塚』1957
2	大丸山	山梨県甲府市上向山	前方後円(120)	4C後		無蓋	不明		『大丸山古墳』『山梨県史跡名勝天然記念物報告』第5編1931
3	松林山	静岡県磐田市新貫	前方後円(116)	4C半		無蓋	不明	両鑿	青木繁夫1973『松林山古墳出土鉄器の保存処理と考古学の新知見について』『MUSEUM』№273 1973
4	舟木山24号	岐阜県本巣市郡府	円(20)	4C後					『岐阜県史』通史編 原始 1972
5	塚越古墳	愛知県安城市古井町塚越	前方後方(46)	4C中		無蓋	両柄	両鑿	『安城市歴史博物館研究紀要』4 1997
6	安土製菓山	滋賀県蒲生郡安土町富津	前方後円(162)	4C末		無蓋	両柄	両鑿	『滋賀県史蹟調査報告書』7 1933
7	富雄丸山	奈良県奈良市大和田丸山	円(86m)	4C末		無蓋	不明	不明	『富雄丸山古墳』1973
8	池ノ内6号	奈良県桜井市池ノ内	円(30)	4C末		無蓋	両柄	不明	『磐余・池ノ内古墳群』1973
9	メスリ	奈良県桜井市高田	前方後円(224)	4C前		無蓋	両柄	片鑿	『メスリ山古墳』1977
10	紫金山	大阪府茨木市宿久庄	前方後円(100)	4C前		無蓋	両柄	片鑿	『紫金山古墳の研究』2005
11	弁天山C1号	大阪府高槻市岡本	前方後円(70)	4C中		無蓋	両柄	片鑿	『弁天山古墳群の調査』1967
12	庭島塚	大阪府羽曳野市東飯田	前方後方(60)	4C後		無蓋	両柄	不明	『庭島塚古墳調査報告』2009
13	丸山1号	兵庫県丹波市山南町野坂	前方後円(48)	4C中		不明	両柄	両鑿	『兵庫県水上郡山南町丸山古墳群』1977
14	権現山51号	兵庫県たつの市御津町中島	前方後方(42.7)	4C前		無蓋	両柄	両鑿	『権現山51号墳』1991
15	花光寺山	岡山県瀬戸内市長船町殿部	前方後円(110)	4C後		無蓋	両柄	両鑿	『近畿地方古墳墓の調査』二 1937
16	神宮寺山	岡山県岡山市北方	前方後円(150)	4C末		無蓋	不明	両鑿	『岡山市史』古代編1962
17	馬山4号	鳥取県東伯郡湯梨浜町上橋津	前方後円(100)	4C中					『馬山古墳群』1962
18	池の上第1号	福岡県朝倉市埴池の上	方(15)	4C後					『池の上墳墓群』1979
19	向谷1号	福岡県春日市春日日向井谷	方(15)	4C末		不明	不明	両鑿	『春日地区遺跡群』V1987
20	阿志岐B26号	福岡県筑紫野市阿志岐	方(20)	4C後		無蓋	両柄	両鑿	『阿志岐古墳群』Ⅱ1985
21	エゲ	福岡県筑紫郡那珂川町	方(15)	4C中		無蓋	両柄	両鑿	『エゲ古墳』1988
22	井原1号	福岡県前原市井原	前方後円(43)	4C後		無蓋	不明	両鑿	『井原1号墳』2003

表16 古墳時代前期の鋸出土地名表

## 土器について

庭鳥塚古墳のくびれ部から出土した直口壺に類似する土器を図80に集成した。

最も似通っている資料は、柏原市の玉手山7号墳出土の土器4があげられる。特徴から布留Ⅱ式に該当する。

庭鳥塚古墳出土の土器5と比較すると口縁端部によりやや玉手山7号墳の土器が先行するものと思われる。

その他、土器3の京都府向日市の元稲荷古墳、土器6の奈良県天理市の東大寺山古墳、奈良県大和郡山市の小泉大塚古墳やがあげられる。

東大寺山古墳から出土した直口壺の製作時期は布留Ⅱ式の新しい時期に該当しよう。

直口壺から考えられる古墳の変遷は、玉手山7号墳から東大寺山古墳、少し遅れて庭鳥塚古墳といった前後関係となる。また、直口壺の実測図から玉手山7号墳の前に元稲荷山古墳が該当し、元稲荷山古墳の前に小泉大塚古墳となる。

玉手山7号墳の直口壺は、供献土器として墳丘テラス面に置かれた東大寺山古墳は円筒埴輪の内部に納められた事例は庭鳥塚古墳のと同じである。

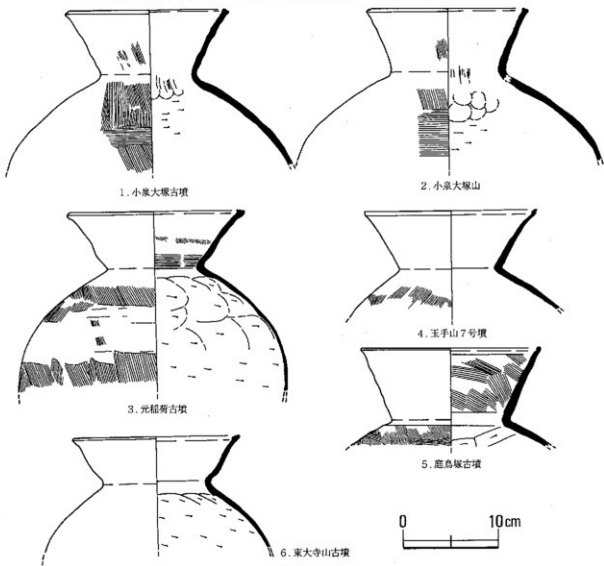


図80 土器

## 棺葬品の組成と特徴

棺内の副葬品は、銅鏡+勾玉+武器(刀剣)がセットで出土している。棺内から出土した武器の内外の刀剣類を見ると鉄刀が3振、鉄剣は2振である。

鉄鏡の点数は、粘土椀内の東側、西側の両者を合わせると135点であった。椀内の鉄鏡配列から推定すると、削平された粘土椀の南側にも副葬されていた可能性はある。そうすると、現況の出土点数に+aを考慮せねばならない。この出土点数は、前期古墳から出土した鉄鏡の量としては、多量副葬された椿井大塚山古墳(248点)、黒塚古墳(170点以上)、紫金山古墳(165点)に次ぐ量である。庭島塚古墳に近い保有量をもつ前期古墳として桜井茶白山古墳(124点)、長法寺南原古墳(123点)、園部垣内古墳(121点)がある。

確認できた鏡形式は7種類であった。出土した銅鏡の56点はすべて柳葉式であった。鏡身の保存状態が悪く、現状の全長が5.7cm前後を測る。図上から鏡身長4.2cmに復原でき、鏡身幅2.3cm。関の突出が一方で、関の厚みが0.5cmと薄い。平面外形のS字形も緩いながらも保たれている。類似品として妙見山古墳出土の柳葉式銅鏡をあげられている。

### 武具

庭島塚古墳で確認された武具は箠手があげられる。箠手は、棺外東側から広げた状況で出土した。鉄板9枚によって構成され、前腕部を防御するために装着時は筒状を呈する。形状から右手に着けるようである。大きさは、広げた状況で幅約22cmを測る。鉄板の長辺には縦孔が認められる。覆輪部は不明である。

前期の箠手は、奈良県富雄丸山古墳や大阪府紫金山古墳から出土している。

### 工具

工具には鉄斧・鉄鋸・鉄鋸がある。すべて、棺外西側から出土している。工具類の副葬される組成で多くみられる刀子やヤリガンナが1点も含まれない。鉄斧は、棺外西側で4点出土した。内訳は有袋鉄斧が3点、短冊形鉄斧が1点である。表面の錆びで柄の装着状況は、現状では観察できない。

鉄鋸は、直刃鋸で、古瀬清秀氏の大形式分類の中型鋸に該当する。鉄製鋸Ⅱ類に該当し、鉋鎌としての機能をもつ。

副葬品は棺内には古い鏡が1枚副葬されていた。出土した1枚の鏡は、三角縁神獸鏡で、被葬者の頭近くに副葬されていた。福永伸哉氏による分類では舶載B段階にあたり、古墳の築造より遡る舶載の三角縁神獸鏡となる。初期ヤマト政権を介して入手して、埋葬までに保有していたことになる。そこに庭島塚古墳の発見が重要な意義をもつものに違いない。そして、唯一の玉類である翡翠製勾玉と鉄刀、短剣が共伴する。腕飾石製品類は一切出土しなかった。

木棺の東西に粘土椀上面に配していた遺物は筒形銅器2本、鉄鏡135本、銅鏡56本、鉄斧4点、鉄鉋1点、鉄鋸1点、鉄刀3振、鉄剣2振、鉄ヤリ3本、箠手、藪、弓?など武器の類は多く納められたが、武具は箠手が認められただけで甲冑は確認できなかった。

## 南河内地域の武器・武具組成

庭島塚古墳が立地する石川流域には、玉手山古墳群や寛弘寺古墳群など古墳時代前期に築かれた古墳群のほか全長60m前後の前方後円墳が散在する。竪穴式石槨を埋葬施設にもつ玉手山古墳群以外は、粘土槨や木棺直葬を採用し“南河内”というひとつの地域色を持つ。遺物の組成にも特色を有するようで、例えば22面の銅鏡が出土した御旅山古墳や大師山古墳では鉄形石・車輪石・石剣などの腕飾石製品が大量に副葬されていた。

石川流域に限って前期古墳から出土した武器・武具の組成を見ると、竪穴式石槨を埋葬施設にもつ玉手山5号墳から碧玉製管玉、鉄形石、巴形銅器、鉄鏃、銅鏃、刀子、短冊状鉄斧が出土した。同5号墳の後円部粘土槨からは、鉄斧、ヤリガンナ、鉄鏃が、前方部北粘土槨では紡錘車形石製品、鉄刀、鉄剣、鉄製工具類が、前方部南粘土槨では石剣、ヤリガンナが見られた。

玉手山6号墳の中央竪穴式石槨からは、銅鏡、石剣、碧玉製管玉、鉄刀、鉄剣、刀子が出土し、東竪穴式石槨からは銅鏡、硬玉製勾玉、短冊形鉄斧が出土している。

玉手山9号墳は盗掘され、副葬品はわずかに琴柱形石製品、ガラス玉、鉄剣、鉄斧、勾玉が遺存していた。

玉手山10号墳では、後円部竪穴式石槨から硬玉製勾玉、滑石製勾玉、碧玉製管玉、銅鏃、鉄鏃、鉄刀、鉄剣、鉄矛、銛、斧、鎌、鉄、刀子が、前方部粘土槨から銅鏡、鉄鏃、鉄剣が出土している。

粘土槨を埋葬施設にもつ玉手山4号墳では、勾玉、紡錘車形石製品、鉄刀、鉄剣、鉄斧、鉄鏃、銅鏃、盾が、狐塚古墳では杵形石製品・硬玉製勾玉・碧玉製管玉・ガラス玉が、駒ヶ谷北古墳では方格規矩鏡・鉄刀・鉄鏃・鉄鎌?・鉄剣?が出土している。

駒ヶ谷宮山古墳は、後円部竪穴式石槨から硬玉製勾玉・碧玉製管玉・ガラス製小玉、石剣、鉄剣が、前方部粘土槨1から内行花文鏡、鉄刀、鉄剣、鉄斧が、前方部粘土槨2から三角縁神獸鏡、鉄刀が出土している。

銅鏡22面が出土した壺井御旅山古墳は、鉄剣、鉄斧、銅鏃が認められている。真名井古墳は、三角縁神獸鏡と平縁銅鏡に碧玉製管玉、紡錘車形石製品、鉄刀、鉄鏃、鉄斧、ヤリガンナ、刀子が伴う。甘山古墳では、銅鏃、刀剣が報告されている。

壺井御旅山古墳や真名井古墳より少し築造時期が下る宮林古墳では、鉄鏃、鉄剣、鉄斧が出土し、板持3号墳では重圍文鏡、剣、銅鏃、鉄鏃と鉄斧や銅鏃が共存する。

津堂城山古墳からは、8面の銅鏡（三角縁神獸鏡を含まず）をはじめ硬玉勾玉、碧玉製管玉、車輪石、鉄形石、滑石剣、滑石刀子、滑石鏃、滑石勾玉、巴形銅器、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、三角板革綴短甲の出土が報告されている。古市古墳群の築造は津堂城山古墳を嚆矢とするが、この時期に定型化した短甲が副葬品の組成に見られ始める。津堂城山古墳より時期が下る盾塚古墳では武器・武具の多量副葬が見られた。

## 築造時期

埋葬施設の粘土椀の存在から出土遺物から古墳時代前期後半（4世紀中頃～後葉）の築造時期と推定される。

出土した埴輪は、破片からは断定しにくいがⅡ期になる。

出土した土師器直口壺は、布留Ⅱ式に相当すると考えられる。

細根系鉄鏃に限られる津堂城山古墳は、銅鏃がまったく見ることができなかった。そのほか8面の銅鏡が副葬されていたが三角縁神獸鏡を含まていなかった。反対に庭鳥塚古墳で見られなかった車輪石、楕形石の腕飾品や滑石製品、そのほか巴形銅器や三角板皮綴短甲の出土が報告されている。以上のことから津堂城山古墳の埋葬時期よりも古く位置づけられる。

以上、庭鳥塚古墳の築造時期は古墳時代の前期を前半と後半に二分した年代観で考えると前期後半に位置づけられる。後半でも前半に限りなく近い。周辺古墳では紫金山古墳より新しく、津堂城山古墳までは行かない。したがって、古市古墳群築造以前となる。

## 被葬者像

その被葬者は総数191本プラスαの鉄鏃・銅鏃を木棺の両脇に副葬していた。武人的性格が浮かびあがり、小型三角鏃や振りを加えた鏃などは最新の鉄鏃形式を取り入れている。さらに武器と一緒に副葬された筒形銅器もまた一早く手に入れた品であるので朝鮮半島との地域間交流が垣間見ることができる。

田中晋作氏によれば、前期後半に台頭する新興勢力と考えられる古墳に筒形銅器が副葬されていることを指摘している。

福永伸哉氏は、筒形銅器が出土した古墳の性格を倣製三角縁神獸鏡が大和盆地東南部の伝統的勢力によって配布されたのに対して、筒形銅器は大和盆地北部、河内平野の新興勢力によって配布されたものと考えている。

前期古墳が知られていなかった石川左岸城の東阪田での首長墓の発見は、言い換えれば古墳時代前期後半段階に新たな勢力の存在が確認されたことになる。

田中晋作氏は「広開土王碑文」にみえる「辛卯年（391）」以降、倭の朝鮮半島の大規模な軍事的侵攻により定型化した甲冑の副葬が始まるとした。七支刀の銘文にみられる「泰和4年（369）」の加耶南部を介した倭と百済の通交関係が成立した時期を前後することと考えている（季刊考古学90号）。

参考文献

- 赤塚次郎1992「前方後方墳」『季刊考古学』第40号  
赤塚次郎1992「前方後方墳の定着」『考古学研究』第43巻第2号  
卜部行弘2006「畿内の前方後方墳を考える」『月刊考古学ジャーナル』№551  
大阪市立大学日本史研究室2004「玉手山7号墳の研究」  
大阪府文化財センター2004『小路遺跡（その3）』  
大阪府文化財センター2006『小路遺跡Ⅲ』  
置田雅昭1977「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第3号  
阪口英毅2005「紫金山古墳出土鉄鍔の構成と副葬状況」『紫金山古墳の研究』  
吹田直子1997「椿井大塚山古墳と山城地域の前期古墳出土土器について」『庄内式土器研究』XIV  
鈴木一有1996「前期古墳の武器祭祀」『雪野山古墳の研究考察編』  
鈴木一有2002「振りと渦巻き」『東海之路』  
鈴木一有2003「副葬鍔の変質」『武器生産の流通と諸圖期』  
辰巳和弘2003「矢の呪力」『新世紀の考古学』  
田中晋作1998「筒形銅器について」『網干善教先生古稀記念考古学論集』  
田中晋作2005「391年後の前方後円墳と副葬品」『季刊考古学』90号  
田中晋作2006「筒形銅器について(Ⅱ)」上・下『古代学研究』173・174  
田中晋作2009『筒形銅器と政權交替』  
奈良県立橿原考古学研究所「島の山古墳調査概報付、小泉大塚古墳調査報告」学生社  
中井正幸2004「二つの前方後方墳」『古墳時代の政治構造』  
西谷眞治1985「元稲荷古墳」西谷眞治先生還暦祝賀会  
野上丈助1972「近飛鳥遺跡分布調査概要Ⅱ」『節・香・仙』第17号
- 福永伸哉1998「対朝鮮半島交渉から見た古墳時代倭政權の性格」『青丘学術論集』第12集
- 北条芳隆2000「前方後円墳と倭王權」『古墳時代像を見なおす』
- 松木武彦1991「前期古墳副葬鍔の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号  
松木武彦1996「前期古墳副葬鍔の成立過程と構成」『雪野山古墳の研究考察編』  
松木武彦2007『日本列島の戦争と初期国家形成』
- 重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性—東部の前期・中期古墳を例として—」『日本考古学』第2号
- 米田敏行1991「土師器の編年近畿」『古墳時代の研究』6  
米田敏行1994「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究』IV

表11 一覧表作成文献

- 柏原市教育委員会1983『玉手山9号墳』  
柏原市教育委員会2001～2006『玉手山古墳群の研究』I～V  
大阪市立大学日本史研究室2004『玉手山7号墳の研究』  
大阪府教育委員会『北玉山前方後円墳発掘調査概報』  
大阪府教育委員会  
大阪府教育委員会  
関西大学文学部1963『北玉山古墳』  
上野勝巳1967『吉田山古墳及び九流谷古墳実測調査概要』1、太子町教育委員  
富田林教育委員会1967『富田林板持古墳群発掘調査概報』  
羽曳野市教育委員会1999『羽曳野市内遺跡調査報告書-平成7年度-』  
羽曳野市教育委員会2000『羽曳野市内遺跡調査報告書-平成8年度-』  
羽曳野市教育委員会2009『古市遺跡群』XXX  
羽曳野市史編纂委員会1994『羽曳野市史』第3巻・資料編I  
藤直幹・井上薫・北野耕平1964『河内における古墳の調査』（大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊）  
梅原末治1932『南河内郡三日市村大師山古墳』『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』3輯  
網干善教1977『河内長野大師山』（関西大学文学部考古学5）

表13 地名表作成文献

- 大阪府教育委員会1967『弁天山古墳群の調査』  
高槻市教育委員会1980『鶴上郡衛発掘調査概要・4』  
交野市教育委員会2003『鍋塚古墳2000-1次調査有池遺跡2002-1次調査』  
大阪府文化財センター2004『小路遺跡（その3）』  
大阪府文化財センター2006『小路遺跡Ⅲ』  
大阪府文化財センター2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書』Ⅶ  
上野勝巳1967『吉田山古墳及び九流谷古墳実測調査概要』1、太子町教育委員  
富田林教育委員会1967『富田林板持古墳群発掘調査概報』

表14 一覧表作成文献



表16 出土地名表作成文献

1957『郡須八幡塚』

1931「大丸山古墳」『山梨県史跡名勝天然記念物報告』第5輯

齊藤弘之1997「桜井古墳群測量調査－姫小川古墳・塚越古墳－」『安城市歴史博物館研究紀要』4

## Ⅱ部 羽曳野市の前期古墳の調査



## 西山古墳

### 1. 西山古墳の認識にいたる経過

平成21年1月4日の朝刊に、羽曳野市軽里の一角で「円筒埴輪をつないだ棺」が発見されたことが新聞数社により報道された。記事の内容は、平成20年10月に羽曳野市軽里にある峰塚公園の発掘調査において古墳時代前期にさかのぼる埋葬施設が確認されたのである。

発掘調査は、平成20年10月1日～平成20年10月31日の期間中、延べ13日を費やした。埋葬施設の発見により峰塚公園内に前期古墳の存在が実証され、小字から「西山古墳」として遺跡発見届けを提出した。

調査の経過は、明治45年（1912）刊行の『歴史と地理』に「今は大いに其の原形を損したれども、もと亦西向き瓢形の塚らしく、埴輪の破片甚多く散乱し、後丘上より三個の埴輪円筒を発掘せり。」（原文のまま）の記載がある。これは明治44年に調査した喜田貞吉博士の小口山古墳の報告の一文である。羽曳野市教育委員会では、平成15年から同年16年にかけて小口山古墳の埴丘確認調査と平行して喜田博士が報告した古墳の位置確定を目的にトレンチ調査を実施した。結果は、古墳の外部施設である埴輪列や葺石など検出するには至らなかった。

その後平成20年（2008）、再び古墳の確定に調査が実施されることとなった。調査再開へ動機は、平成17年（2005）に東阪田で確認された“庭鳥塚古墳”である。同古墳により石川左岸の前期古墳がクローズアップされることとなり、郷土の森ゾーンがある小丘陵の尾根上に散布している古墳時代前期の埴輪の存在が気になりになった。そこで、古墳の確認を目的とした調査を実施したのである。

### 2. 古墳の位置と環境

西山古墳は、羽曳野市軽里に所在する。羽曳野市の中央に位置する近鉄古市駅から西へ約2kmに平成20年5月にオープンした峰塚公園郷土の森ゾーンの一角にある。

古墳の地理的環境は、羽曳野丘陵から派生する小丘陵の尾根の上に築かれていた。地形分類で言えば「丘陵」に立地する。標高68.2m付近を最高所とし、東へ緩やかに傾斜していき、峯ヶ塚古墳が立地する沖積平野へつながる。その比高が約30mあり、石川から西方を望むと西山古墳を丘陵の中腹に見ることができる。

古墳から風景は、石川を隔てた丘陵に玉手山古墳群や壺井に所在する前期古墳が望める。羽曳野市内に分布する前期古墳は石川の東岸に集中するものの、石川の西岸においては古市古墳群内に含まれる地域にも五手治古墳のような古墳時代前期の小規模古墳が点在するだけであった。ところが、前述したように庭鳥塚古墳が三角縁神獣鏡を副葬する前期古墳であったことにより、石川の左岸にも古墳時代前期の古墳が築かれていることが明らかとなったのである。

古墳は古市古墳群の南東にあたり、峯ヶ塚古墳をはじめ水塚古墳などの後期古墳が存在する。また、墳丘長が100mを超えるボケ山古墳や白髪山古墳などの古墳時代後期の前方後円墳が築かれる地域でもある。

古墳時代終末期になると一辺50mの方墳である塚穴古墳が築かれ、その後引き続き小口山東古墳、小口山古墳などの横口式石塚と呼ばれる埋葬施設をもつ古墳が西山古墳に隣接して築かれる。

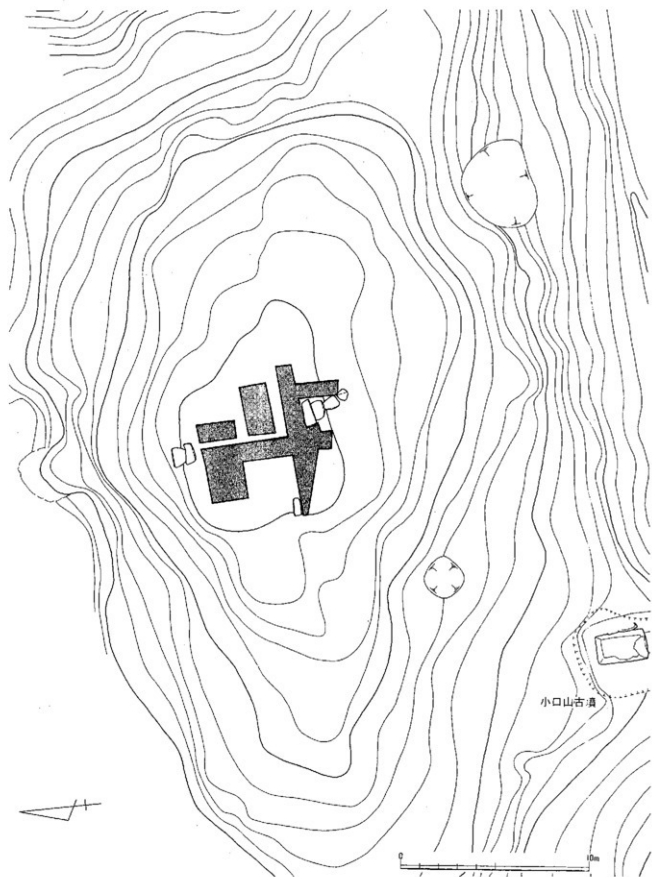


圖82 西山古墳墳丘測量圖

### 3. 調査の成果概要（基本層序と検出遺構）

#### a. 調査した周辺の地形測量

図82は、小口山古墳の背後の丘陵尾根を測量した地形測量図である。平成17年度（2005）に羽曳野市教育委員会が小口山古墳の調査時に周辺の地形を測量したもので、25cmコンターで100分の1のスケールの平板図である。

#### b. 調査区の設定

調査区の設定に際して平成17年度作成の地形図をもとに丘陵の最高所に求めた。埋葬施設の有無を確認するために、まずは尾根の最高所に南北方向の調査区を設定した（Iトレンチ）。Iトレンチは、幅1m、長さ5.5mで、トレンチの南端に円筒埴輪の破片が包蔵される遺構を検出した。遺構の南の端を確認するため、Iトレンチを南へ1.4m拡張したところ南北0.5mの大きさの遺構であることが判明した。

遺構は東西に広がるため、東へ長さ3.8m、幅1mのIIトレンチを、西に長さ3.2mのIIIトレンチをそれぞれ設定し、遺構範囲を確定するために遺構精査を努めた。結果、東西1.4m、南北0.5mの構内を呈する土坑であることが判った。さらに、土坑の南東隅を確認するためにIトレンチとIIトレンチの角を東側に拡張し、土坑の平面形態を確認した。

IトレンチからIIIトレンチの3ヶ所のトレンチでは、埋葬施設と考えるような遺構が確認できなかった。Iトレンチの北側寄りの東に南北2m、東西1mのIVトレンチ、西に幅2m、東西2mのVトレンチを設定した。

さらに、Iトレンチの中央、東側に幅1m、東西2.75mのVIトレンチ、IIトレンチの南に幅0.8m、南北2.2mの南北方向のVIIトレンチを設定した。

#### c. 基本層序

調査区全面を腐葉土に近い表土が覆う。平均の厚さは20cmであったが、笹の根で掘り下げに時間を要した。煉瓦や陶磁器が数点出土したほか僅かな埴輪片が包蔵されていた。

表土を剥くと上層から黄褐色粘砂質土、明黄褐色砂質土、明黄褐色粘質土の3層が確認でき、その下が黄色砂質土の地山に到る。地山は、現地表面から約40cmの深さで標高65.6mとなる。

3層目の明黄褐色砂質土は、しまりがあり、円筒埴輪や朝顔形埴輪が包蔵されていた。埴輪はいずれも元位置にあった状況ではないが、出土した破片はある程度の大きさであることから埴輪が樹立していた所からさほど離れていないことを意味していると思われる。

2層目の明黄褐色砂質土もしまりがあったが、同層からは小口山古墳で確認できる土師質の埴が包蔵されていた。埴と共に凝灰岩や石英安山岩の破片が包含されるので小口山古墳の埴丘を切り崩して搬入した土砂であることが考えられる。調査地には小口山古墳の石櫛の石材が建物の階段として転用されている。また、V区においてにぶい黄褐色砂質土に焼きしめの素焼きの土管が埋設されていた。土管は埋設した掘り込みが認められないことから、にぶい黄褐色砂質土遺物から近代の造成土であることが理解できた。同層から図86の盾形埴輪の口縁部が出土しているので西山古墳の埴丘盛土を搬入した可能性がある。

以上のことから、地山の上に見られた3層はすべて明治末に建てられた別邸のために整地された盛土であることは判明した。したがって、調査区においては、古墳の埴丘盛土が確認されなかったことになる。

#### d. 検出遺構

検出した遺構は、円筒埴輪を棺に転用した埋葬施設（円筒埴輪棺）を1基である。

埴輪棺は、楕円形を呈する平面形態の墓壇に納置される。墓壇は、東西に主軸をもち、長さ120cm、幅50cm、深さ0.6mの規模を有する。

棺は、2本の円筒埴輪の口縁部を合わせて連結する。円筒埴輪の底部側は棺の小口にあたり、その閉塞は円筒埴輪の破片を用いていた。棺の周囲に幅25cmの黄色粘土の帯が検出された。粘土の帯は、埴輪棺の底まで存在することが埴輪棺の破片が無い部分で観察できた。断ち割ってはいないため、棺底の状況が明らかでないが、筒状の棺が転がらないように固定を目的として粘土を用いた可能性が高いと思われる。

調査成果から復原できる埴輪棺の埋葬順序は次のとおりである。

- ①墓壇を掘る。
- ②墓壇の底に棺を固定するために粘土を置く。
- ③粘土の上に埴輪を転用した棺を置き、小口を別の埴輪で塞ぐ。
- ④棺の周囲に粘土をまく
- ⑤墓壇を埋める。

となる。

棺内には副葬品が存在しなかった。なお、検出した円筒埴輪は棺としての遺構として現地保存とし調査終了後、埋め戻しを実施した。



写真22 埴輪棺検出状況

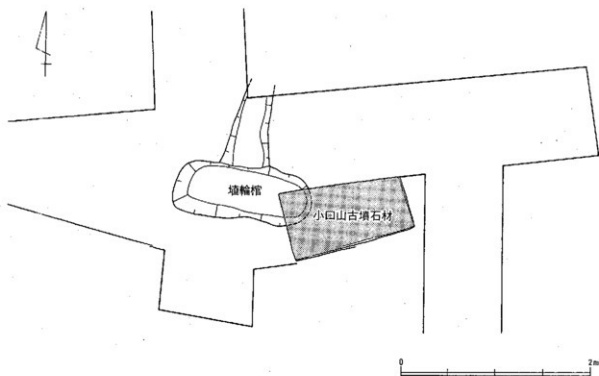


図82 遺構平面図

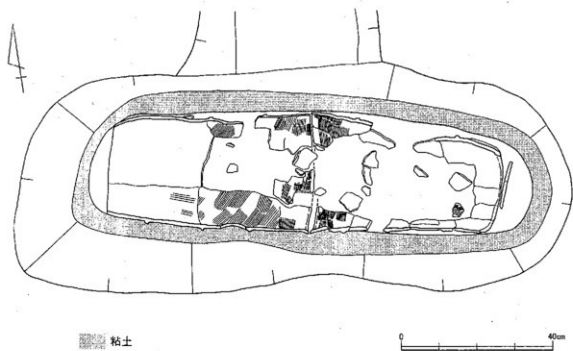


図83 埋葬施設平面図



図84-1・2は埴輪棺に転用されていた円筒埴輪である。

8は西側の棺で、3条突帯4段の逆台形を呈する形態である。埴輪の器高52cm、口縁部径36.2cm、底部径22.0cmの法量をもつ。底部高が12.6cm、口縁部高が12.6cm、突帯間隔が13.2cmを計測する。外反する口縁をもち、端部は直角近くの折れ端面は平坦である。スカシ孔は円形で、第3段において2方向穿つ。スカシ孔の径は6.4cmであった。調整方法は、外面調整がタテハケを施す。内面調整は、底面から第2突帯付近までがタテハケ、第2突帯付近から第3突帯のやや下がった付近までが斜め方向のハケメを施している。第3突帯のやや上った付近も斜め方向のハケメが丁寧に施されているが、僅かに粘土紐の接合痕跡が残る。口縁部付近は、横方向のハケメが施されている。色調は赤褐色。呈する。

2は東側の棺で、3条突帯4段の逆台形を呈する形態である。埴輪の器高が51.6cm、口縁部径33.6cm、底部径21.4cmの法量をもち、底部高が12.2cm、口縁部高が12.6cm、突帯間隔が13.2cmと13.6cmを計測する。外反する口縁部は、端部を上方へ外反する。端面は平坦。スカシ孔は円形で、第3段において2方向穿つ。スカシ孔の径は6.7cmであった。調整方法は、外面調整がタテハケを施す。内面調整は、底面から第2突帯付近までが縦方向のユビナデが残り、ハケメ調整が見られない。第2突帯付近から第3突帯と口縁部の間までが斜め方向のハケメを施している。口縁部付近は、横方向のハケメが施されている。色調は橙色を呈する。

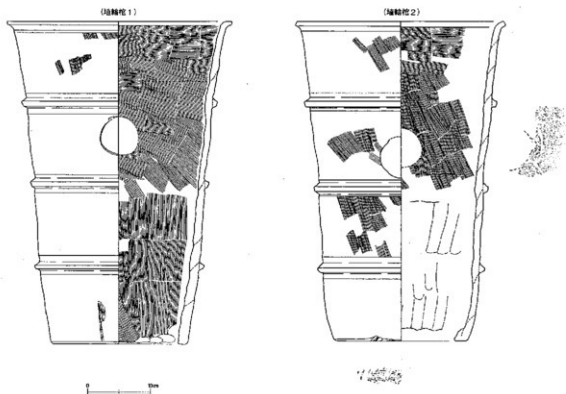


図84 埴輪棺実測図

#### 4. 出土埴輪

埴輪は、円筒と朝顔形、盾形などの形象埴輪がある。図化できた埴輪を図85、図86に提示した。

図85は円筒系の埴輪である。

1は、朝顔形埴輪の口縁部である。復原口縁部径は48cm、器高19.6cm。口縁端部は水平に折り曲げ、端部下端を垂下する。頸部は突出度が高い頸部突帯が巡る。径は17.2cmを測る。調整は、外面がタテハケ、内面は一次口縁が斜め方向のハケメ、二次口縁がヨコハケを施す。口縁部端部はナデ調整が見られた。外面は赤色顔料が塗布されている。

2は、朝顔形埴輪の肩部と胴部である。頸部付近が欠損している。1とは接合しない。残存高さは7.3cm、最大胴径31.4cmを測る。外面調整は、肩部はタテハケ後にヨコハケを施すが、胴部は表面が剥離し、調整は不明であった。内面調整はタテハケ基調で、突帯裏面ナデが見られた。黒斑が見られる。

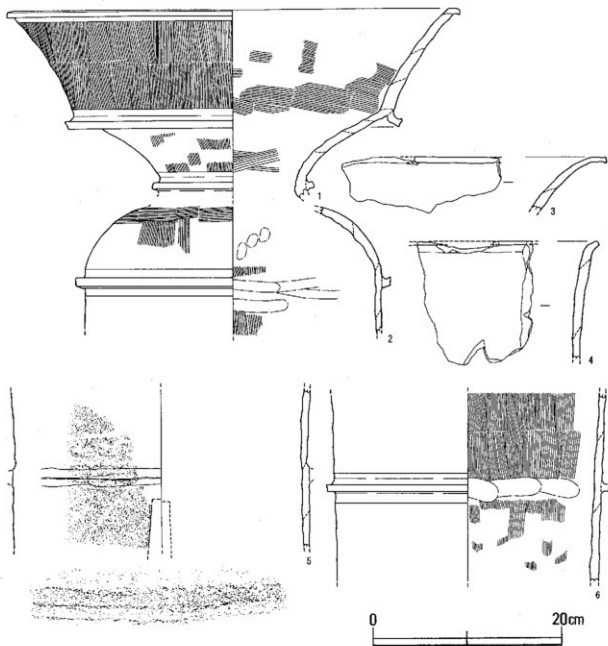


図85 円筒系埴輪実測図

3は、朝顔形埴輪の二次口縁部である。破片が小さいので口径は復原できない。1に比べると口縁部が水平に広がる形態を呈する。調整は内外面とも表面が剥離しているため不明である。

4は、鯉付円筒埴輪の口縁部であるが、小片ため口径は復原できなかった。鯉は欠損しているが、口縁部から鯉が付いていた痕跡が認められる。端部は斜めに立ち上がり、端面は平らである。残存高12cmである。調整は内外面とも表面が剥離しているため不明である。

5は、円筒埴輪の胴部片である。復原胴径31.4cm。突帯から上部は9cm、下部は7cmそれぞれ残存する。下部には方形のスカン孔がある。突帯が剥がれている。突帯設定のため凹縁が認められる。

6は、円筒埴輪の胴部片である。復原し得た胴径は28cmである。突帯の高さ1cm、上端が肥厚する。内外面の調整は、外面がタテハケ、内面もタテハケ。突帯の裏側にはヨコナデが確認できた。

黒斑が見られる。

図87の1から6が西山古墳に樹立された盾形埴輪の実測図である。

1は、盾形埴輪の口縁部で有段口縁を呈する。類似する資料が羽曳野市野々上の五手治古墳にある。口縁部高が7.6cmである。

2から5からは盾面中央区画にあたる。2は区画突帯を有するが、突帯両脇に平行線が施される。3も縦方向の区画突帯が認められるほか、横に巡る突帯も存在する。4は区画表現を縦方向の突帯で画する破片である。区画突帯のは、幅1.0cm、高さ0.4~0.6cmの断面形が方形を呈する。5の破片は区画突帯の左側が無文の区画をもつ。

6は鯉部の破片である。下端にあたる部分に三角形の板を水平に貼り付け、盾面の下辺を明示する突帯となる。

以上の盾形埴輪を復原すると図87の右下に提示した形態を呈する。二重口縁状を呈する口縁部を持ち、胴部の両脇に鯉が付き、上部は口縁部に続く。鯉は盾面の下辺まで延び、下方に水平に三角板を貼り付けている。復原図にある盾形埴輪はかつて奈良市の不退寺裏山古墳から出土した埴輪棺に類似していることから「不退寺裏山型」として特殊な盾形埴輪と考えた。その後、京都市の黄金塚古墳で埴丘に囲繞された盾形埴輪から今日「黄金塚タイプ」の盾形埴輪と分類されている。

ところが、五手治古墳や西山古墳の例は、横断面が楕円を呈するので黄金塚古墳と別形式とした。また、五手治古墳は盾面が両面にあることが最大の特徴となるが、西山古墳では今のところ盾面が二面確認できないことから「西山タイプ」として「黄金塚タイプ」と分けた。

西山古墳の鯉の下端に見られた粘土板については、五手治古墳では報告書によれば未確認である。しかしながら、平成8年に出土した埴輪片を再検討したところ鯉部の下端部片が確認できた。

図87の7~10の4点は五手治古墳出土の盾形埴輪で【羽曳野市内遺跡調査報告書】平成8年度の報告書に未掲載の資料である。

7は口縁部の破片である。口端部が欠損する破片で、立ち上がる口縁の下方に粘土紐を貼り付けて段を表現している。

8は鯉部の破片である。

9は胴部の平行に描かれた線文帯部片である。上部に区画突帯が水平に貼り付けられている。12条の沈線が施されている。

10は鯉部の下端部の破片である。粘土板の形状は破損して判らないが、鯉の下端部の形状が西山古墳出土の盾形に類似している。

羽曳野市内において同じような資料が出土しているが、いずれも破片で盾面を二面有するか判断できない。

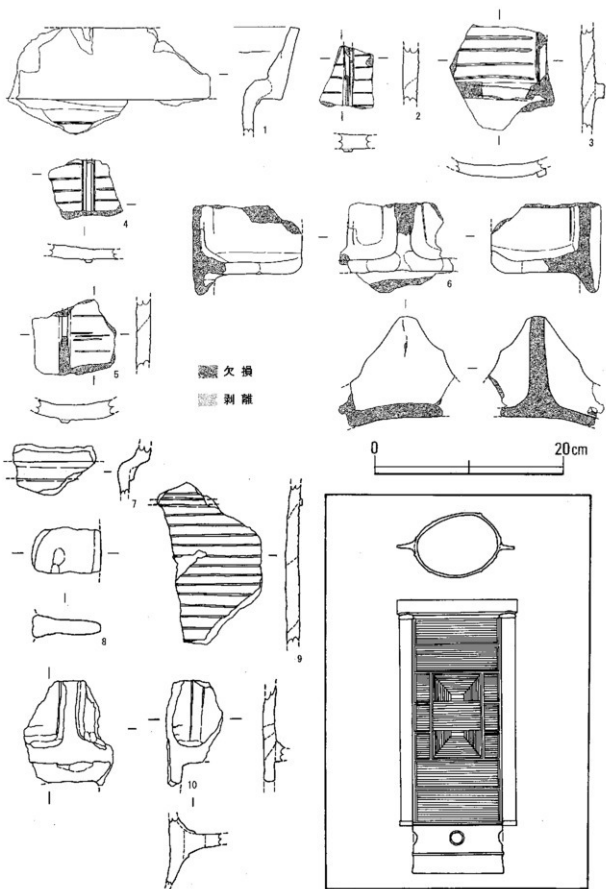


图86 盾形轴毂实测图

#### 4. 調査結果（まとめにかえて）

今回実施した最大の調査成果は、墳丘の一角と考えていた地点から埴輪棺が検出されたことである。このことにより、明治45年（1912）に喜田貞吉氏が『歴史と地理』に報告している古墳であることにはほぼ間違いはなからう。

96年目にして古墳を再確認したことになるが、残念ながら検出した埴輪棺は大きさや構造から従属埋葬と考えられ、主となる古墳の被葬者の埋葬施設は今後の調査に委ねる結果となった。平成16年度や平成17年度に実施した郷土の森ゾーンの遺跡確認調査のトレンチでは埋葬施設の推定地を発掘してきたが検出されなかったことから、すでに削平されている可能性が高い。したがって今回の埴輪棺を検出できたことは運良く周辺埋葬が残った結果であろう。

喜田博士が見た西向きの瓢形の塚については、今回も明らかにすることができなかった。その要因は墳丘盛土が確認されず、葦石も存在しない状況では墳丘の確定ができなかったことによる。

ひとつの案として、平成14年3月に実施した遺構をもとに地形測量図と合わせて推察したところ墳丘長が約40mの前方後円墳を復元できる。地形図の66m～65mのコンターが楕円状に廻るが、65mの部分で溝状の遺構を検出している。遺構は、第3次調査で確認したもので、幅3mの落ちから埴輪片が出土している。周辺をことから区画する溝と考えることができる。この溝が墳丘裾を巡る溝と考えたのである。

古墳の名称については小字「西山」から名付けることとしたが、「西山古墳」の名称についてはすでに昭和6年刊行の『大阪府史蹟名勝天然記念物』の中で「善正寺山古墳群」の項に「西山古墳」の名称がすでに使用されていることを述べておく。

西山古墳の再確認により、羽曳野市域に分布する前期古墳を考える上で新たな知見を得ることとなった。従前羽曳野市内の前期古墳は、駒ヶ谷地区や壺井地区といった石川の右岸域に群をなして分布することが知られていたが、今回、羽曳野丘陵の一角での西山古墳の存在が数少ない石川の左岸域に新たな首長の存在を明らかにしたことになる。

#### 参考文献

- 大阪府学務部昭和6年『大阪府史蹟名勝天然記念物』第一冊（昭和49年再刊）
- 喜田貞吉「河内輕墓の掘抜石棺に就て」『歴史と地理』第19巻第2号
- 羽曳野市教育委員会1999『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成7年度－』
- 羽曳野市教育委員会2000『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成8年度－』
- 羽曳野市教育委員会2005『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成14年度－』
- 羽曳野市教育委員会2007『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成16年度－』
- 河内一浩1997『棺に転用された盾形埴輪』『古文化論叢－伊達先生古稀記念論集』
- 花園大学黄金塚2号墳発掘調査団1997『黄金塚2号墳の研究』

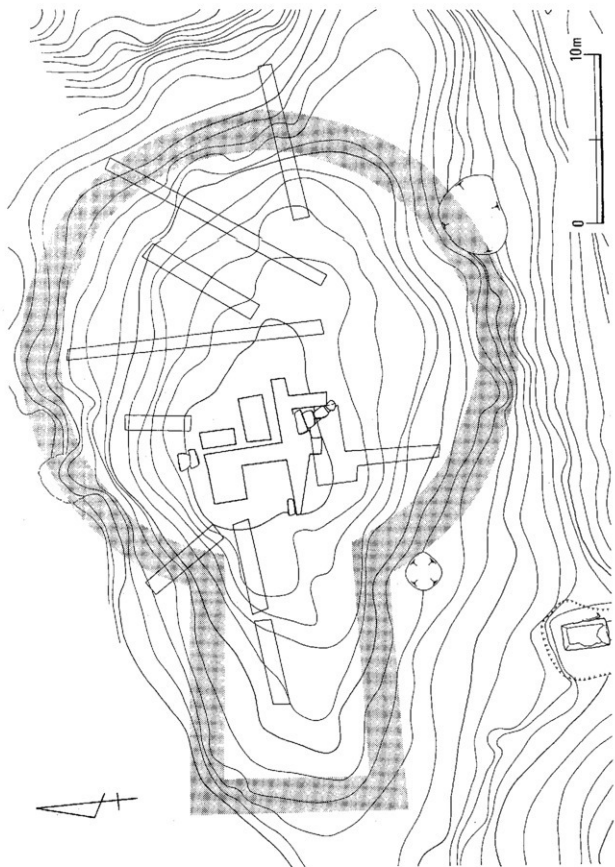


图87 西山古墳墳形復原図

## 狐塚古墳

### 1. 確認にいたる経過と過去の調査

羽曳野市域の東端に玉手山から南へ延びる標高70m前後の丘陵地がある。南北に連なる丘陵は、柏原市の玉手山地区から羽曳野市の駒ヶ谷地区と行政区分がされている。かつては風光明媚な駒ヶ谷の丘陵地は昭和30年代から開墾や土取りによって著しく景観が変わりだした。

この駒ヶ谷の丘陵地は柏原市玉手山にある勝負山古墳や後山古墳など古くから知られた古墳と違い昭和30年代になって相次いで発見されたため現在保存されている古墳は残念ながら皆無である。

ここに取り上げる狐塚古墳もその一つである。狐塚古墳は、昭和33年（1958）に地元の研究者が駒ヶ谷の丘陵を踏査中に羽曳野市駒ヶ谷の一角で新規の古墳を1基発見した。小字から「狐塚古墳」と命名された。

墳丘は、『河内における古墳の調査』の報告書によると、丘陵全体が葡萄山となって改変を受けた状況であったとあり、発見の当初は円墳として報告されている（註1）。羽曳野市史を担当された北野耕平氏は、数箇所を観察される円濠の散布を葦石と見ると、散布状況から南向きの前方後円墳であるとの考えを平成5年（1994）に刊行された羽曳野市史において示された。復原した墳丘の長さは、後円部の北西縁と前方部の正面に遺存する葦石から92m内外と推定した。後円部の直径は約51m、その高さ6mで、前方部は尾根筋のために崩れている。後円部に比べ4mほど低く、もとは「バチ形」に広がっていた可能性も指摘されている。前端の幅は38mとみられている。

航空写真から墳丘観察をされた澤田秀実氏によれば、昭和23年（1948）と昭和36年（1961）に撮影された写真から狐塚古墳の墳長は約90mで、後円部の直径が約50m、くびれ部の幅が約21m、前方部の前端幅が約39mであったことを算出した。さらに、前方部の形態は、側縁が曲線的に外反する擬形の前部を復原できるとしている（註2）。

最近、白石太一郎氏が中心となって昭和21年（1946）に米軍が撮影した空中写真を図化され、報告書である『近畿地方における大型前方後円墳の基礎的研究』で成果が公表された。狐塚古墳が存在する駒ヶ谷周辺の旧地形を見ることができ、狐塚古墳が築かれた尾根の部分をトレースしたのが図89である。この図の左側は地形図の記号から果樹園が存在し、コンターの乱れは開墾によるものである。したがって古墳の西くびれ部付近は元の形状を留めない。尾根の最高所の北側は地形図の記号では針葉樹となっているので、この南側付近において埋葬施設が確認されたところと思われる。復原された90mクラスの前部後円墳とすると墳丘裾は標高79mのコンターを巡る。地形測量図では後円部の北側が直線的であるが、くびれ部や前方部はその見えなくもない。自然地形が造成によるものかは判断できない。復原された後円部の直径が50m程度に算出されているが、数値的には図上で問題ないと思える。

外部施設は昭和33年の踏査時では墳丘斜面には埴輪の散布が見られなかった。墳丘には土師器片が散布していたことから壺形土器が墳丘の表飾として使用されていると推定されていた（註3）。

埋葬施設については後円部に粘土層の存在が確認できた。埋葬施設の調査は、古墳の発見6年後の昭和39年（1964）7月に試掘されている。そのときの調査成果が『羽曳野市史』第3巻史料編1に報告されているので少し長くなるが引用しよう。

「後円部中央の僅かに地形隆起の残った部分を試掘したところ、約2m四方の範囲に内部構造の基底部が遺存しているのを発見した。表土下のごく浅いところに地山に掘り込んだ墓竈があり、内側に2～3枚の板石が横並びに配列されていた。板石のうち最も大きなものは長さ47cm、幅32cm、厚さ6.5

cmの安山岩で、この板石列は竪穴式石室東壁の最下段にあるものであろう。竪穴式石室の高さと規模は分からない。板石の下面は黄白色良質の粘土縁に接し、石室の壁体が粘土棺床上に構築されたことを示していた。棺床は内方に向かって浅くU字形に凹んでいた。この棺床底部は最も広くて幅108cm、高さ17cmの台形断面をなし、周囲の墓壁との間には礫石を厚く充填してあった。墓壁の幅は床面で2.37mあり、側壁に沿ってさらに幅15cm、深さ13cmの溝が掘り込まれて排水溝をなしていた。墓壁の全長は不明である。

棺床上は攪乱されていたが、若干の遺物を検出した。棺床上面の北寄りに80×50cmの範囲に薄く朱染した部分があり、粘土塊中から硬玉製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉、柃形石製品を見出した。

硬玉製勾玉は極めて小型品で、長さ1.01cm、湾曲した横幅0.63cm、頭部の厚さ0.39cmの大きさにすぎない。硬玉としては良質で、頭部の色は浅くて半透明に近いが、尾端に至るに従い美しい緑色が濃くなる。頭部に片側穿孔による円孔を穿ち、これを中心に三条の放射状の溝をもつ丁子頭である。1個を得た。碧玉製管玉は5個あり、いずれも硬質の灰緑色をもつ小型の良品で、長さ0.7~0.6cm、直径は0.3cmに満たない。ガラス小玉は径3.5mm、厚さ3mmで淡青色。

柃形石製品も小型で、高さ1.59cm、底面の径0.99cmあり、五輪塔に似た形をしている。材石は碧玉というよりも淡緑色軟質の凝灰岩からなる。頭部には帽子状の円い安縁があり、その上は笠木状に高くなって中央に一孔を穿っている。中央はくびれて細くなり、柃身の本体は円錐の下端が広がる。頭部は朱染している。」と前期古墳の存在を報告した。

ところが、昭和45年(1970)の冬に狐塚古墳が造成工事によって破壊されてしまった。大阪府の外郭団体による前代未聞の不祥事は新聞紙上に大きく報道され、古墳破壊に至るまでの経過が記載されている。朝日新聞11月28日付けの朝刊から時間別に準じて記述しよう。

昭和45年3月中小企業団地開発協会 地主と土砂買取契約を結ぶ。

砂防法による工事許可を申請

21日当時の大阪府知事名で許可がでる。

9月末 羽曳野市在住の府文化財愛護推進委員から文化財保護課に通報。

10月7・8日府文化財保護課が試掘。木棺の痕跡を検出し、文化財保護課と開発協会の協議を重ねていた(注4)

11月25日に土取りを実施。

11月28日に古墳の破壊の件が報道される。

大阪府教育委員委員会は造成された地点を翌年の1月に発掘調査を実施している。調査成果は円筒埴輪列が検出されたが、その報告はない。

大阪府教育委員会に保管されている図面には1971年1月13日付けで「藤池北の円筒列」として見ることが出来る。藤池北とは駒ヶ谷にある藤池の北を指し、すなわち狐塚古墳が存在する地点であることがわかる。

実測図は検出した埴輪列のもので、図から6本分の円筒が確認でき、配列が円弧を描くことが判る。埴輪の樹立は布甌ではなく、1本1本立てるために掘り方を掘る壺掘りによるものである。

検出した埴輪列から直径は20m内外となり、先に復原された狐塚古墳の後円部墳丘裾の直径の2分の1である。図からの判断であるが狐塚古墳の墳丘裾に巡らされた埴輪列とは判断しがたい。後円部の墳頂部の可能性と昭和45年(1970)の試掘で存在が確認された古市東山古墳の外部施設なのか、検討を要する資料であることを明記しておく。



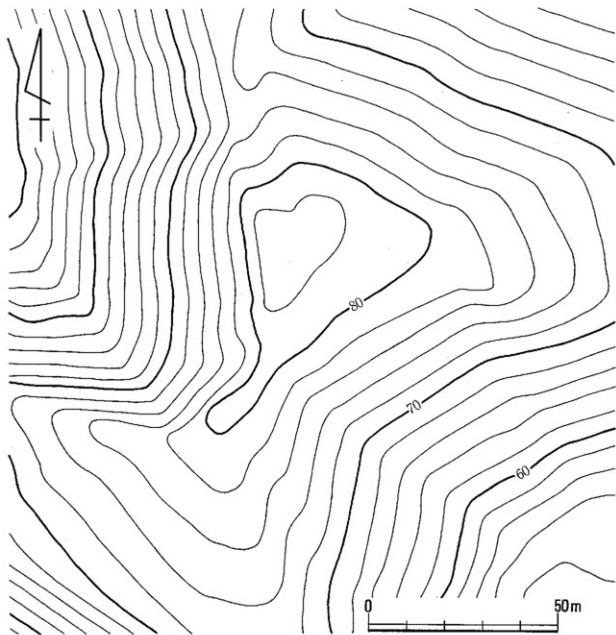


圖88 狐塚古墳地形測量圖

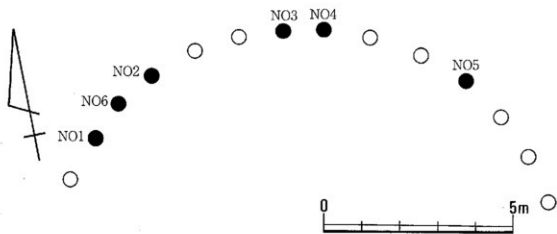


圖89 門筒輪列位置圖

## 2. 古墳の位置と環境

狐塚古墳は、標高42.6mの丘陵尾根に立地していたが、現在は中小企業団地の造成によって昔の面影はまったくみられない。

丘陵の南を北西へ流れる飛鳥川によって大黒地区の丘陵と分断し、飛鳥川の右岸に形成される氾濫低地から沖積段丘が丘陵裾に広がる。

丘陵東側は国分から駒ヶ谷に抜ける深い谷（水分駒ヶ谷柏原線）が背後の山塊からの連なりを分断し、南北約2.5km、東西約1.0kmの菱形を呈した独立丘陵を形成している。丘陵の南北を走る嶺線を境に細かい開折谷をみることができる。

南北に延びる駒ヶ谷丘陵の尾根上には狐塚古墳のほか前方後円墳が宮山古墳や駒ヶ谷北古墳が築かれていた。

宮山古墳は、昭和37年（1962）に丘陵の土砂採取が進み、大阪大学の北野耕平氏によって状況把握のための踏査で発見された。同年に発掘調査を実施している。

駒ヶ谷北古墳は、昭和38年（1963）末には柏原との市境付近で木片を包む粘土を丘陵に掘られた溝の断面に見出され、外形から古墳と確定できない地点であったがその後、鏡が露出し翌年の昭和39年（1964）の1月に大阪大学国史研究室で調査を実施した。南北方向の粘土層を築き、鏡は棺内の北側で鏡背を上に向けて出土した。（：北野耕平「駒ヶ谷北古墳の出土遺物」『日本考古学年報』17）

なお、狐塚古墳の名称は藤池の北に位置することから藤池北古墳として昭和40年（1965）に文化財保護委員会が刊行した『全国遺跡地図（大阪府）』にみられる。同地図には古市東山古墳、藤池南古墳の古墳の名称がある。藤池北古墳は前方後円墳とあり、古市東山古墳、藤池南古墳の両古墳の墳形が円墳との記述がある。したがって、藤池北古墳は狐塚古墳を指す名称である。

その後、昭和52年（1977）に刊行された大阪府教育委員会編『大阪府文化財地名』に狐塚古墳となって現在に至っている。

駒ヶ谷地域とした羽曳野丘陵は、駒ヶ谷北古墳が存在した丘陵の北に不自然な分断が認められる。西に下りれば安宿郡衙と考えられる円明遺跡がある。東に下れば旧街道に合流し北へ上がると河内国分寺に至る。

玉手山丘陵に十数基の前方後円墳で構成される玉手山古墳群が存在するが、羽曳野市内にも玉手山13号墳と玉手山14号墳が存在する。この2基の古墳は、昭和46年（1976）に大阪府教育委員会が実施した分布調査で登録されたK-2が玉手山13号墳、そしてK-1が玉手山14号墳と後に改称されている。玉手山13号墳は帝塚山大学考古学研究室によって調査され古墳でないことが明らかにされている。また、玉手山14号墳については、丘陵尾根が平坦となったブドウ畑の一面から埴輪が採集されたことや西側斜面に前方後円墳の面影と推測できるようなくびれ部が残っていたために古墳と考えられた。玉手山14号墳と改称されるが調査されることなく消滅し、詳細はまったく不明である。

### 3. 出土埴輪の観察

狐塚古墳から出土した埴輪は、大阪府教育委員会が所蔵している。昭和45年の調査で出土した資料である。

昭和57年（1982）に大阪府立泉北考古資料館にて資料館改修工事完成記念として開催された特別展「大阪府の埴輪」において玉手山古墳群の円筒埴輪として円筒埴輪が3点展示された。図録並びに展示のキャプションは藤池北古墳であった。

図91は、大阪府立泉北考古資料館の収蔵庫に保管されていた円筒埴輪3点である。昭和57年の展示のために大振りの破片を接合し、石膏による復原がされている。

1は3条の突帯を貼り付けた胴部片である。計測できる胴径は31.6～35.0cmを測る。図の一番下とその上に円形のスカシ孔が確認できる。直径7cm前後の大きさで、刀子状工具によって穿っている。スカシ孔の穿孔位置から少なくとも突帯は5条以上貼り付けられていたと推察できる。突帯間隔は11cmである。突帯の断面形態は台形を呈し、最大の高さ1.5cm、幅1.6cm～1.8cmを測る。ナデにより調整されている。

外面の調整方法は、ヨコハケを施す。図の一番下の段と一番上の段は外面が剥離し、調整は不明である。2段目のハケ目の施行範囲が長く3段目のハケ目は断続的に施行しているのが観察できる。1次調整のタテハケが施されている。

内面の調整はナデによる。部分的に粘土紐巻上げの痕跡が確認できる。

外面に黒斑が認められることから野焼きによる焼成である。

（藤池4 648）

2は2条の突帯が確認できる底部である。計測できる法量は、底径は30.4cm、底部高13cm、突帯間隔13cmである。

スカシ孔は確認できない。突帯は断面形態が台形を呈する。幅2.2cm、高さ1.2cmを計測する。ヨコナデによる調整で突帯の上面がやや凹み気味である。

外面調整は、タテハケを施したのちヨコハケを施す。胴部は下から2段目まで確認できたが、3段目は調整が剥離していたため不明である。

内面は丁寧にタテ方向のナデ調整を施している。円筒埴輪1や円筒埴輪3の内面で観察された粘土紐の接合痕は確認できなかった。

黒斑が見られるので野焼きであることがわかる。

（円筒列No2 647）

3は2条の突帯が確認できる底部である。破片は大きく3点底径は30.0cm、底部高10.5cm、突帯間隔12cmである。

スカシ孔は確認できない。突帯は上辺が下辺より突出する断面形態を呈する。幅1.9cm、高さ1.2cmを計測する。

外面調整は、タテハケを下から2段目まで確認できたが、3段目は調整が剥離していたため不明である。

内面はナデ調整を施し、粘土紐の接合痕が数箇所観察できた。

黒斑が見られるので焼成は野焼きによるものとわかる。

（円筒列No6）

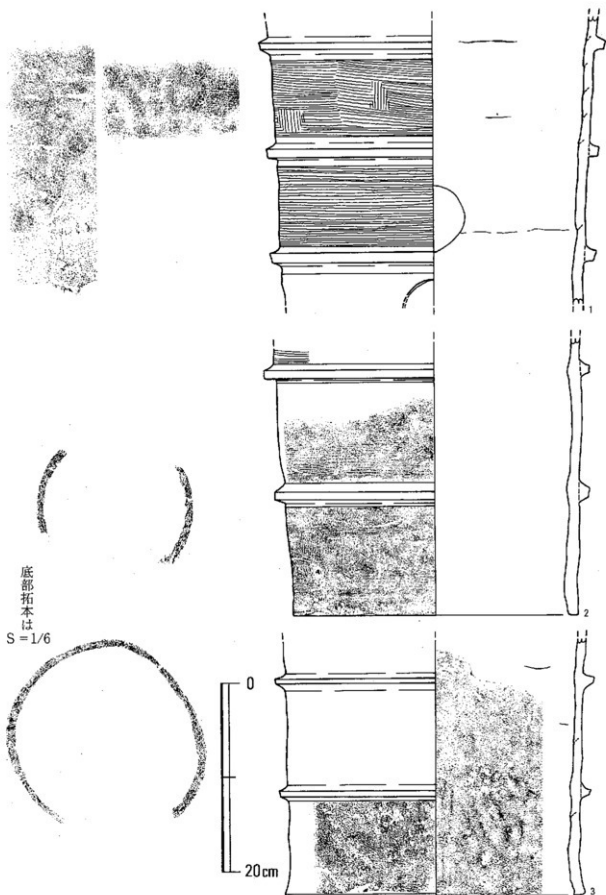


図90 狐塚古墳出土土埴輪

#### 4. まとめにかえて

—駒ヶ谷地域の古墳を見直す—

昭和20年代の駒ヶ谷丘陵と平成となって約60年経過した現在の駒ヶ谷地域を比較すると丘陵がまったく消滅し、工場地となっている。丘陵の開発は昭和30年代から始まり、昭和45年工業団地の造成で変貌したのはすでに述べた。

北野耕平氏により古墳の存在と内部主体、出土遺物が報告されているが、そのことにより駒ヶ谷地域の古墳を再検討することができる。改めてその業績に敬意を払いたい。

さて、北野氏の調査によって明らかにされたことは、駒ヶ谷丘陵に北から駒ヶ谷北古墳、狐塚古墳、駒ヶ谷宮山古墳の存在が確認された。いずれも前方後円墳であるが、埋葬施設に竪穴式石室をもつ狐塚古墳、宮山古墳と粘土槨をもつ駒ヶ谷北古墳に二分できる。さらに宮山古墳は前方部側に粘土槨が2基存在することが判明している。

駒ヶ谷北古墳から出土した方格規矩鏡は下垣仁志氏は古墳時代の後葉前半に位置づけられている。

駒ヶ谷宮山古墳では前方部2号粘土槨より、三角縁神獸鏡が出土している。鏡は三角縁緑文帯三神三獸鏡で目録番号の238に該当する。福永伸哉氏による分類のIV-a期に該当する。三角縁神獸鏡の最新鏡が宮山古墳の最終埋葬施設から出土していることから同古墳の下限が前期末葉と判る。

(岩本崇2005「三角縁神獸鏡の終焉」『考古学研究』第51巻第4号)

出土遺物から駒ヶ谷宮山古墳→狐塚古墳→駒ヶ谷北古墳の変遷が考えられる。

昭和46年2月から3月まで大阪府教育委員会が近飛鳥地域の分布調査を実施している。

駒ヶ谷丘陵ではK-1号墳とK-2号墳がマークされた。K-1号墳は古墳でないことが明らかとなったが、K-2号墳は消滅し詳しいことは判らない。

発掘品ではないが、駒ヶ谷に鎮座する杜本神社の境内には明治時代の初年まで金剛輪寺という神宮寺が存在していた。廃仏毀釈により現在は廃寺となっているが、宝物として画文帯四仏四獸鏡と画文帯環状乳四神四獸鏡が『河内名所図会』に挿図とともに記載されている。両者はいずれも駒ヶ谷出土の鏡であるが、出土した古墳の名前が判らない。同型鏡群が出土するような時期の古墳は駒ヶ谷古墳には知られていない。あるいは、未知の古墳の存在を示唆しているのか。

駒ヶ谷から出土した銅鏡が京都大学に所蔵されている。銅鏡は1本で、銅鏡が納められている箱には後藤碩田が寄贈したと書かれているが出土古墳は明らかにできない。法量は長さ5.4cm、幅1.4cmを計測する。

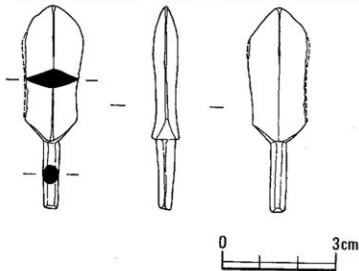


図91 駒ヶ谷出土の銅鏡

## 註

- 1) 北野耕平氏は『河内における古墳の調査』において、墳形は円墳としながらも「丘陵全体が葡萄山となっているので、墳丘の細部の形状に変改が加えられていると考えられ、稜線に沿って低い前方部が設けられた前方後円墳かもしれない。」と報告している（大阪大学文学部国史研究室1964、p 86）。『羽曳野市史』平成5年刊行では前方後円墳として報告をしている。
- 2) 空中写真による玉手山古墳群の復元を手がけている澤田秀実氏によれば、狐塚古墳の墳形の問題点は南西に延びる尾根が前方部と認定し得るかどうかと指摘している。空中写真の観察から直径約50mの円丘の存在は確認できるという（澤田2005、p 168）。
- 3) 出土した壘形土器は大阪大学に所蔵されている。観察したところ土器は弥生時代のものであり、古墳に伴わないことが判明した（河内2004）。
- 4) 『羽曳野市史』平成5年刊行には古市東山古墳として報告されている。

## 参考文献

- 石川昇1989『前方後円墳築造の研究』六興出版
- 梅原末治1964『金剛輪寺旧蔵面文帯四仏四獣鏡』【史迹と美術】第34輯ノ8
- 大阪大学文学部国史研究室1964『河内における古墳の調査』
- 大阪府教育委員会編1977『大阪府文化財地名』
- 大阪府教育委員会1971『近飛鳥遺跡分布調査概要』
- 大阪府立東北考古資料館1982『特別展大阪府の埴輪』特別展図録
- 河内一浩2001『玉手山古墳群の埴輪Ⅰ－埴輪基本資料－』【玉手山古墳群の研究Ⅰ－埴輪編－】柏原市教育委員会
- 河内一浩2004『玉手山古墳群の埴輪Ⅳ－副葬された土器と壘形埴輪－』【玉手山古墳群の研究Ⅳ－副葬品編－】柏原市教育委員会
- 河内一浩2005『玉手山古墳群の埴輪Ⅴ－総括『玉手山古墳群の埴輪』－』【玉手山古墳群の研究Ⅴ－総括編－】柏原市教育委員会
- 北野耕平1994『狐塚古墳』『羽曳野市史』第3巻史料編1、羽曳野市史編纂室
- 近藤義郎編1992『前方後円墳集成』近畿福山川出版社
- 澤田秀実2005『空中写真による玉手山古墳群の復元（2）－玉手山丘陵南半の検討－』【玉手山古墳群の研究Ⅴ－総括編－】柏原市教育委員会
- 白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』
- 羽曳野市教育委員会1986『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財分布調査概要』
- 羽曳野市教育委員会1992『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書』
- 文化財保護委員会1965『全国遺跡地図（大阪府）』
- 安村俊史2008『古市古墳群の成立と玉手山古墳群』【近畿地方における大型古墳群の基礎的研究】

## 壺井丸山古墳

### 1. 古墳の位置と環境

丸山古墳は、羽曳野市壺井に所在する。

石川の東岸には飛鳥川と梅川に挟まれた丘陵が存在する。「大黒丘陵」と呼ばれる東西約0.7km、南北約1kmの範囲に標高95～70mの尾根を呈する。丘陵の北辺を飛鳥川が飛鳥から石川へと流れ、また丘陵の南辺の大井川、梅川が太子町から羽曳野市域に入り石川へと注ぐ。

壺井丸山古墳は大黒丘陵の北半に位置し、標高約50mを測る尾根上に築かれている。丘陵の北側と南側に丘陵を侵食する谷に挟まれた西側に舌状に伸びる支丘にあたる。

古墳の南東方向約430mに現在は破壊され消滅したが墳丘長約45mの前方後円墳である壺井御旅山古墳が、また同方向の約930mに墳丘長約60m以上の前方後円墳と思われる通法寺裏山古墳が存在している。

丸山古墳が築かれた丘陵西斜面において土師器、須恵器、瓦器が散布している。遺物の散布は昭和46年の大阪府教育委員会、昭和60年の羽曳野市教育委員会による分布調査で確認され、平成2年に駒ヶ谷遺跡調査会によって試掘調査が実施され、遺構、遺物の出土が認められている。その成果から「壺井第1散布地」として周知された。

古墳の北西約200mには弥生時代末葉に位置づけられる方形台状墓が検出されている。台状墓は平成元年に駒ヶ谷遺跡調査会の調査で確認され、遺跡名は駒ヶ谷遺跡である。昭和46年の大阪府教育委員会が実施した分布調査で弥生時代後期の高地性集落の一つと考えられ、当時は大黒遺跡と呼称していた。墓が確認された尾根より200m北には同時期の堅穴住居跡が検出されている。出土土器や検出した遺構には切り合いが認められ弥生時代前半から後半まで集落が営まれ、先の台状墓に伴う。その被葬者は集落の構成員のうち最有力の小集団に属する者であろうと調査担当者は考えている。(辻花)

方形台状墓が築かれた尾根上から墳丘を削平された検出幅2.8mの周溝が円弧を描き巡っており、古墳時代後期の古墳は直径約10mの円墳が復原されている。

羽曳野高校はかつて高塚古墳が存在していたところである。古墳はすでに破壊されて現存していないが円墳と報告されている。また、埴輪の出土も確認されている。

大黒丘陵での埴輪の出土は、平成2年に実施した駒ヶ谷第1散布地のNa129地点で報告されている。5世紀後半の円筒埴輪で、復原した胴径が40cmを超える大型品で、幅広い突帯が5条確認されている。突帯間隔が10cmで、外面調整はB種ヨコハケを施す。

後期の古墳は、駒ヶ谷遺跡のNo01地点（埴輪と須恵器の小片が出土している）、同遺跡No07地点、飛鳥第2散布地のNo58、同遺跡No118地点で6世紀後半の須恵器（蓋杯など）が出土している。遺物の内容や出土地点の地形から古墳の存在を裏付ける遺物と考えられる。したがって、大黒丘陵に尾根上に古墳が点在することが推定できるようになった。立地から横穴式石室をもたない古墳でNo07地点のS X 034のような木棺を直葬した小古墳で構成されていたと推定されている。飛鳥川を挟んで対岸の丘陵には有名な飛鳥千塚があり、横穴式石室を主体とする群集墳と造営集団の性格がかなり異なっていたと考えられ、伝統的な墓制を受け継いだ在地的な集団が想定されている。

駒ヶ谷第2散布地のNo113地点からは初期須恵器の器台片が出土している。破片は杯部でヘラ描きによる斜格子が施されている。破片の断面は、初期須恵器特有のセピア色を呈している。出土地点は、明確な遺構は検出されなかったが、飛鳥川に張り出す緩やかな傾斜をもつ丘陵の尾根上に位置する。

ブドウ畑によって開墾されているが、かつて古墳があった可能性が高い。駒ヶ谷第2散布地は大黒第3散布地として昭和46年の大阪府教育委員会の分布調査で確認された遺跡である。

大黒丘陵の北半部は南阪奈道路によって景観が変貌し、敷設にあたり埋蔵文化財の調査が実施されている。その内の成果のひとつとして墳丘長53.5mの前方後円墳が検出されたことである。盾形の周濠をめぐらせ全長68.9mの規模を有する。埋葬施設は残念ながら墳丘が削平され残存していない。したがって築造時期を判断する遺物は周濠から出土した須恵器から6世紀の中葉と考えられる。

## 2. 古墳の概況

墳形は前方後円墳で前方部を西方に向ける。現状は雑木林に覆われており、墳丘の遺存状況は全体的に良好である。細かい部分を観察すると、後円部の墳頂に乱掘穴による窪みがある。また、墳丘裾部分は里道による掘削や墳丘盛土の崩壊箇所が見られる。

丸山古墳は現在まで発掘調査は実施されていない。したがって、埋葬施設の構造については不明である。遺物出土の伝承等もない。

現在まで、埴輪破片は全く確認されていない。これについては、円筒埴輪列を持たないのか、あるいは特定箇所のみ少数配置されたのか、少なくとも円筒埴輪列が墳丘を圍繞するような様相でなかった可能性が考えられる。また、葺石についても崩壊箇所では観察できない。葺石の転落と考えられる川原石などの散布も見られないことから墳丘斜面全面に施されたか不明である。

【羽曳野市史】によると、墳丘長約70m前後、後円部直径約35m、前方部前端幅約20mの墳丘規模が記載されている。後円部の後背部分は丘陵と接しているため、後円部後端には尾根から切り離す掘削が見られる。後円部墳頂平坦面は比較的広く、同部分の標高は約51mである。前方部は、後円部に比してかなり低平で、その比高差は約5mを測る。墳丘測量図及び現地観察によると、墳丘の形状はいわゆる柄鏡式であるが、前方部についてはその前方部分が少し幅広く開くバチ形を呈する可能性もある。

## 3. 観察結果

丸山古墳の北側の地形を観察すると、後円部の北西に見られた掘削は古墳当初のものではないと判断した。古墳の北側に墳丘裾にそって里道があり、おそらく近年の開墾に伴う里道を敷設する際に墳丘裾を掘削しその盛土による高まりが図面上において掘削に見えるのである。したがって後円部の大きさはもう一回り大きくなる可能性がある。

前方部前面は後円部に比べ墳丘の崩壊が目立つ。特に前方部南側の角は墳丘の一部を削り落とした際に排出された土砂が南へ押されて形状で入り交錯した墳丘裾を示すものでない。

後円部墳頂部はおおよそ直径15mの平坦面を呈する。その中央に東西約3m、南北約10mにわたって窪みが観察される。状況から盗掘穴と考えられる。そうすると、南北方向に築かれた埋葬施設の存在が想定される。盗掘時の掘削土は、後円部墳丘の南側が大きく膨らむ斜面が観察されるので墳頂部ではなく、南側へ排出したことがわかる。墳頂部の窪んだ部分や排出した土の中に石材が見られなかった。石材が確認できなかったので堅穴式石室ではなく粘土槨と考えるのが妥当であるが、表面観察による粘土塊も観察されなかったので埋葬施設に至っていない可能性がある。

墳丘の観察では明瞭なテラスや段築が確認できない。前方部2段、後円部3段の可能性が推定されている（駒ヶ谷報告書p48）が、調査によって結論をだすべきであろう。

今回踏査して観察できた特筆事項は、墳丘の南側裾において幅10mの緩斜面である。「墳丘基部」と呼ばれる施設に相当するのかが発掘調査を経て確認しなければならないが、注意を要する。



北側の墳丘裾に見られた池縁や里道の掘削断面から土層を観察すると地山であることから墳丘を盛り上げるために地山成形した可能性がある。掘削断面には葎石と考えるような石材の露頭が見られないし、転落している様子も観察できなかった。

大阪府教育委員委員会が作成した測量図から、墳丘長約80m、後円部径約42m、高さ8m、前方部幅約25m、高さ約4.5mの規模が計測できる。

#### 4. 出土遺物

丸山古墳の副葬品はもちろんのこと、古墳から出土した遺物は過去においてまったく不明であった。平成20年に設置したコンクリート枕埋設の掘削時に埴輪と弥生土器の破片が出土した。出土遺物を図化し、図93に提示した。以下、遺物の概略を述べることにする。

図93の1は前方部の墳頂から出土した弥生時代の甕の底部片である。破片は底部の約半分であるが、底径4.4cmに復原することができた。底部外面には叩き板の圧痕が観察され、内面にはハケ目が観察された。調整から弥生時代後期に帰属するもので古墳築造以前の遺物と考えられる。

図95の3と4は後円部の墳頂から出土した円筒埴輪である。3と4は、胎土や調整方法から同一個体と考えられるが、接合関係はなかった。

3は突帯がめぐる胴部片である。突帯の断面形態は三角形を呈し、幅1.9cm、高さ0.7cmを計測する。突帯は、粘土紐を貼り付け後にヨコナデを施すが、突帯の下辺は粘土紐の貼り付け痕跡が残る。断続ナデ技法は観察できなかった。内外面の調整は、タテハケが観察できる。ハケ目は粗く、3本/cmの密度であった。二次調整は見られない。破片からはスカシ孔が確認できなかった。破片には黒斑が見られないことから焼成は窖窯によるもので土師質であった。

4も円筒埴輪の底部の破片で、1条の突帯を含む。底面の残存率が小さく、底径を復原するには至らなかった。突帯の面形態は三角形を呈する。幅1.9cm、高さ0.6cmを計測する。3の破片と同じように粘土紐を貼り付け後にヨコナデを施すものの突帯の下辺は粘土紐の貼り付け痕跡が残る。4の破片も突帯に断続ナデ技法は観察できなかった。底部高は10.7cmを計測できた。突帯間隔は不明であるが、2段目は残存する高さは6.7cmを計測する。調整は荒いハケ工具を用い、内外面を縦方向に施すタテハケであった。ハケ目自体の密度は3本/cmの密度であった。底部も2段目も二次調整は施されていない。底部外面には底部調整が認められなかった。2段目部分の破片には現存する破片ではスカシ孔は観察できなかった。焼成は3と同様に窖窯による土師質であった。

以上2点の破片から考えられる埴輪の製作年代は川西編年のV期に対応し、埴輪検討会共通編年のV期2段階と考えられ相対年代を6世紀前半となる。

図95の2は須恵器であるが出土資料ではない。後円部南側の盗掘孔から排出された土砂に散布していたもので表面採集をした。破片から杯蓋の天井部片である。復原すると口径14cm程度の大きさになる。推測の域を脱せないが陶邑編年の高蔵寺23形式から陶器山15形式の範疇と考えられ、先の円筒埴輪の年代とも矛盾しない。しかし、副葬品として取り扱うには墳丘形態と大きな齟齬がある。表採という資料の制約もあり慎重に取り扱わなければならないが、採集地点から副葬品の可能性も捨て切れない。供献土器としての性格も考慮し古墳の年代決定については今後資料の増加を待って対応しなければならないであろう。

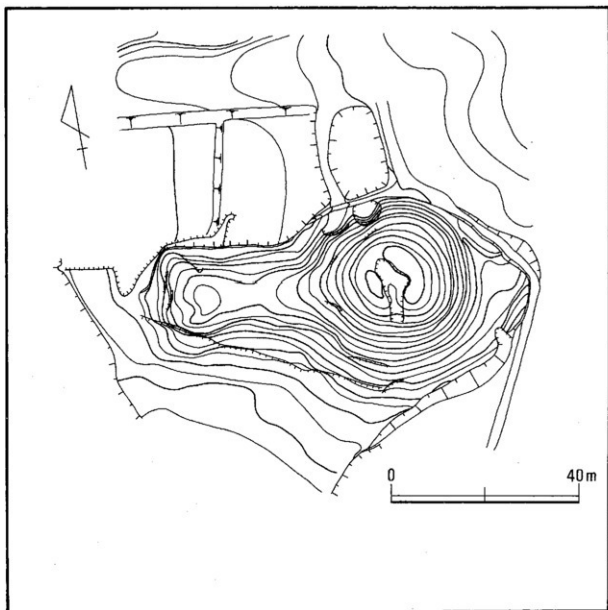


图92 丸山古墳墳丘測量図

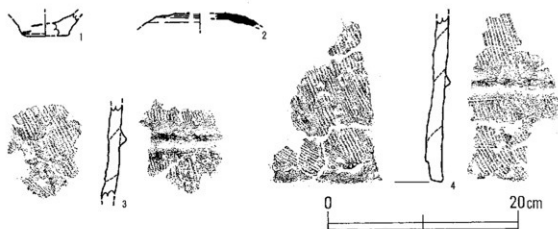


图93 丸山古墳出土遺物実測図

## 5. まとめにかえて

真っ直ぐ伸びる前方部に高い後円部を有する墳形は前期古墳特有のものであり、従来から考えられている築造時期を訂正する必要性はないと考える。ただ、後円部墳頂から出土した円筒埴輪は観察する限り古墳時代後期に帰属するものである。

埴輪の出土位置は、後円部墳頂平坦面の外周端であり、通常円筒埴輪が樹立する地点である。出土した6片程度の破片が接合することから別のところからの混入とは考えにくい。さらに底部が残る資料はここに樹立されていたことを窺わせる。

## 参考文献

- 大阪府教育委員会1971『近飛鳥遺跡分布調査概要』
- 大阪府教育委員会1972『近飛鳥遺跡分布調査概要』Ⅱ
- 羽曳野市教育委員会1986『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財分布調査概報』
- 駒ヶ谷遺跡調査会1990『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財分布調査概要』

## 御旅山古墳

### 1. 埋葬施設確認にいたる経過

御旅山古墳は、大阪府教育委員会の職員が発見したことに始まる。昭和42年(1967)9月のことである。以下、調査の経過を「羽曳野市壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報」から抜粋した。

9月25日に大阪府教育委員会の職員が南河内東部地域の文化財視察の途次に、壺井八幡宮が鎮座する丘陵縁で大規模な採土工事により古墳が破壊されつつあるのを発見した。9月末に同委員会は、この古墳が前方後円墳であることを確認するとともに埋葬施設が露出していることを確認し、10月6日から後円部の埋葬施設の調査に着手した。10月8日に調査を終え、10月18日から本格的な発掘調査を開始した。調査は11月4日に終了した。墳丘の保存はできなかったものの、内部構造・外部構造・副葬品などが明らかとなった。

御旅山古墳の位置は、大阪府羽曳野市壺井に所在する。古墳が営まれた丘陵は「大黒丘陵」とも呼ばれ、丘陵の西側を石川が、丘陵の東側を飛鳥川が流れる間にあり幅約800m、高さ50mで複雑な起伏をなしつつ、東南方の太子町から西北に伸びている。古墳は壺井八幡宮の所在する標高55mの丘頂部にあり、東西、南北の広さが約200mの平坦な地形の西北隅を占めている。江戸時代の宝暦年間(1751～1764)に八幡宮のお旅所となったことから、この地名が生じたという。

調査で確認された古墳の規模は、全長が44.5mを測る。後円部径26.5m、後円部の高さ約8m、前方部の幅16.5m、前方部の高さ約4.5mであった。前方部は北北西すなわち北25°西を向いている。後円部が大きくて高いのに比べて、前方部が低くて長く、撥形に開く外形は、前期の前方後円墳の特色をよく示している。

埋葬施設は調査により後円部の中央に存在する粘土槨が確認されたが、江戸時代に乱掘されていた。撓乱坑の埋土から床面に排水施設として用いられていた大量の礫石と赤色顔料の付着した粘土塊片、鉄製品の破片とが混在していた。南北に長く穿たれた墓壁の北半の固壁はろうじてたどることができた。北端の幅は上面で2.2m、底面で1.6m、中央では幅が広がって上面で3.6m、底面で約2.6mという胴の張った長方形をなし、墳頂部からの深さは1.3m、全長はほぼ7mに達するとみられる。墓壁底の北端付近には粘土槨がわずかに残り、南北方向に長さ6m余りの粘土棺床を構築する。粘土棺床の周囲に礫石をつめた排水施設をめぐらした構造を復原できる。墓壁底の北西隅から幅、高さともに約30cmのU字形断面をもつ溝を穿ち、内部に礫石をつめた暗渠としてぐれ部西側に向かって直線に伸びていることが確かめられた。

副葬品は乱掘されていたため埋葬当初の状況では確認できなかった。後円部から凝灰岩の石櫃が検出され、その中に副葬品と考えられる鏡と墨書のある石が2個納められていた。墨書から元文年間(1736～1740)に掘り出された鏡は宝暦4年(1754)に再埋納されたことが判明した。なお、後円部の調査時に凝灰岩製の五輪塔の破片が出土していることから石櫃は平安時代末の骨甕器を転用していたものと考えられる。石櫃の納められた鏡は5面の大型の鏡を中央に重ね置き、四隅に小型の鏡を分けて置いてあった。石櫃の底には鉄器を敷き詰めていた。

再埋納された鏡は全部で23枚である。鏡の内訳は、仿製三角縁獣文帯三神三獸鏡4面、仿製細線式獣帯鏡系1面、仿製内行花文鏡14面、珠文鏡1面、系列未定の方鏡1面、重圏文鏡1面となる。また、底に敷かれていた鉄器は鉄刀、鉄斧、鉄鏃があるが、細片であったという。

## 2. 埴輪の出土状況

大阪府教育委員会の調査で埴輪の配列状況が明らかになった。調査報告書によれば、前方部については全域を調査し得たので、その結果を示すと次のごとくである。

下段葺石下縁における前方部前面幅は、両隅を流失してしまっているが復原すれば16mとなり、くびれ部の幅は11.5mである。くびれ部から前方部全長は19mとなる。

前方部は検出した葺石から2段に築造されていたことが明らかである。

葺石は下段および上段とともに、かなり丸味を帯びた河原石を小口積にして使用されているが、その基底のところどころにやや目立つ大石を使用している外は、全体にわたって、通常他の古墳に見られるような、基底部に大きな石を使用する状況はみられない。ただ、前方部前面東端近くでは、やや細長い大きな石を縦に並べて基石としている部分のあるが目立つ程度である。

下段葺石は、いずれの部分も上段葺石基底部から続くテラス面まで残存するものはなく、上部を流出してしまっているが、葺石面の傾斜と上段基部のテラス面等から復原すれば、幅約1.2mで前方部を周り、そのまま後円部にも続くものと考えられる。

上段葺石は、下段よりはさらに残存の状態は不良であって、前方部前面では、ほとんど残存するものもなくすべて流出してしまっていた。他の部分においても前方部まで残存するものはなく、また前方部頂もかなり流出していることも考えられるが、その傾斜等から復原すれば、ほぼ1.6mで前方部を周り、後円部中段の葺石に続くものであったと推定される。

後円部にはさらにこの上に上段の葺石が幅約3.5mで葺かれ全体が3段に築造されていたと考えられるが、前述のとおり、調査を実施し得なかったため推定の域をでない。

前方部および、東側くびれ部から後円部にかけて、下段葺石基底部に接して壺形埴輪が並べられているを検出したが、幅約0.5mのほぼ等間隔に置かれていたことが明らかである。東側くびれ部では、葺石基底部外に小礫が敷かれ、その上に壺形土器が置かれていた状態であったが、他の場所では、こうした小礫を敷いた痕跡はなき、直に地山面に置かれた状態であって、溝や穴等の壺を置くために特別に仕事をしている状態は見受けられなかった。また、円筒埴輪片もこの面でもかなり検出されたが、元の位置を保つものではなくすべて上方から落下したものと判断され、下段には前方部後円部ともに、この壺形土器のみが並べられていたことが明らかである。

上段葺石上や下段葺石からも、破片が検出されていることが明らかであるが、元の状態を知り得るものはない。

埴輪部および上段基底部外には、これらの壺形土器以外に、円筒埴輪も並べられていたことが、やはり葺石清掃時に、落下した葺石や土砂に混じって、上段葺石上や下段葺石上から破片を検出していることが明らかであるが、西側上段基底部でわずかに底部のみを残して検出されたもの以外には、元の位置を保って検出されたものはない。

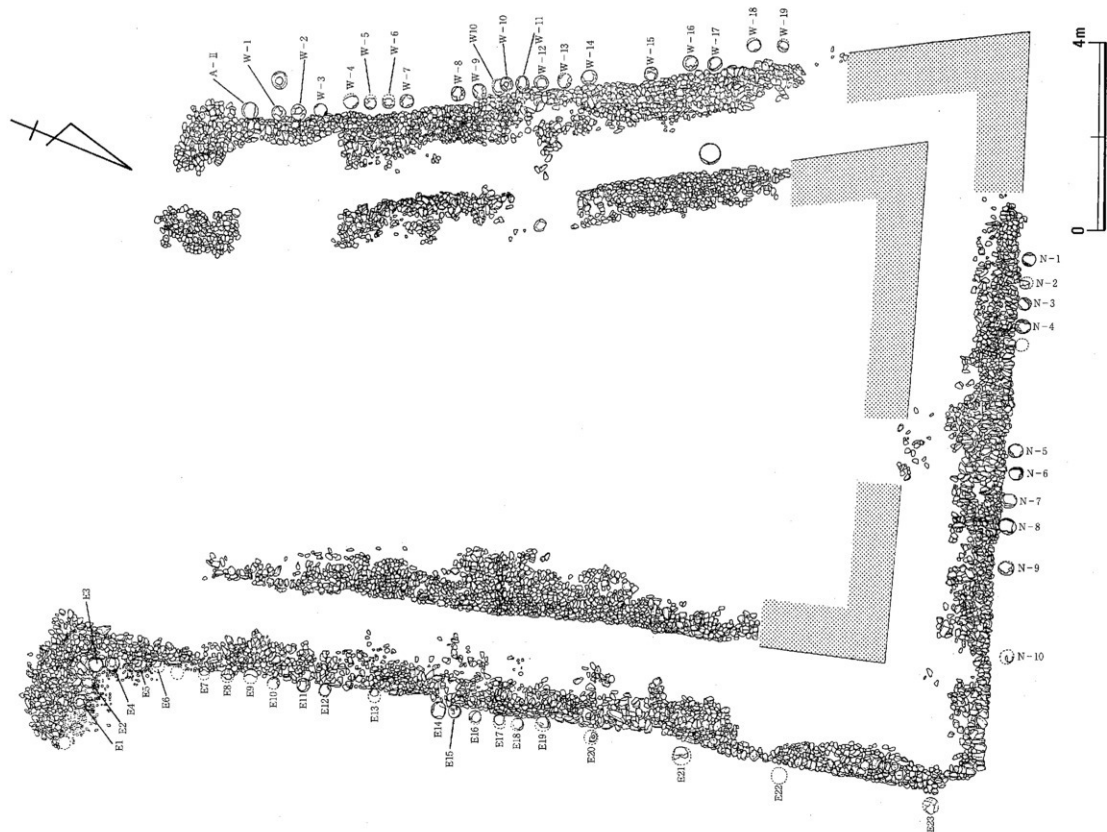


图94 御旗山古埠榭出土位置图

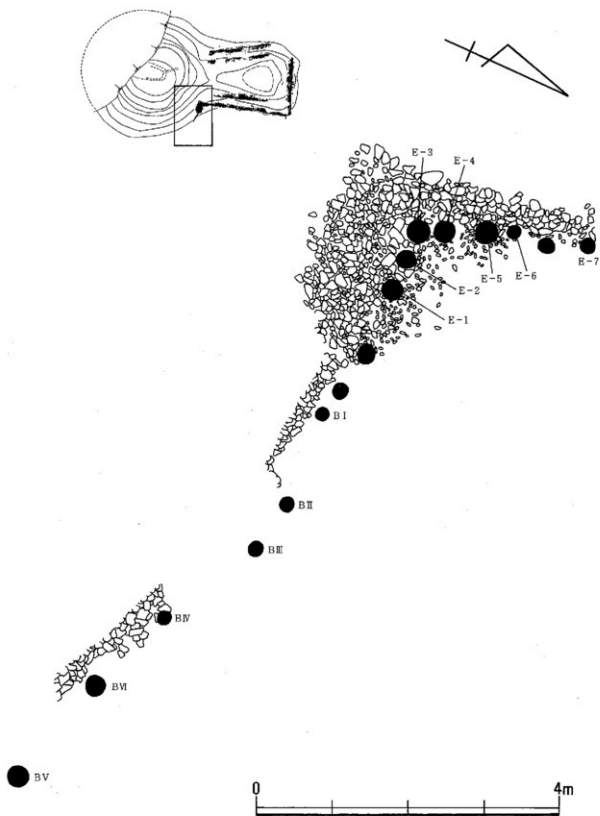


図95 後円部塙輪出土位置図

### 3. 出土埴輪の観察

昭和42年の調査で出土した埴輪片のいくつかを図化した。

図96は底部の破片で、3は復原底径から直径37.8cmの円筒埴輪と判断される。他の3片の底面残存率が小さく底面形態が断定できなかつた。断定はできないが比較的高い割合で楕円筒埴輪が存在する可能性が高い。突帯が遺存する1、2、4の底部高は、1が17.5cm、2が18cm、4が9.5cmでバラつきが見られる。突帯が欠損して底部高が不明な3は12cmの残存高を図る。外面の調整にはナデが多く見られるが、4のようにタテハケの調整も見られる。

図97の底部片は横断面が楕円形を呈する。したがって、御旅山古墳には円筒埴輪と楕円筒埴輪が樹立されていたことになる。1は短辺22cm、長辺23cm以上で、突帯はないが現存する高さは12cmを測る。2は22cmの底部高をもつ底部である。2段目に逆三角形のスカシ孔が観察される。スカシ孔は残存する破片から胴部の長辺側に穿たれている。スカシ孔を楕円筒埴輪の中心と考えると長辺は53cmに復原できる。観察できた2片の楕円筒埴輪の外面調整はいずれもタテハケによるものであった。円筒埴輪と楕円筒埴輪の外面調整が異なることは今回の観察では明らかに成し得なかつた。2の内面にはケズリを施していた。突帯から上段の外面に朱塗りが見られ、塗布する際に滴り落ちた朱が底部に付着しているのが観察できた。底部高に見られた規格には20cmを超えるもの、18cm前後、10cm以下の3種類があるが、今後の整理で新たな規格が存在する可能性もある。

図98に胴部片を6点提示した。この内、突帯間隔が判る1は、14.5cmを測る。破片にはスカシ孔が観察できないので、どの段数になるのかは判断できない。内外面はナデによる調整が施されている。2から4は、剝離した突帯貼り付け面に方形刺突による突帯間隔設定技法が確認できる。刺突は短辺2～3mm、長辺3～4mmの断面形態が長方形の工具を用いている。その他、ヨコナデによる突帯間隔設定技法がある。外面調整に断続的なヨコハケが施される。内面はナデ調整による。外面に朱塗布が観察される。4には逆L字状のスカシ孔が穿かれている。突帯の上辺から遺存する胴部先端まで13.7cmを計測するので、突帯間隔は1で計測できた14.5cmよりも長いと思われる。5も突帯の上辺から遺存する胴部先端まで14.3cmを計測し、破片に突帯のナデ調整が認められないので、やはり1の突帯間隔よりは長くなる。推測の域を超えないが16cm以上になる。5は残存する横断面から楕円筒埴輪と判断される。外面調整はタテハケを施した後に丁寧にナデによりハケ目を消している。胴部の短辺寄りに逆三角形のスカシ孔を穿っている。6もスカシ孔が逆三角形で突帯の直下に位置する。御旅山古墳で観察できるスカシ孔は三角形が多く、逆L字形が確実である。方形スカシの存在は可能性があるが、円形スカシ孔は今のところ存在しない。6の外面調整にナデを施しているが、内面調整にヘラ削りを施す。

図99は口縁部の破片で、4点図示した。口縁部径すべて直線的で、楕円筒埴輪の可能性はある。1と2はいわゆる極狭口縁と呼ばれる口縁部間隔（口縁部と最上突帯の間隔）が著しく狭い口縁部がある。1の口縁部間隔は2.6cm、2の口縁部間隔は2.4cmを測る。同じように3と4を計測すると両者の口縁部高は1が5.6cm、4が4.5cmであり、底部高同様に規格にバラつきがある。観察できた口縁部は外方へ屈曲するものである。図示した1だけが口縁端面が上方へ肥厚するが、2～4は口縁端面が平坦である。外面の調整はタテハケもしくはナデが施され、内面の調整にはヘラ削りをした後にナデを丁寧に施している。

出土した破片から形態の復原ができなかつた。また、定位置突帯の埴輪の存在は今回の観察でも確認できなかった。すでに指摘されているが、スカシ孔の上辺部分を底部として認識した結果である。



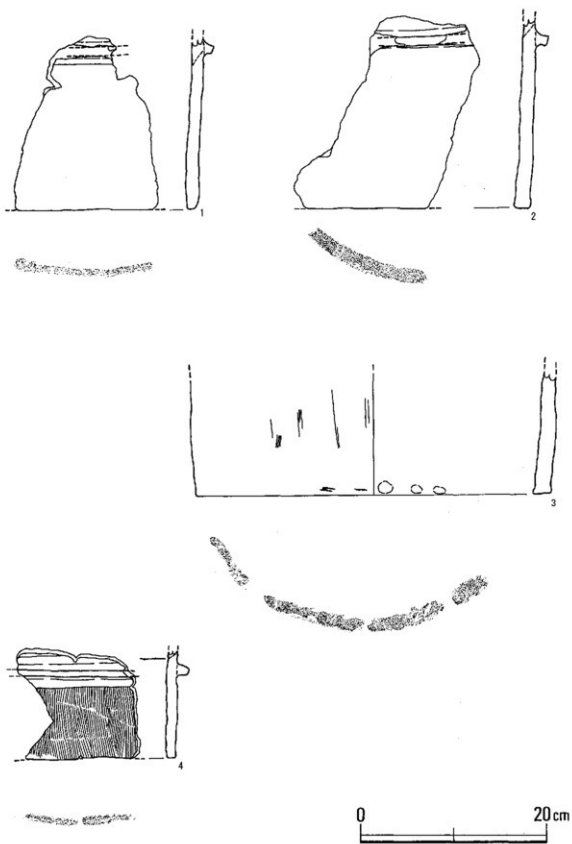


图96 御旅山古墳出土埴輪実測図 (1)

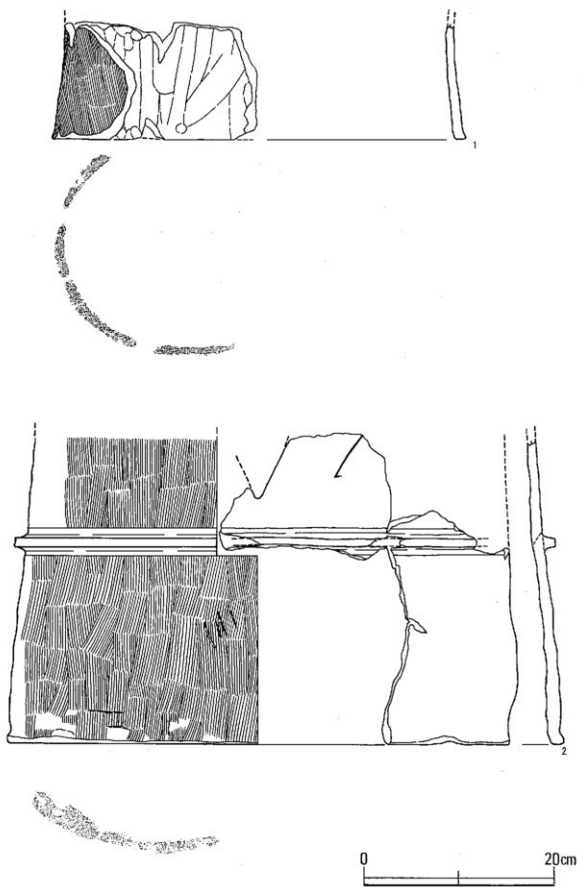


图97 御族山古墳出土木輪實測圖 (2)

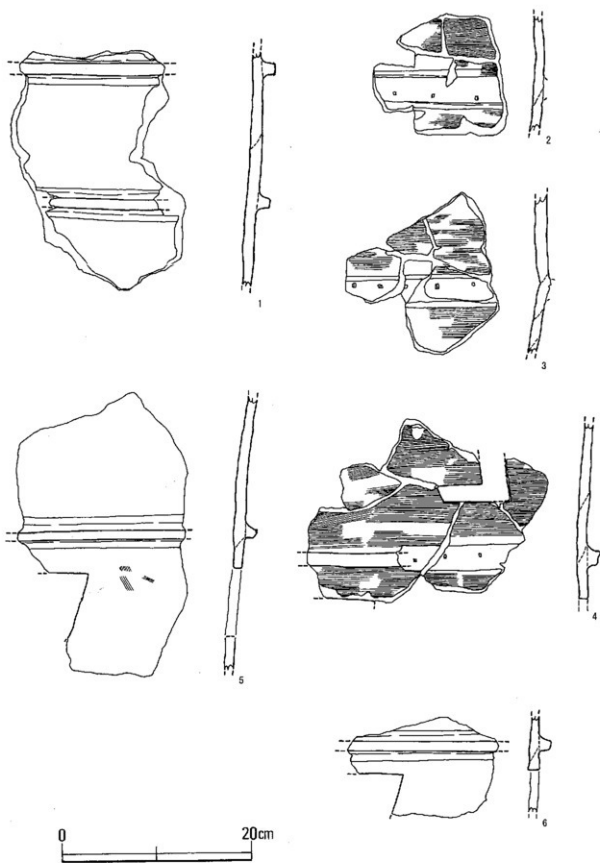


图98 御旅山古墳出土埴輪実測図 (3)

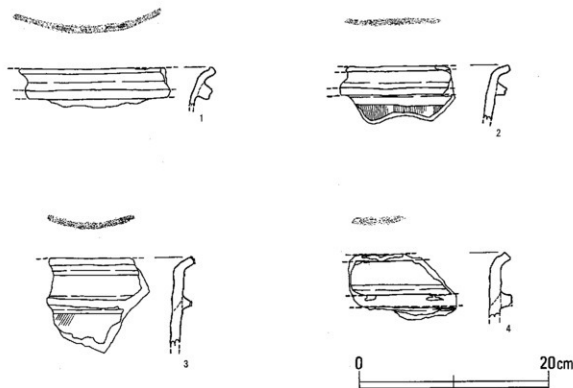


図99 御旗山古墳出土埴輪実測図(4)

次に、後円部と前方部の墳丘裾に巡らされていた壺形埴輪について紹介する。今回、前方部の西側に並べられていた壺形埴輪をすべて復原し、17点を図化した。図102に提示した壺形埴輪に付された番号(W-O)は、大阪府教育委員会による取り上げの番号である。

w-1(図100-1)口縁部の頸部欠損。口径27.4cm。残存12.2cm。底部欠損。胴頭部ヨコナデ。頸部径14.2cm。最大胴径29cmをはかる。底部を欠損している。

w-2(図100-2)遺存する胴部形態は球状を呈する。底部欠損。最大胴径30.8cm

w-3(図100-3)肩部から上が欠損する。

w-4は図化できなかった。

w-5(図100-4)粘土を押し広げた大きな穿孔が見られる。

w-6(図100-5)胴部の下半が遺存する。底部穿孔は指で大きく広げている。

w-7(図100-6)底部に粘土を押し広げた大きな穿孔が見られる。

w-8(図101-1)肩部が欠損するが図上では全体を復原が可能である。

w-9は図化できなかった。

w-10の壺形埴輪が入ったコンテナの遺物を接合したところ2個体が復原できた。便宜上、10aと10bとした。図101-2が10a、図101-3が10bである。

w-11(図101-5)胴部と底部と接合できなかった。大きい穿孔を持つ。

w-12(図101-4)指1本分の穿孔が観察できた。

- w-13 (図102-1) は肩部が欠損。底部がやや尖った形態を呈する。
- w-14 (図102-2) 丸い胴部を呈する。底部穿孔は大きい。
- w-15 (図102-3) 肩部が欠損するが口縁部の頸部と図上復原できた。
- w-16 (図102-4) やや丸みをもつ胴部を呈し、最大胴径29cmを図る。
- w-17 (図102-5) 底部と肩部を欠損する。
- w-18 (図102-6) 底部を欠損する。

口縁部は3点、図103に図示した。2は前方部斜面中央出土の壺形埴輪の口縁部である。3は出土地点が不明の壺形埴輪の口縁部である。4は後円部に囲繞されていた壺形埴輪B-6の壺形埴輪の口縁部である。

壺形埴輪の底部を図103に2点図示した。5は59075 (W3) コンテナに入っていた。w-3の壺形埴輪は図100-3に示したように穿孔部分まで遺存する底部が存在する。穿孔は指1本程度の大きさである。6は前方部東側の壺形埴輪でE-1の注記がある。穿孔は直径4cmで、指頭で押し広げる穿孔方法を用いる。7はN-9の壺形埴輪の底部片で、押し広げられた粘土に棒状工具の圧痕が残る。8はW-1の壺形土器の穿孔で、指1本分の大きさである。9はラベルが無く出土地点が判らないが、穿孔された底部の破片である。指頭で大きく広げる穿孔方法を採用する。10はW-10の壺形埴輪で指頭で大きく広げる穿孔方法が観察できる。

底部の穿孔方法は、ヘラを使って器壁を切り取るものではなく、底部外面から指頭で器壁を突き破るものである。

以上、図上から全体を復原した壺形埴輪は、高さ40cm、胴部最大径27cm、高さ28cm、口縁部直径27cm、高さ10cmの量をもつ。口縁部は二重を呈し、その形状からいくつかの分類が可能である。底部には焼成前に外側から指で押しあげた孔がすべてに見られる。この孔も大きさから二分できる。一つは、直径約5cmの穿孔で底部の内側に指で押し広げた際に反り返った粘土がそのまま残るものと、直径約2cmの穿孔で指突しただけ(指1本分)のものとなる。

口縁部上部はヨコナデによって仕上げられて、下部および胴部外面はハケメ調整を施す。内面は粗いヘラケズリを施す。

埴輪以外に土師器の埴が出土している。図105の1は、後円部墓壇内から出土した土師器の埴である。口縁端部が欠損する以外は完形である。緩やかな「く」の字状の頸部から延びる口縁部には突帯が巡りそこからさらに口縁端部が続くと思われる。胴部は寸胴で、平らな底に焼成前の穿孔が見られる。法量は現高で3.5cm、口縁部の突帯部分の直径5.5cm、頸部径4.9cm、最大胴径6.3cm、頸部から底部までの高さ2.8cmを測る。穿孔の直径1.6cmを測る。

図104に図示したのは線刻が認められる破片である。13・14から突帯上下にも施していることが判る。破片が小さく、全体の文様構成は復原できない。南河内では玉手山1号墳、玉手山3号墳、玉手山9号墳、真名井古墳にも線刻埴輪の存在が認められる。

#### 4. 副葬品から見た埴輪の製作時期

御旅山古墳から出土した三角縁神獣鏡は4面で、京都大学の目録番号のNo204、No223、No226、No227である。福永伸哉氏による分類によれば、No223・No227が福永I-b期に、No204・No226が福永I-c期に該当し、4世紀前葉から後葉となる。

埴輪からみた御旅山古墳の築造時期は、楕円筒埴輪の存在から玉手山1号墳と同時期に位置づけられ、円筒埴輪の外面調整から玉手山7号墳より少し遡る時期と考えられる。前期古墳出土の円筒埴輪

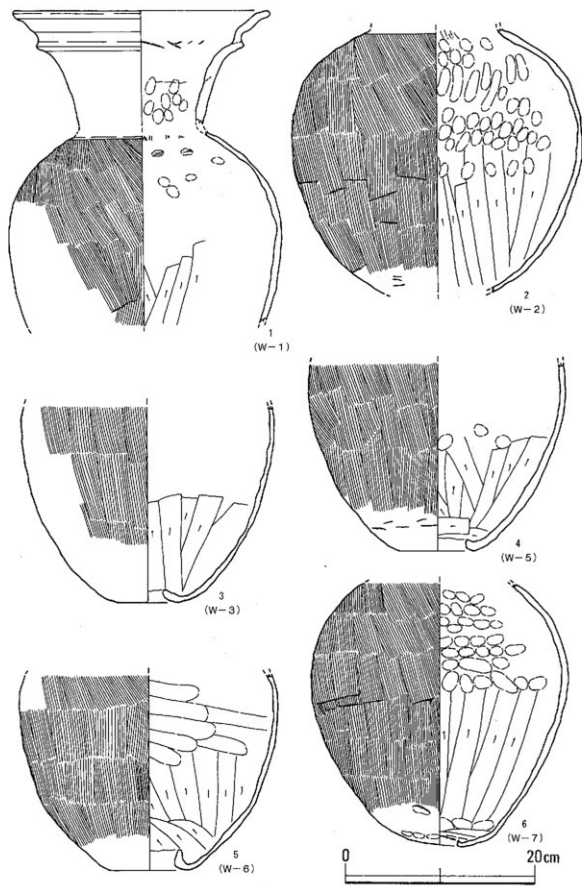


図100 御旅山古墳出土土壺形埴輪実測図 (1)

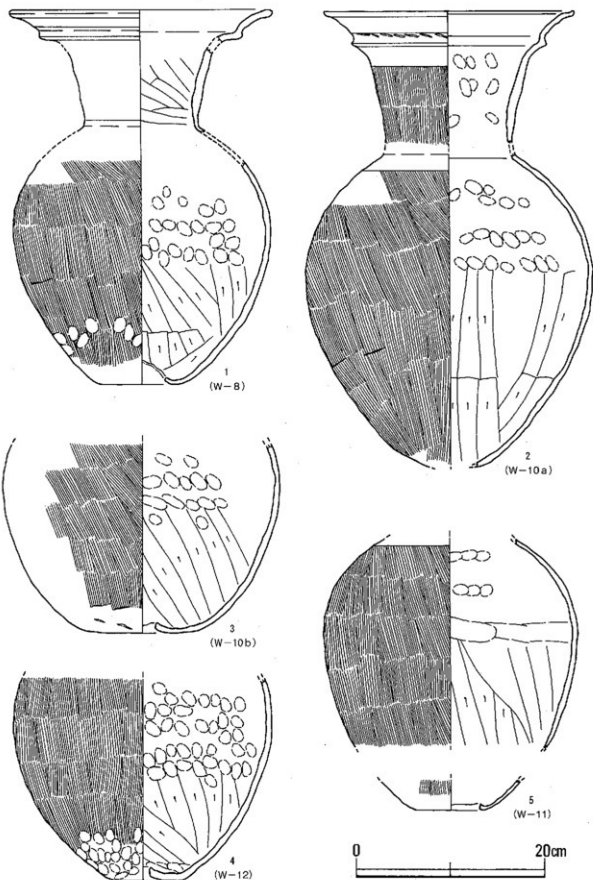


图101 御旅山古墳出土土壺形埴輪実測図(2)

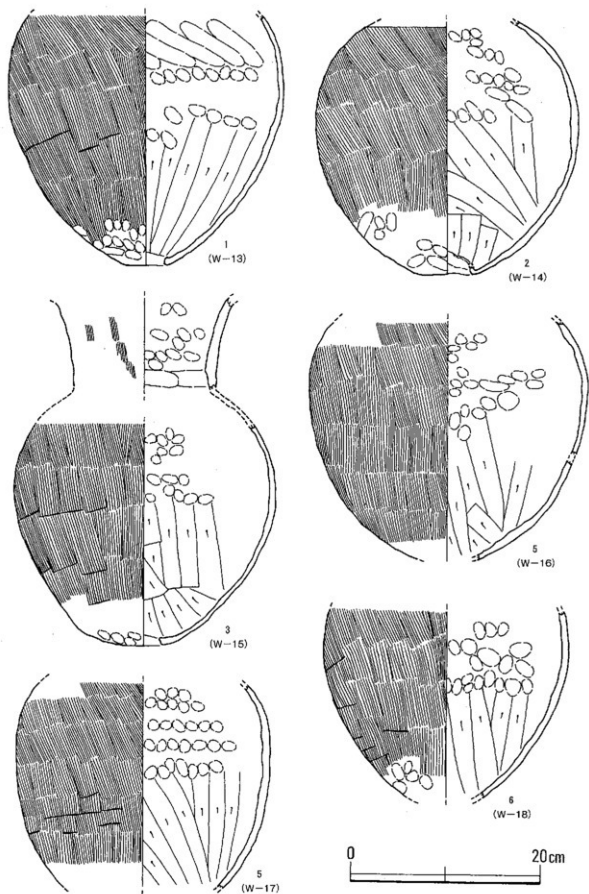


图102 御旅山古墳出土土壺形埴輪実測図 (3)



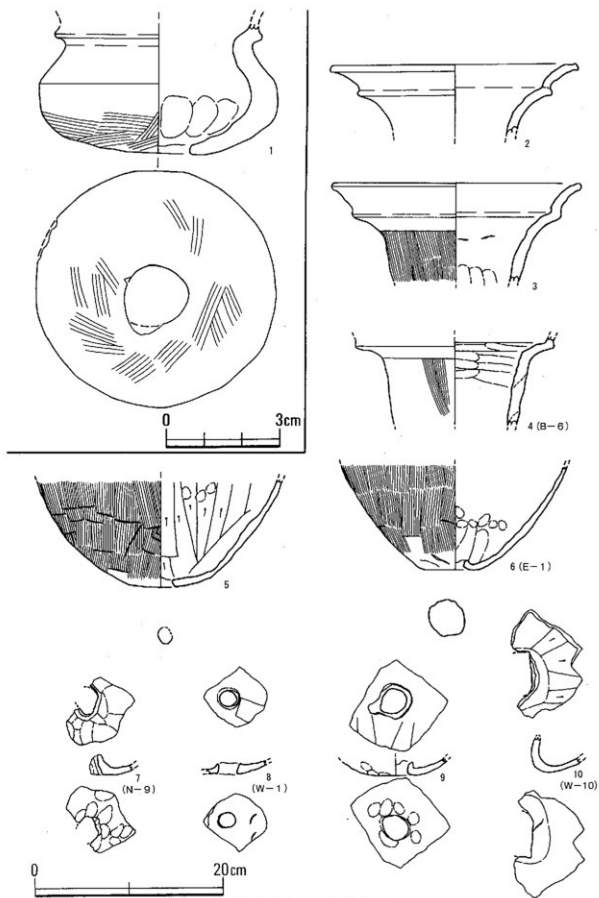


图103 壶形埴輪口縁部形態分類図

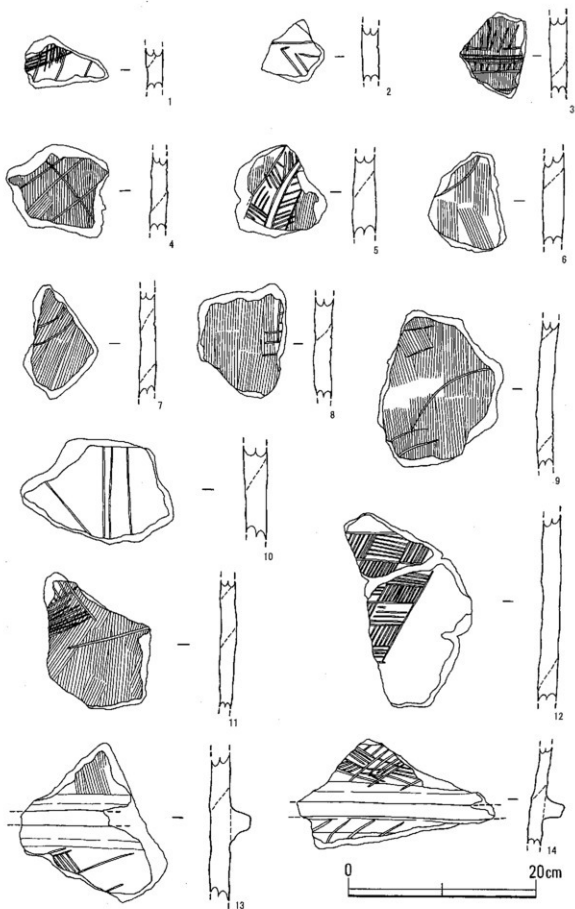


图104 御旅山古墳出土線刻埴輪实测图

を編年した鐘方正樹氏は、大きくⅠ期とⅡ期に二分し前者を5段階に細分した。年代は、Ⅰ期4段階が4世紀初頭（前期中葉）、Ⅰ期5段階が4世紀前半（前期中葉）、Ⅱ期が4世紀中葉から後葉（前期後葉）とした。編年によれば、玉手山1号墳出土の円筒埴輪はⅠ期4段階に、玉手山7号墳はⅠ期5段階に位置づけられている。

#### 4. まとめにかえて

##### 一御旅山古墳の被葬者像

江戸時代に再埋納された銅鏡22面は南河内では群を抜く枚数である。その中には4面の仿製三角縁神獸鏡が含まれ、4世紀前半に位置づけられる。

埴形に前方後円墳採用し、墳丘に圍繞されたのは円筒埴輪以外に壺形、楕円形がある。南河内では異彩を放つ。壺形埴輪の口縁は二重であるが、胴部が卵形を呈する。丸底の底部には焼成前に穿孔するがその方法はヘラを用いず、指と棒状工具である。

壺形埴輪の製作にあたり東四国地域の影響を受けたものと推測されている。

## 通法寺裏山古墳

### 1. 古墳存在の確認にいたる経過

通法寺裏山古墳は、昭和45年度・昭和46年度の2ヵ年に渡って大阪府教育委員会が実施した近つ飛鳥地域（柏原市・羽曳野市・太子町・河南町）の遺跡分布調査で確認された。調査は昭和46年3月12日に踏査され、No16地点として丘陵尾根に前方部が東方を向く前方後円墳が把握された（大阪府教育委員会1971）。

その後、昭和60年度に羽曳野市教育委員会が駒ヶ谷地区の埋蔵文化財分布調査を実施している。墳丘はブドウ畑の中にかなり削平されているが、前方部を西に向ける墳丘長60mを超える前方後円墳とした。埴輪片等が多数散在していた。（羽曳野市教育委員会1986）。

平成6年に刊行された『羽曳野市史』第3巻には墳丘南側のくびれ部と思える箇所での地形観察から東方側に後円部が存在する可能性をあげ昭和60年の羽曳野市教育委員会の所見を支持している。また、同じ丘陵上に築造されている壺井丸山古墳や壺井御旅山古墳は前方部を西に向けているのを勘案すれば後方が東側であると理解できるとしている（羽曳野市史編集委員会1994）。

### 2. 古墳の位置と環境

通法寺裏山古墳は、羽曳野市通法寺小字延寿谷に所在する。いわゆる大黒丘陵（注1）から西へ張り出した、標高約58mの丘陵尾根状に立地する。小河川の浸食によって谷地形が発達している。そのため傾斜の急な尾根となって幾筋にも分断されている。

また、古墳の西側には標高30m前後の沖積段丘が丘陵に沿って南北に存在する。現在は、壺井・通法寺の集落が古くから市街化しており、遺跡の存在は知られていない。

古墳が築かれた尾根の南麓との高低が14mの差があり、そこには河内源氏の発祥地である通法寺が建立されている。明治時代に廃仏毀釈運動によって取り壊された本堂跡を含む境内地が国の史跡に指定を受けている。『河内名所図会』に描かれている通法寺の境内図には古墳が位置する部分に流造りの社が存在する。同書によれば水分、弁天、稲荷の三座を祭る「上ノ社」が稲荷山にあることが記載されているので、享和元年（1801）当時の通法寺の裏山は稲荷山と呼ばれていたことになる。また、製作年代は不明であるが、通法寺を描いた境内図には「上ノ社」でなく「稲荷社」とある（羽曳野市史編集委員会1985）。

通法寺裏山古墳の北西500mの同丘陵上には壺井御旅山古墳が存在する。また、南の丘陵上には九流谷古墳が存在する。九流谷古墳は太子町太子に所在する墳丘長70mの前方後方墳である。大黒丘陵の南端に位置し、丘陵南裾には大井川が北西流し梅川と合流した後石川へ注ぐ。

### 3. 調査の成果概要

現在まで発掘調査を実施されておらず、詳細については不明である。幾度の踏査により墳丘と思われる高まりがわずかに確認できる程度である。江戸時代には通法寺の境内として社が鎮座し、戦後には果樹園として開墾されたと思われる。したがって、墳丘部分の流失も激しく前方後円墳の形状は明確ではない。さらに、墳丘部分の遺存状況が悪く規模も判然としない。おそらくは墳丘長が60m級の大きさを持つものと思われる。

昭和45年度の大阪府教育委員会の分布調査の報告では、墳丘は全壊で、埋葬施設（報告文では櫛室とある）も全壊とある。石材が見られないことが根拠であろうか、粘土礫と推定されている。埴輪片、須恵器片が多数出土しているようだ。

今のところ墳丘部分での川原石等の石材は確認できていない。したがって、今のところ葺石の存在を確定し得ない。昭和45年と昭和61年の分布調査で埴輪が採集されている。丘陵尾根の埴輪の散布から古墳の存在は明らかである。よって、古墳の築造時期も採集した埴輪に拠り所を求めよう。

### 4. 出土埴輪

表採された埴輪の内25点を図化し、図105に提示した。図105の1から12までの円筒系埴輪の破片で、図105の13から25までが形象埴輪である。

埴輪片の外面に黒斑が認められることから埴輪の焼成は、甕窯焼成ではなく野焼きによるものと考えられる。

観察できた円筒埴輪片のうち全体を復元できるような資料はない。破片の出土量もさほど多いとは言えない。形態が判明した資料を取り上げると1から4の4点の破片は、口縁部片である。小片のため口径を復元し得なかった。口縁部はヨコナデによって調整し、端部に面をもつ形態を呈する。1以外は口縁部を外反する。

5から10までは胴部の破片である。5は胴部から剥がれた突帯であり、下端幅1.2cm、上端幅1.2cmを測る突帯の断面は方形である。剥離した面には突帯貼り付け技法の痕跡などは観察されなかった。胴部片の調整はタテハケとヨコハケが施されている。前者は6、7、9の破片が該当し、後者は10の破片が該当する。ヨコハケは断続性が認められた。内面はいずれもタテハケによる調整が施されている。

8は突帯が付された破片である。突帯断面は台形状を呈する。

円筒埴輪の胴部に穿孔されるスカシ孔については観察し得た破片では確認できなかったため形状については不明である。

11と12は朝顔形埴輪と考えられる破片である。いずれも肩部にあたる。11は肩部と円筒部の境目に突帯を貼り付けた破片と考えられる。朝顔形埴輪の特徴的な頸部や口縁部の破片は今回の観察した資料のなかでは確認できなかった。

13から21は盾形埴輪と考えられる破片である。盾面の文様を構成する沈線の存在から判断した。破片は非常に小さいため盾面のどの部分にあたるか判断ができない。そのなかで、20の線刻は三角形を復元することが可能で鋸歯文を表現する盾の文様も考えられる。

22から24の底部は小片のため判断しづらいが、底径が円筒埴輪の口縁部とした口径に比べ直線的だったので盾形埴輪などの形象の基部の可能性が高い。22の底部片にはカタカナの「ハ」の字を左横向きにしたような文様が施されている。

盾形埴輪以外の形象埴輪については不明である。形象埴輪の器種が偏るのは採集地点によるものかは現状から判断できない。

## 5. 調査結果（まとめにかえて）

通法寺裏山古墳は現況から前方後円墳と考えられるが、墳丘測量図などの基礎資料が作成されていないのが現状である。

古墳の築造時期は採集されている埴輪から求めることが可能である。観察し得た円筒埴輪の手法と形象埴輪の存在から古墳時代前期の後半に位置付けられる。

壺井に所在する丸山古墳、御旅山古墳と比較すれば通法寺裏山古墳の築造は後出となる。

注1 『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書』の中で石川に沿う壺井から大黒にかけての丘陵を「大黒丘陵」、太子町との境界にあたる南東の丘陵を「御陵山丘陵」と仮称している（羽曳野市井教育委員会『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書』1992）。

### 参考文献

大阪府教育委員会1971『近飛鳥遺跡分布調査概要』

羽曳野市教育委員会1986『羽曳野市駒ヶ谷地区 埋蔵文化財分布調査概報』

羽曳野市史編纂委員会1994『通法寺裏山古墳』『羽曳野市史』第3巻史料編1

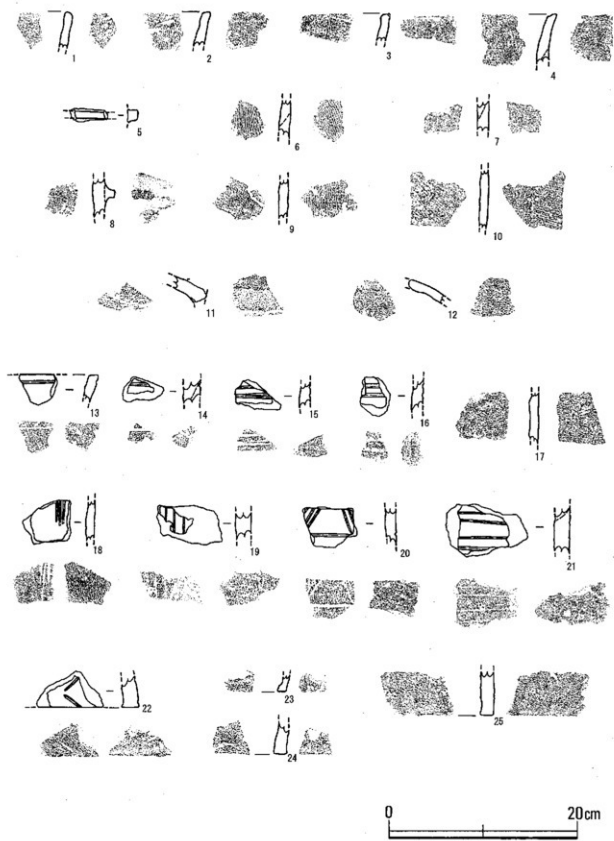
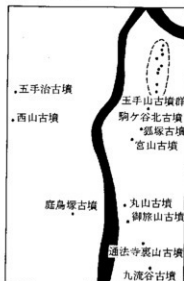


图105 通法寺裏山古墳出土埴輪実測図



### 弥生時代



### 古墳時代前期



### 古墳時代中期

## 庭鳥塚古墳の景観

庭鳥塚古墳が位置する中位段丘は旧石器の出土が確認されていることから人間の行動は1万年前に求めることができる。大地に人の痕跡が確認できるのは弥生時代からである。この時期、石川流域から9点の銅鐸が知られ、羽曳野市内では西浦から突線紐式銅鐸が出土している。また、庭鳥塚古墳の西側にある羽曳野丘陵から銅鐸が出土し、狭山藩主家に伝えられていた。突線紐式の銅鐸で、下半部が欠損する。同じ、突線紐式銅鐸は対岸の玉手山丘陵にも出土が報告されている。

西浦銅鐸が埋納された近くには平成10年(1998)に居館が検出された。方形の溝で囲まれた空間に2棟の掘って立て柱建物が存在する。古墳時代の前半期にあたる頃に出現した屋敷は銅鐸が埋められた直後に造られた。

尺度遺跡の居館が出現されたところ羽曳野市域には高塚の古墳築造が確認できていない。南河内では玉手山9号墳や真名井古墳が当該期の古墳と考えられる。

庭鳥塚古墳から出土した鏡は三角縁神獸鏡は古く位置づけられ、250年代に製作されたされる。

庭鳥塚古墳が築かれたのは4世紀の中葉と考えているので、埋納されるまで約100年の間、伝世されることとなる。4世紀中以降に埋葬施設が竪穴式石室から粘土椀へ移行し、腕飾石製品や武器が副葬される。

4世紀中期になると墳丘長が200mを超える前方後円墳の造営が始まる。大型前方後円墳が築かれ、長持ち形をした石棺が竪穴式石室に納められる。

図106 庭鳥塚古墳景観



## 庭鳥塚古墳のこれから

調査によって古墳時代前期に築かれたことが判明し、築造後1600年にわたり現在まで保存されてきた。出土遺物から中世と近代とに墳丘の一部に改変が認められたものの現在の古墳の姿は大きく損なわれることなく住宅地の狭間に残されてきた。しかも被葬者が葬られた部分は奇跡的にも盗掘されていなかった。それは古墳との意識がなかったのかあるいは塚としての祭祀的空間によるものかは判断はつかない。

しかしながら、古墳との意識が無かったことで墳丘の南側を削ってしまったことは周知の事実である。三角縁神獣鏡や筒形銅器といった遺物は貴重な文化財であるが、古墳が築き上げられた地域の来歴を考慮しながら羽曳野市内の前期古墳の動向も重要である。

墳丘がすでに消滅しているが駒ヶ谷地区の駒ヶ谷北古墳、狐塚古墳、駒ヶ谷宮山古墳並びに壺井地区では御旅山古墳が羽曳野市域の前期古墳として取り上げられる。壺井の丸山古墳や通法寺の通法寺裏山古墳は墳丘が遺存するが庭鳥塚古墳と同様に私有地である。平成20年度に再確認した西山古墳は私有地であるが公園中にあり、今後の活用方法を検討していかねばならない。

私有地となっている古墳については、庭鳥塚古墳をはじめ今後古墳の保存を契機にした“まちづくり”の展開が必要であろう。保存していくには古墳を所有してこられた地権者や地元住民の理解なくしては考えられない。

単に土地を買い上げ史跡公園としての整備をしていくのではなく、文化財の環境管理として現在や未来の人々のために、自然に溶け込んだ古墳の風景を大事にしたい。

墳丘から東は速くに二上山がシンボリックに見え、その南裾に竹内街道の峠がある。

羽曳野の前期古墳は大きく石川の右岸域と左岸域とに二分できる。比較的集落近くに位置するが、主な交通路からは一定の距離があり、判りにくい環境にある。そのため、主な交通路から各古墳へのアクセスを円滑にするため案内板の設置を図る。アクセス上のポイントとして鉄道駅では近鉄の喜志駅、上ノ太子駅から誘導される。

古墳見学コースのマップ作成や出土遺物の展示施設など必要であるが可能な事項から取り組むことが先決である。

例えば、羽曳野市内の前期古墳訪問マップ作成について、前期古墳の見学にあたり幾つかのルートを提示しておきたい。

喜志駅→庭鳥塚古墳→壺井丸山古墳→壺井御旅山古墳→通法寺裏山古墳→上ノ太子駅  
のほか

古市駅→西山古墳→西浦銅鐸出土地→尺度遺跡→庭鳥塚古墳→喜志駅

駒ヶ谷駅→壺井丸山古墳→壺井御旅山古墳跡→通法寺裏山古墳→丸流谷古墳→喜志駅

といったように。また、古墳の理解を深めるための学習施設を羽曳野市周辺に求めると、近つ飛鳥博物館、太子町立竹内街道歴史資料館、柏原市立歴史資料館などがある。これらの施設には前期古墳の遺物が展示されている。

近つ飛鳥博物館には壺井御旅山古墳の遺物や庭鳥塚古墳に類似する遺物が出土している紫金山古墳の鉄製品がある。太子町立竹内街道歴史資料館には丸流谷古墳の埴輪が所蔵されている。柏原市立歴史資料館には玉手山古墳群や松岳山古墳群の遺物が展示されている。これらの施設も活用しながら学習のネットワークを広げることも可能だ。

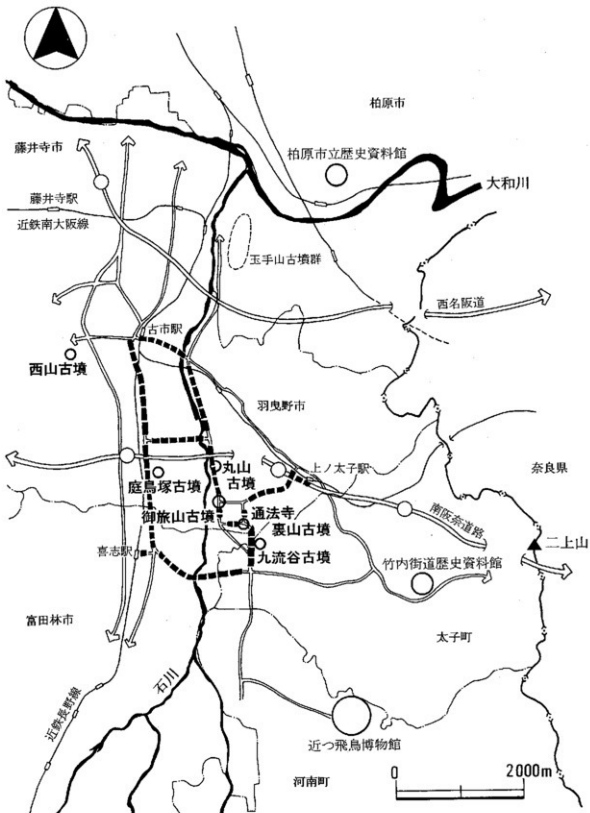


図107 羽曳野市内前期古墳のアクセス

# 原色図版



庭島塚古墳の調査風景

图版一 鏡背（处理前）



図版二 鏡面（処理前）





図版三 鏡背斜め（処理前）



図版四 鏡背（処理後）



図版五 鏡面（処理後）





図版六 鏡背斜め（処理後）

图版七  
粘土梯断面



図版八 後方部墳丘断面



図版九 粘土礫断面

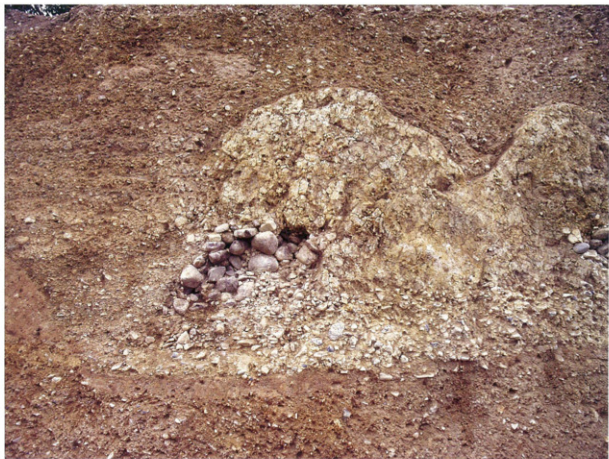




图版十  
墓壙断面



图版十一 粘土槲断面



图版十二 副葬品出土状况





図版十三 副葬品出土状況







図版十四 副葬品出土状況（棺外東側）



図版十五 副葬品出土状況（棺外東側）



図版十六 副葬品出土状況（棺外東側）



図版十七 副葬品出土状況（棺外西側）





図版十八 副葬品出土状況（棺外西側）

図版十九 副葬品出土状況（棺外西側）





図版二十 副葬品出土状況（棺外西側）





図版二十一 副葬品出土状況（棺外西側）





図版二十二 副葬品出土状況（棺外東側）

图版二十三 副葬品出土状况（棺外东侧）



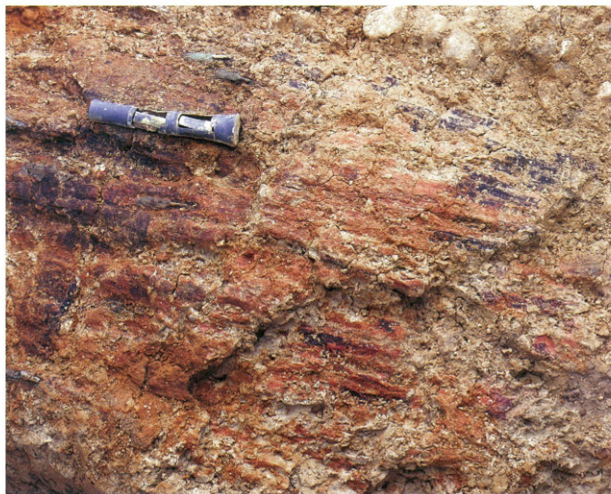
図版二十四 副葬品出土状況（棺外東側）





図版二十五 副葬品出土状況（棺外東側）





図版二十六 副葬品出土状況（棺外西側）



図版二十七 副葬品出土状況（棺外西側）



图版二十八 副葬品出土状况（棺外西侧）



図版二十九 副葬品出土状況（棺外西側）





图版三十 副葬品出土状况（棺外西侧）



図版三十一 副葬品出土状況（棺外西側）

図版三十二 副葬品出土状況（棺外西側）





图版三十三 副葬品出土状况（棺外西侧）



図版三十四 副葬品出土状況（棺外西側）





図版三十五 副葬品出土状況（棺外西側）



図版三十六 副葬品出土状況（棺外西側）

図版三十七 副葬品出土状況（棺外西側）







図版三十八 ヤリ3有機質



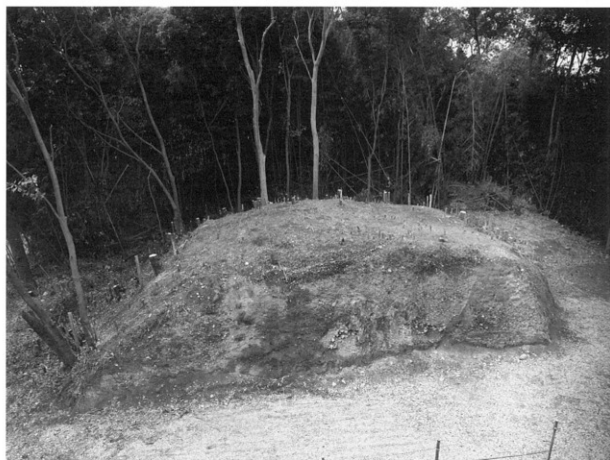
図版三十九 ヤリ3有機質

# 図 版



埋葬施設が明らかになった庭島塚古墳

図版一 調査前墳丘（後方部）・墓壇検出状況



1



2

図版二 埋葬施設断面・粘土槲検出状況



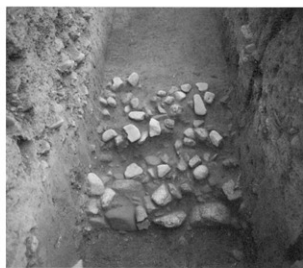
1



2



1. 第1トレンチ（北から）



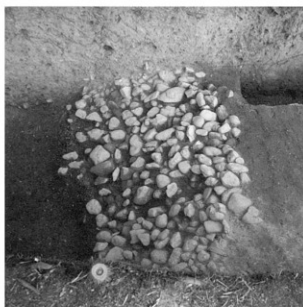
2. 第1トレンチ（西から）



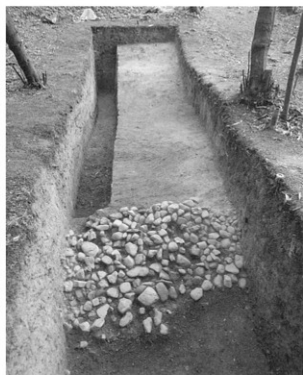
3. 第6トレンチ（南から）



4. 第6トレンチ（西から）



5. 第5トレンチ（南から）



6. 第5トレンチ（西から）



1. 第10トレンチ（南から）



2. 第10トレンチ（北から）



3. 第7トレンチ（北から）



4. 第7トレンチ（西から）



5. 第9トレンチ（西から）



6. 第9トレンチ（南から）



7. 第8トレンチ（東から）



8. 第8トレンチ（北から）



1. 第4トレンチ（西から）



2. 第11トレンチE区（西から）



3. 第11トレンチW区（西から）

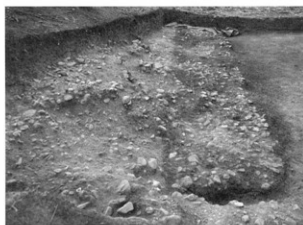


4. 第12トレンチ（東から）



5. 第12トレンチ（北東から）





1. 第15トレンチ（南から）



2. 第15トレンチ（東から）



3. 第15トレンチ前方部填土裾



4. 第15トレンチくびれ部（東から）



5. 第13トレンチ（南から）



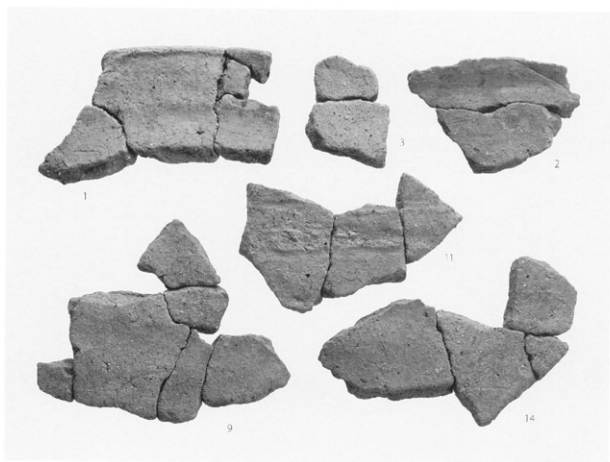
6. 第13トレンチ（北から）



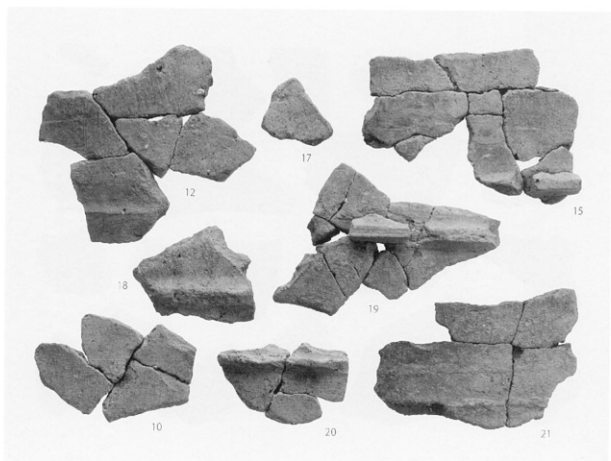
7. 第13、16トレンチ（南から）



8. 第16トレンチ（東から）



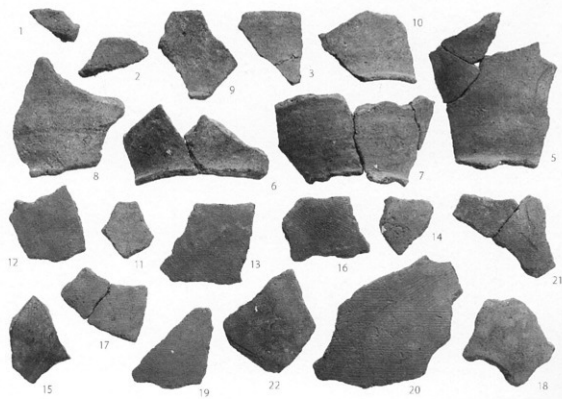
1



2



1. 第4トレンチ出土土師器



2. 第12トレンチ出土土師器



1. 南から



2. 北から

図版十  
墓壇断ち割り状況



1. 北から

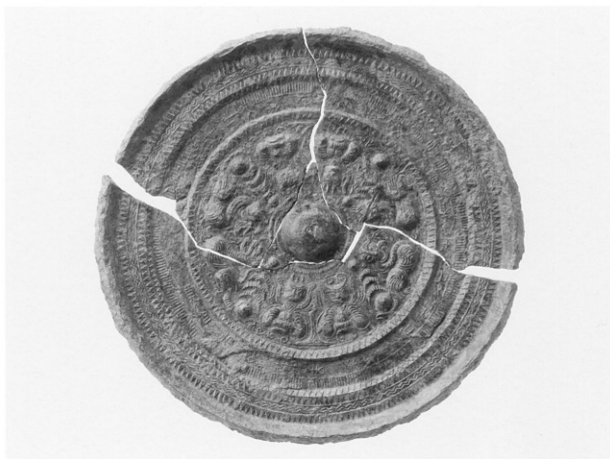


2. 南から



1. 柄蓋取り上げ直後

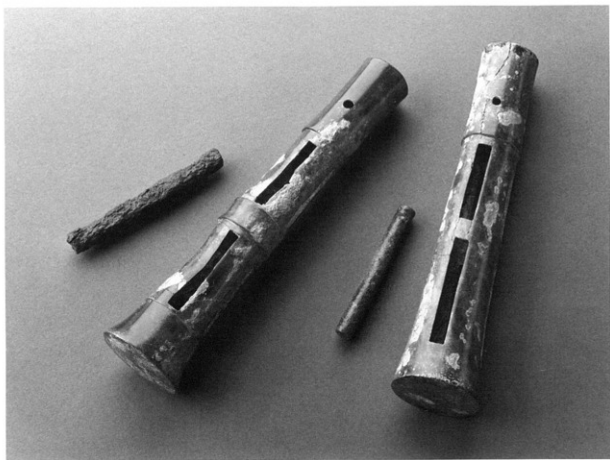




1



2



1



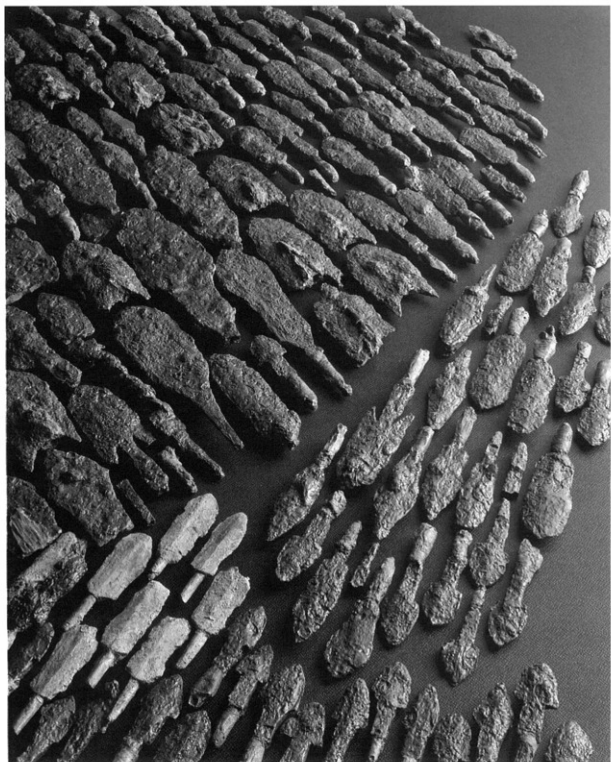
2

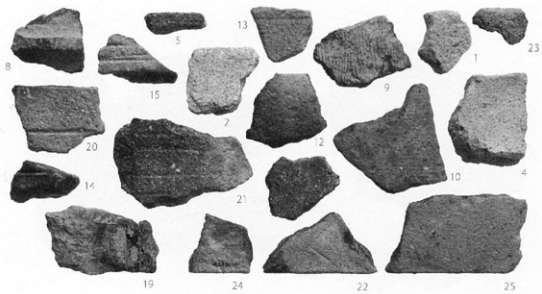


図版十四 鉄刀・鉄剣・鉄ヤリ



図版十五  
鉄鏃・銅鏃





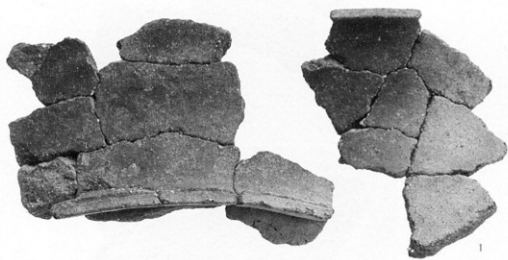
1. 通法寺裏山古墳出土埴輪



2. 西山古墳埴輪柁 1



3. 西山古墳埴輪柁 2



1. 朝顔形埴輪 二次口縁



2. 朝顔形埴輪 一次口縁



1. 円筒棺1 口縁部



2. 円筒棺2 口縁部



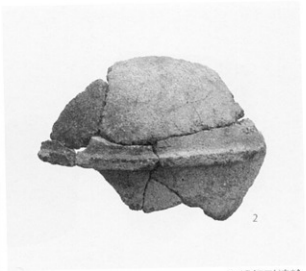
3. 円筒棺2 口縁部



4. 円筒棺2 底部



1. 朝顔形埴輪 二次口縁



2. 朝顔形埴輪



3. 蟹付円筒埴輪



4. 円筒埴輪



5. 円筒埴輪



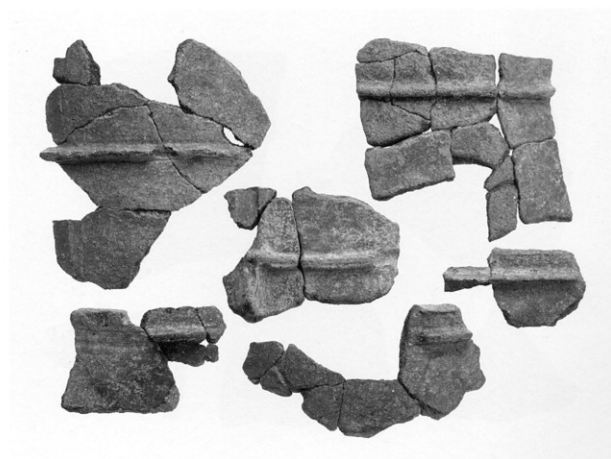
6. 西山型盾形埴輪口縁部



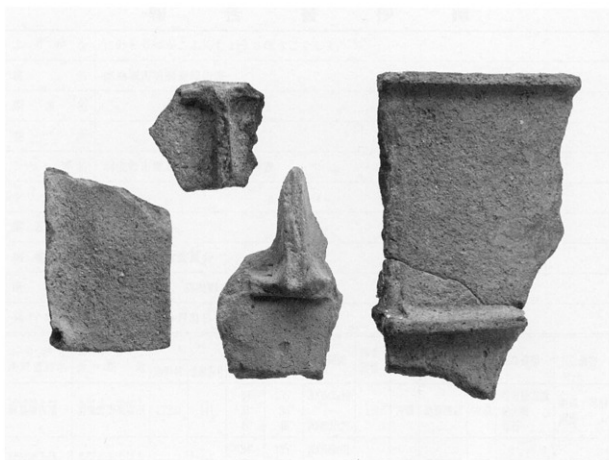
1. 西山型盾形埴輪



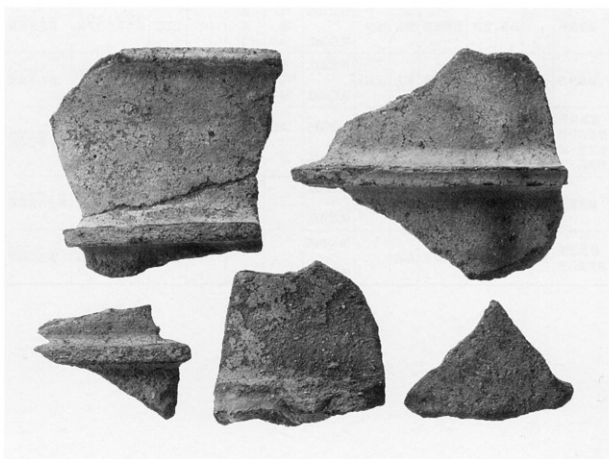
2. 西山型盾形埴輪



3. 簀付円筒埴輪 (赤彩)



1. 鬚付円筒埴輪



2. 円筒埴輪



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	にわとりづかこふんちょうさほうこくしょ											
書名	庭鳥塚古墳調査報告書											
副書名												
巻次												
シリーズ名	羽曳野市埋蔵文化財調査報告書											
シリーズ番号												
編著者名	河内一浩											
編集機関	羽曳野市教育委員会											
所在地	〒583-8585 羽曳野市誉田4丁目1-1											
発行年月日	西暦2010年3月31日											
ふりがな 所以遺跡名	ふりがな 所在地			北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	種別	調査原因	主な 時代	主な遺構	主な遺物
		市町村	遺跡番号									
庭鳥塚古墳	羽曳野市東坂田	27222	141	34° 31' 47"	135° 36' 46"	2005.05.19 ～ 2005.10.27	114.5	古墳	範囲確認	古墳	前方後方墳 粘土層 葺石	銅鏡・筒形 銅器
庭鳥塚古墳	羽曳野市東坂田	27222	141	34° 31' 47"	135° 36' 46"	2006.09.01 ～ 2007.03.20	45.00	古墳	範囲確認	古墳	葺石	円筒埴輪
庭鳥塚古墳	羽曳野市東坂田	27222	141	34° 31' 47"	135° 36' 46"	2007.12.18 ～ 2008.03.28	45.00	古墳	範囲確認	古墳	葺石	円筒埴輪
庭鳥塚古墳	羽曳野市東坂田	27222	141	34° 31' 47"	135° 36' 46"	2008.07.01 ～ 2009.03.27	118.20	古墳	範囲確認	古墳	葺石	円筒埴輪
西山古墳	羽曳野市鞋屋	27222	52	34° 33' 14"	135° 35' 12"	2008.10.01 ～ 2008.10.31	25.30	古墳	確認調査	古墳	前方後円墳 埴輪	円筒埴輪・ 瓣付円筒埴 輪・葺形埴 輪・円筒埴
壺井丸山古墳	羽曳野市壺井	27222	117			2009.01.08 ～ 2009.03.30		古墳	確認調査	古墳	前方後円墳	円筒埴輪
御旅山古墳	羽曳野市壺井	27222	118			2009.04.01 ～ 2009.10.30		古墳	再整理	古墳	前方後円墳	葺形埴輪・ 楕円筒埴輪

## 庭鳥塚古墳調査報告書

発行 羽曳野市教育委員会  
生涯学習室 社会教育課  
世界遺産登録準備室  
羽曳野市誉田1丁目1-1  
072-958-1111  
2010年3月発行

印刷 株式会社 近畿印刷センター

